望月町文化財調査報告書　第13集

竹之城原遺跡
浄永坊遺跡
浦谷B遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1984・3

望月町教育委員会

東信土地改良事務所

序

ここに、昭和58年度県営ほ場整備事業の施行に伴う竹之城原遺跡、浄永坊遺跡、浦谷B遺跡緊急発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。本年度実施の緊急発掘調査により、県営ほ場整備事業にかかわる春日地域及び春日縄文時代遺跡群の周知遺跡の調査は全て終了したことになります。昭和55年度から始った春日での調査は、新水A・B遺跡、金塚遺跡、春日尾崎遺跡、後沖遺跡、栃久保A遺跡と本年度の3遺跡を加えた9遺跡にものぼっています。この集中調査により縄文時代と奈良時代～平安時代における生活址がもののみごとに現在に浮き彫りにされ、当町及び周辺地域の歴史研究に大きく貢献するものになったことは間違いありません。縄文時代では、早期から晩期初頭に至るまでの各期、各系統の遺構・遺物が検出され、また奈良時代～平安時代においては、望月牧を核とする時代の社会的復元に重要な手掛りを与えるべき遺構・遺物の検出がありました。本年度実施した調査においては、竹之城原遺跡の縄文前期・中期と平安時代の住居址及び遺物群、浄永坊遺跡では、縄文早期の住居址の検出、浦谷B遺跡では、縄文後期の集石と石器製作址及び遺物群が特に注目に値するものでした。

これらの学問的成果と共に重要な意義を見い出すとすれば、地域の方々が発掘調査に参加することによって、地域の歴史を地域の方々の手によって掘り起したことであります。他から与えられた歴史を学ぶのではなく、自らが不明であった歴史解明の主体者となったことであります。このことは、物事を深く追求していこうという意志と、さらには文化財保護と愛護の精神に通づるものであり、貴重な体験であったかと思います。

本調査並びに報告書は、顧問の森嶋稔先生をはじめとして、調査員諸氏や調査補助員、作業員の方々の熱意あふれる御指導、御協力により実施され、また埋蔵文化財センター百瀬長秀先生には、お忙しい中御指導をいただきました。各氏並びに埋蔵文化財センター、各協力団体に対し衷心より敬意と感謝の意を表する次第であります。

本調査の成果が記録保存の役目を荷って多くの方々に利用され、益々の進展の足がかりともなれば幸いと存じ願うものであります。

1984年3月20日

望月町教育委員会
教育長　佐　藤　初　雄

例　言

（竹之城原遺跡　浄永坊遺跡　浦谷Ｂ遺跡）

１．発掘調査の構成

1)、遺跡名・所在地　竹之城原遺跡　長野県北佐久郡望月町大字春日字竹之城原1856—4
浄永坊遺跡　長野県北佐久郡望月町大字春日字浄永坊1635—1
浦谷Ｂ遺跡　長野県北佐久郡望月町大字春日字浦谷1451—1、1453、1459、1460—2、1460—3、1461—1、1469、1470、1464—1

2)、調査原因　望月地区（春日）県営ほ場整備事業の実施に伴い、竹之城原遺跡、浄永坊遺跡、浦谷Ｂ遺跡に影響が及ぶため、事前に発掘調査を実施し記録保存を図る。

3)、調査委託者　東信土地改良事務所　所長　栗田　亘

4)、調査受託者　望月町　町長　佐藤幸男

5)、調査主体　望月町教育委員会及び教育委員会が組織する発掘調査団

6)、調査期間（現場調査）
竹之城原遺跡　自昭和58年６月20日・至昭和58年７月12日
浄永坊遺跡　自昭和58年７月７日・至昭和58年７月19日
浦谷Ｂ遺跡　自昭和58年７月12日・至昭和58年10月５日
［整理作業　昭和59年３月17日まで］

7)、調査面積　竹之城原遺跡・1116㎡、浄永坊遺跡・1233㎡、浦谷Ｂ遺跡3501㎡

8)、調査方法　各遺跡共３ｍ×３ｍグリッドによる平面発掘
現地協議で対象となった調査地域に西→東（Ａ・Ｂ…）、北→南（１・２…）にグリッドを設定。但し、調査段階で遺構・遺物の密度の差異があるため、同面積の変更も考慮。
抜根、表土（耕作土）は重機、他は調査団による平面掘りにより実施

２、調査及び報告書作成業務

1)、本調査は、別記発掘調査団が中心になり実施したものである。

2)、抜根及び表土剥ぎは、株式会社竹花組が施工した。

3)、遺構の実測は、竹之城原遺跡と浄永坊遺跡を福島邦男、福島茂子が行ない、浦谷Ｂ遺跡は新日本航業株式会社が気球による測量を施工した。

4)、写真撮影は、現場調査に関するもの並びに遺物共に福島邦男が行なった。

5)、遺物の洗浄は、平林さだ、阿部けさよ、加藤紋子、永井三代、小野山宮子、遺物への注記は、福島茂子、遺物の復元は、福沢幸一、掛川喜四郎、福島茂子、拓本は、掛川喜四郎、福島茂子が行なった。

6)、遺物の実測は、土器及び土製品を福島邦男、石器及び石製品を森山公一、近藤尚義、福島

邦男が行なった。

7)、遺構・遺物実測図のトレース、図及び図版の作成は、福島邦男、図の貼り込み等は福島茂子、掛川喜四郎が行なった。

8)、浦谷B遺跡の縄文時代後期・晩期土器の分類及び編年の組み立ては、百瀬長秀によるところが大きい。

9)、本書の執筆は、福島邦男が行なった。また、第V章第3節は、福島邦男、百瀬長秀が行なった。

10)、本書の作成業務は、望月町教育委員会が行ない、印刷製本は、鬼灯書籍株式会社が行なった。

3、本報告書の内容

1)、本報告書は、竹之城原遺跡、浄永坊遺跡、浦谷B遺跡の調査記録を合本したものである。

2)、本報告書は、長期に亘る調査で整理及び報告書作成業務の期間が限られ、しかも膨大な出土資料であったため、概要の一端に触れたにすぎず、意を尽せない部分が非常に多い。従って、土器を中心にした実測図、写真集（資料編）的な傾向が強く、詳細な説明や分析はほとんど行なうことができなかった。

3)、本書の構成は、本文、表、図、図版によりまとめ、遺跡単位で編集した。

4)、浦谷B遺跡の遺物の図と写真は、基本的に左ページに図を入れ、右ページに写真を載せた。左図と右写真は、同じ遺物を載せ、対比して検討できるようにした。

5)、浦谷B遺跡の土器は、後期～晩期の編年構成を行なった。したがって、図と図版は一部前後はあるが、基本的に編年に沿って編集した。

6)、浦谷B遺跡の図、図版中、①～・②などの○番号は、土器の類別を現しており、1・2などの番号は、図中の土器番号である。

7)、実測図の尺度は、実測図ごとに記載した。

8)、内容の説明や分析は、3、(2)で記述した通り、報告書作成の時間的な関係上できなかった。したがって、図及び図版に係る必要最少限の内容のみ記載せざるを得なかった。

本 文 目 次

序
例 言
第Ⅰ章 調査の事務的経過及び調査団組織……1
第1節 調査の事務的経過……1
1、調査の事務的経過……1
2、発掘調査団組織・協力者・事務局……2
第2節 調査の経過……3
1、調査日誌……3
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境……6
第Ⅲ章 竹之城原遺跡（MTS）……10
第1節 縄文時代の遺構……10
1、縄文時代の住居址……10
1)、第1・2・3・15号住居址　2)、第3・10号住居址
3)、第5号住居址　4)、第6号住居址
5)、第7・9号住居址　6)、第11・12号住居址
7)、第13号住居址　8)、第14号住居址
2、土壙……21
1)、第5号土壙（SK05）　2)、第23号（SK23）、28号（SK28）土壙
第2節 縄文時代の土器……22
第Ⅰ群土器　第Ⅱ群土器　第Ⅲ群土器　第Ⅳ群土器
第Ⅴ群土器　第Ⅵ群土器　第Ⅶ群土器　第Ⅷ群土器
第3節 縄文時代の石器……36
1)、石鏃　2)、石錐　3)、スクレイパー　4)、石匙　5)、両極石器
6)、打製石斧　7)、磨製石斧　8)、横刃型石器　9)、凹石
10)、敲打器　11)、磨石及びその他の石器
第4節 平安時代の住居址と遺物……39
1)、第4号住居址　2)、第4号住居址出土遺物
第Ⅳ章 浄永坊遺跡（MJE）……79
第1節 縄文時代の住居址……79
1)、第1号住居址　2)、第2号住居址　3)、第3号住居址

第２節　縄文時代の土器……82
第Ⅰ群土器　第Ⅱ群土器　第Ⅲ群土器　第Ⅳ群土器　第Ⅴ群土器
第３節　縄文時代の石器……86
第Ⅴ章　浦谷Ｂ遺跡（ＭＵＹ・Ｂ）……98
第１節　遺跡と調査の概要……98
第２節　縄文時代の遺構……98
１．遺物集中地点……98
1)、第１遺物集中地点　2)、第２遺物集中地点　3)、第３遺物集中地点
5)、第４遺物集中地点　5)、第５遺物集中地点　6)、第６遺物集中地点
6)、第７遺物集中地点　8)、第８遺物集中地点
2、石器製作址……105
1)、第１号石器製作址　2)、第２号石器製作址
3、石囲址……108
1)、第１号石囲址　2)、その他の石囲址
4、集石址……110
1)、第１号集石址　2)、第２号集石址　3)、第３号集石址
4)、第４号集石址　5)、第５号集石址　6)、第６号集石址
5、土壙……110
1)、第１号土壙　2)、第２号土壙
6、溝状列石址……110
第３節　縄文時代後期・晩期の土器……111
第４節　縄文時代の土製品……178
1)、岩偶　2)、土偶　3)、土製耳飾　4)、環状土製品
5)、土製円板　6)、球状土製品
第５節　縄文時代の石器……188
1)、石鏃　2)、石錐　3)、石匙　4)、スクレイパー　5)、両極石器
6)、打製石斧　7)、磨製石斧　8)、ノミ型石器　9)、有溝砥石
10)、砥石　11)、石皿　12)、凹石　13)、多孔石　14)、敲打器
15)、磨石
第６節　縄文時代の石製品……195
1)、石剣　2)、石棒　3)、玉類一括
第Ⅵ章　総括……197
結語

挿　図　目　次

第１図　発掘調査地域位置図（１：100,000）

第２図　発掘調査地域概要図及び周辺遺跡分布図（１：10,000）

第３図　竹之城原遺跡グリッド配置図及び遺構全体図（１：400）

第４図　竹之城原遺跡第１・15号住居址、第８・９・13・15・24・27・28・29・30・31・32号土壙実測図（１：80）

第５図　竹之城原遺跡第２・８・15号住居址、第32・33・34号土壙実測図（１：80）

第６図　竹之城原遺跡第３・10号住居址、第１～４、45～55号土壙実測図（１：80）

第７図　竹之城原遺跡第５・６号住居址、第５・6・56～60号土壙実測図（１：80）

第８図　竹之城原遺跡第７・９号住居址、第７・10～12、35～44号土壙実測図（１：80）

第９図　竹之城原遺跡第11・12・13号住居址、第75～84・91・97号土壙実測図（１：80）

第10図　竹之城原遺跡第14号住居址、第16～19・21・25・26・67-71・73-75号土壙実測図（１：80）

第11図　竹之城原遺跡第20・22・23・27・85・87・90号土壙実測図（１：80）

第12図　竹之城原遺跡第14・61～66・97号土壙実測図（１：80）

第13図　竹之城原遺跡出土土器（１：３）

第14図　竹之城原遺跡出土土器（１：３）

第15図　竹之城原遺跡出土土器（１：３）

第16図　竹之城原遺跡出土土器（１：３）

第17図　竹之城原遺跡出土土器（１：３）

第18図　竹之城原遺跡出土土器（１：３）

第19図　竹之城原遺跡出土土器（１：３）

第20図　竹之城原遺跡出土土器（１：３）

第21図　竹之城原遺跡出土土器（１：３）

第22図　竹之城原遺跡出土土器・石器（１・１：６、他１：４）

第23図　竹之城原遺跡出土石器（１：４）

第24図　竹之城原遺跡第４号住居址実測図（１：80）

第25図　竹之城原遺跡第４号住居址出土土器（１：４）

第26図　竹之城原遺跡第４号住居址出土土器、鉄製品、石器（１・１：４、３～８・１：２、９・１：３）

第27図　浄永坊遺跡グリッド配置図及び遺構全体図（１：400）

第28図　浄永坊遺跡第１・２号住居址実測図（１：60）

第29図　浄永坊遺跡第３号住居址実測図（１：60）

第30図　浄永坊遺跡出土土器（１：３）

第31図　浄永坊遺跡出土土器（１：３）

第32図　浄永坊遺跡出土土器、土製品、石器（１～６・８～10・１：３、他１：４）

第33図　浦谷Ｂ遺跡グリッド配置図及び遺構全体図（１：300）

第34図　浦谷Ｂ遺跡第１遺物集中地点及び第７遺物集中地点実測図（１：80）

第35図　浦谷Ｂ遺跡第２遺物集中地点実測図（１：80）

第36図　浦谷Ｂ遺跡第２号石器製作址、石囲址、集石実測図（１：40）

第37図　浦谷B遺跡石組遺構実測図（1：80）
第38図　浦谷B遺跡溝状列石址、第1・2号土壙実測図（1：80）
第39図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅠ：①1～45〕
第40図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅡ：②1～12、③13～37〕
第41図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅡ・Ⅲ：④1～13、⑤14-16、⑥17～33、浦谷BⅢ：⑦34～44〕
第42図　浦谷B遺跡出土土器（1・1：6、17・1：2、他1：3）〔浦谷BⅢ：⑧1～16、⑨17～31〕
第43図　浦谷B遺跡出土土器(18・1：2、他1：3）〔浦谷BⅢ：⑩1～15、浦谷BⅣ：⑪16～17、⑬19～21、⑫22～29〕
第44図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅣ：⑫1～10、⑭11～18、⑰19～23〕
第45図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅣ：⑱1～13、⑲14～22、浦谷BⅤ：⑳23～29〕
第46図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅤ：㉑1～13、㉒14～27〕
第47図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅤ：㉓1～17、㉔18～40〕
第48図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅤ：㉕1～30、㉖31～35〕
第49図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅤ：㉗1～20、㉘21～30〕
第50図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅤ：㉗1～11、㉘12、㉙13～20、㉚22～32〕
第51図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅤ：㉛1、㉜2～17、㉝18～31〕
第52図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅤ：㉞1～12、㉟13～26、㊱27～31〕
第53図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅤ：㊲1～13、㊳14～35、浦谷BⅤ～Ⅵ：㊴36～39〕
第54図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅥ：㊵1～4、㊶5～10、㊷11～15、㊸16～17、㊹18、㊺19～29〕
第55図　浦谷B遺跡出土土器(13・1：4、他1：3）〔浦谷BⅥ：㊻1～12、㊼13～23〕
第56図　浦谷B遺跡出土土器(25・1：4、他1：3）〔浦谷BⅥ：㊽3～5、7～24、㊾25～34、㊿1・2・6〕
第57図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅥ：㊾1～18、㊿19～37〕
第58図　浦谷B遺跡出土土器(1：3）〔浦谷BⅥ㊹1～3、浦谷BⅦ：㊻4、㊼5～31〕
第59図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅦ：㊼1～26、㊽27～39〕
第60図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅦ：㊾1～10、㊿11～20、(51)21～27、浦谷BⅦ～Ⅷ：(52)28～29〕
第61図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅧ：(53)1～41〕
第62図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅧ：(54)1、(55)2～10、浦谷BⅧ～Ⅸ：(56)11～17、(57)18～29〕
第63図　浦谷B遺跡出土土器(1：3）〔浦谷BⅧ～Ⅸ：(58)1、浦谷BⅨ：(59)2～4、(60)15～16、(61)17～20、(62)21～22、(63)23～31、(64)32～36、浦谷BⅩ：(65)37～40〕
第64図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅩ：(66)1～9、(67)10～13、浦谷BⅨ：(68)14～16、浦谷BⅩ：(69)17～25、(70)26～32〕
第65図　浦谷B遺跡出土土器（25～27・1：2、

他1：3)〔浦谷BX：㉓1～8、㉔9～18、㉕19、㉖20～24〕
第66図　浦谷B遺跡出土土器（1～6・1：6、7・1：4）
第67図　浦谷B遺跡出土岩偶(1)、土偶(2～8・1：2)
第68図　浦谷B遺跡出土土偶（1：2）
第69図　浦谷B遺跡出土土偶(1～4)、顔面装飾付土器(5)、土製耳飾(6～13)（1：2）
第70図　浦谷B遺跡出土土製耳飾（1：2）
第71図　浦谷B遺跡出土土製耳飾（1：2）
第72図　浦谷B遺跡出土土製円板（1：3）
第73図　浦谷B遺跡出土土製円板（1：3）
第74図　浦谷B遺跡出土土製円板（1：3）
第75図　浦谷B遺跡出土石器（1～8）、石製品（9）（1：2）
第76図　浦谷B遺跡出土土製品（1・1：5、他1：2）
第77図　浦谷B遺跡出土石器（1：4）
第78図　浦谷B遺跡出土石器（1～2・1：2、他：4）

図　版　目　次

図版1　竹之城原遺跡　竹之城原遺跡全景、遺構全景
図版2　竹之城原遺跡　遺構全景、第1・8号住居址
図版3　竹之城原遺跡　第2・8・15号住居址、第3号住居址
図版4　竹之城原遺跡　第5号住居址、第6号住居址
図版5　竹之城原遺跡　第7・9号住居址、第11・12号住居址
図版6　竹之城原遺跡　第12号住居址、第13号住居址
図版7　竹之城原遺跡　第14号住居址、第14号住居址埋甕炉
図版8　竹之城原遺跡　集石土壙、炉址状石組み
図版9　竹之城原遺跡　第25号土壙土器出土状態、第23号土壙及び土器出土状態
図版10　竹之城原遺跡　第23号土壙土器状態、第5号土壙及び土器出土状態
図版11　竹之城原遺跡　第5号土壙土器出土状態、第1・2・54・55号土壙
図版12　竹之城原遺跡第33・34号土壙、第24・27・38号土壙
図版13　竹之城原遺跡　竹之城原遺跡調査及び見学会風景
図版14　竹之城原遺跡　土器
図版15　竹之城原遺跡　土器
図版16　竹之城原遺跡　土器
図版17　竹之城原遺跡　土器
図版18　竹之城原遺跡　土器
図版19　竹之城原遺跡　土器
図版20　竹之城原遺跡　土器
図版21　竹之城原遺跡　土器
図版22　竹之城原遺跡　土器
図版23　竹之城原遺跡　土器
図版24　竹之城原遺跡　石器

図版25　竹之城原遺跡　石器
図版26　竹之城原遺跡　石器
図版27　竹之城原遺跡　第４号住居址、第４号住居址完掘状態
図版28　竹之城原遺跡　第４号住居址カマド、第４号住居址床面の状態
図版29　竹之城原遺跡　第４号住居址遺物出土状態
図版30　竹之城原遺跡　第４号住居址紡錘車、鉄鏃、鉄釘、鉄塊出土状態、紡錘車出土状態
図版31　竹之城原遺跡　第４号住居址鉄製品出土状態
図版32　竹之城原遺跡　第４号住居址土器
図版33　竹之城原遺跡　第14号住居址出土鉄製品、第４号住居址出土遺物
図版34　浄永坊遺跡　浄永坊遺跡全景、浄永坊遺跡全景
図版35　浄永坊遺跡　トレンチ内集石、第１号住居址
図版36　浄永坊遺跡　第２号住居址、第３号住居址
図版37　浄永坊遺跡　第３号住居址炉址、調査風景
図版38　浄永坊遺跡　土器
図版39　浄永坊遺跡　土器
図版40　浄永坊遺跡　土器、石器
図版41　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版42　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版43　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版44　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版45　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版46　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版47　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版48　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版49　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版50　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版51　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版52　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版53　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版54　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版55　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版56　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版57　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版58　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版59　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版60　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版61　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版62　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版63　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版64　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版65　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版66　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版67　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版68　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版69　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版70　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版71　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版72　浦谷Ｂ遺跡　土器
図版73　浦谷Ｂ遺跡　浦谷Ｂ遺跡全景、浦谷Ｂ遺跡東側
図版74　浦谷Ｂ遺跡　浦谷Ｂ遺跡西側、浦谷Ｂ遺跡北側
図版75　浦谷Ｂ遺跡　第１遺物集中地点、第１遺物集中地点遺物出土状態
図版76　浦谷Ｂ遺跡　第１遺物集中地点遺物出土状態、第１遺物集中地点遺物出土状態
図版77　浦谷Ｂ遺跡　第１遺物集中地点注口部出

土状態
図版78　浦谷B遺跡　第1遺物集中地点石器、石製品出土状態
図版79　浦谷B遺跡　第2遺物集中地点、第2遺物集中地点土器出土状態
図版80　浦谷B遺跡　第2遺物集中地点土器出土状態、第2遺物集中地点埋甕
図版81　浦谷B遺跡　第2遺物集中地点土器、石器、土偶出土状態
図版82　浦谷B遺跡　第3遺物集中地点、第1号石器製作址
図版83　浦谷B遺跡　第1号石器製作址黒曜石散乱状態、第1号石器製作址下部の様子
図版84　浦谷B遺跡　第2号石器製作址、第2号石器製作址黒曜石散乱状態
図版85　浦谷B遺跡　集石
図版86　浦谷B遺跡　集石
図版87　浦谷B遺跡　石組み状遺構
図版88　浦谷B遺跡　石囲址、石囲址土器出土状態
図版89　浦谷B遺跡　第1号土壙、第2号土壙
図版90　浦谷B遺跡　埋甕、石棒、大珠出土状態
図版91　浦谷B遺跡　溝状石列遺構
図版92　浦谷B遺跡　土偶
図版93　浦谷B遺跡　土偶
図版94　浦谷B遺跡　土偶、顔面付土器、口縁部耳飾
図版95　浦谷B遺跡　耳飾
図版96　浦谷B遺跡　土製円板
図版97　浦谷B遺跡　土製円板
図版98　浦谷B遺跡　土製円板
図版99　浦谷B遺跡　磨製石斧、打製石斧
図版100　浦谷B遺跡　石棒・石剣・磨石、有溝砥石・砥石
図版101　浦谷B遺跡　凹石、敲打器
図版102　浦谷B遺跡　石皿、多孔石、石棒
図版103　浦谷B遺跡　大珠、磨石、翡翠原石、スクレイパー、不定型石器、横刃型石器
図版104　浦谷B遺跡　第1号石器製作址出土石鏃、スクレイパー、石匙、石錐、両極石器、原石
図版105　浦谷B遺跡　第2号石器製作址出土石鏃、スクレイパー、原石
図版106　浦谷B遺跡　石器製作址出土フレイク、チップ
図版107　浦谷B遺跡　遺構外出土石器
図版108　浦谷B遺跡　調査及び整理の様子

表　目　次

第1表　発掘調査地域周辺の遺跡分布表
第2表　浦谷B遺跡土器編年対比表
第3表　浦谷B遺跡編年・類別系統表

第Ⅰ章　調査の事務的経過及び調査団組織

第１節　調査の事務的経過

１、調査の事務的経過

望月地区（春日）県営ほ場整備事業の施行に伴う発掘調査は、昭和55年の新水Ａ・Ｂ遺跡から開始され、その数は合計９遺跡にも及んでいる。９遺跡の外にも工事段階における立合調査を実施した遺跡もいくつかある。本年度発掘調査を実施した３遺跡により、いわゆる「春日縄文時代遺跡群」（大字春日下の宮～竹之城）の調査は、特別なほ場整備の設計変更がない限り終了したといえる。

本来発掘調査は、遺跡に影響を及ぼす工事主体者、すなわち東信土地改良事務所が実施すべきものであるが、独自の調査組織が持てないので、工事地域の望月町に発掘調査を委託して実施したものである。望月町は、教育委員会が主体となり発掘調査団を組織して直営でその遂行に努めた。予算は、総額のうち27.5％が農家負担分であるところから、これを補助対象経費とし、27.5％のうち50％が国庫補助額、15％が県費補助額、35％が町負担額である。残る72.5％は、工事主体者である東信土地改良事務所が負担し、補助金と農政負担金との二本立てで執行するものである。

調査の依頼から完了するまでの事務的経過は以下のとおりである。

昭和57年５月27日　「昭和58年度文化財補助金事業計画」（通知）57教文第102号

９月25日　現地協議（長野県教育委員会文化課、東信土地改良事務所、望月町役場建設課、望月町教育委員会による。）

10月25日　「昭和58年度県営ほ場整備事業望月地区に係る埋蔵文化財の保護について」（通知）　57教文第10―38号

昭和58年１月６日　「昭和58年度文化財関係補助事業計画について」（提出）　58望教第17号

４月13日　「昭和58年度文化財関係国庫補助事業の内定について」（通知）　58教文第35号

４月22日　「昭和58年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について」（提出）58望教第356号

５月10日　「埋蔵文化財包蔵地浦谷Ｂ遺跡の発掘調査について」（通知）　58望教第466号

５月10日　「埋蔵文化財包蔵地竹之城原遺跡の発掘調査について」（通知）　58望教第467号

５月10日　「埋蔵文化財包蔵地浄永坊遺跡の発掘調査について」（通知）　58望教第468

号

5月24日　昭和58年度浦谷B遺跡外緊急発掘調査詳細計画書の作成〔町関係〕

5月24日　浦谷B遺跡外緊急発掘調査調査団作業員の公募〔町関係〕

6月11日　昭和58年度埋蔵文化財緊急発掘調査団構成員の決定〔町関係〕

6月17日　発掘調査顧問、調査員、調査補助員、作業員の打ち合せ会議〔町関係〕

6月20日　「昭和58年度埋蔵文化財発掘調査事業委託契約について」（締結）

6月20日　竹之城原遺跡発掘調査開始

9月19日　「文化財保護事業県費補助金交付申請書について」（提出）　58望教第1105号

10月5日　発掘調査終了　以後「収得届」のための集計

10月19日　「埋蔵文化財の収得について」（届）　58望教第1256号

10月19日　「埋蔵文化財保管証について」（提出）　58望教第1257号

11月25日　「埋蔵物の文化財認定について」（通知）　58教文第8－151,617号

12月1日　「国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知書」　58教文第4の5号

12月13日　「昭和58年度文化財保護事業補助金の交付決定について」（通知）　58教文第4の5号

昭和59年1月7日　「昭和58年度文化財関係補助事業にかかる状況報告について」（提出）

2月10日　昭和58年度文化財保護事業の執行状況調査

3月末日　「昭和58年度国宝重要文化財等保存整備費補助金実績報告書」（提出）

2、発掘調査団組織、協力者、事務局

顧　問　森嶋　稔（日本考古学協会会員・千曲川水系古代文化研究所主幹）

団　長　福島邦男（日本考古学協会会員・望月町教育委員会学芸員）

調査員　佐藤　敏（長野県考古学会会員）　渡辺重義（長野県考古学会会員）
福沢幸一（長野県考古学会会員）　近藤尚義（長野県考古学会会員）
吉田　稔（埼玉考古学会会員）

補助員　吉沢浩矣、吉沢弥太郎、福島茂子、日暮信生、倉見　渡

作業員　掛川喜四郎、阿部けさよ、加藤紋子、永井三代、小野山宮子、桜井宗次、佐藤千代子、小野山やよい、依田夏江、桜井卯作、関嘉津武、永井徳弥、大森徳太郎、大森英七、上野知一、竹花きよ子、今井伊一、飯島正信、竹重きく江、中山ふみ子、吉沢公男、井出進三、桜井きぬ子、平林さだ、土屋重雄、大森一尾、吉沢栄子、大塚米子、重田たい子、佐藤澄江

協力者　森山公一、百瀬長秀、桜井泉、桜井速雄、湯本和幸、山本賢治、長野県埋蔵文化財センター

事務局　社会教育係…大森睦男(係長)、高橋重雄、上野早苗、小林辰男、花岡一子、福島邦男

第2節　発掘調査の経過

1、調査日誌

竹之城原遺跡

6月20日　本日より竹之城原遺跡発掘調査を開始する。重機による表土剝ぎ。結団式。グリッド掘り開始。

6月21日　午前中は雨で中止。午後からグリッド掘りを行う。黒曜石が雨にぬれて目につく。

6月22日　住居址と思われる落ち込み、ピット、土壙を多数検出する。縄文式土器、石鏃、スクレイパー等が出土。

6月23日　ピットから想定できる住居址を第1号、第2号とする。K—2・3より石囲炉検出。縄文前期・中期土器が中心に出土。

6月24日　石囲炉周辺部からうっすらと住居址らしい落ち込みを検出する。午後は雨のため現場作業を中止し、本部にて遺物整理。

6月25日　A—Gの9～13で集中して住居址、土壙、ピットを検出する。縄文前期土器出土。

6月26日　本日作業休み

6月27日　A・Bの12・13で住居址と土壙、C～Eの11～13からも住居址を検出。諸磯式土器が出土。

6月28日　柱穴による想定で3号住を検出。4号住は方形の落ち込みで、坏、甕、灰釉陶器、刀子が出土。焼土が散乱している。

6月29日　本日までに縄文時代の住居址9棟、平安時代の住居址1棟を検出する。

6月30日　各遺構の掘り下げ、清掃作業を行う。4号住は極めて多量の遺物出土。甕類が特に多い。

7月1日　住居址、土壙、ピットの掘り込みと写真撮影のための清掃を行う。土壙の状況は極めて興味深い。

7月2日　各遺構の清掃、写真撮影。遺構の掘り込みも引き続き行う。本日より遺構の実測を開始する。

7月3日　本日作業休み。

7月4日　12住・13住の掘り込みと一部清掃を行う。縄文前期諸磯B・C式土器と九兵衛尾根II式土器が主体的に出土。

7月5日　雨天のため本部にて遺物整理。

7月6日　12住・13住の掘り込みと清掃、12住は11住とほぼ全体が重なり合う状況である。11住・12住は九兵衛尾根II式土器が主体。

7月7日　14住のプラン確認とピットの掘り込み。埋甕炉を検出する。口縁部が大部分欠損しており、保存状態があまり良くない。

7月8日　14住の掘り込み。土壙と住居址の実測。激しい雨の中集石炉の実測を行う。

7月9日　本日は全員で浄永坊遺跡の調査。

7月10日　本日作業休み。

7月11日　14住の清掃・写真撮影。埋甕炉の実測と取り上げ。胴部のみ存在した。実測。

7月12日　遺構全体写真、遺構全体測量を行い全ての調査を終了する。

浄永坊遺跡

7月7日　本日より、竹之城原遺跡の調査と併行しながら浄永坊遺跡の調査を開始する。本遺跡は、桑畑と水田部に立地し、水はけの悪い所である。

7月8日　グリッド掘りを行うが、遺構の検出はできなかった。縄文前期初頭の土器が出土。

7月9日　調査区北東部で円形に近い落ち込みが検出され第1号住居址とする。さらに西側に住居址と思われる落ち込みを検出する。

7月10日　本日作業休み。

7月11日　1住の掘り込みを開始する。西側の落ち込みは住居址と解り第2号住居址とし掘り込みを開始する。グリッドからは、縄文前期初頭の土器が目立つ。

7月12日　1住と2住の掘り込み。北部で炉址が検出され第3号住居址とする。3住はプランが破壊され炉址のみである。1住は、縄文早期茅山式土器が出土。

7月13日　1住の清掃、2住の掘り下げ、3住の掘り下げと清掃を行う。他のグリッドからは前期初頭の土器が比較的多く出土する。

7月14日　1住と3住の写真撮影。2住の掘り込みと清掃。調査区南西部のグリッド掘りを継続しているが遺構の検出はない。

7月15日　雨天のため本部にて遺物整理。

7月16日　雨天であったが、雨の合い間をみて2住と3住の実測を行う。

7月17日～18日　雨天のため本部にて遺物整理。

7月19日　1住の実測と遺跡及び遺構の全体測量を行い、本日で全ての現場調査を終了した。

浦谷B遺跡

7月12日　竹之城原遺跡と浄永坊遺跡の調査を行いながらも、本日より浦谷B遺跡の抜根と表土剝ぎを開始する。多量の遺物が出土する。

7月13日　本日も重機による抜根と表土剝ぎを行う。一部グリッドの設定を行う。

7月14日　グリッドの設定を行いながら、本日よりグリッド掘りを開始する。すでに多量の縄文後期土器、土師器、黒耀石製の石器が出土する。調査区西側には、黒耀石の製作址と考えられる部分が2箇所検出する。

7月15日　雨天のため本部にて遺物整理。

7月16日　浄永坊遺跡の実測を行うが、雨天のため浦谷B遺跡の調査は中止する。本部にて遺物整理を行う。

7月17日～18日　雨天のため本部にて遺物整理。

7月19日　グリッド掘りを行う。土製耳飾2点と多量の縄文後期土器、土師器、石鏃等が出土する。遺構は現在のところ石器製作址以外検出されない。

7月20日～22日　雨天のため本部にて遺物整理。

7月23日　久しぶりの好天に恵まれ作業が進められた。相変らず多量の遺物が出土する。遺構は検出できない。

7月24日　本日は、作業を休みにする。

7月25日　雨が降ったり止んだりの一日であったが調査にはあまり影響はなかった。ダンボール3個分の遺物が出土する。平安時代のカマドと思われる焼土塊を検出する。

7月26日～27日　第1号・2号石器製作址のプラン確認作業を行う。おびただしい量のフレイクやチップが散乱している。

7月28日　石器製作址のフレイク等の取り上げと掘り込みを行いながらの清掃を行う。

7月29日　石器製作址の清掃掘りと中間での写真撮影を行う。礫もかなり含んでいる。

7月30日　2号石器製址の掘り込みとグリッド掘り。

7月31日　本日作業休み

8月1日　雨天のため本部にて遺物整理を行う。

8月2日～3日　遺物集中区の精査、石器製作址の掘り込み、グリッド掘りを行う。

8月4日～8日　石棺墓と考えられる部分の掘り込み。2号石器製作址の掘り込みと遺物の取り上げ及び廃土ふるい。グリッド掘り。

8月9日　集石の清掃掘り。石棺墓と考えられる部分の掘り込み。1号石器製作址遺物の取り上げ。拡張区を重機により表土剥ぎする。

8月10日　重機による拡張区の表土剥ぎ。集石、1号石器製作址の継続作業。

8月11日　拡張区にグリッドを設定し、グリッド掘りを開始する。

8月12日　グリッド掘り、集石の清掃掘り、各所の出土遺物の写真撮影を行う。

8月13日～17日　盆休みで現場作業はなし。

8月18日　雨天のため本部にて遺物整理を行う。

8月19日～23日　盆休み明けの調査を開始する。集石の清掃掘り。1号石器製作址の清掃掘りと石器、フレイクの取り上げ、拡張区のグリッド掘りを行う。拡張区は礫がほとんど出土せず、西側調査区とはやや様相を異にする。

8月24日～27日　相変らずの猛暑が続いている。グリッド掘り、集石の清掃掘り、1号石器製作址の清掃掘りと廃土中の遺物の取り上げ。

8月28日　本日作業休み。

8月29日～31日　拡張区グリッド掘り、集石の清掃掘り、1号石器製作址の清掃掘りと廃土中の遺物の取り上げ、廃土はふるいにかけたり、手による拾い上げを行う。

9月1日　雨天のため本部にて遺物整理を行う。

9月2日～5日　拡張区グリッド掘り、1号石器製作址の廃土中遺物の取り上げ、集石の清掃掘り、1号石器製作址の清掃掘りは終了。

9月6日～7日　1号石器製作址の遺物取り上げとともに、2号も廃土ふるいを行い取り上げ作業を行う。1号に比較すれば全体量は少ないが、やはり相当量含まれている。

9月8日　雨天のため本部にて遺物整理を行う。

9月9日～10日　1号石器製作址の遺物取り上げは本日で終了する。集石の清掃掘りは続く。

9月11日～12日　日曜日と雨天が続き作業を休みにする。調査員は作業、遺物整理を行う。

9月13日～14日　集石、遺物集中区の清掃と写真撮影を行う。

9月15日　雨天のため本部にて遺物整理を行う。

9月16日～17日　集石部の深掘りを開始する。

9月18日　本日作業休み。

9月19日～24日　集石部の深掘りを行う。1日にダンボール2～3個分の遺物が出土する。

9月26日～27日　集石部の深掘りを行う。相変らず多量の土器が出土しつづける。

9月28日　雨天のため本部にて遺物整理を行う。

9月29日～10月1日　集石部の深掘り

10月2日　本日作業を休みにする。

10月3日～5日　集石の深掘りを行い、本遺跡の全ての調査を終了した。器材の搬出作業。

10月6日　遺物整理を実施する役場南庁舎の清掃や準備を行う。

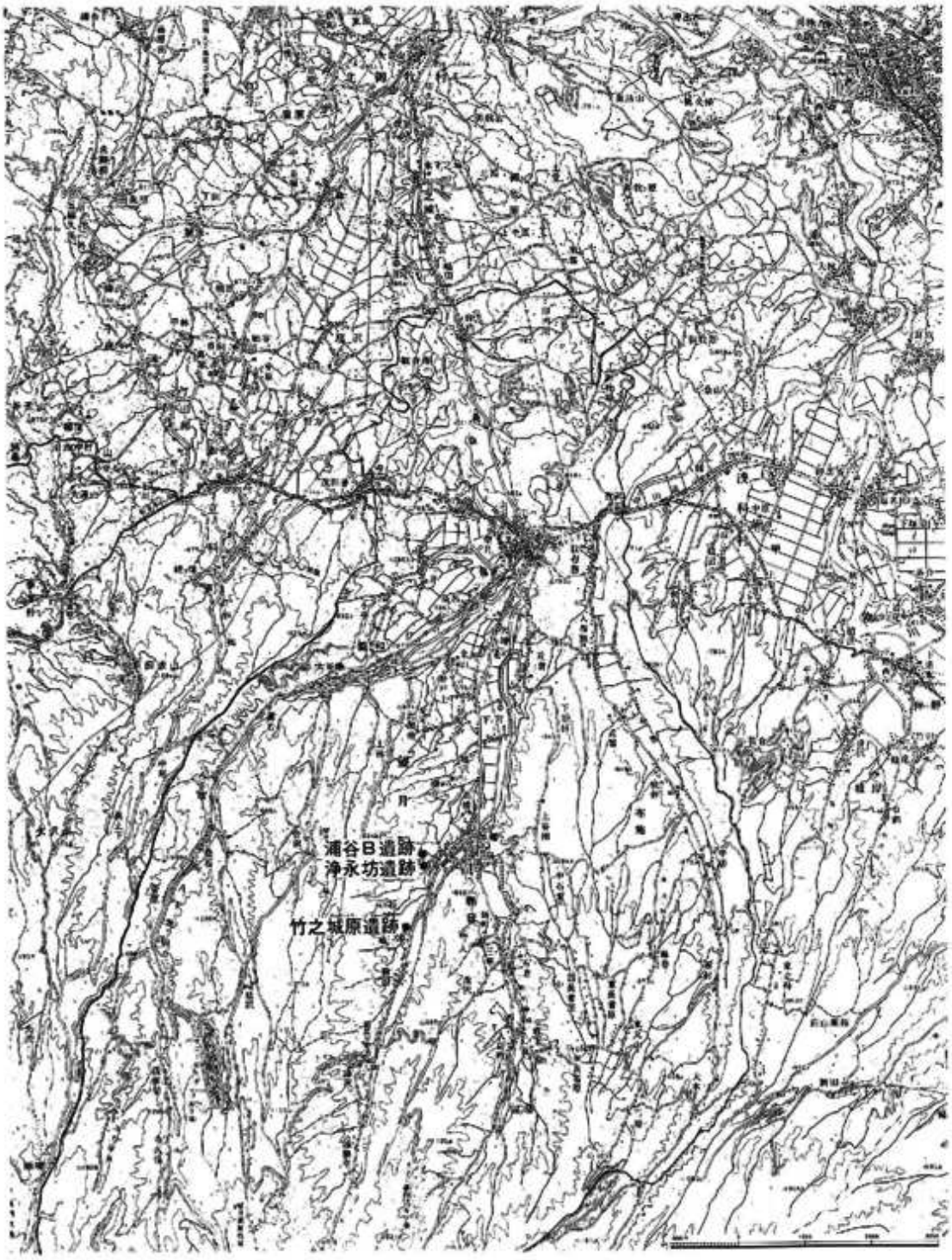
10月7日～昭和59年3月30日　遺物整理、報告書作成業務。

第II章　遺跡の立地と歴史的環境

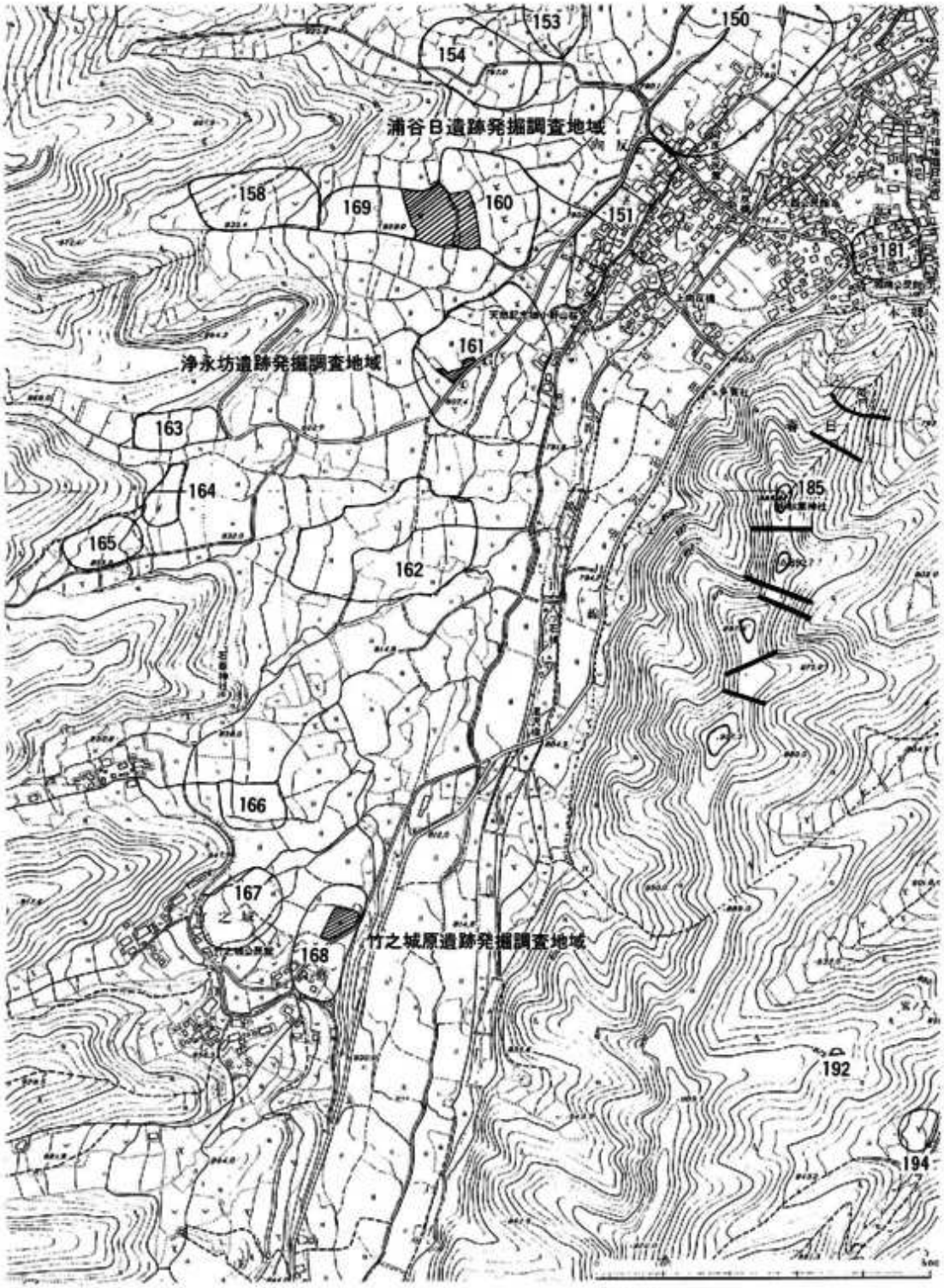
望月町は、北佐久郡の中でも千曲川の西方に位置し、北は北御牧村、西は立科町、東は浅科村、南は一部佐久市と隣接している。西南方向には、山懐深い蓼科山（2530m）を中心とする山系が連なり、北東方向には千曲川を隔てて聳え立つ浅間山（2560m）の連山を臨むことができる。望月町の地質及び地形の形成は、大きく二つの要因に起因しているといえ、その1つは、蓼科山の火山活動により基盤並びに地形の形成が成されていることであり、もう1つは、御牧原台地や八重原台地地域が地殻の断層運動によって形成されていることである。望月町にかかる御牧原台地は、その南端において上部に「相浜層」（模式地：佐久市相浜）と呼ばれる非常にもろい湖沼性堆積層によって形成されて、各所に露頭箇所をみることができる。堆積物は、凝灰岩、泥岩、砂岩および礫質砂岩などで、幾層にもくり返し互層しており、ほぼ水平層にちかい。これらの地層の中で泥岩からは、針葉樹や広葉樹などの珪藻類の化石が産出し、比較的容易に採取することができる。また、相浜層の下部は「瓜生坂層」（模式地：望月町大字望月）と呼ばれ、メタセコイヤやその他の植物化石が得られるところから、相浜層が属する新生代第四紀更新世の前期と推定されているのに対し、瓜生坂層は、新生代第三紀鮮新世の後期に属すると推定されており、今から200万年以前に形成されたということがわかる。一見すれば、蓼科山の裾野のように連なっているが、この瓜生坂地籍から御牧原台地にかけては、形成過程にかなりの相異がみられるものである。

一方、蓼科火山によって形成された地籍は、立科町芦田付近、望月町の瓜生坂より北方と茂田井地籍を除く全地域、さらに浅科村の五郎兵衛新田付近にまで達しており、これらの地域を、いわゆる蓼科火山地域と呼んでいる。中央に位置する蓼科火山群の南方には、八ヶ岳火山群が連なり、また西方には霧ヶ峰火山群がその雄姿を止めている。蓼科山は、全般に緩傾斜の裾野が、北方の望月町方向へ延び、しかも長く雄大である。大河原峠付近にあっては、極めて急傾斜の谷を形成しているが、多くは蓼科山を中心に放射状に延びる緩やかな谷を形成している。これらの地域は安山岩の分布が広くみられ、中でも両輝石安山岩、しそ輝石安山岩、角閃石安山岩が主体を成している。これらは、望月町の浅田切、八丁地、畳石、菅原、大谷池、吹上など、八丁地川中流域に見ることができ、しかも熱の珪化作用による板状節理がもののみごとに発達し、天然記念物のごとき美しい露頭箇所を見ることができる。望月町を流れる主流は、鹿曲川、細小路川、八丁地川、布施川の4河川あり、いづれも蓼科山を源流とし、長い裾野を抜って流下している。細小路川は春日で、また八丁地川は望月で鹿曲川と合流し、そして北御牧村で千曲川に流れ込んでおり、布施川は、浅科村において千曲川と合流している。これら蓼科山と主流4河川は、人間の生活や動植物の生息に対し必須の自然的条件であるとともに、これらの自然環境を中心に過去から現在に至る間脈々と生活が営なまれてきたのであり、当地方においてはまず基本ともなるべき重要な位置を占めているものである。

竹之城原遺跡、浄永坊遺跡、浦谷B遺跡は、望月町の南方の鹿曲川中流域左岸に位置し、「春日



第1図　発掘調査地域位置図(1：100,000)



第2図　発掘調査地域概要図及び周辺遺跡分布図（1：10,000）

縄文時代遺跡群」に包括されるものである。春日縄文時代遺跡群は、北方へ延びる蓼科山の裾野の鹿曲川を臨む東向きの緩傾斜地に立地し、竹之城地籍の竹之城原遺跡を最南端に、下の宮地籍にまで広範囲に渡って分布している遺跡を含んでいる。すでに金塚遺跡、後沖遺跡、栃久保A遺跡など多くの遺跡の発掘調査を実施しているが、本年度3遺跡の調査結果も含め、縄文時代早期から晩期に至るまでの継続的な資料が得られており、蓼科山北麓地域あるいは、千曲川西岸地域における重要な標式的位置を占めるものである。

竹之城原遺跡は、標高850mを測り、浅間山と真のあたりに対面する南向きの緩斜面に位置し、湾曲状に傾斜する斜面の中央からは、豊かな湧水の水口があり、さらに八ッ石久保からは、かなりなまでの水流が遺跡に向って流れ落ちてきている。ここからは、春日縄文時代遺跡群のほとんどを臨むことができ、限られた範囲ながら良好な条件が整っている。浄永坊遺跡は、竹之城原遺跡から直線にして北方約800mの所に位置し、標高800mを測る。遺跡の西側に隣接するように小規模な沢状の地形が形成されており、北方へ続いている。遺跡はこの沢によって隔てられる尾根状の台地に立地し、沖積地とロームの堆積する洪積地の接点的な部分であり、調査地域も明確に二分できる程歴然としている。調査中の水の流れ出しは、この沢による影響がかなりあるものと思われる。浦谷B遺跡は、浄永坊遺跡から北へ200mの所に位置し、小規模な沢の西側に当る東向き緩斜面にある。沢の西側は、上方からの流れ出しにより、おびただしい量の礫で覆われており、かなりの深部にまで達している。本遺跡西側上方には、浦谷A遺跡、知能遺跡と続き、東側下方には、本遺跡が広範囲に広がりを見せている。標高は、840m～800mで、40mもの落差の中に位置しているが、緩傾斜であるということはいかに規模の大きな遺跡であったかということがわかる。春日縄文時代遺跡群を代表する遺跡であり、また数少ない縄文時代後期を主体とする重要な遺跡である。

第1表　発掘調査地域周辺の遺跡分布表（1980：望月町遺跡詳細分布調査報告書より）

町遺跡番号	遺跡名	大字	小字	町遺跡番号	遺跡名	大字	小字
150	松原遺跡	春日	松原	165	春日山寺B遺跡	春日	山寺
151	向反遺跡	〃	向反	166	八ツ石久保遺跡	〃	八ツ石久保
153	桂久保遺跡	〃	桂ノ久保	167	竹之城久保遺跡	〃	竹之城久保
154	栃久保A遺跡	〃	栃ノ久保	168	**竹之城原遺跡**	〃	**竹之城原**
158	知能遺跡	〃	知能	169	浦谷A遺跡	〃	浦谷
160	**浦谷B遺跡**	〃	**浦谷**	181	堀端遺跡	〃	堀端
161	**浄永坊遺跡**	〃	**浄永坊**	185	春日城跡	〃	ゆる久保，法憧寺，城久保，駒込，小庭
162	大門先遺跡	〃	大門先				
163	北入遺跡	〃	北入	192	宮ノ入経塚	〃	西ノ洞
164	春日山寺A遺跡	〃	山寺	194	宮ノ入B遺跡	〃	宮ノ入

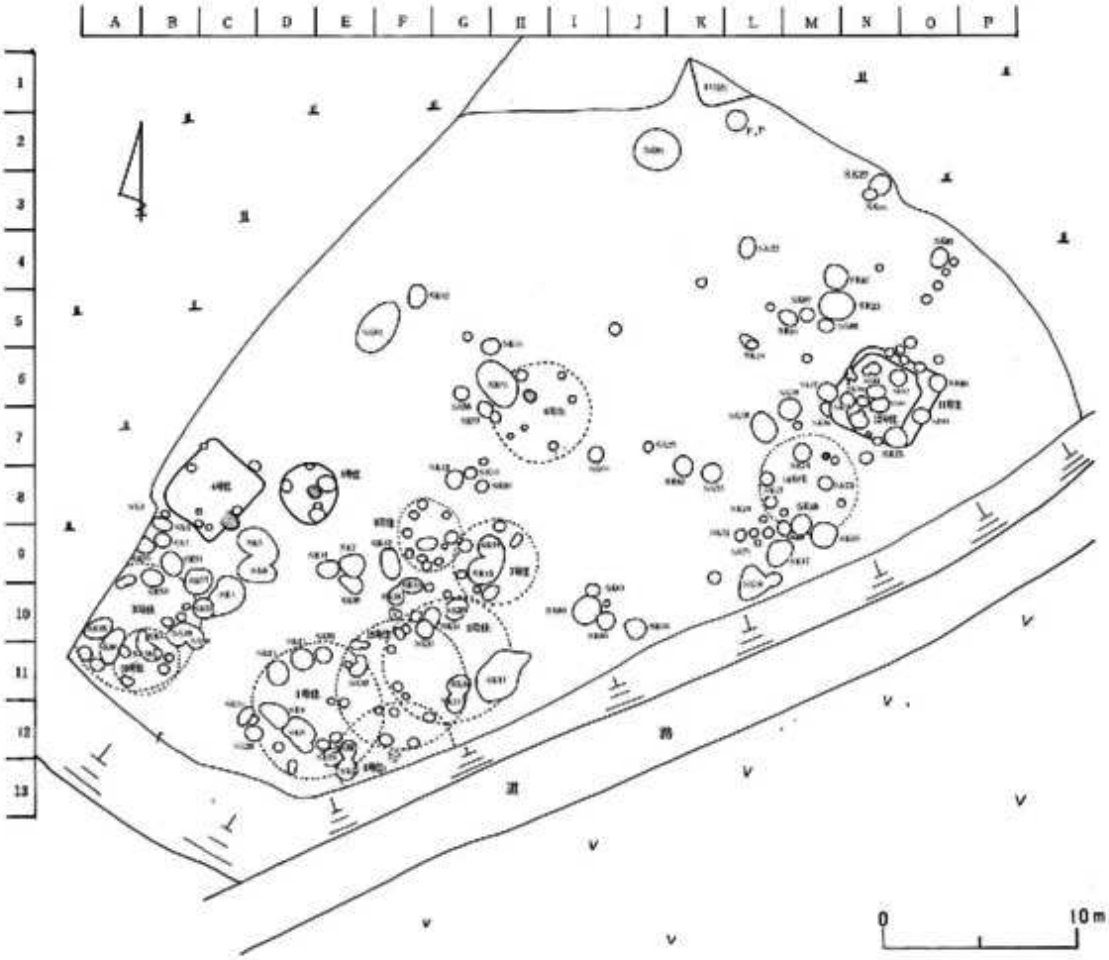
（番号は，町遺跡番号を示す）

第Ⅲ章　竹之城原遺跡（ＭＴＳ）

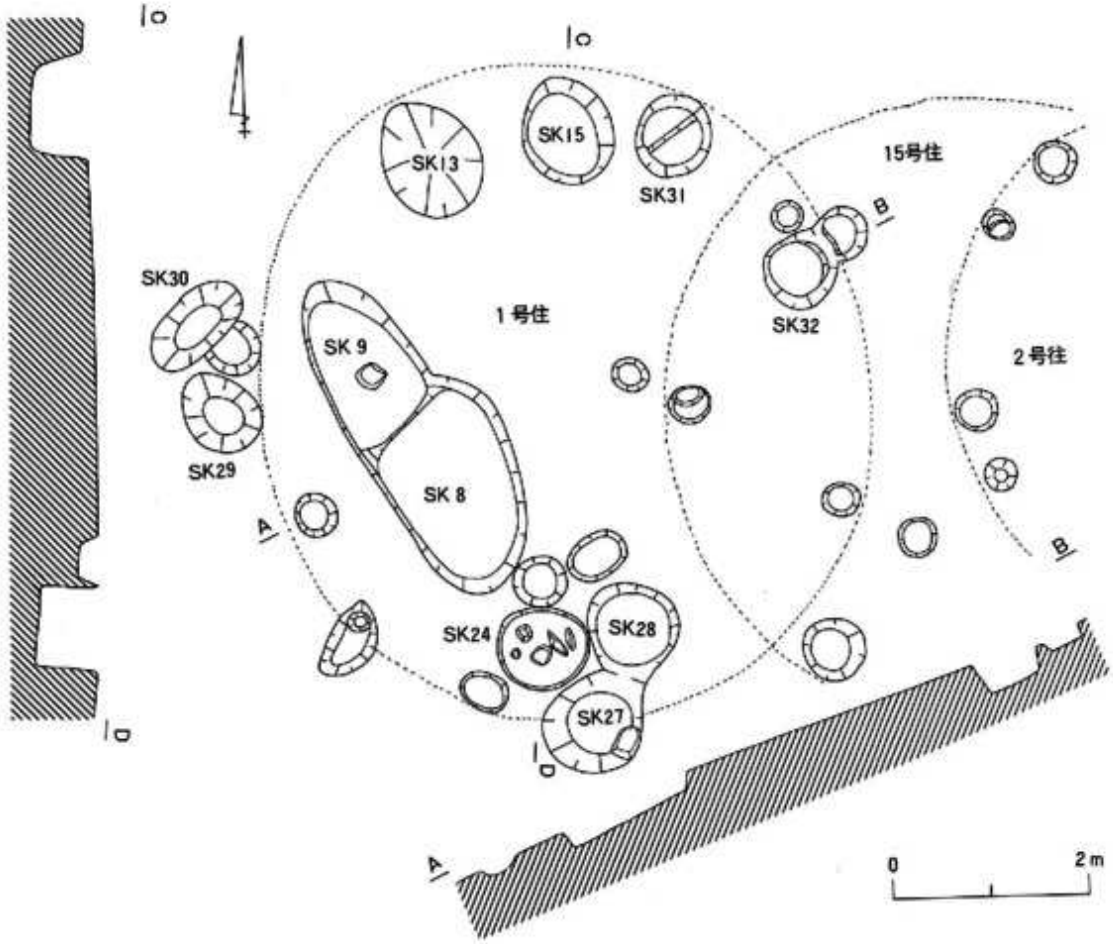
第１節　縄文時代の遺構

１、縄文時代の住居址

竹之城原遺跡は、調査地域全体が耕作による深掘りが成されており、検出された遺構の大部分は何らかの影響を受けている。15棟検出された住居址のうち、第５、11、12、13号は、部分的に破壊されているとはいえプランが明確に把握できたものであるが、他の11棟は、壁面及び床面までもすでに存在していなかった。しかし、柱穴が残り、かろうじてプランの推定を試みることができたが、あくまでも残存部からの推定であり、やや不正確な部分も含まれているのはまぬがれ



第３図　竹之城原遺跡グリッド配置及び遺構全体図（１：400）



第4図　竹之城原遺跡第1・5号住居址、第8、9、13、15、24、27～32号土拡実測図(1：80)

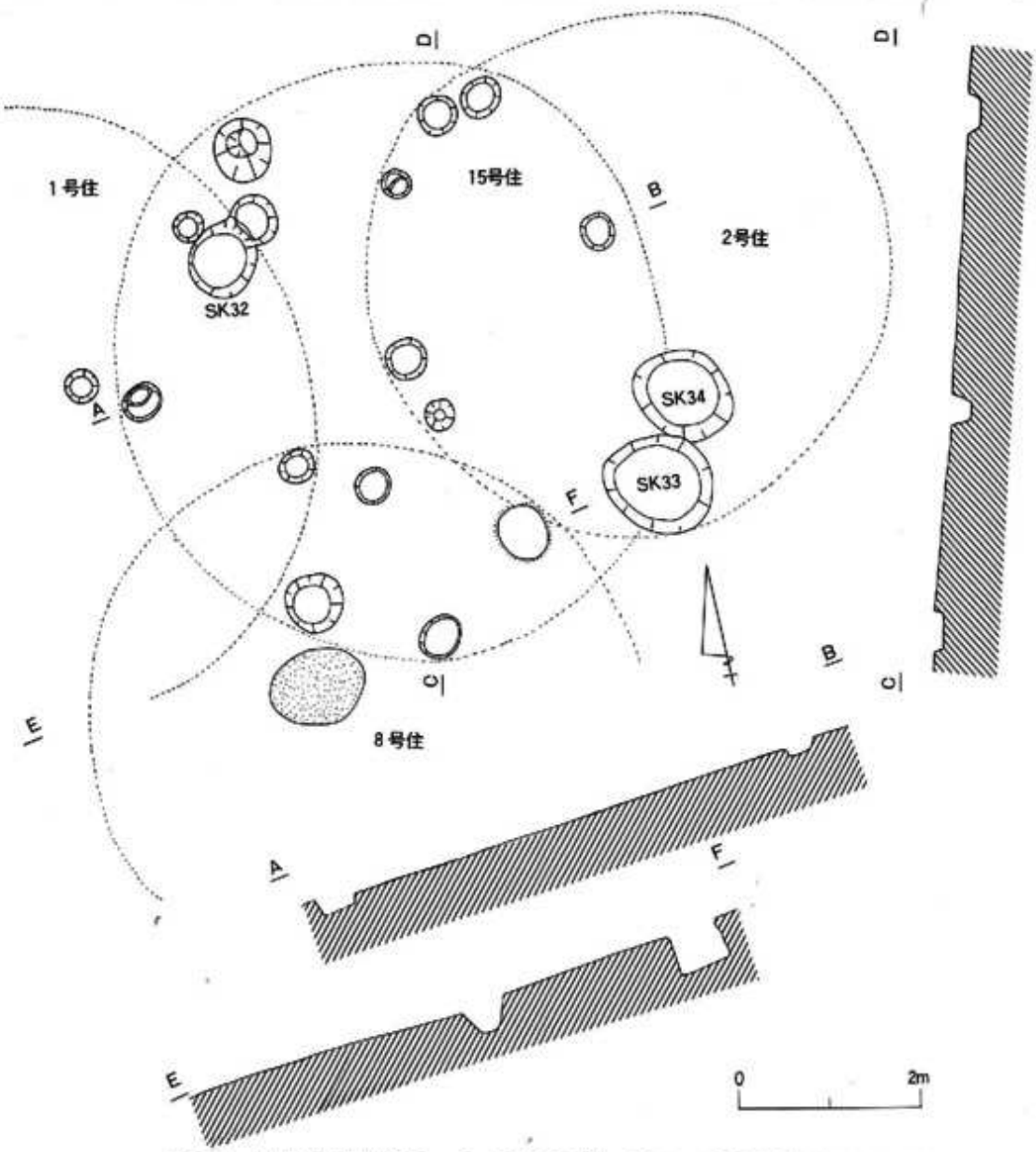
ない。土壙は92基を検出したが、遺構が深かったために残存されたものであり、恐らく上部はすでに削り取られてしまっているものと思われる。また、特に柱穴で想定した住居址との柱穴などと混同して把握してしまっているものも含まれている可能性がある。しかし、確認できる最大の可能性により捉えたので、これ以上の確認作業は現状では不可能である。住居址共、同様である。なお、プランが確認できた4棟の住居址は、調査区域外に大部分が入ってしまっているものや、複合関係により、内部の土壙の所属が不明確なものなどがあり、詳細に分析の段階に入るとかなり戸惑う状況がある。

以上の状態であるため、本節はプランの確認ができた4棟の住居址について1棟ごとに記述することにし、他の想定プランは一括で取り上げることにしたい。

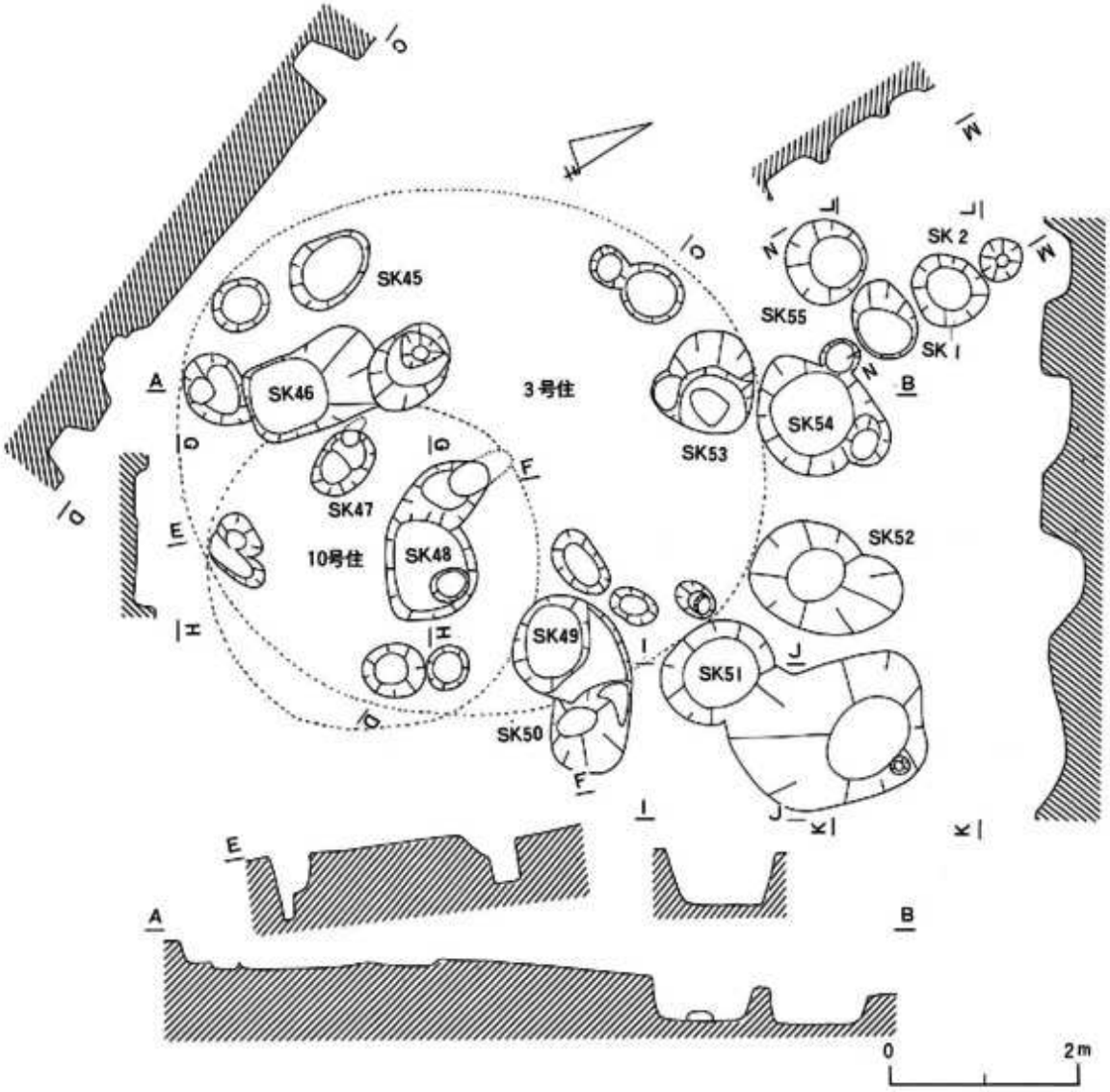
1)、第1・2・8・15号住居址（第4・5図、図版2・3）

第1・2・8・15号住居址は、調査地域最南部の竹之城部落に通ずる道路際で検出したものである。いづれも壁や床面が保存されておらず、しかも複合関係にあるので一括した。

複合部は、土壙や柱穴が多数集中し、いづれも複雑な様相を呈している。第1号住居址は、土壙状の比較的大型のピットが巡っている。他は明らかに柱穴と確認できるものがほとんどである。第8号住居址は、すでに炉石は抜き取られていたが焼土が残り、この一群の中にあっては幸いするものであった。土壙や柱穴内から諸磯C式土器と九兵衛尾根II式土器が中心に出土している。



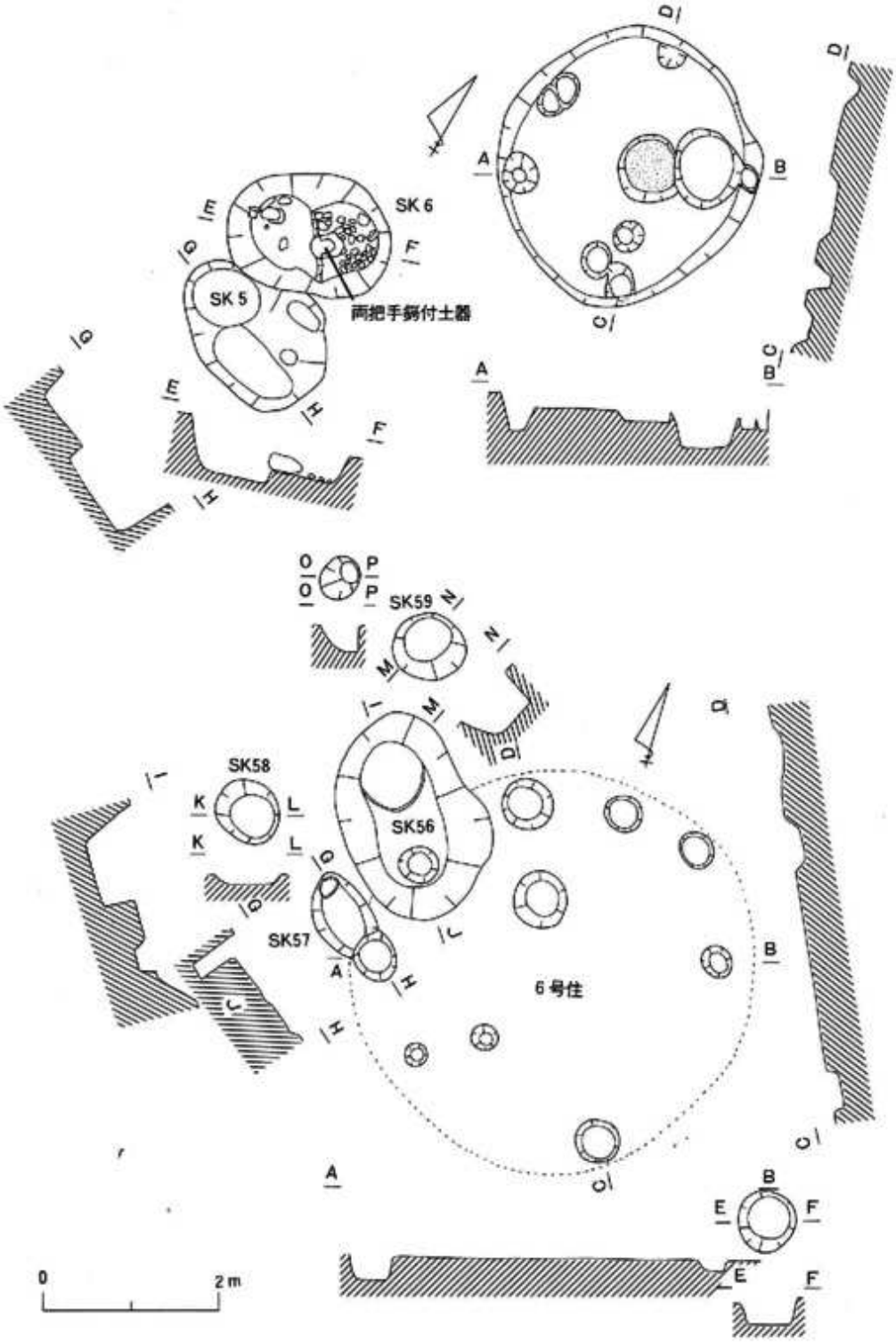
第5図　竹之城原遺跡第2・8・15号住居址、第32～34号土拡実測図（1：80）



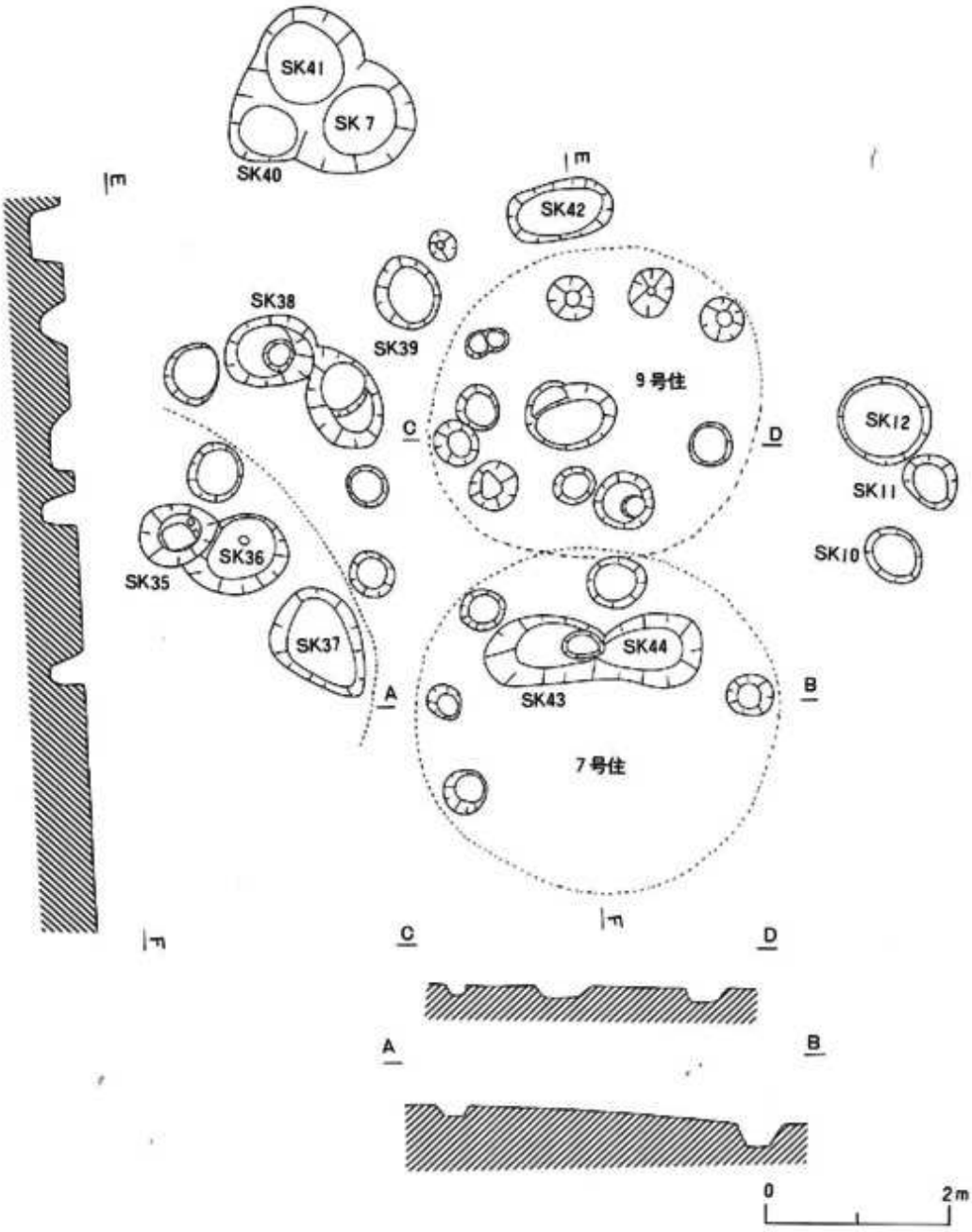
第6図　竹之城原遺跡第3・10号住居址、第1～4・45～55号土拡実測図(1：80)

2)、第3・10号住居址（第6図、図版3、4）

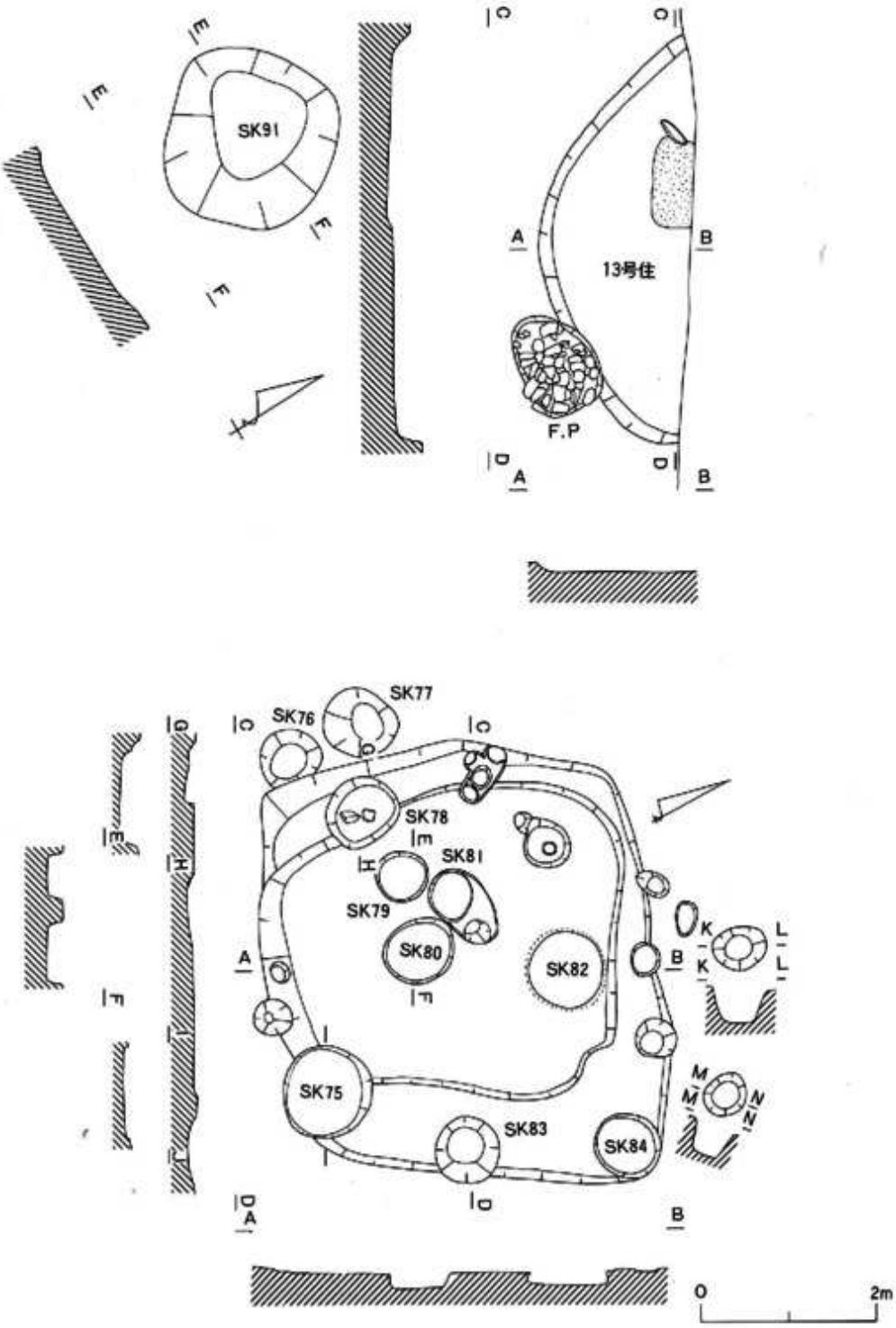
この2棟の住居址は、調査地域南西部の隅で検出されたもので、南から北へ緩傾斜する遺跡の中にあって，最も高い位置に存在する。第10号住居址は、第3号住居址に包括されるように存在しており、柱穴間で直径3.5mを測る。柱穴は5個であるが、このうちの3個は内側から外側に向って作られており、しかも大変深いものである。第3号住居址は、土壙とも思える規模の大きな柱穴が巡っており、一部調査地域外に達してしまっている。想定するプランの直径は約6m前後で、床面まで削り取られているため傾斜している。遺物は、九兵衛尾根II式と花積下層式土器が集中して出土しており、10号住は花積期、3号住は九兵衛尾根期の住居址と推定されるものである。



第7図　竹之城原遺跡第5・6号住居址、第5・6、56～60号土拡実測図(1：80)



第8図　竹之城原遺跡第7・9号住居址、第7・10～12・35～44号土拡実測図(1：80)



第9図　竹之城原遺跡第11・12・13号住居址、第75～84、91・97土拡実測図（1：80）

3)、第５号住居址（第７図、図版４）

本址は、調査地域南西部の第４号住居址に隣接するように検出され、縄文時代の住居址の中では最も良好に保存されていたものである。プランは、直径３m前後で、やや楕円形に近い円形の形態を成している。壁高は15cm～20cm で、一部耕作による攪乱はあるが良好である。床面は比較的固く締っており、ほぼ水平である。炉址は、中央よりやや北東寄りに位置し、直径約80cm を測る円形で、石はなく、厚い大量の焼土が存在していた。柱穴は、８個検出したが、基本的には５個であると思われ、建て替え部分が確認されている。規模は、直径45cm～50cm、深さ25～30cm である。住居址内部の東側には、炉址と隣接するように土壙が検出され、直径80cm、深さ40cm を測る比較的大きなものである。

本址からは、前期初頭の花積下層式土器と黒曜石製のスクレイパーが出土しており、この時期に比定できるのではないかと思われる。

4)、第６号住居址（第７図・図版４）

本址は、調査地域のほぼ中央部で検出された住居址であるが、プランはあくまでも柱穴により想定したものであり、また複合関係をもっていない。規模は、ほぼ4.5m 前後で円形プランになると思われる。中央部よりやや西寄りに直径65cm 程度の円形の炉址が検出されており、焼土が多量に堆積していた。柱穴は７個検出されているが、間隔が不揃いである。

遺物は散在的であり、集中して同時期のものは出土していない。

5)、第７・９号住居址（第８図・図版５）

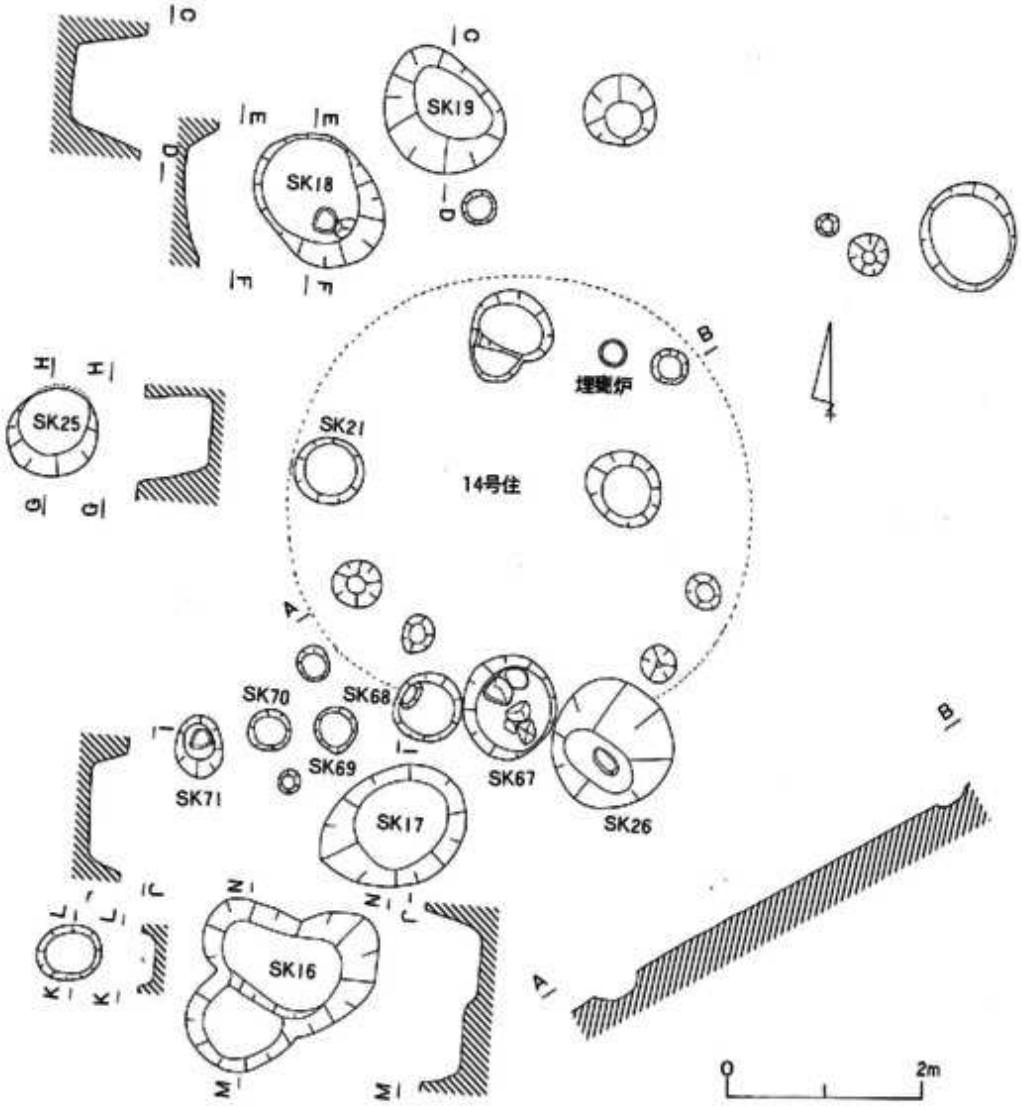
本址は、調査地域南側の、第１・２・８・15号住居址の一群と、第６号住居址との中間で検出され、一部複合関係を有する住居址である。２棟とも例にもれず柱穴によりプランを想定した。第７号住居址は、直径3.8～4.0m になると思われるが、南東部には柱穴が検出できなかった。また土壙が想定プラン内に存在し、複雑な複合関係を成している。第９号住居址は、比較的緻密に柱穴が存在し、容易にプランを想定することができたものの１つである。東西3.7m、南北3.4m 程になると思われ、規模からみると第５号と10号住居址に近似するものである。柱穴は深いもので45cm 程を測り、想定プランの中では良好なものである。

遺物は、花積下層式と諸磯Ｃ式が混在して出土しており、又、打製石斧もこの付近に多かった。

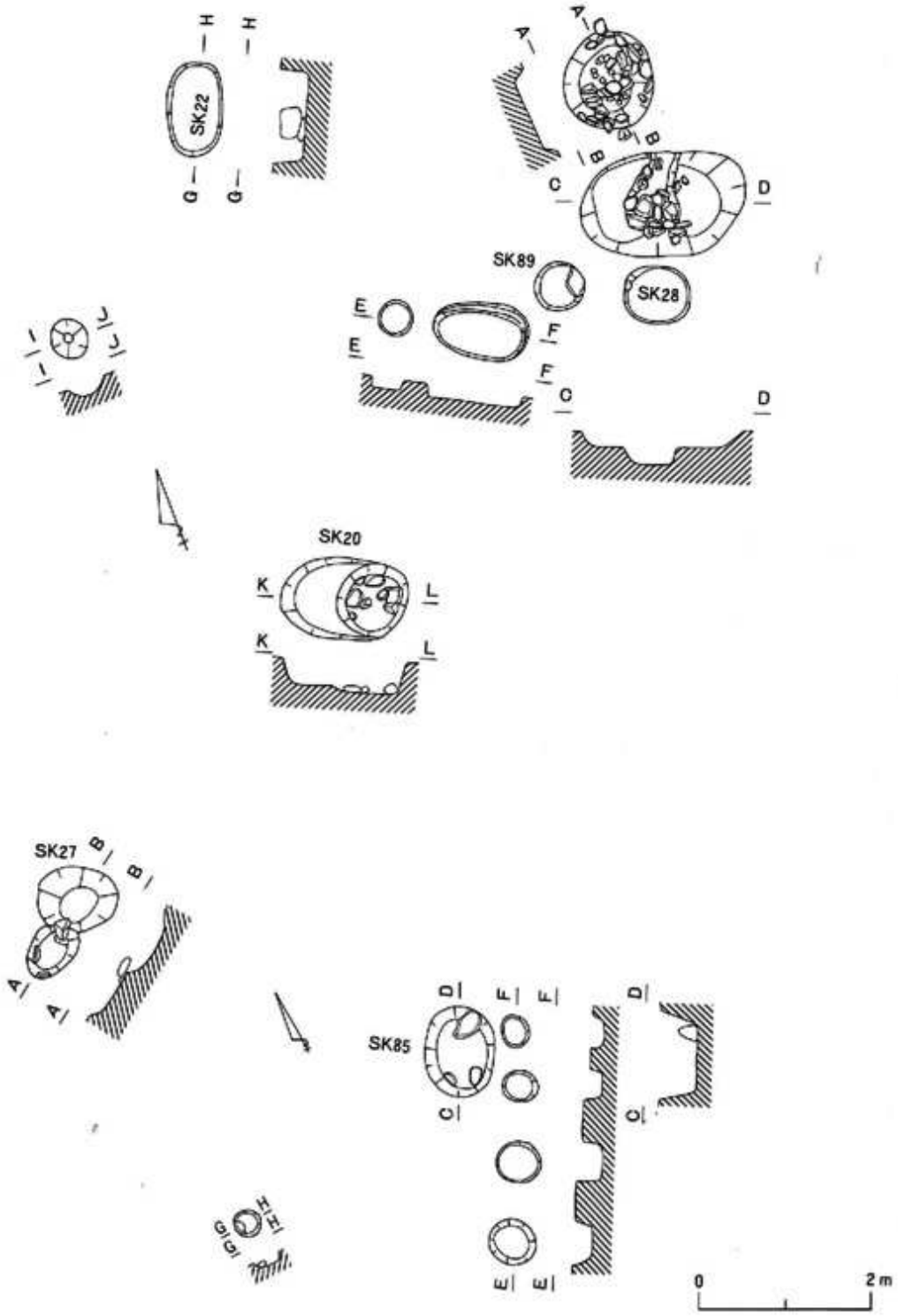
6)、第11・12号住居址（第９図・図版５）

本址は、調査地域の東側で検出された方形の竪穴住居址で、複合関係を有している。斜面下方に当る北側の壁はかなり削られており、検出が難しかったが、全体にはかなり良好な保存状態であった。複合関係は、第12号住居址上に貼り床を行なっているため、第12号住居址→第11号住居址と編年を捉えることはできたが、第12号住居址は第11号住居址の中に全てが包括され、また出

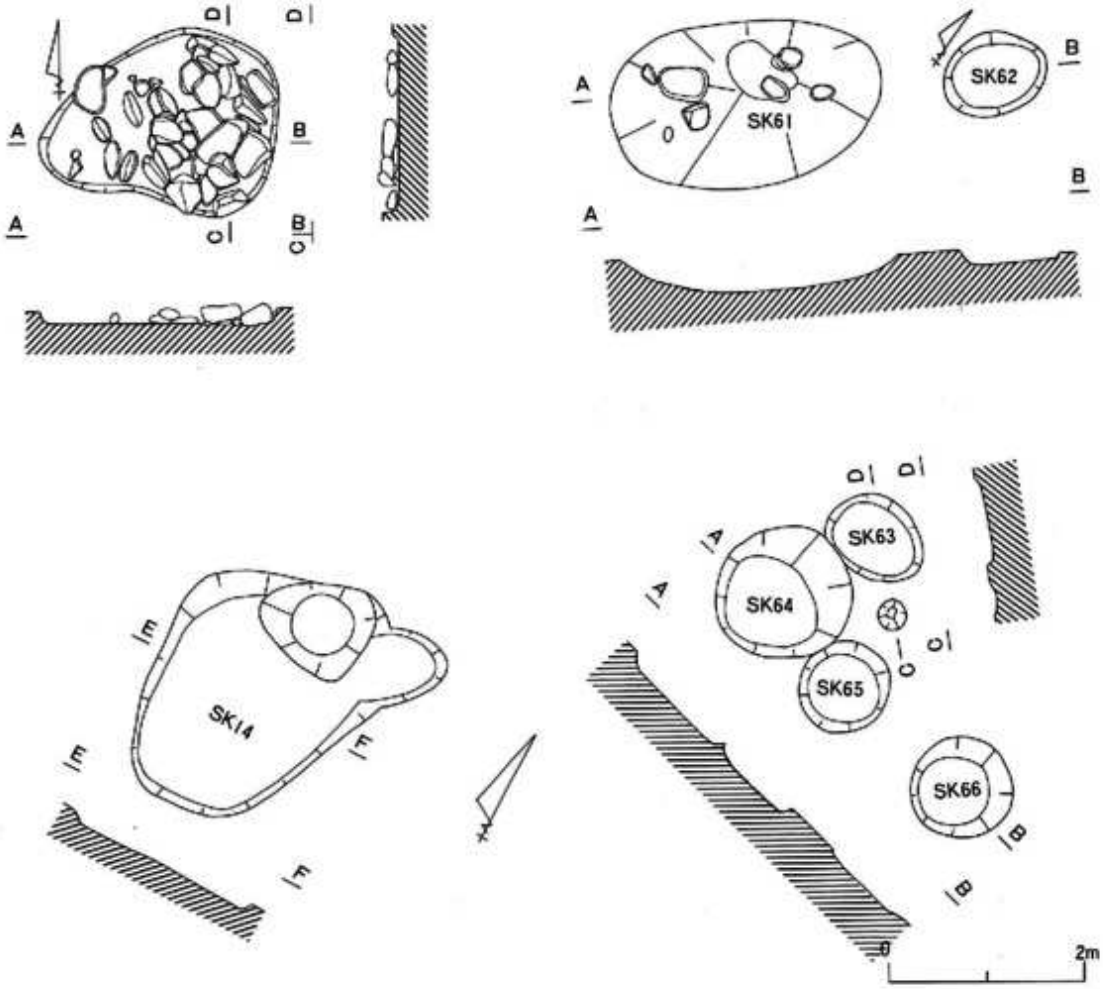
土遺物も同一時期であるため、別個の住居址の切り合いではなく、同一住居址の拡張ではないかと考えられる。第11号住居址は、平面で4.85m×4.5m、壁高は深いところで30cmを測る。床面は、貼床部分ともにやや軟弱であった。柱穴は、壁際を主体に巡らしてあり、しかもコーナー部分ではなく壁の中央部に存在している。第12号住居址は、平面4.1m×3.5m、壁高は第11号住居址の床面まで10cm程であった。北西部の壁は、第11号住居址と同一にしている。床面は比較的固く良好であり、各所に焼土の散乱がみられた。第11・12号住居址内には7基の土壙が存在し、いづれも規模が大きく、SK81・82号の内部には多量の焼土が堆積し、炉址的な様態を想定させるが、様相からして、やはり土壙としての分類をしたい。またこれらは、貼床からは検出できず、第12



第10図　竹之城原遺跡第14号住居址、第16～19・21・25・26・67～71・73～75号土拡実測図(1：80)



第11図　竹之城原遺跡第20・22・23・27・85・87～90号土拡実測図(1：80)



第12図　竹之城原遺跡第14・61～66・97号土拡実測図(1：80)

号住居址の床面から検出しているので、第11号住居址構築以前のものであることがわかっている。

遺物は、床面や土壙内から縄文時代中期初頭の土器が多量に出土している。

7)、第13号住居址（第9図・図版6）

本址は、調査地区の最北端で検出され、調査地域設定部外へ大部分が入り込んでしまっていた。したがってプランの平面規模は捉えることができないが、壁高は20cm～25cmを測り、かなり良好に保存されているものである。床面は軟弱であり北へ向ってやや傾斜する傾向がみられた。炉址は調査地域外へ一部入り込みながら検出され、1mの範囲に焼土が散乱していた。

床面から諸磯C式土器を中心に出土しているところから、時期設定の有力な資料とみてよさそうである。

8)、第14号住居址（第10図・図版７）

本址は、調査地域東側の第11・12号住居址に隣接して検出されたもので、プランはすでに存在せず、柱穴と埋甕炉によりプランを想定したものである。平面規模は約4.8m前後になると思われ柱穴と土壙が散在状態に見えるが基本的には円形に巡っている。土壙は、本址に伴うものかどうかは判別がつかない。本址を確定づけたのは埋甕炉の存在であり、確実なる時期設定を行うことができた。埋甕炉は、平面で直径35cm を測るが、口縁部と胴部下半の大部分を打ち欠いて埋設している。内部には、僅かな焼土と炭が混入していた。

埋甕炉からみて、九兵衛尾根Ⅱ式の住居址である。

２、土壙

竹之城原遺跡で検出された土壙は92基を数えるが、先にも記述したとおり、柱穴で想定した住居址との関係で、柱穴と土壙が曖昧な部分が所々にあるため、多少の増減は考慮しなければならない。時期の設定については、遺物の出土内容や出土状態により判断したが、多くは覆土内から僅かに出土するものや、混在状態であるものが多く、確実に設定できるものはほんの数例でしかない。形態は、円形ないし楕円形が最も多く、長楕円形や不定形のものもまれに存在している。深部形態は、平面部と比較して浅い桶形、深い樽形、垂直に掘り込まれている直下形、あるいは袋状の土壙など多種にわたっており、これらの中では桶形、樽形が最も多い。さらに、土壙壁面に礫が多量に突出しているものもあり、他の土壙との区別を想定させるものである。調査した遺跡全体の中で、土壙の集中する箇所は、住居址の存在する部分ないしその周辺部であることに興味をひく。住居址との密接な関係を物語るものであろう。

1)、第５号土壙（SK05）（第７図・図版10・11）

本土壙は、第３号住居址と第５号住居址の中間で検出され、平面1.9m×1.35mの楕円形を成し、底部は２段に分かれ、深い部分で55cm、浅い部分で40cm を測る。深い部分には河川の小玉礫が全体に敷かれ、口縁部直下に鍔を有する両把手付のほぼ完形の樽形土器が北側にやや傾いた状態で出土した。また、深鉢形土器の破片も出土している。下段の深い底部からは、拳大の礫が少量存在し、同様の樽形土器とも考えられる底部が出土している。これらの様相から他の土壙とは異った用途に使用したのではないかと思われる。出土土器から曽利期の土壙と思われる。

2)、第23号(SK23)、28号(SK28)土壙（図版９・10）

これら２基の土壙は、調査地域のほぼ中央部で近接して検出された。SK23は、かなり浅いもので、内部から小型の深鉢形土器が出土した。また、SK28は、比較的大形の深い土壙で、掘り切り部から大形の深鉢形土器が出土した。

時期は、九兵衛尾根Ⅱ式である。

第2節　縄文時代の土器

本遺跡から出土した縄文式土器は総体的に余り多いとはいえないが、当地域における発掘調査で、群として捉えることのできる諸磯C式併行期の資料や、昭和57年度の後沖遺跡の発掘調査で、蓼科山北麓では初めてその実態を把握することができた九兵衛尾根Ⅰ・Ⅱ式土器が、再び本遺跡の中心的存在の遺物として出土している。しかし縄文時代前期初頭から中期末葉まで、遺構に伴う資料は極めて少なく、その大半は遺構外から出土したものである。したがって、遺構から出土した資料は、その都度明記することにし、遺構外の資料と一括にして分類を試みた。

第Ⅰ群土器（第13図13・図版14）

縄文早期末に比定するものを本群とする。本群に属するものは、第13図13の茅山式土器1点だけである。表面・裏面ともにかなり太目の条痕が施文され、表面は黄茶褐色、裏面は茶褐色で、胎土には大粒の石英、長石、パミスが多量に混入し、また少量ではあるが繊維が混入している。焼成は極めて良好である。

第Ⅱ群土器

縄文前期初頭の土器を本群とする。

第1類（第13図2～5・11、図版14）

縄文原体を押圧施文するものを本類とする。いづれも繊維の含有はなく、表面が茶褐色で内面が黒色を呈するものである。焼成は良好で、狭雑物等は含まれていない。2～4・11は器面に対して数条ずつの押圧が成され、方向は数条の1単位ごとに一定している。5は地文に原体を回転施文した後、その上に押圧を行なっている特異な資料である。いづれも第5号住居址の出土資料である。

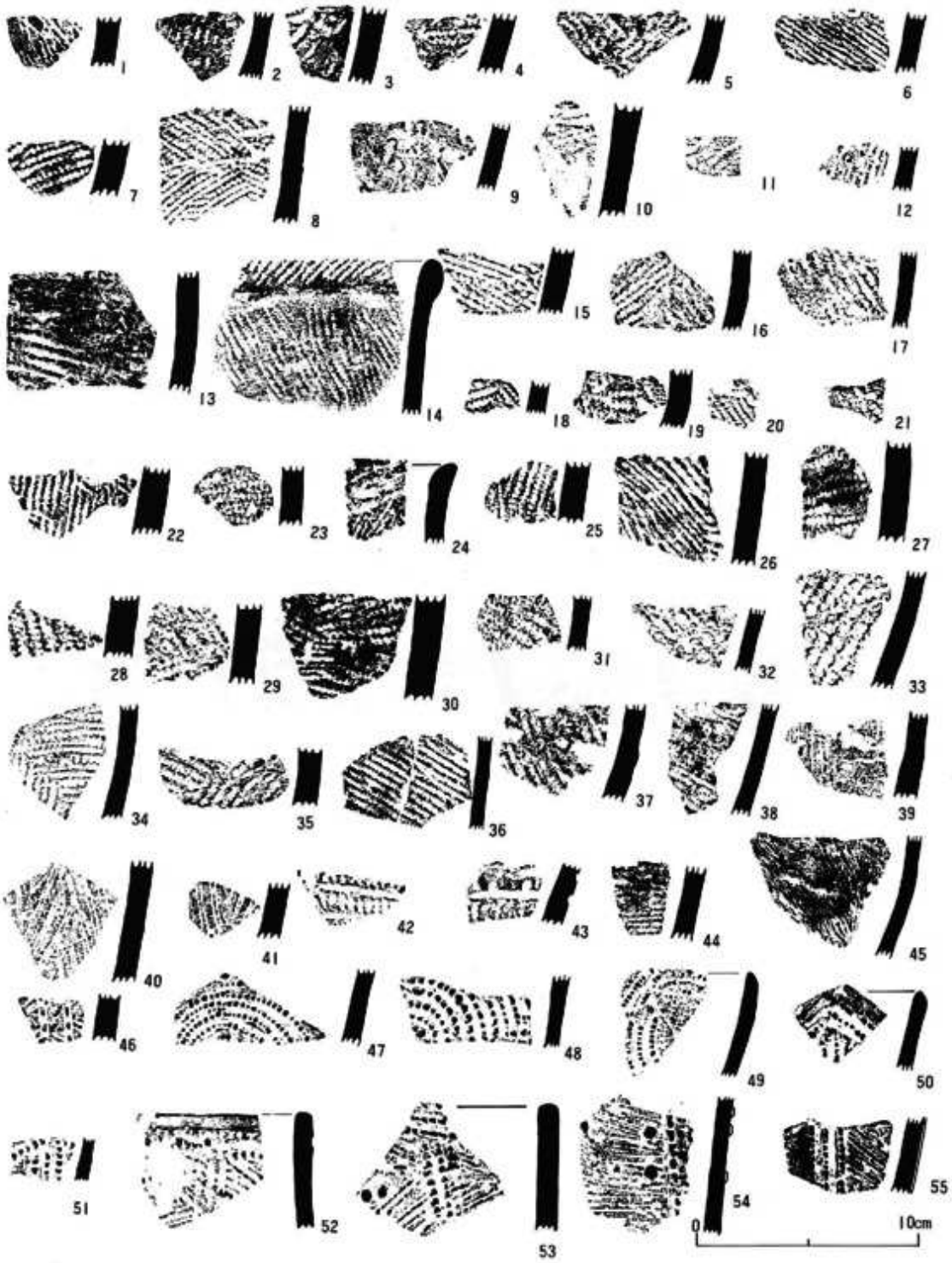
第2類（第13図14～39、図版14）

a種（14）

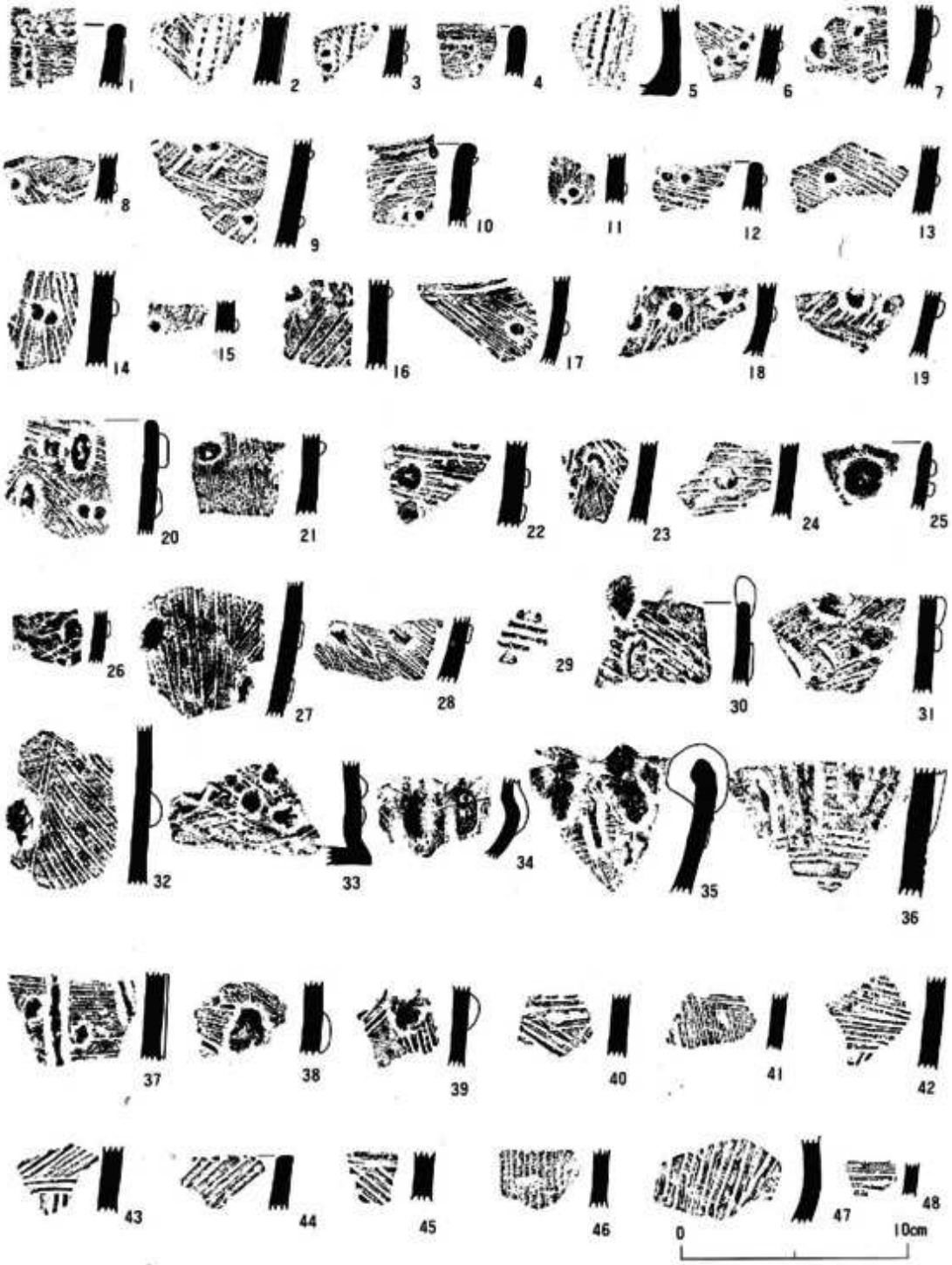
単節縄文が施文され、肥厚口縁を有するものを本類とする。本遺跡からは1点だけ出土しているだけである。口縁部施文帯と胴部施文帯は明らかに区別して行なっており、しかも施文方向は異なっている。破片からみると平縁であるが、波状口縁を成す可能性がある。胎土には金雲母が多量に混入し、繊維は含まれていない。焼成はややもろい。

b種（5～39）

a種以外のものを全て本種として取り上げた。本種の中には斜縄文施文の方向を変化させることによって羽状縄文のように表現しているものや、単に斜縄文の施文部のみのものなどが含まれ概して繊維の混入が比較的多い。



第13図　竹之城原遺跡出土土器（1：3）



第14図　竹之城原遺跡出土土器（1：3）

第３類土器（第13図40～41）

R縄文の原体２本撚えの単軸絡条体を縦位に回転施文したものを本類とする。本類は、僅か２片しか出土しなかった。胎土には僅かな繊維と砂粒が混入し、表面は黄褐色、内面は黒褐色を示し、焼成は良好の資料である。

第Ⅲ群土器（第13図46、図版14）

縄文前期中葉の土器を本群とする。本群に属するものは、有尾式に比定される第13図46と図示できなかった南大原式の２点だけである。いづれも少片であるがその存在は貴重である。

第Ⅳ群土器

縄文前期後半の諸磯Ｃ式土器に比定するものを本群とする。

第１類（第13図47～51、図版14）

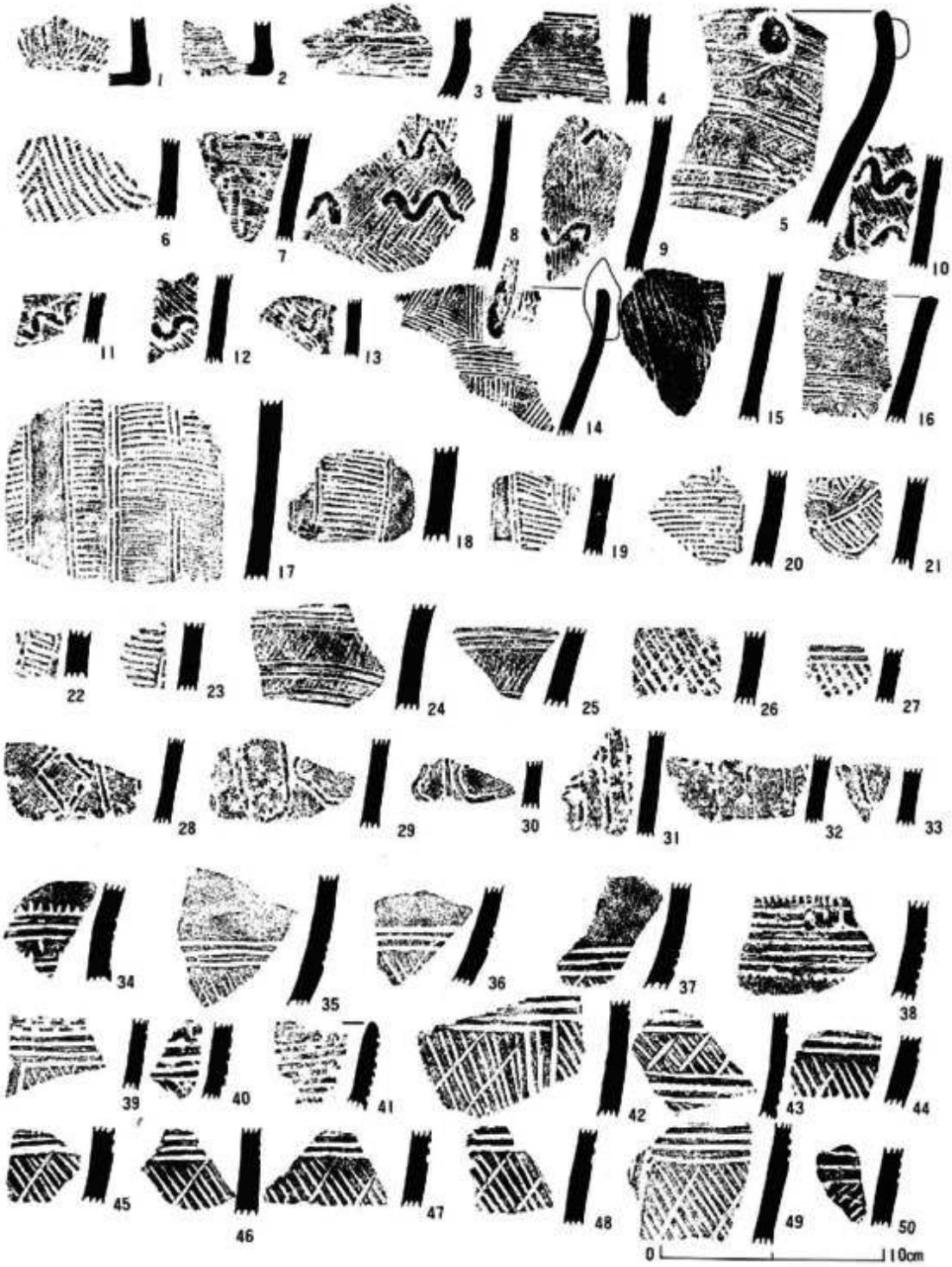
結節状浮線文を有するものを本類とする。但しこのうち地文に沈線を施文し、その上部に結節状浮線文のあるもの、あるいはボタン状貼付文のあるものは別類とした。47～49は、器面に対して同心円状に粘土紐を貼付し、その上を半截竹管の施文具により連続の押し引きを行なったものである。50～51は、横位ないし縦位に粘土紐を貼付し、その上を同様に施文したもので、施文方法は同一であるが文様形態はやや異なるものである。胎土はかなり精練されてなめらかで、微量の砂粒が混入しているだけである。色調は、黒褐色、茶褐色、赤褐色と一様でなく、二次的な変化を受けて変色しているものもある。

第２類（第13図52～55、第14図１～５、図版14、15）

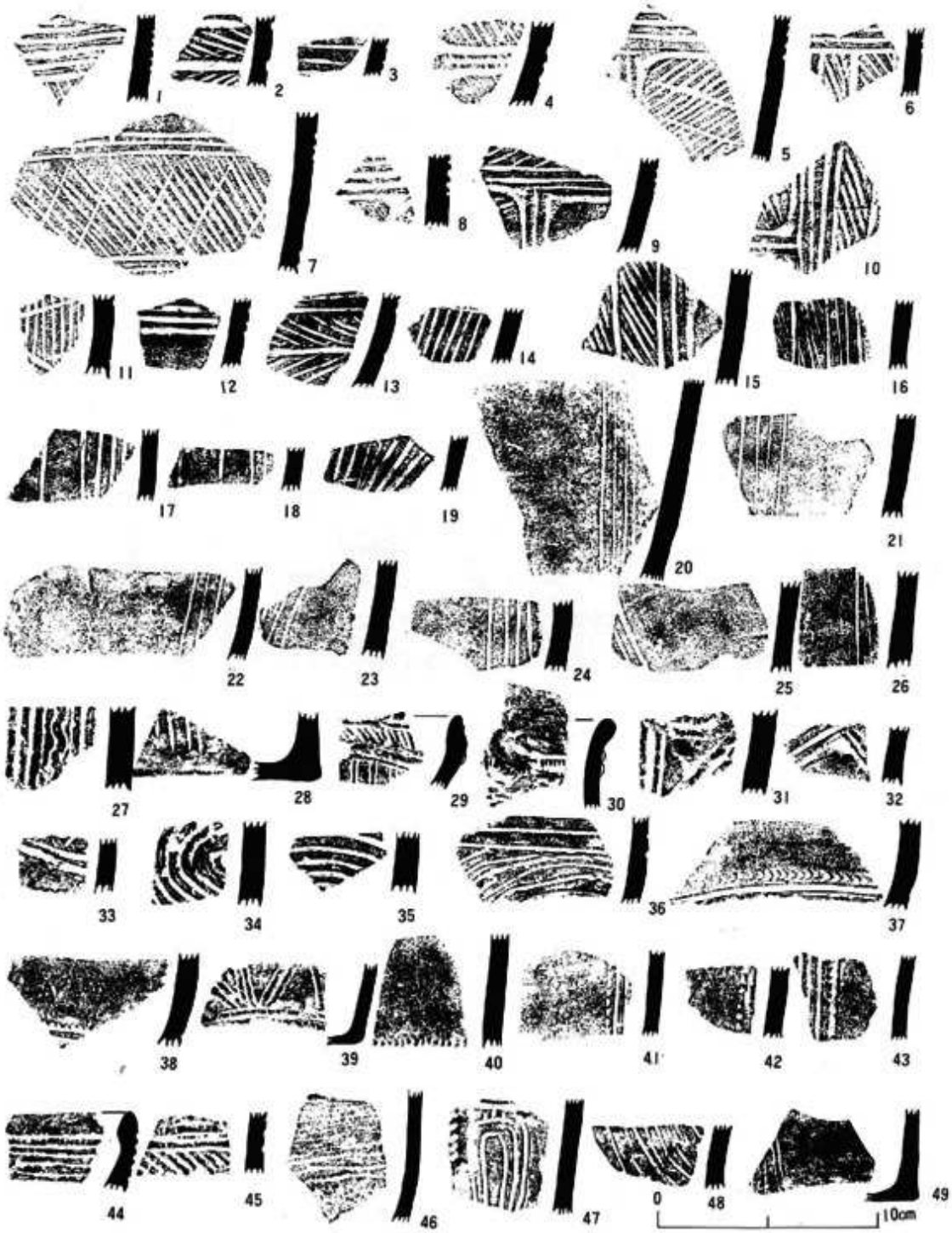
結節状浮線文が施文されているもので、地文に沈線文を有し、これにボタン状突起文を貼付してあるものを含めて本類とする。地文には、横位ないし斜位の沈線文が棒状の工具で併行に施文されている。半截竹管を使ったものはない。この沈線を施文した上に粘土紐を口縁部に対して併行ないし縦位・斜位に貼付し、その上面を半截竹管により押し引きを行なっている。結節状浮線文は、三本が１組となり、あくまでも直線的に貼付している。さらに地文の沈線部分にボタン状突起を貼付しており、この類の土器が本類の中ではかなりの割り合いである。ボタン状突起文は、二個が１対となり、文様の構成を成している。胎土は、第１類と同様精練され砂粒が僅かに混入しているだけのものが圧倒的に多いが、54のように小石と砂粒が目立つものもある。このような胎土の土器は、第３類で示す土器と同種であり、地域的なものかないしは本群の末期的な傾向を示しているものと思われる。

第３類（第14図６～15図１、図版15）

地文に沈線文を施文し、その上面にボタン状突起文を貼付しているものを本類とする。本類は第２類の特徴である結節状浮線文は存在しないものである。基本的な器形は、胴部から口縁部にかけて大きく開き、胴部がややくびれ、底部にかけてやや開くという特徴をもっており、口縁や



第15図　竹之城原遺跡出土土器（1：3）



第16図　竹之城原遺跡出土土器（１：３）

口縁部直下に器体を巡る耳状突起文が貼付（第14図30・34・35）され、地文である沈線文上にボタン状突起文が貼付される。また、耳状突起文の間に粘土紐を縦位に貼付（第14図35～37）する場合もある。縦位粘土紐の部分、いわゆる口縁部直下の文様帯は、横位数段にわたる沈線文が施文されることが多い。胴部から底部にかけては、縦位ないし斜位に、平行する数条の沈線文を単位として施文し、その上面にボタン状突起が貼付されており（第14図６～29）、文様は底部にまで達しているものがほとんどである（第14図33）。第14図40～第15図１は、胴部から底部にかけての資料で、ボタン状突起文部からはずれている資料である。本類のボタン状突起文は、大粒化し、また、それと併行しながら胴部にも小型の耳状突起文が貼付される場合が多い（第14図27・28・31・32・38・39）。

本類は下島式土器として編年されるもので、丸山遺跡、田畑遺跡、一の釜遺跡などに類例を見ることができる。

第Ⅴ群土器

縄文前期末葉の土器を一括して本群とする。

第１類（第15図６・７、図版16）

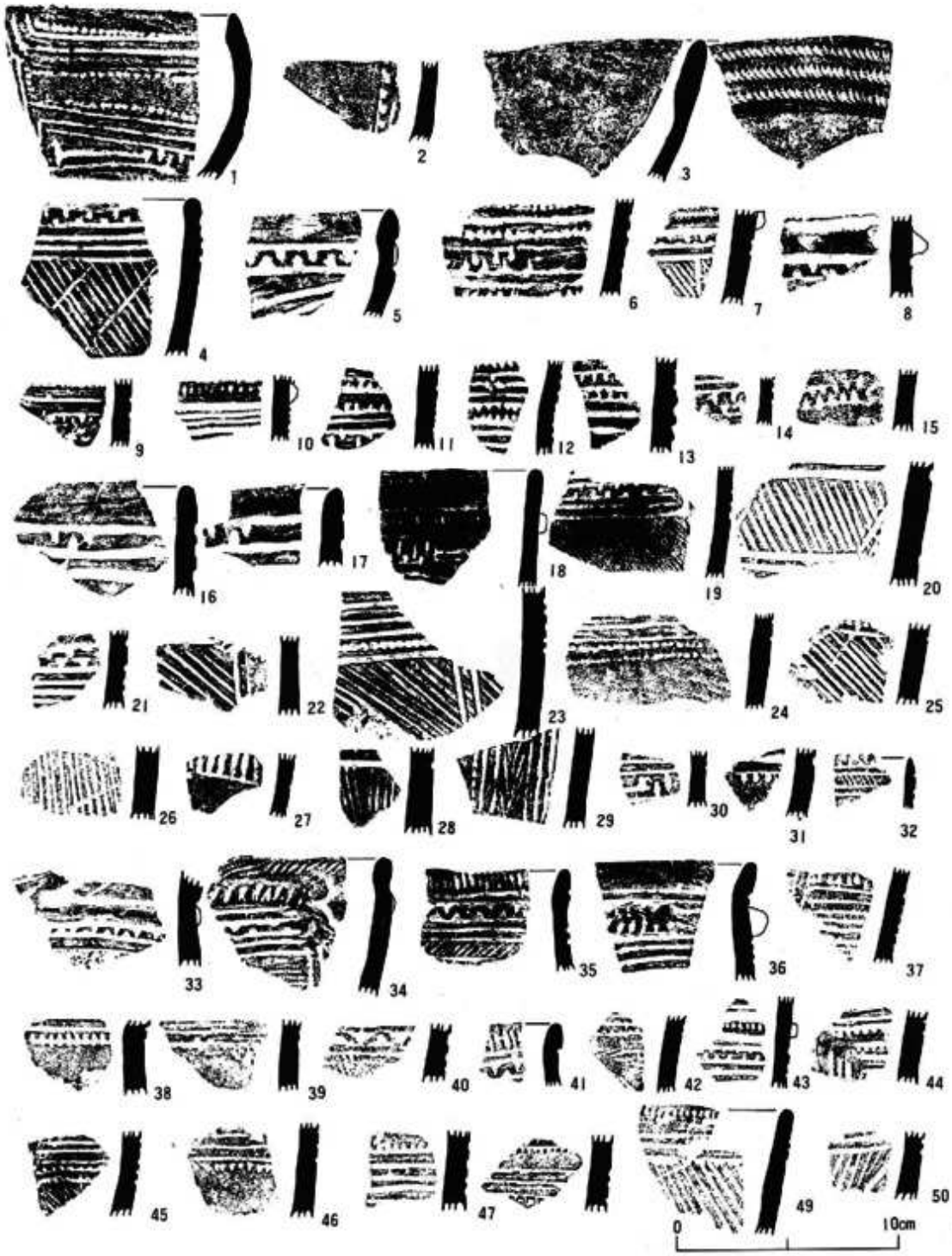
地文に細い沈線文を施文し、その上面に同心円状に粘土紐を貼付し、円の中心部から放射状に棒状工具により沈線を施文しているものである。一見すると諸磯Ｃ式の特徴である第Ⅳ群第１類の結節状浮線文のように見えるが、粘土紐上への半截竹管文は行なわず、沈線により極めて簡略化しているものである。本類の土器を結節状浮線文として分類している報告例が大半を占めるがステップを置くべきである。胎土は、第Ⅳ群土器の小石や砂粒が比較的多く含む資料と同一であり、焼成も極めて良い。７は、横位を基本とする沈線文の上面に、縦位ないしＵ字状に粘土紐を貼付し、棒状工具により沈線を加えたもので、粘土紐の形態は６とは異なるが施文技法は同一である。第Ⅳ群第１・２類に比べ、粘土紐は細く薄くなり、施文技法の簡略化とともにその種の末期的現象を示すものである。

第２類（第15図２～４・15、図版16）

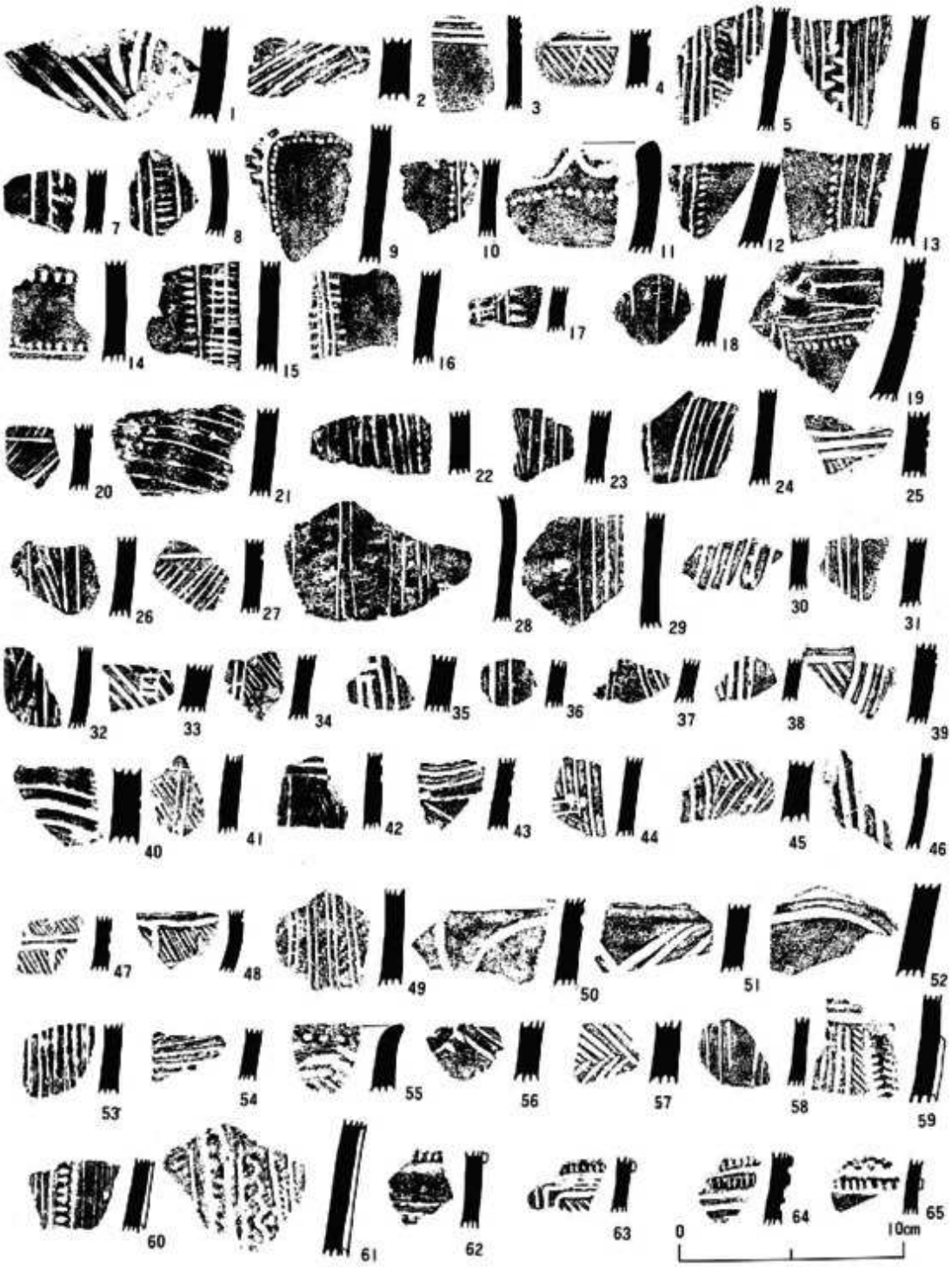
沈線文のみ施文されているものを本類とした。器体に対し数条を単位に横位、斜位に施文しており、胎土には小石、砂粒が多く含んでいる。第Ⅳ群の影響を強く受けているものである。

第３類（第15図５・16・25・25、図版　）

地文に単節斜縄文を施文した後に横位を基にした数条単位の沈線文が描かれているものを本類とした。５は口縁部に貼付文がみられるもので、横位の沈線文の間に孤線文状の沈線が施文されている。16は口縁部に半截竹管の押し引き文がみられ、また口縁下部には半截竹管の刺突文が施文されている。いづれも比較的Ⅳ群の影響を受けている土器である。24と25は、地文の斜状文に横位の沈線文が施文されているだけであるが、中期的な傾向が強い土器である。本類はいづれも小石と砂粒が混入しており、焼成は極めてよい。



第17図　竹之城原遺跡出土土器（1：3）



第18図　竹之城原遺跡出土土器（1：3）

第４類（第15図８～12、図版16）

半截竹管により縦位、斜位の沈線を施文したのちＳ字状の粘土紐を貼付したものを本類とする。沈線は綾杉状や「く」の字型に施文されており、粘土紐は概して太いが、９のように細いものもある。胎土は砂粒やパミスが混入しており、焼成は良好である。

第VI群土器

縄文中期初頭の土器群を本類とする。（梨久保式前後）

第１類（第15図26・27、図版16）

籠目文を主体とする土器を本類とするが、図示した２点のみしか出土していない。踊場式、晴ヶ峯式の特徴を受けるものである。梨久保式土器に該当する。

第２類（第15図35～第16図19・44・45、第17図４・７・20～23・25～28・49・50、図版16）

籠目文が非常に簡略化された土器で、口縁部に数条を１単位とする併行沈線を二段巡らせ、その間に斜位に沈線を施文し、この沈線と交錯するように逆方向に荒く沈線を描いているものである。さらに併行する横位の沈線から底部に向って垂直に沈線が描かれている。器面はよく調整されているが、石英が多量に混入し、焼成はあまりよくない。

第３類（第15図28～33、図版16）

器面に沈線文を施文し、その上面に区画文を描く土器である。沈線は極めて細いもので、交鎖する斜状沈線を全面に施文し、そこに菱形や楕円状の区画文を半截竹管により描いている。胎土には石英を多量に含有しており、内外面ともに突出している。本類は梨久保式土器として型式分類されるものである。

第４類（第17・18図、図版18・19）

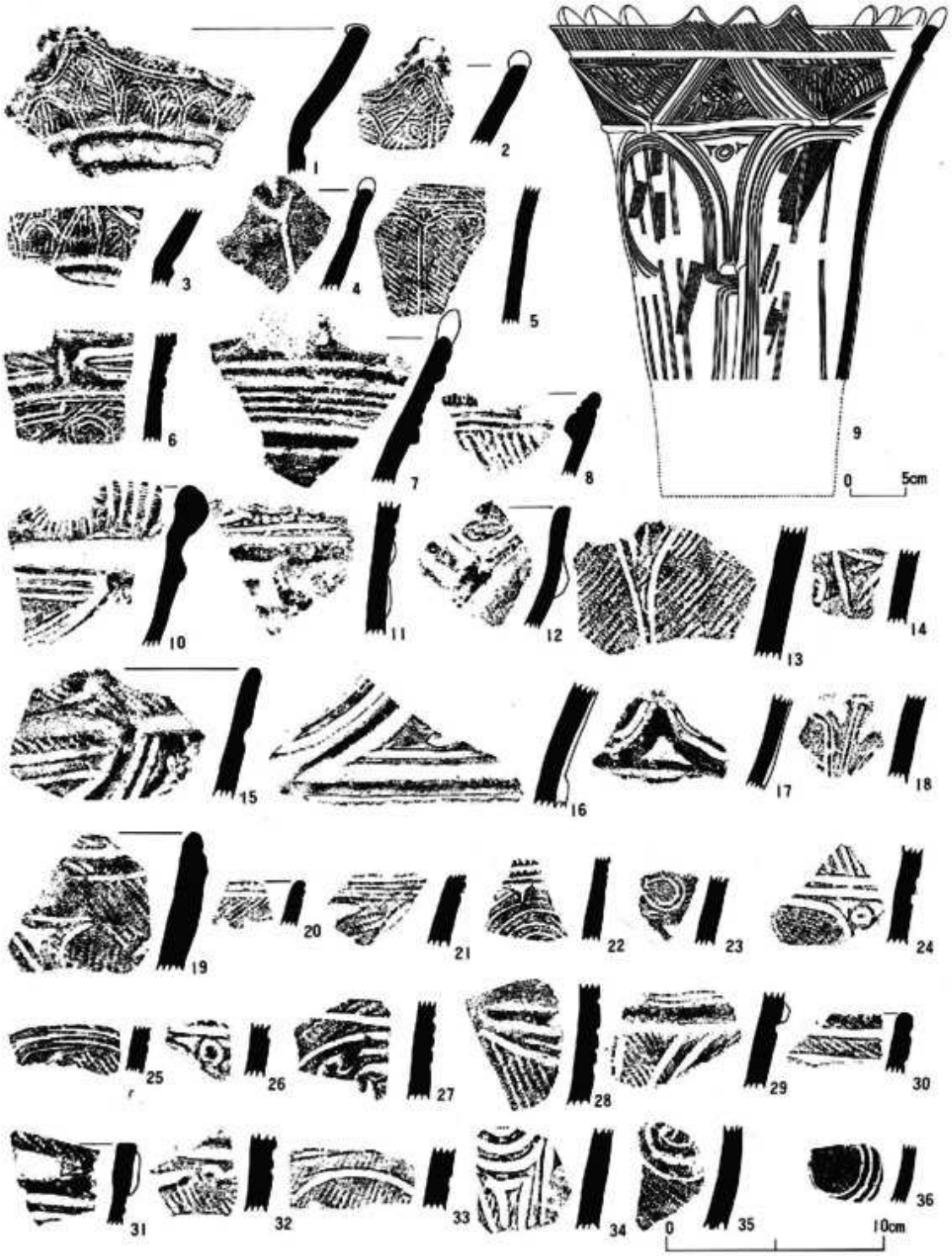
鋸歯状文、三角形列点文を特徴とする土器である。口縁部や口縁部直下の平行沈線に対して刺突されるものが多く、晴ヶ峯式土器の特徴をよく伝えているものである。鋸歯状文は中期中葉まで残り、この二種の文様部だけでは時期設定が困難な資料もあるが、本遺跡出土資料は本群から第VII類にかかるものとみられる。

第VII群

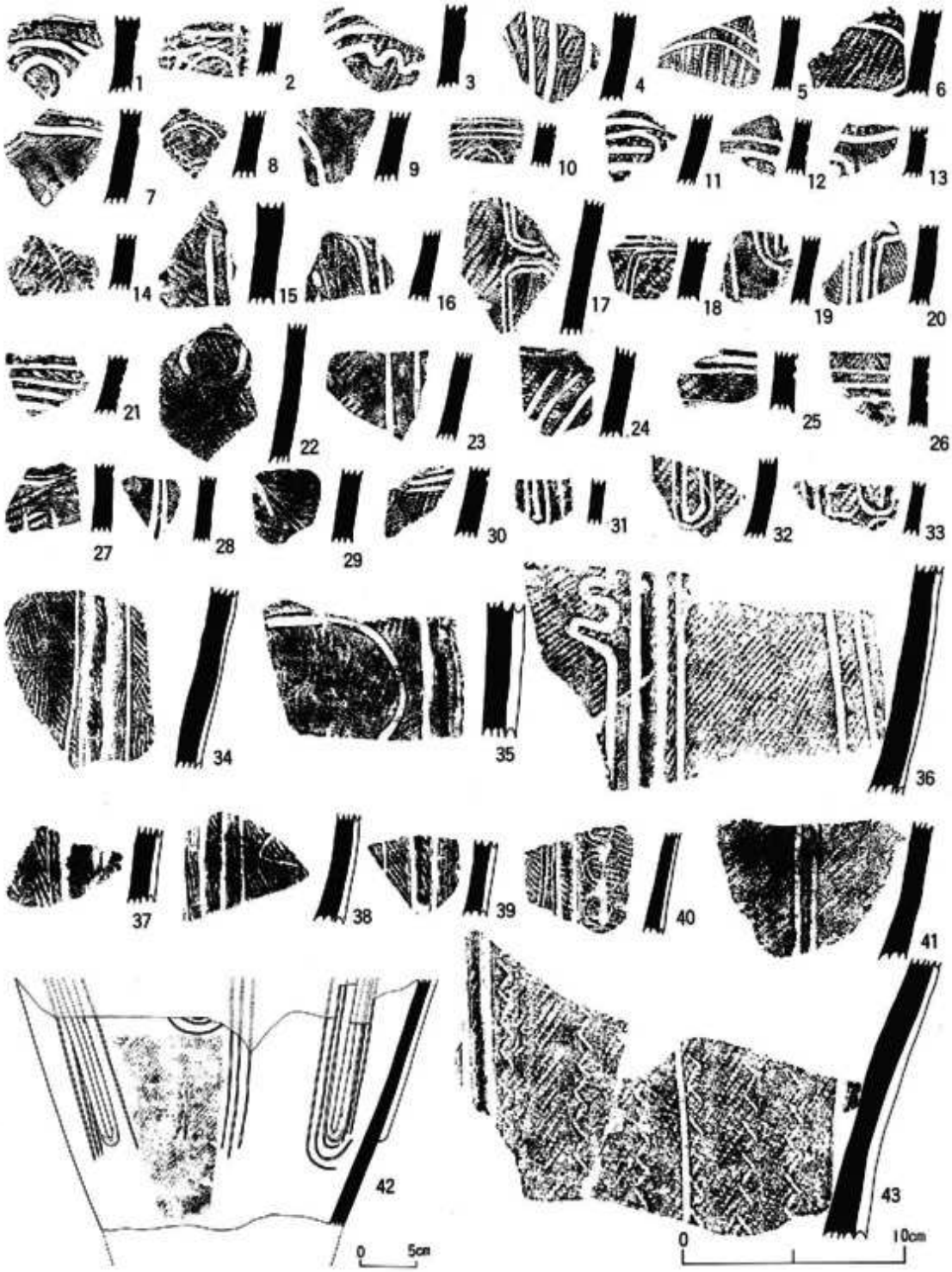
縄文中期初頭の土器群を本群とし、梨久保式と区別をした。

第１類（第19、20、21図１～50、図版20～23）

九兵衛尾根II式土器を本類とする。竹之城原遺跡の出土土器の中では本類が最も多く、遺跡の性格を特徴づけるものである。器形にまとめることができた資料は、第19図９と、第20図42、51である。第19図９の特徴は、器形は底部から胴部にかけてやや広がりぎみの円筒形で、胴部が長く、口縁に向ってラッパ状に外反している。口縁部は３個の山形を１単位とする波状部が三ヶ所に作られている。文様は、器面全体に単節斜縄文を地文として施文している。この上に、口縁部



第19図　竹之城原遺跡出土土器(9・1：6、他1：3)



第20図　竹之城原遺跡出土土器(42・1：6、他1：3)

直下を一周する太い半截竹管文が施文される。頸部から口縁部にかけてラッパ状に広がる部分に粘土紐による隆帯を三角形に貼付し、三角形区画文を作り出している。この隆帯の両側には細い竹管状工具によって3条～6条の沈線を描いている。さらに区画文の中央部に玉抱き三叉文が施文されている。8区画ある部分にそれぞれ施文しているとともに、一区画内を沈線で二分し玉抱き三叉文が描かれていない部分もある。玉抱き三叉文の円文は、二重の同心円ないし渦巻き状に沈線で描き、三叉文はヘラ状工具による削り取りが行なわれている。胴部は三角区画文の下部から九兵衛尾根II式の特徴であるY字状に隆帯を貼付し、その両側を竹管状工具により細い沈線が施文されている。Y字状文内部にも玉抱き三叉文が施文されている。またY字状文からはずれる部分には、同じ竹管状工具により縦位に沈線が描かれている。器面は縄文が磨り消され、調整の跡をみることができる。9はやや特徴的な土器であるが、他の図示した土器とはやや施文方法が異なる部分がある。第19図1～3は波状口縁部にY字状文を沈線で施文しているものであり、頸部には隆帯により横長の楕円区画文を施文している。5はその胴部であり、楕円区画文の下部に、やはり沈線によりY字状文を施文している。

その他図示した資料は、口縁部に隆帯による文様帯をもち、他の部分は沈線によりY字状文や玉抱き三叉文を施文しているものである。中には九兵衛尾根I式の特徴を備えた土器もあるが、本群で一括した。

第21図47～50は本類の浅鉢形土器である。口縁部の内側に連続押し引き文が施文されている。浅鉢形土器はこの4片の出土にすぎない。

九兵衛尾根II式土器は、昭和57年度の発掘調査で得られた第7・18号住居址と土壙5・20・32・35・48号出土資料があり、ようやくここに来て蓼科山北麓地域における中期初頭の分析が始まろうとしているのである。

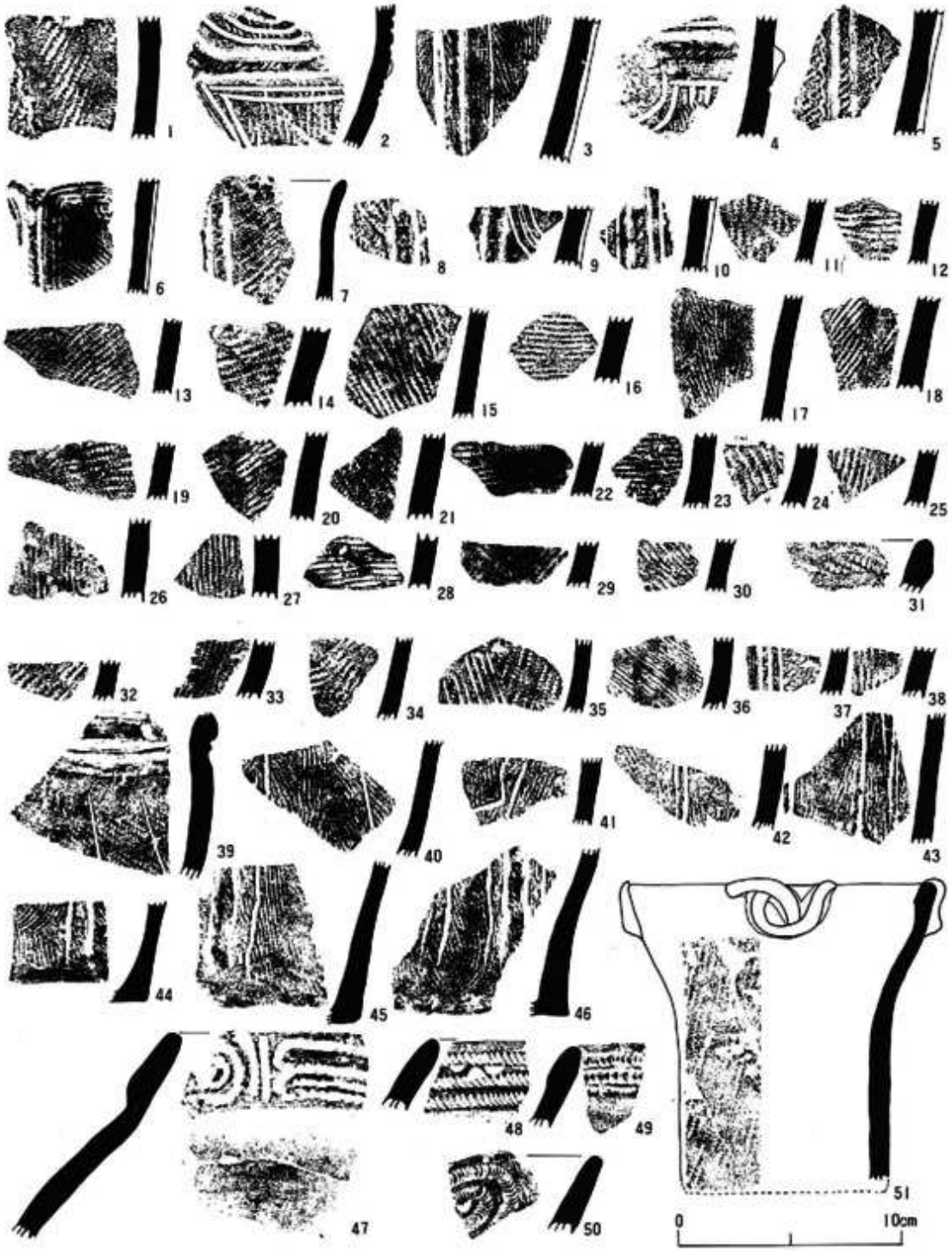
第VIII群土器

縄文中期末葉の土器を本群とする。

第1類（第22図1、図版23）

中期末葉の土器はあまり出土しておらず、代表できるものは本資料の両耳鍔付樽形土器である。時期は曽利V式である。口縁部直径20.8cm、器高35.5cm、胴部の最大幅25.5cmを測る。器厚は0.9～1.9cmで鍔及び両耳部が最も厚い。鍔はかなり幅の広い粘土紐を器体に一周させている。両耳部は、装飾としてではなくあくまでも機能本位に作られており、しっかりしていて強い。文様は唐草文系土器の特徴である綾杉文が底部直上まで施文されているが、施文技法からして末期的な様相である。

器形、文様から求められる類例は、長野市安庭遺跡の土器があり、ほぼ同一とみてよい。他に器形や文様の変化を伴う資料も数例みられるが、やや意を異にするものである。本資料は、第5号土壙の河原石を敷いた所で出土しており、その性格も興味をひくところである。



第21図　竹之城原遺跡出土土器（1：3）

第3節　縄文時代の石器

竹之城原遺跡は、縄文時代と平安時代の2時期であるので、出土した石器は縄文時代のものであることは区分できるが、縄文時代の中では遺構と密接に結びつけて時期設定できるものはまずないといってよい。しかし、傾向としては早期末葉、前期初頭ないし後葉、中期初頭ないし末葉のいづれかに該当するものと思われる。これ以上の推測はまず不可能である。

出土した石器は、石鏃、石錐、スクレイパー、石匙、両極石器、打製石斧、磨製石斧、横刃型石器、凹石、敲打器、磨石、その他使用痕のある石器、調整痕のある剥片などが出土しているが、量的にはかなり少なく、これも本遺跡の特徴のひとつでもある。

1)、石鏃（図版26）

出土した石鏃は60点程で、全てが良質の黒耀石製である。このうち完形品は20点程で全体の⅓を占めている。 欠損部の多くは基部であり、 次いで尖端部であり、中央部から欠損しているものはない。形態は、有茎はなく全て無茎であり、基部の短い長身鏃である。また基部の無い平基鏃や、脚部の作出部が逆にふくらむ円基鏃が数例出土している。

2)、石錐（図版26）

石錐は7点出土しており、そのうち2点が刃部欠損品である。棒状のものはなく全てがつまみを作り出している。1例だけではあるが、大部分がつまみ部であり刃部は尖端部に僅かに加工しているものがある。石材は黒耀石で良質である。

3)、スクレイパー（図版26）

スクレイパーはおよそ60点程出土しており、黒耀石製が圧倒的に多い。サイドスクレイパーとエンドスクレイパーとを比較すると、そのほとんどはサイドスクレイパーであり、縦長剥片の両側辺部を加工したものが多い。

4)、石匙（図版26）

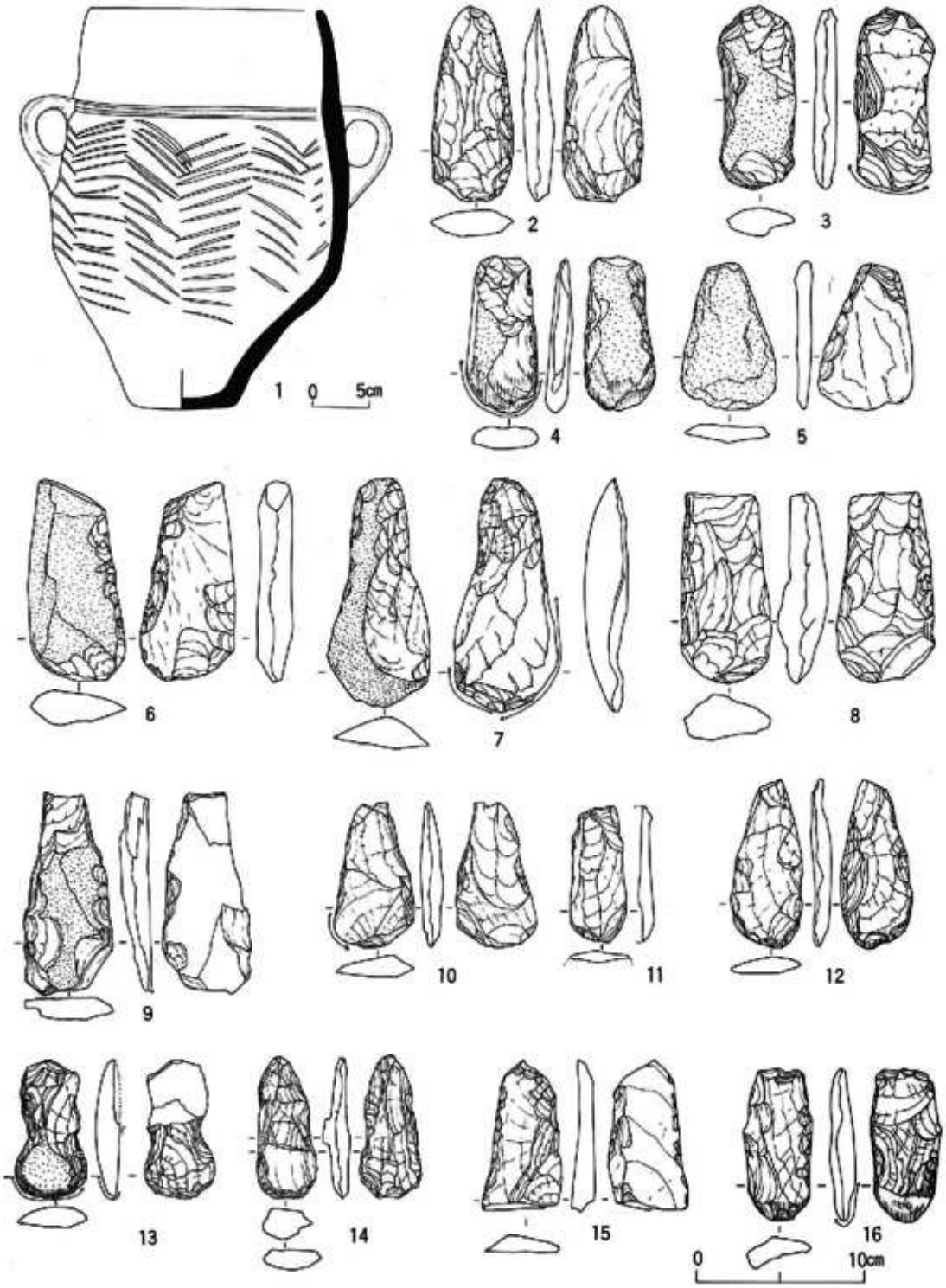
石匙は5点出土した。1点だけ硬砂岩製であるが、他は黒耀石製である。形態は、1点が縦型であり、4点は横型である。いづれも石匙の中では極小の分類に含まれる。

5)、両極石器（図版26）

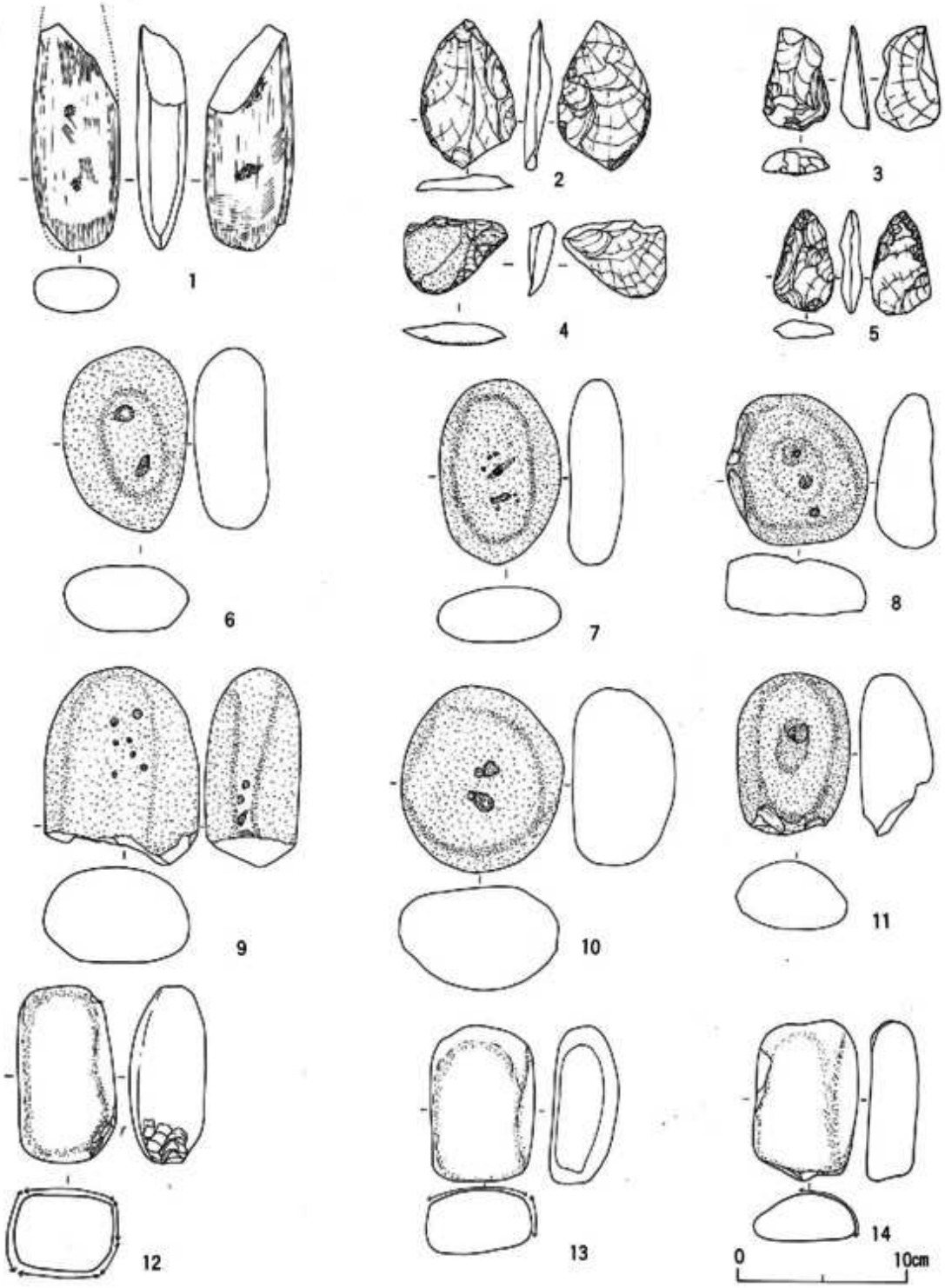
両極石器は18点を数えた。一方の打撃痕が直接的に反対側の打撃（ダメージ）と一致し、しかも剥離面の方向が相対しているものを全て含めた。石材はすべて良質の黒耀石である。剥片を利用しているものはほとんどなく、多くは礫核を使っている。形態は、いわゆる曽根型石核形態のものは数例しかみることができず、多くは不定形である。

6)、打製石斧（第21図2～16・第23図5、図版24）

打製石斧は25点出土し、硬砂岩、安山岩が多い。形態は分銅型が1点で他は短冊型に撥型の中間形態が最も多い。刃部は円刃が多く、数例の斜刃もある。



第22図　竹之城原遺跡出土土器・石器(1・1：6、他1：4)



第23図　竹之城原遺跡出土土器(1：4)

7)、磨製石斧（第23図１）

磨製石斧は１点だけ出土した。乳棒状の石斧で、刃部の１部と基部が欠損している。全体に風化が激しい。数ヶ所に摩滅痕がある。

8)、横刃型石器（図版24）

４点程出土し、全て安山岩製である。横剝ぎの技法により作出され、刃部は比較的丁寧に加工され、背部は調整剝離程度の加工である。全体にずんぐりしたものが多い。

9)、凹石（第23図６～11、図版25）

凹石は12点出土している。石質は多孔質の複輝石安山岩が最も多く、次いで輝石安山岩である。凹の数は、表裏に２個ずつのものが最も多く、１個ずつというのはない。磨石ないし敲打器と併用して使用するものが多い。

10)、敲打器（第23図12～14、図版25）

敲打器は８点を数えるが、凹石や磨石と併用するものも含めると数は増える。安山岩や硬砂岩を使用するものが多い。両端を機能点とするものはなく、どちらか一方である。

11)、磨石及びその他の石器（図版25）

磨石は８点程出土しており、扁平でやや楕円ぎみのものが多い。

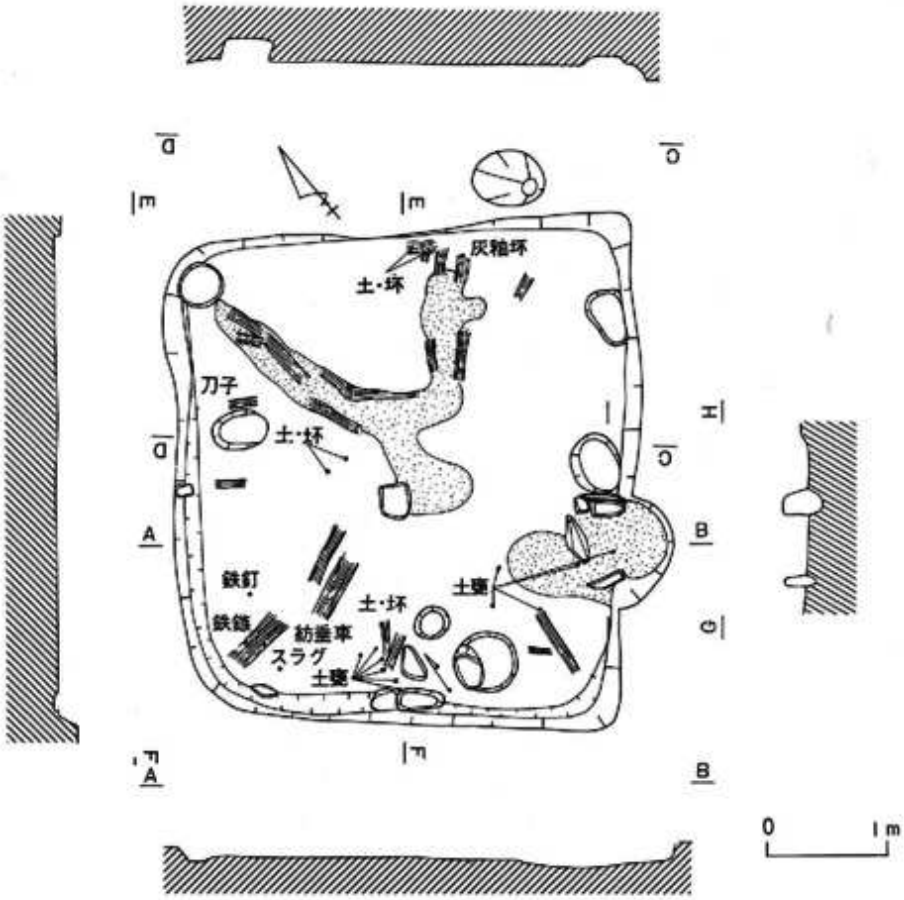
その他の石器は、加工痕のある石器やフレイク、使用痕の認められるフレイク、名称を与えるのに苦慮する不定形な石器などがある。

第４節　平安時代の住居址と遺物

1)、第４号住居址（第24図、図版27・28）

本址は、調査地域の西側で検出した平安時代の隅丸方形の竪穴住居址である。調査地域が南から北方向に緩傾斜し、そこに耕作による削平が加わっているため、西南部の壁程高く、北東部壁は僅かに残存する程度である。またカマドの尖端部付近を耕作のうねが走っていたため、石が抜き取られ攪乱されていた。

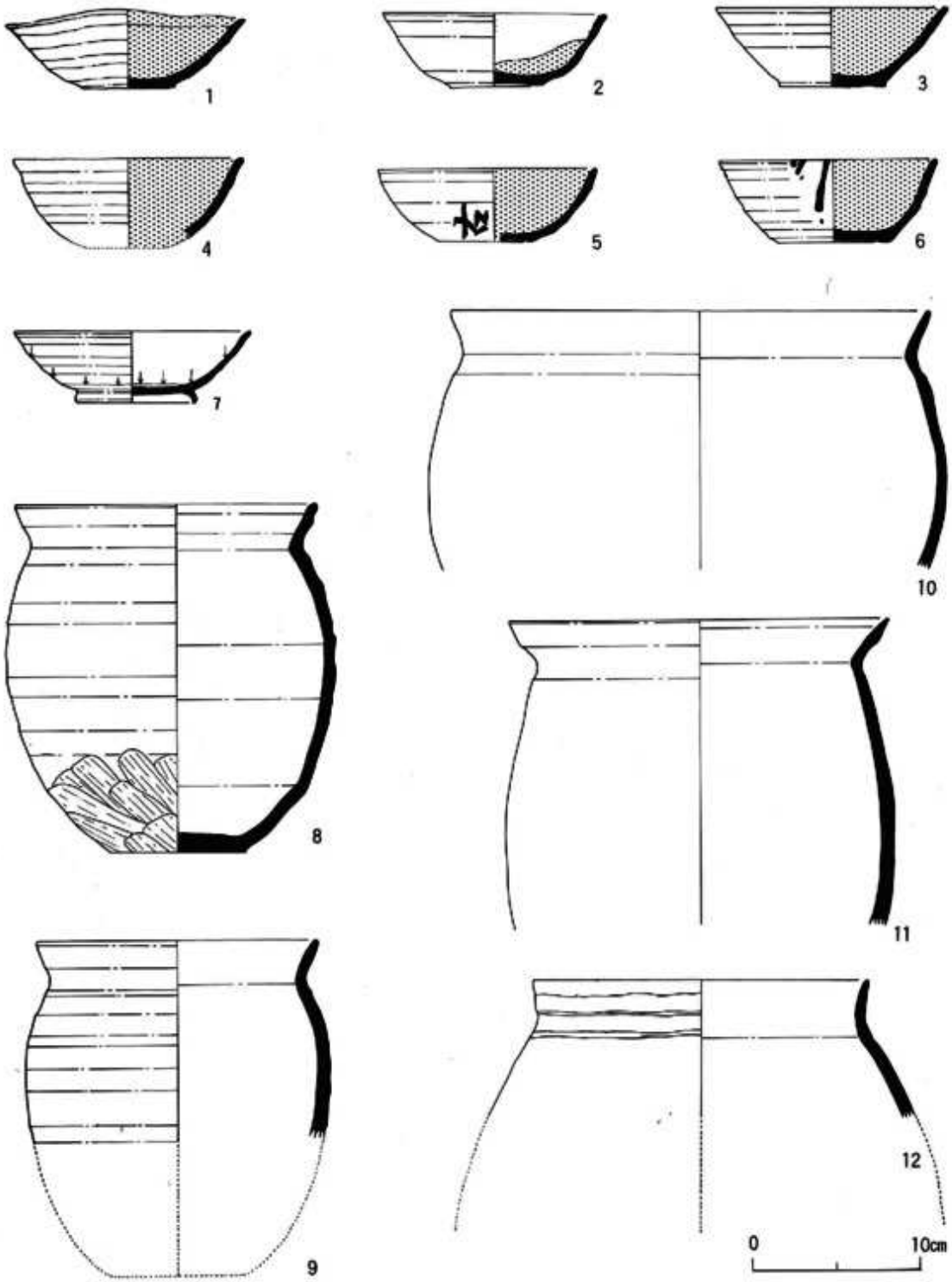
規模は、南東―北西で3.9m、北東―南西で4.1mを測る。壁高は、最も高い部分で20cm、低い部分で０～５cmである。カマドは、南東部壁面の中央部よりやや南寄りに住居址から張り出して構築されている。石組みカマドであり、両袖石と側部の一部が残存していた。カマド手前には灰原があり、カマド内部とともに多量の焼土がみられた。床面及び壁は、一部の攪乱を除いては良好に保存されていた。本址は焼失住居址であり、垂木材と考えられる炭化した木材が、壁から住居址中央方向に向けて各所に出土した。また、北東部壁面下の土師器の坏の下から炭化した屋根材（カヤ？）が出土している。それらに伴い焼土が全体に散乱し、床面もかなり焼けていた。柱穴は６個検出され、またカマドの北側には貯蔵穴らしい土壙がみつかっている。本址は鉄製品が数種類出土し、また製作のための施設や道具が出土しているので小鍛冶としての性格づけをしたい。



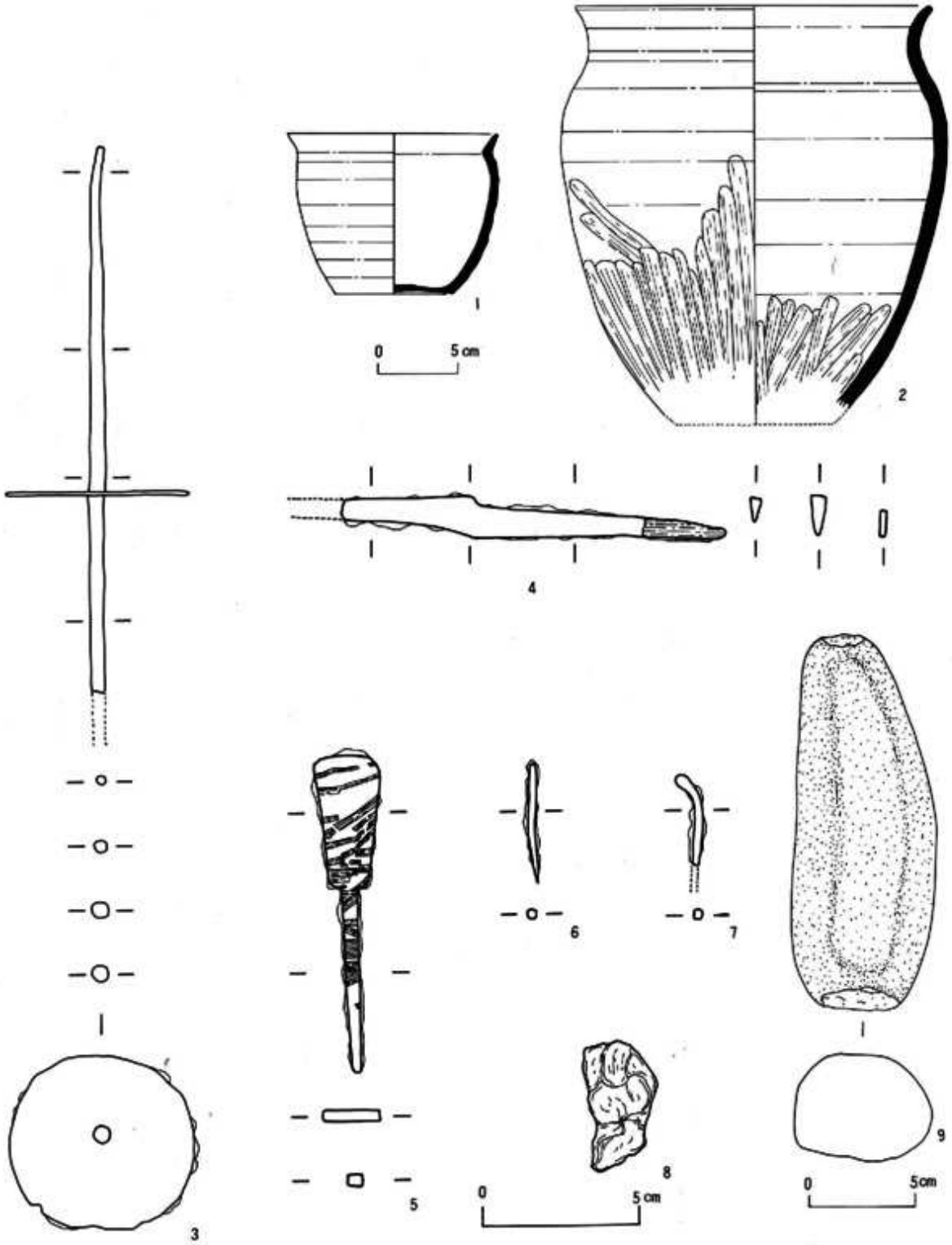
第24図　竹之城原遺跡第４号住居址実測図（１：80）

2)、第４号住居址出土遺物（第25図、第26図、図版29～33）

本址から出土した遺物は、土師器坏10点（うち完形品３点、復元可能なもの３点）、灰釉陶器１点（半欠品）、甕形土器12点（うち完形品及び完形に近いもの３点、復元可能なもの４点）、鉄製品：紡錘車１点、刃子１点、鉄鏃１点、鉄釘２点、鉄塊１点、石製ハンマー１点、製作台１点が出土している。焼失住居址ということも考慮すれば、生活用具の良好なセットとみてよいのではないかと思われる。このうち坏には墨書が２点あり、１点は判読できないがもう一方には「右」とある。「古」とも読めないことはないが、書き順により「右」が正しい。甕形土器は、カマド周辺部から集中している。鉄製品は、本住居址の性格付けをする資料として重要である。刃子は北西部壁面下の中央付近、紡錘車、鉄鏃、鉄釘、鉄塊は西側のコーナ部で集中的に出土している。住居址の中央部床面上には、上面が平担な厚い大礫が置かれてあり、平担部は雪耗痕や削痕がみられた。また、南西部壁面下にはやはり一方が扁平な大礫が４個程存在していた。さらにカマド手前には、坏と並ぶように長さ17.5cmの全体が乳棒状になっているハンマーが出土している。製作台、ハンマー、鉄塊、鉄製品と遺物が整えば小鍛冶址としてみてよいと思われる。



第25図　竹之城原遺跡第4号住居址出土土器(1：4)



第26図　竹之城原遺跡第4号住居址出土土器、鉄製品、石器(1・2：1：4、3～8：1：2、9・1：3)

図　　版

竹之城原遺跡全景

遺構全景

図版2　竹之城原遺跡

遺構全景

第1・8号住居址

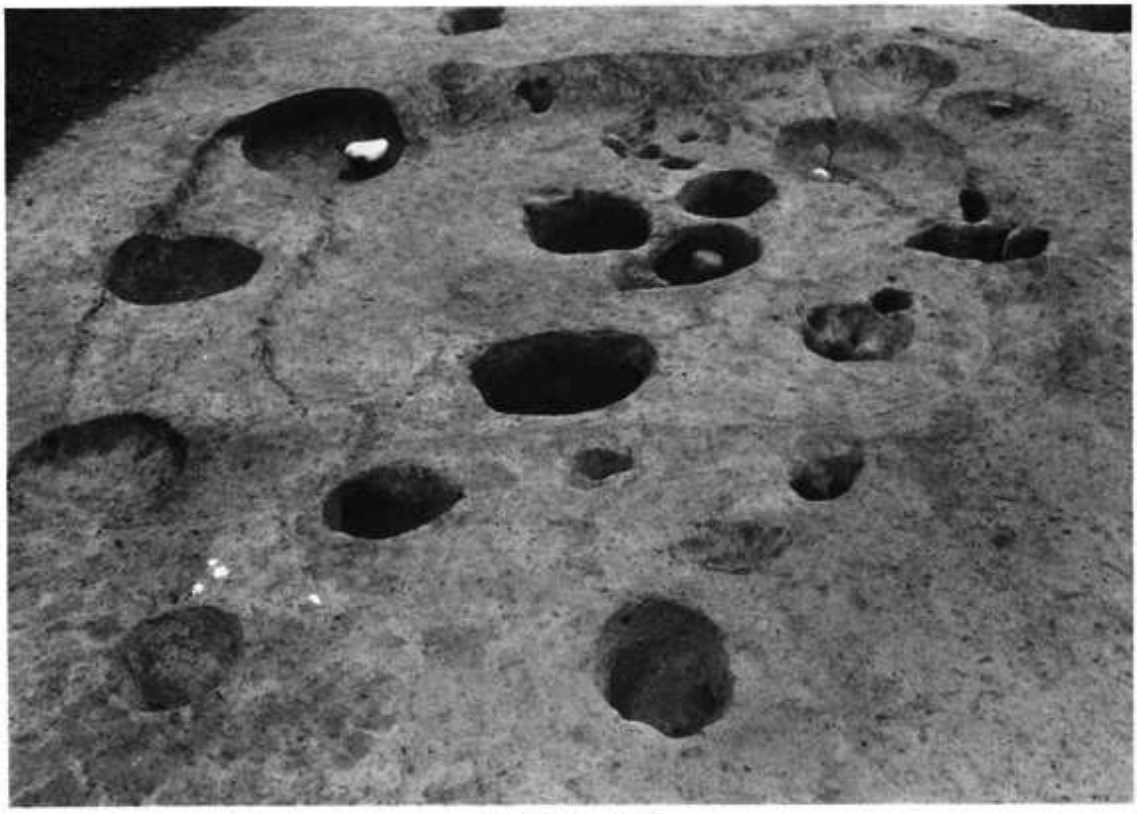
第2・8・15号住居址

第3号住居址

第5号住居址

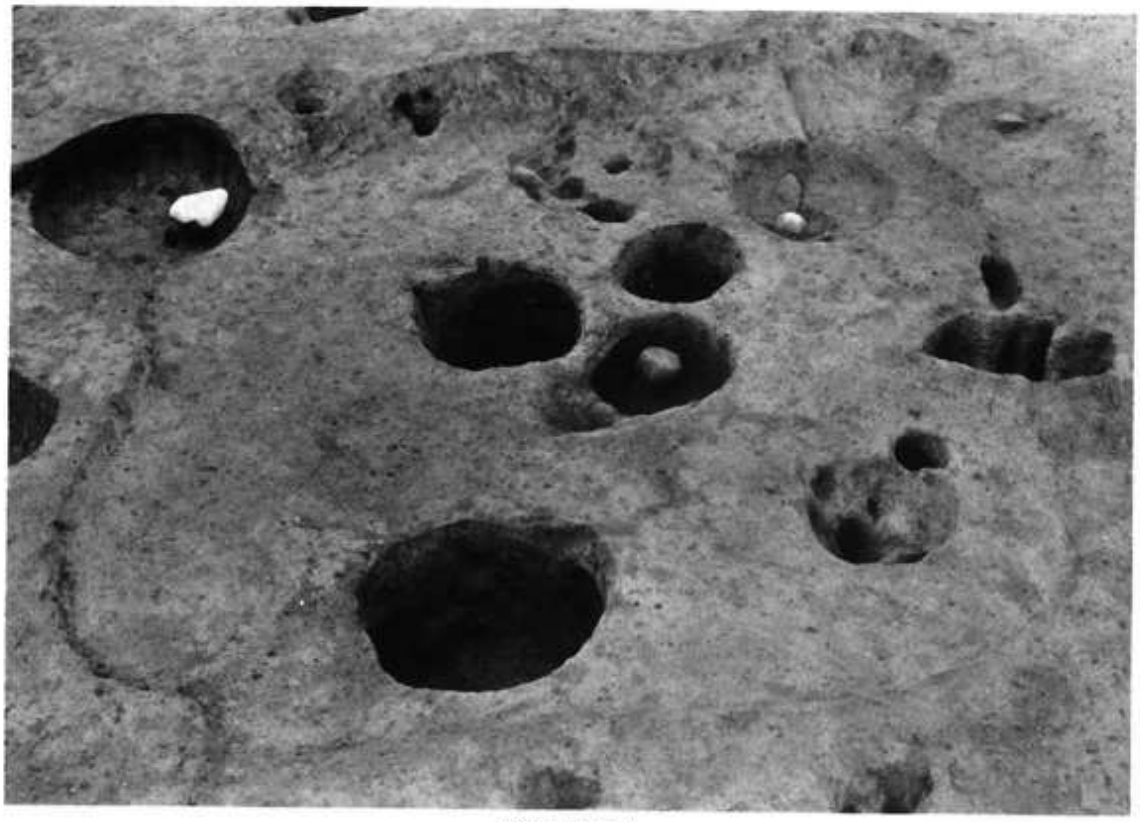
第6号住居址

第7・9号住居址



第11・12号住居址

図版6　竹之城原遺跡



第12号住居址

第13号住居址

第14号住居址

第14号住居址埋甕炉

集石土壙

炉址状石組み

第25号土壙土器出土状態

第23号土壙及び土器出土状態

第23号土壙土器状態

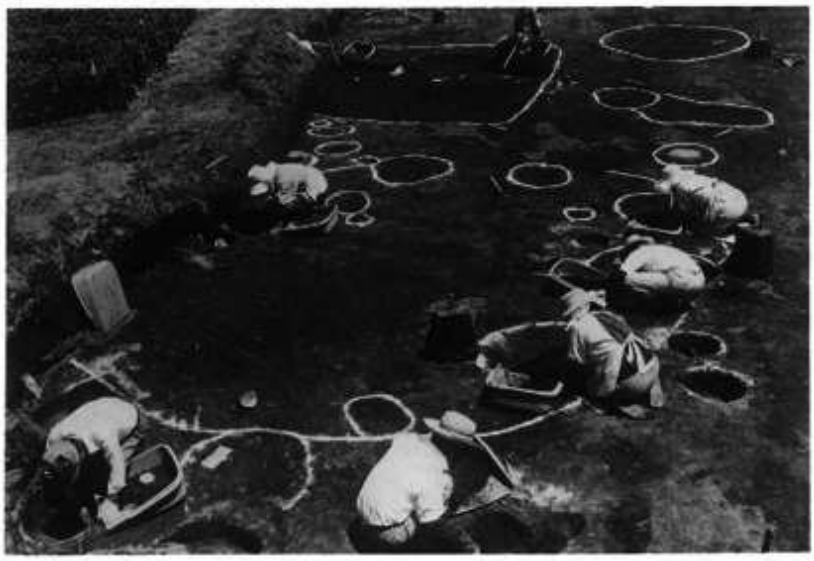
第5号土壙及び土器出土状態

第5号土壙土器出土状態

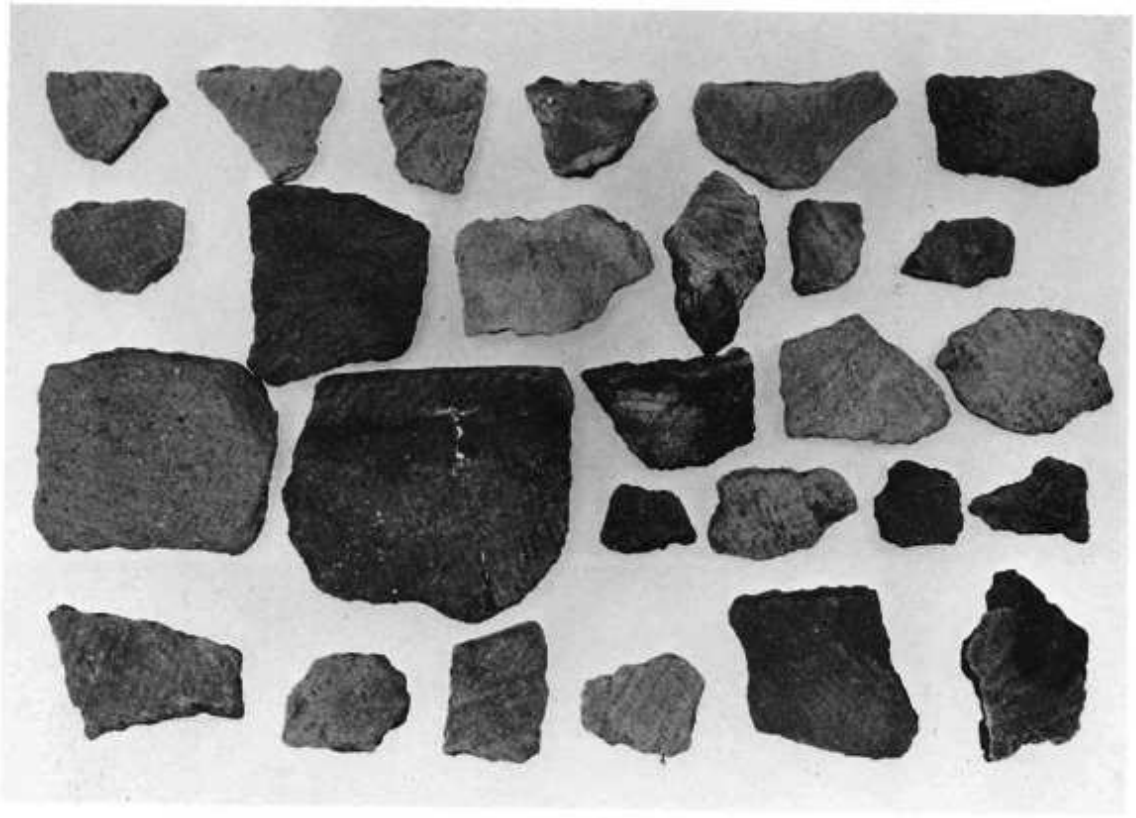
第1・2・54・55号土壙

竹之城原遺跡第33・34号土壙

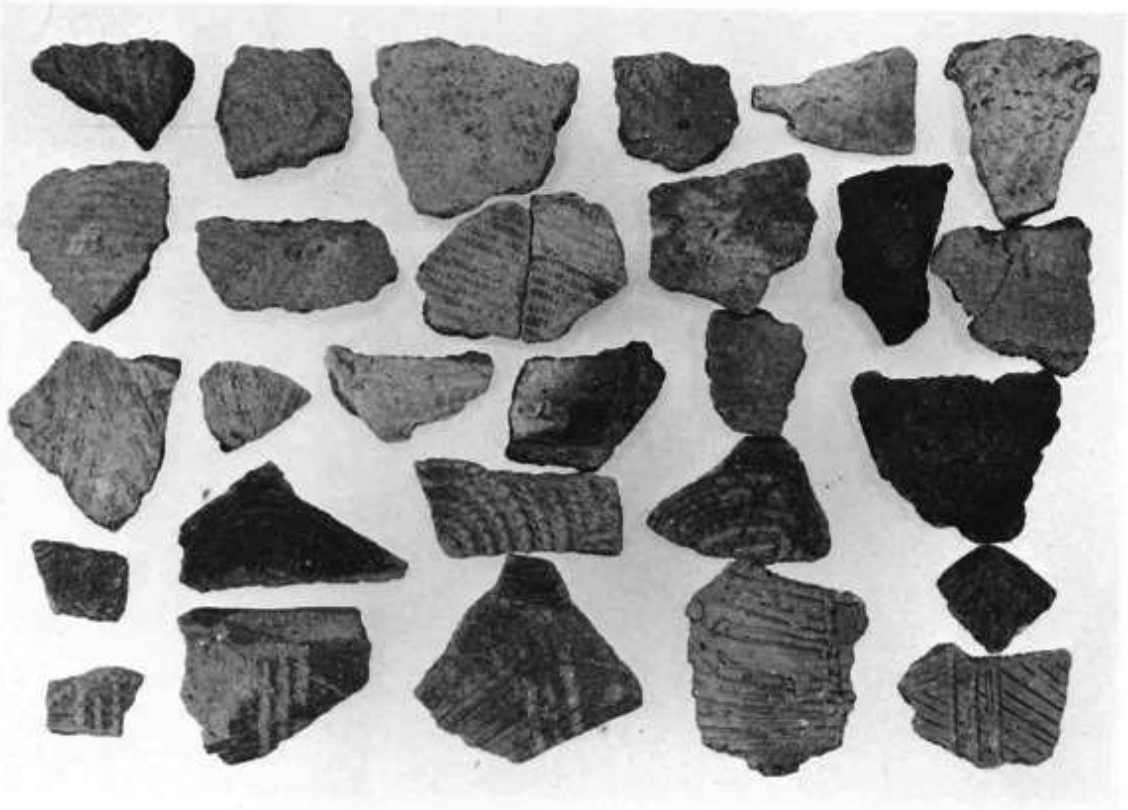
第24・27・38号土壙



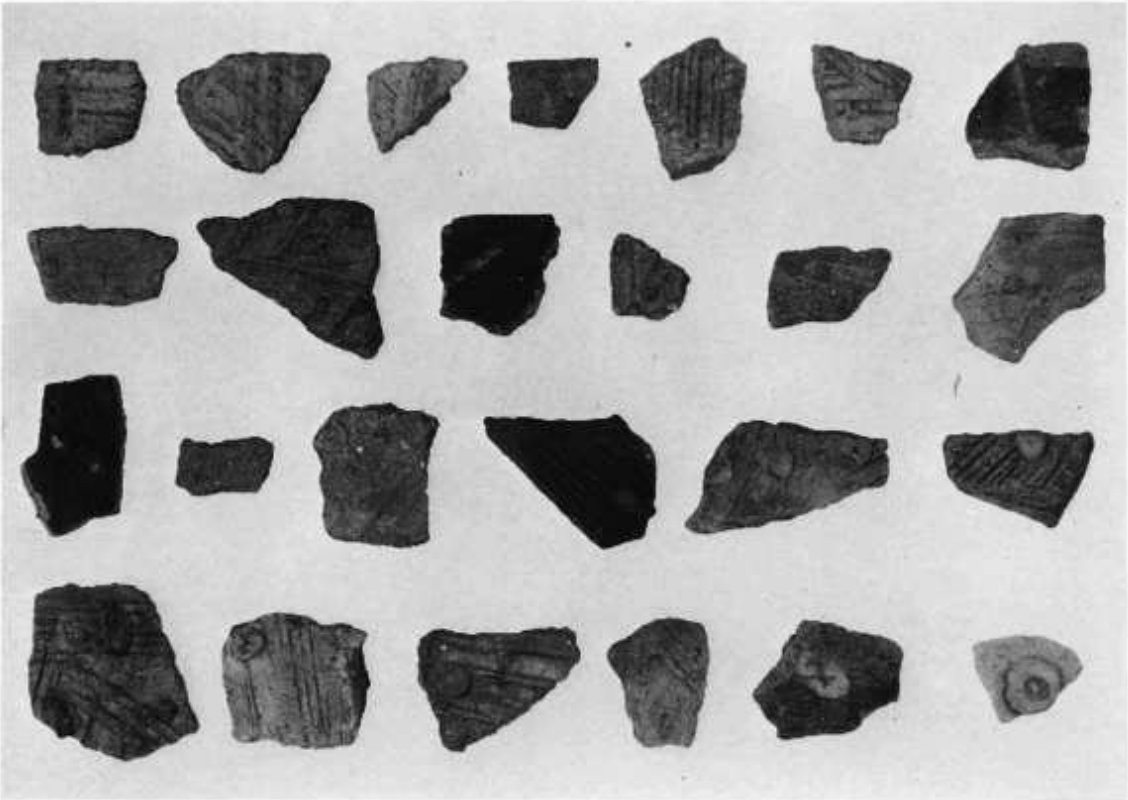
竹之城原遺跡調査及び見学会風景



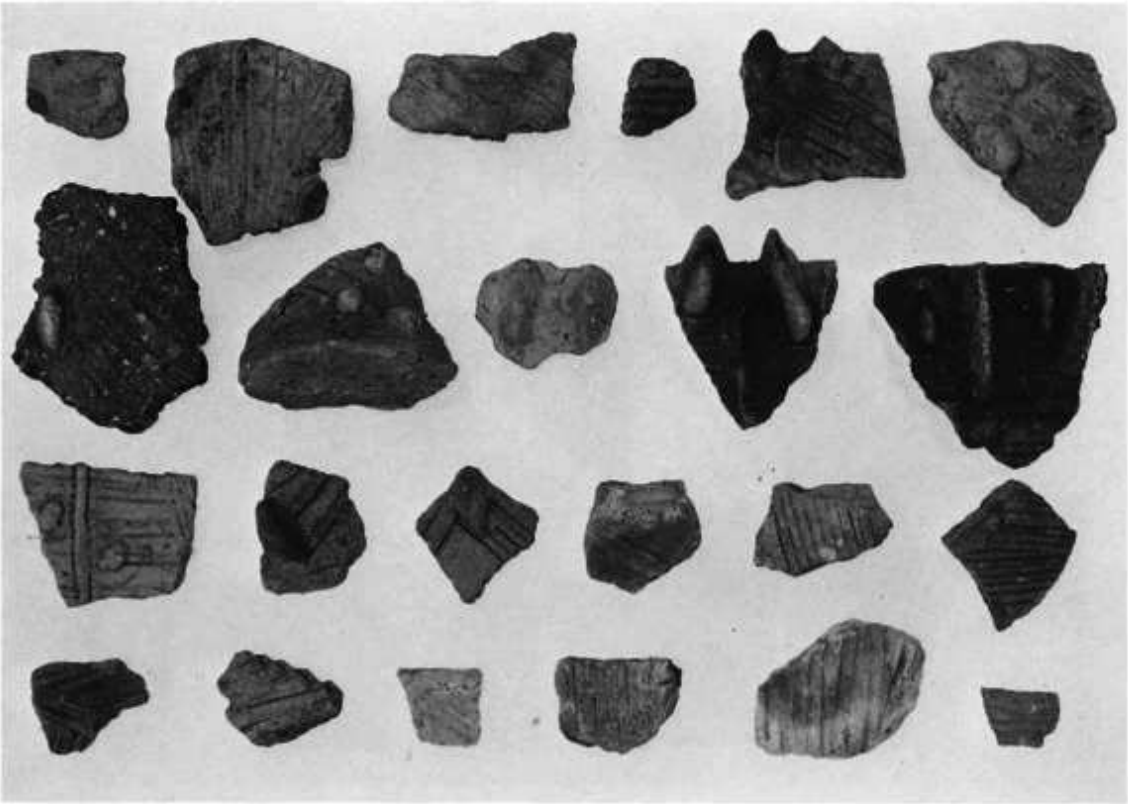
竹之城原遺跡　土器



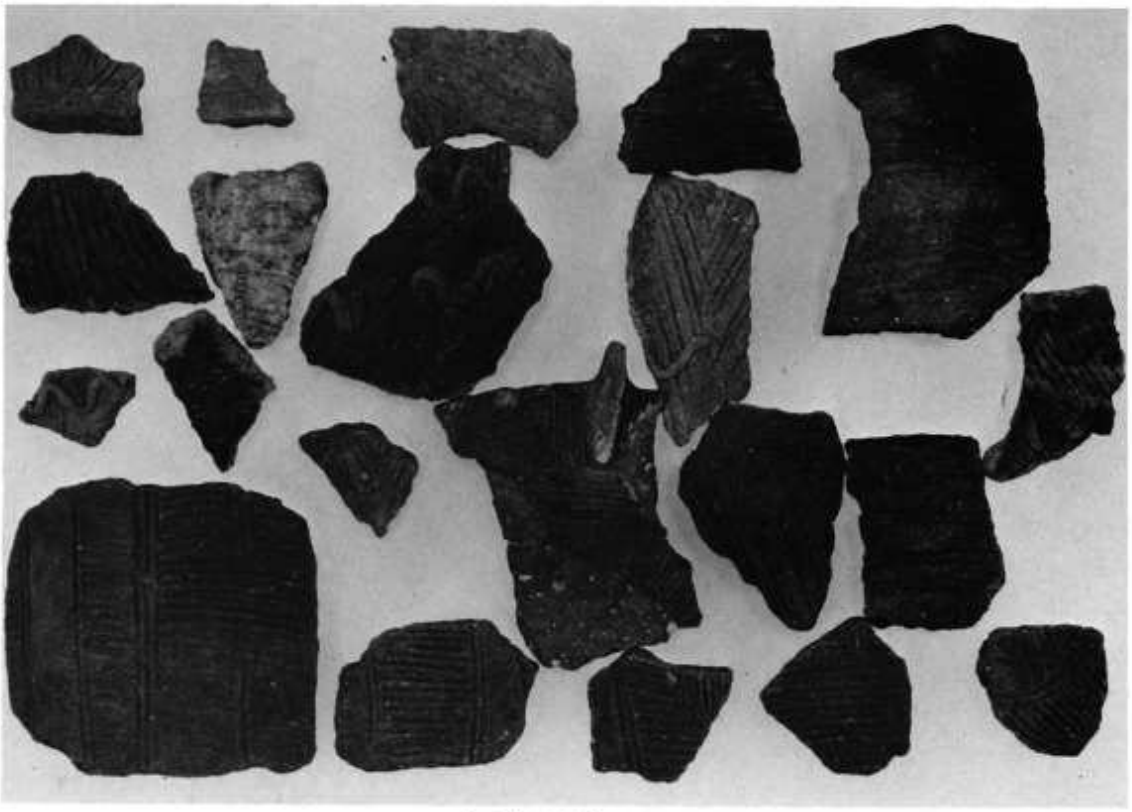
竹之城原遺跡　土器



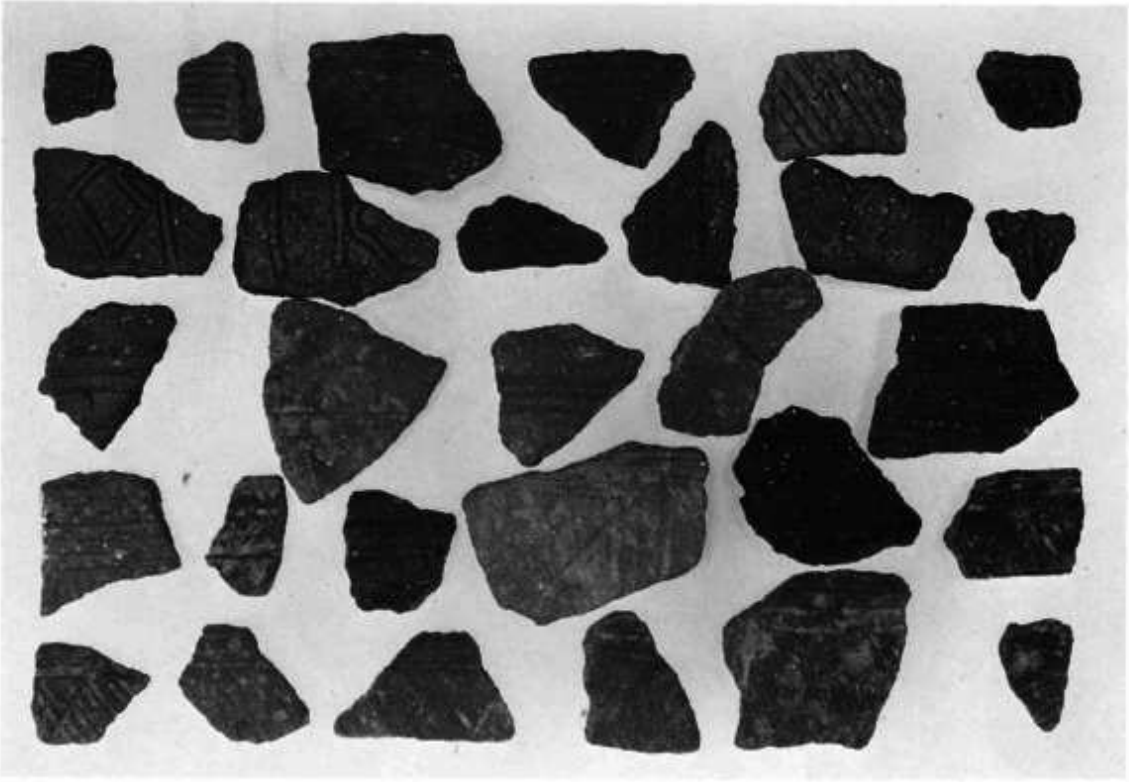
竹之城原遺跡　土器



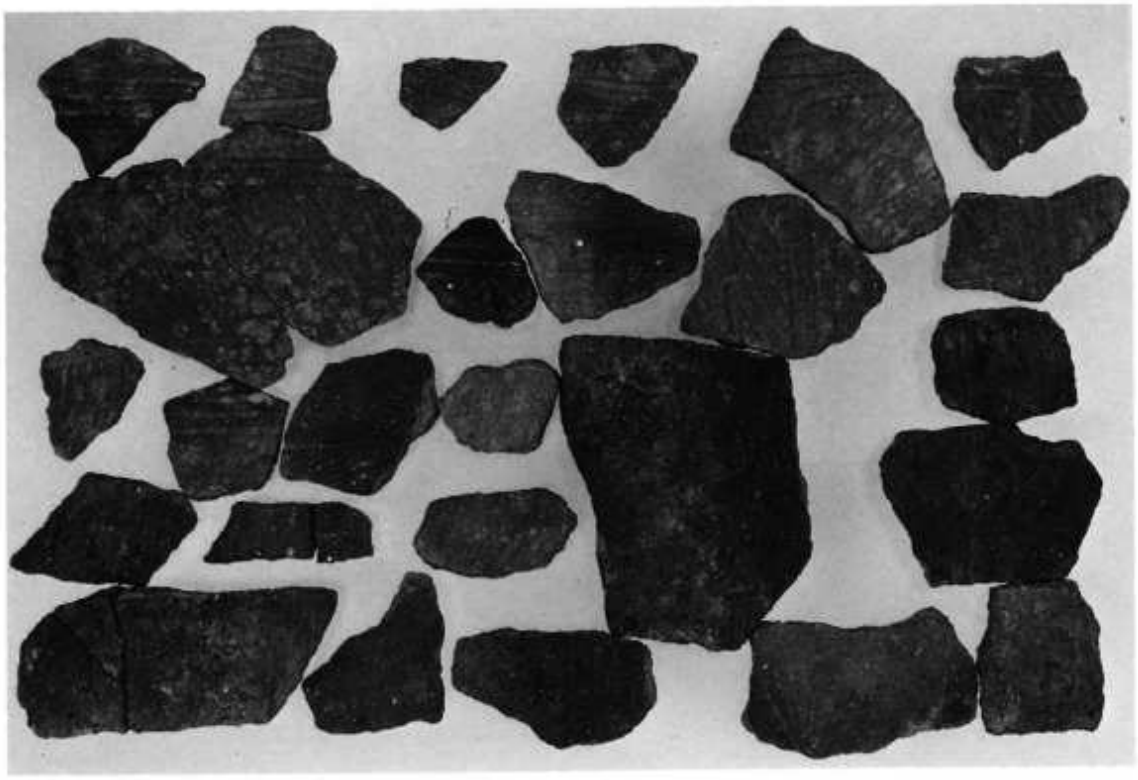
竹之城原遺跡　土器



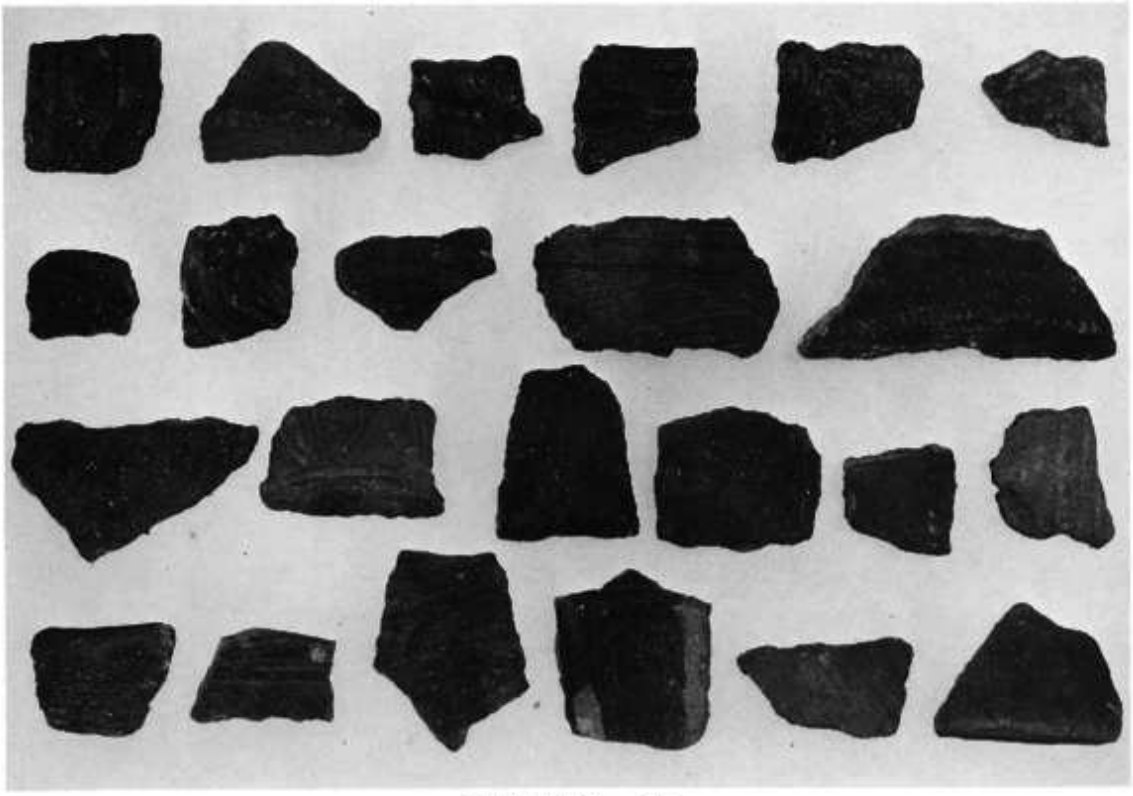
竹之城原遺跡　土器



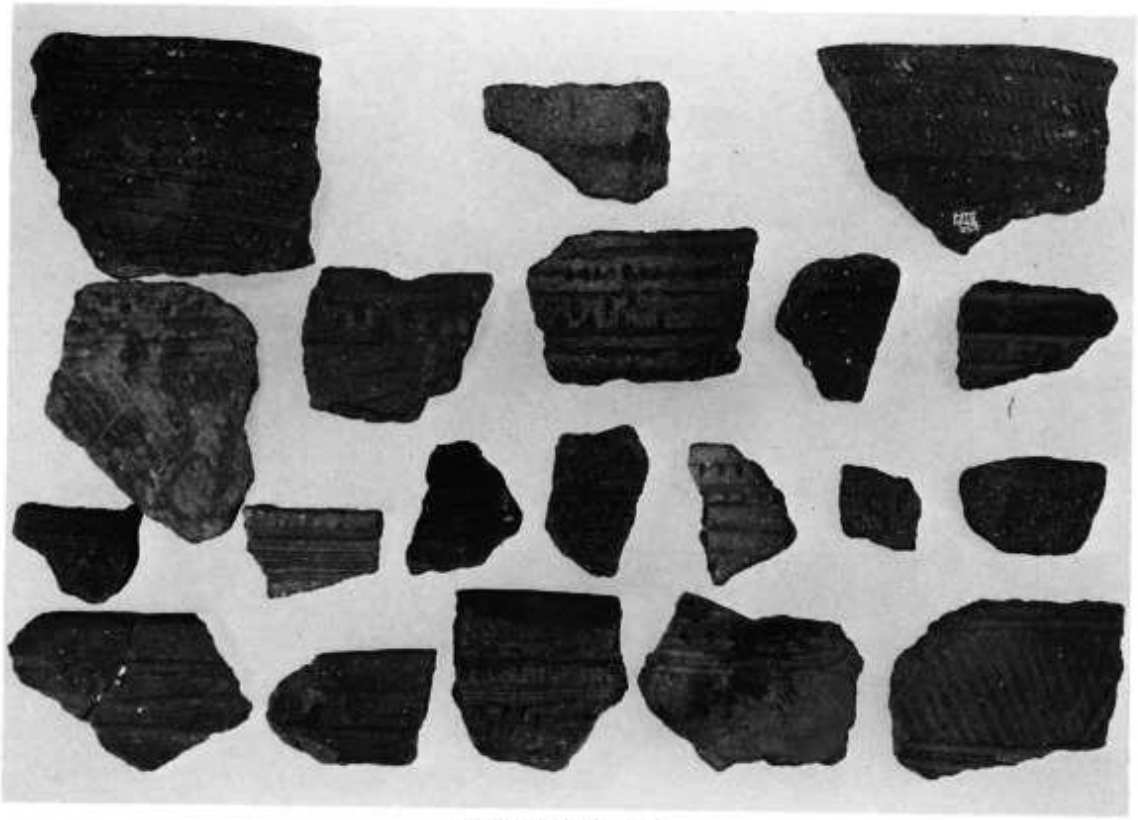
竹之城原遺跡　土器



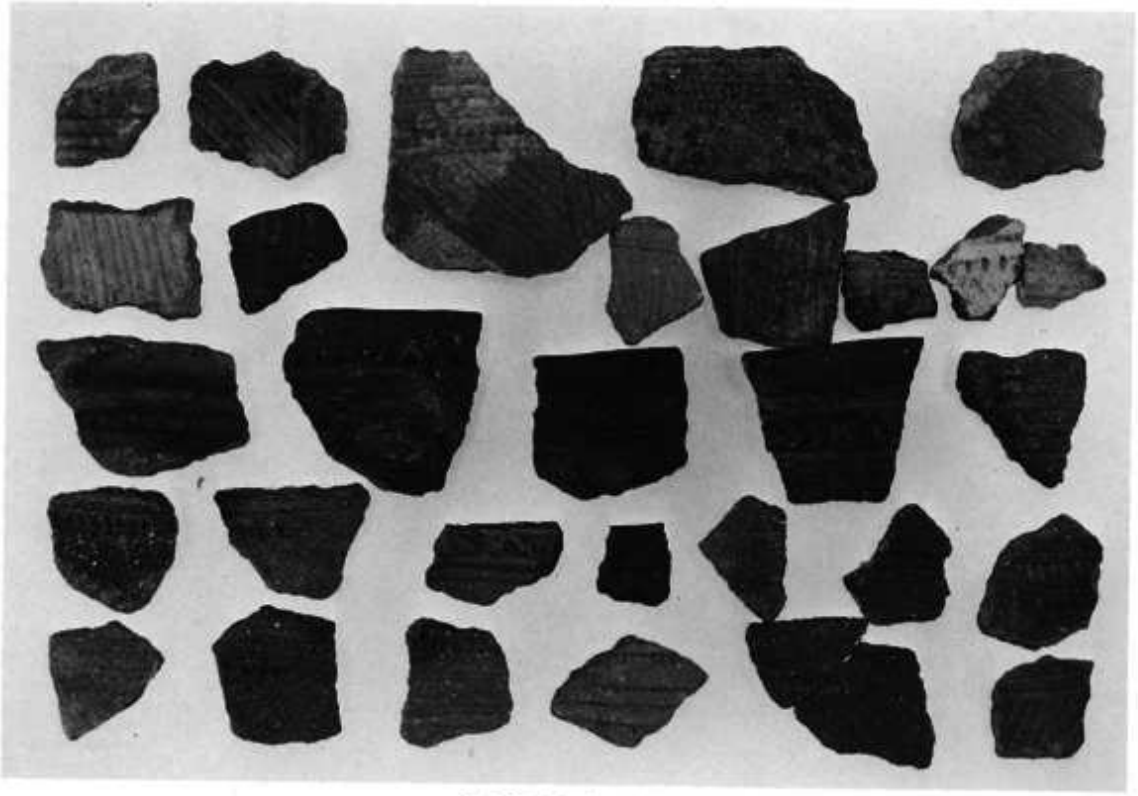
竹之城原遺跡　土器



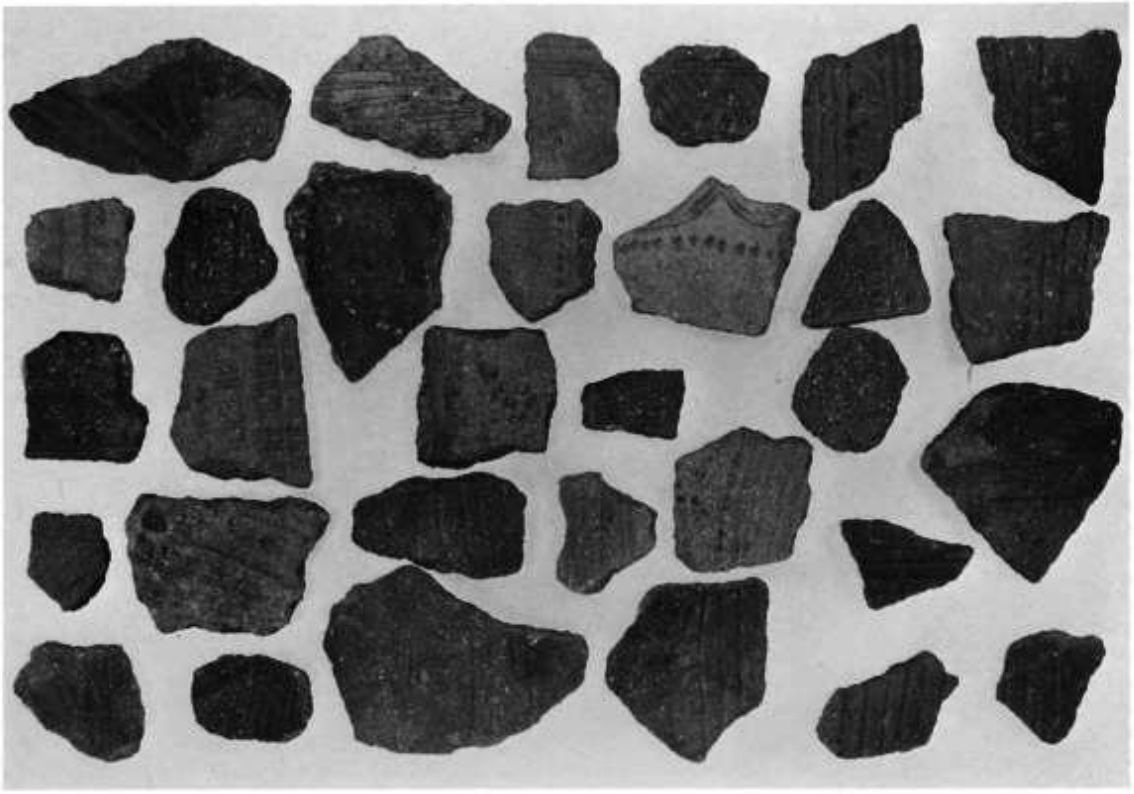
竹之城原遺跡　土器



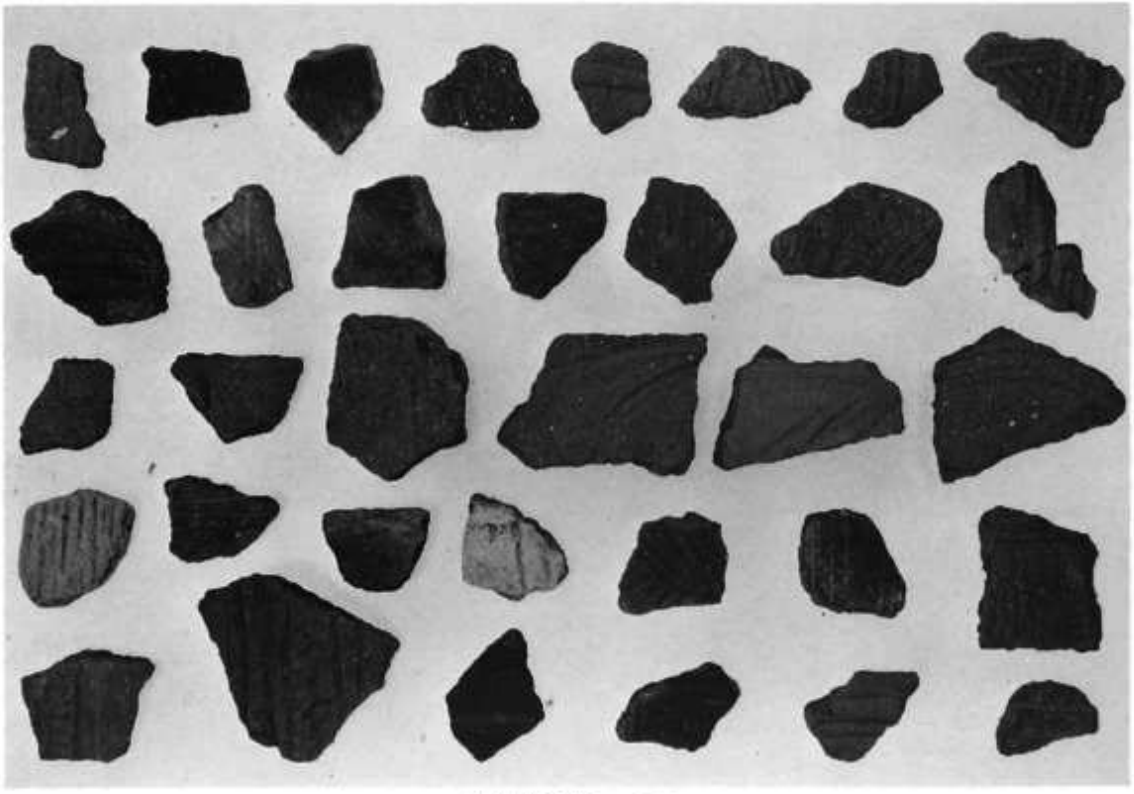
竹之城原遺跡　土器



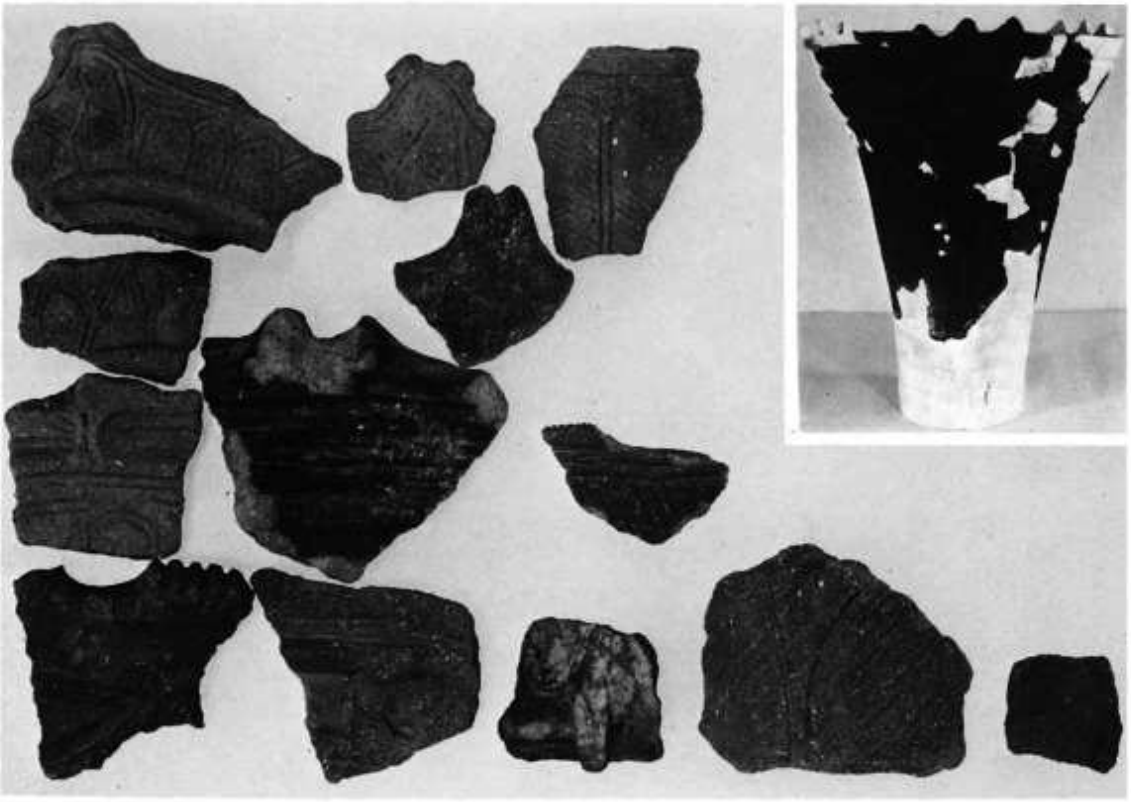
竹之城原遺跡　土器



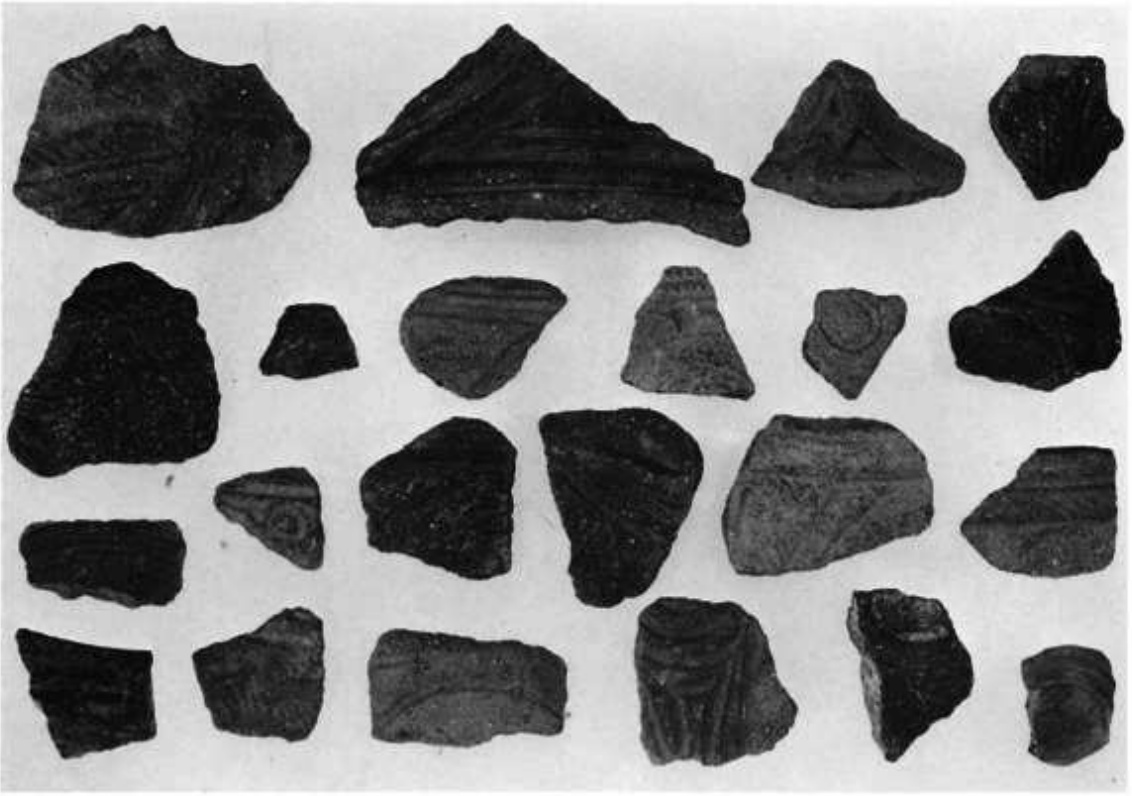
竹之城原遺跡　土器



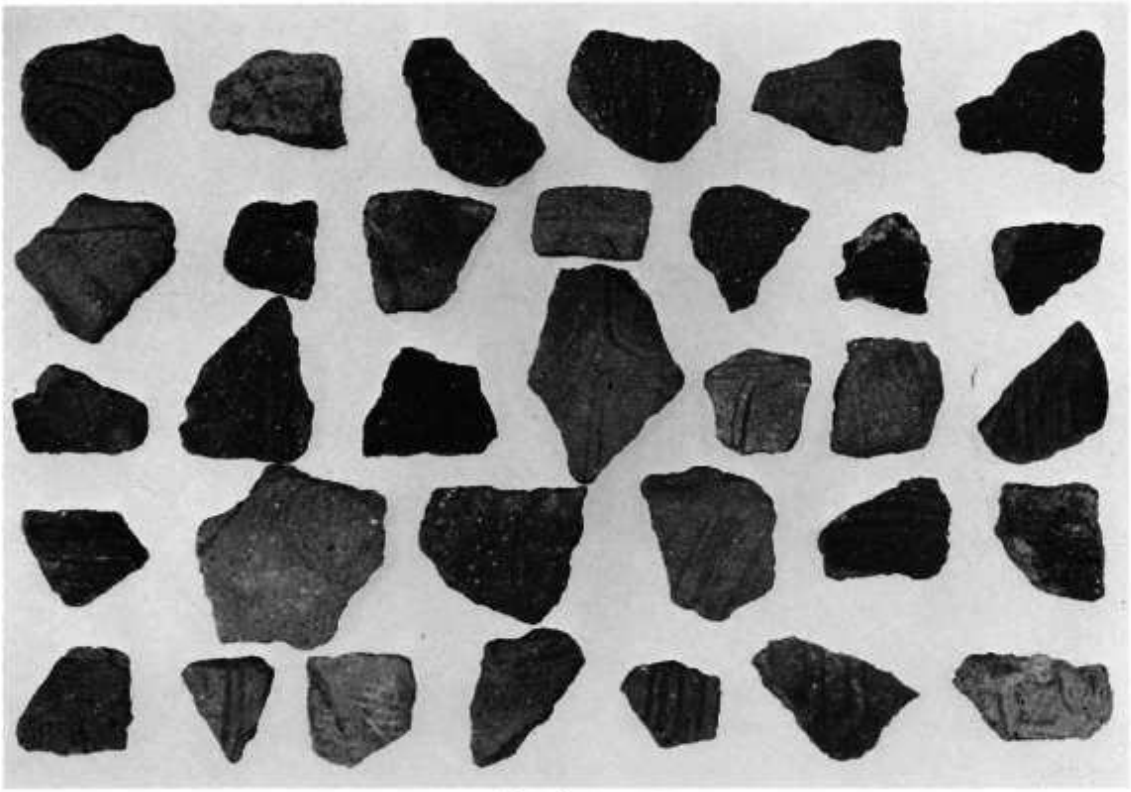
竹之城原遺跡　土器



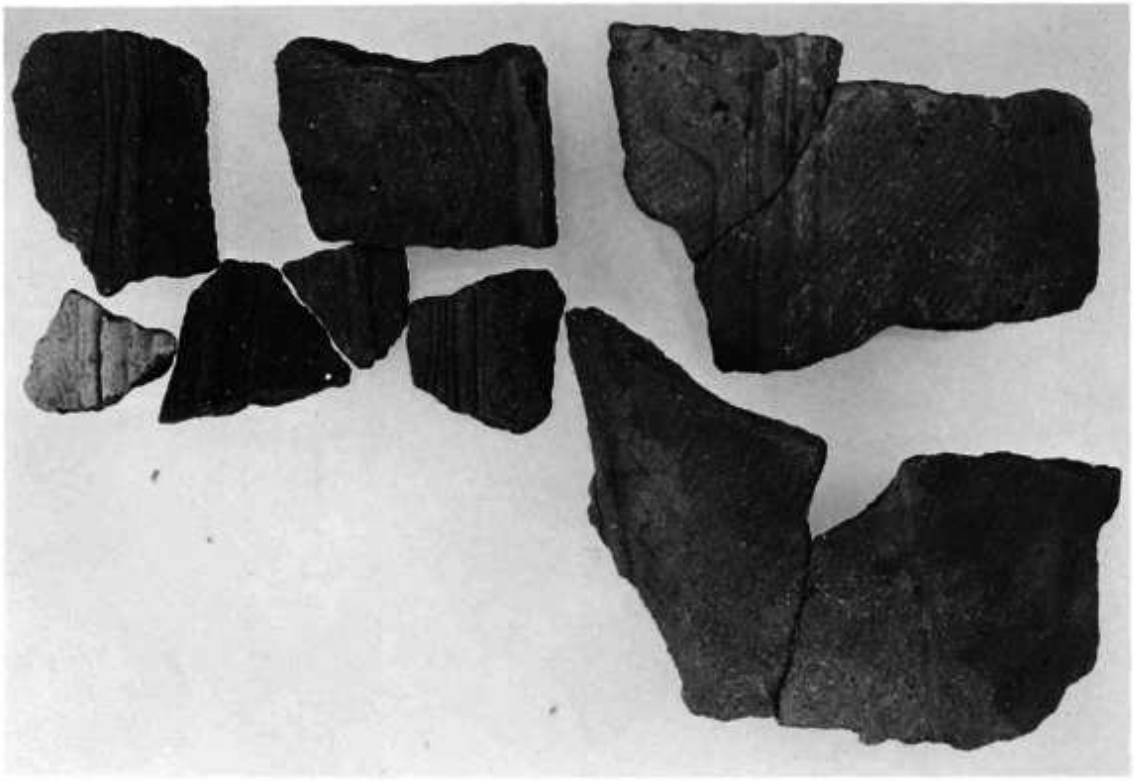
竹之城原遺跡　土器



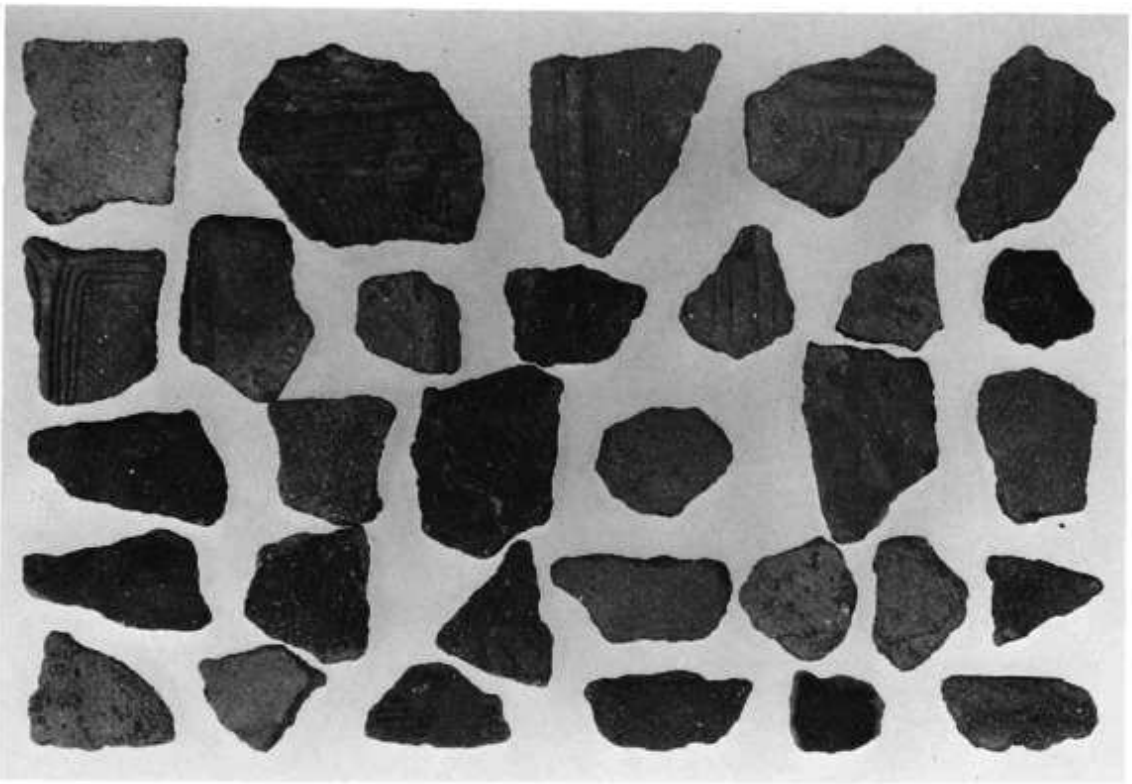
竹之城原遺跡　土器



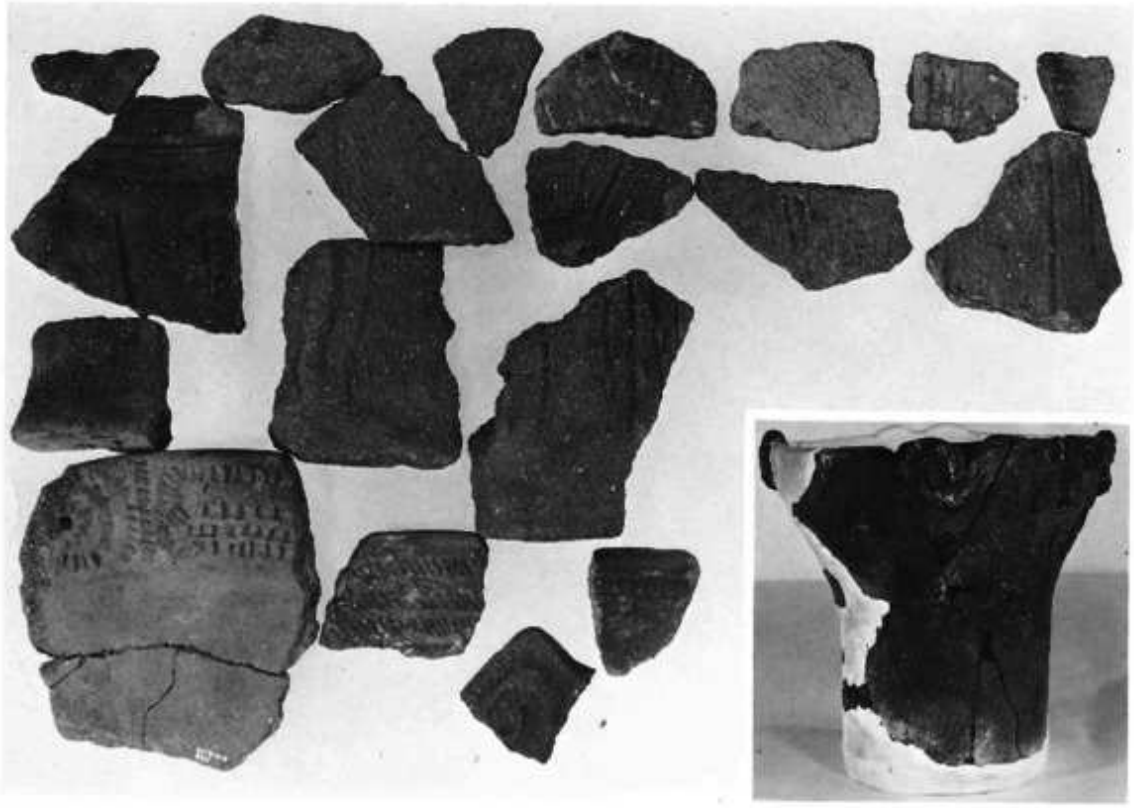
竹之城原遺跡　土器



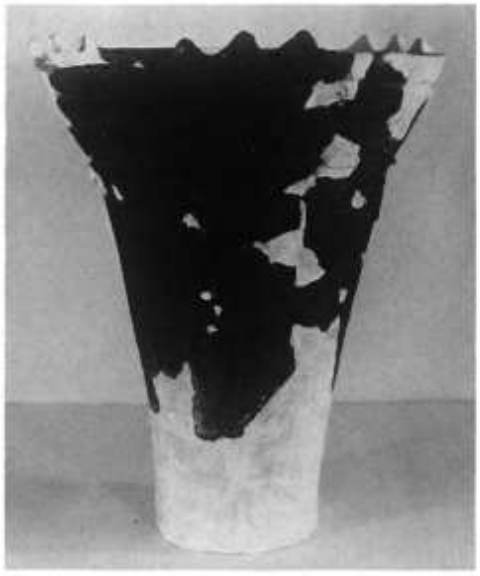
竹之城原遺跡　土器



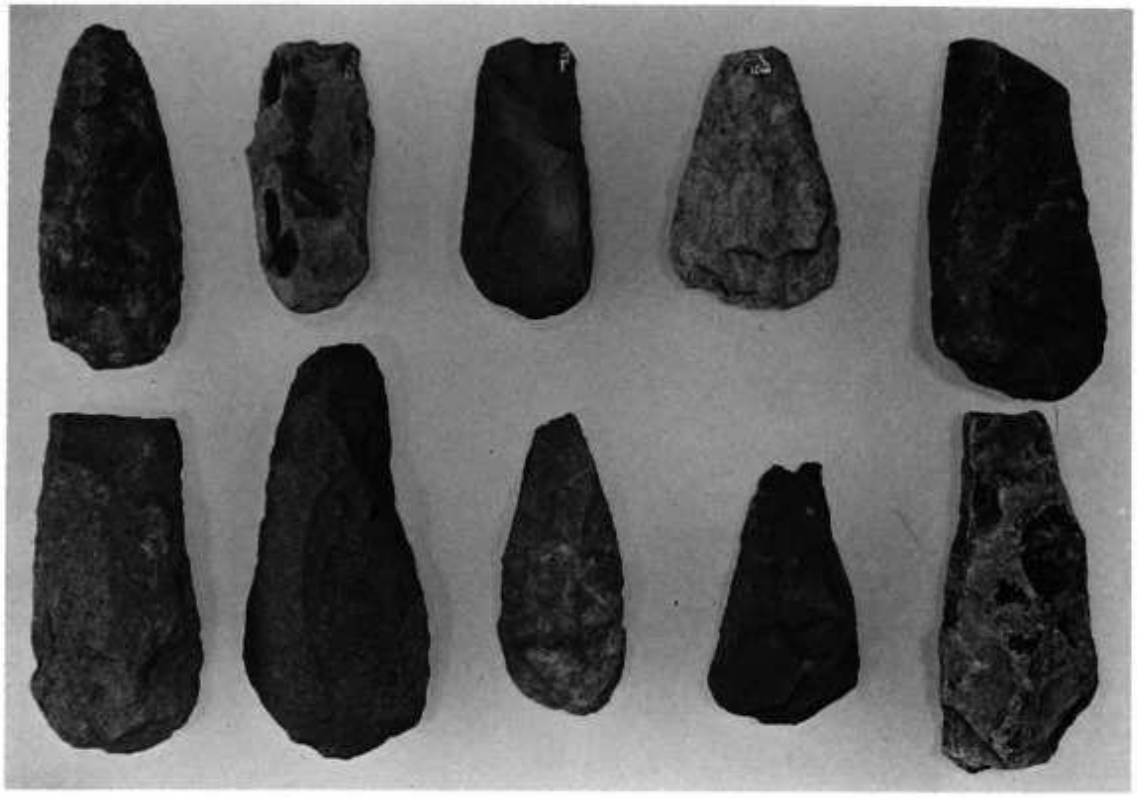
竹之城原遺跡　土器



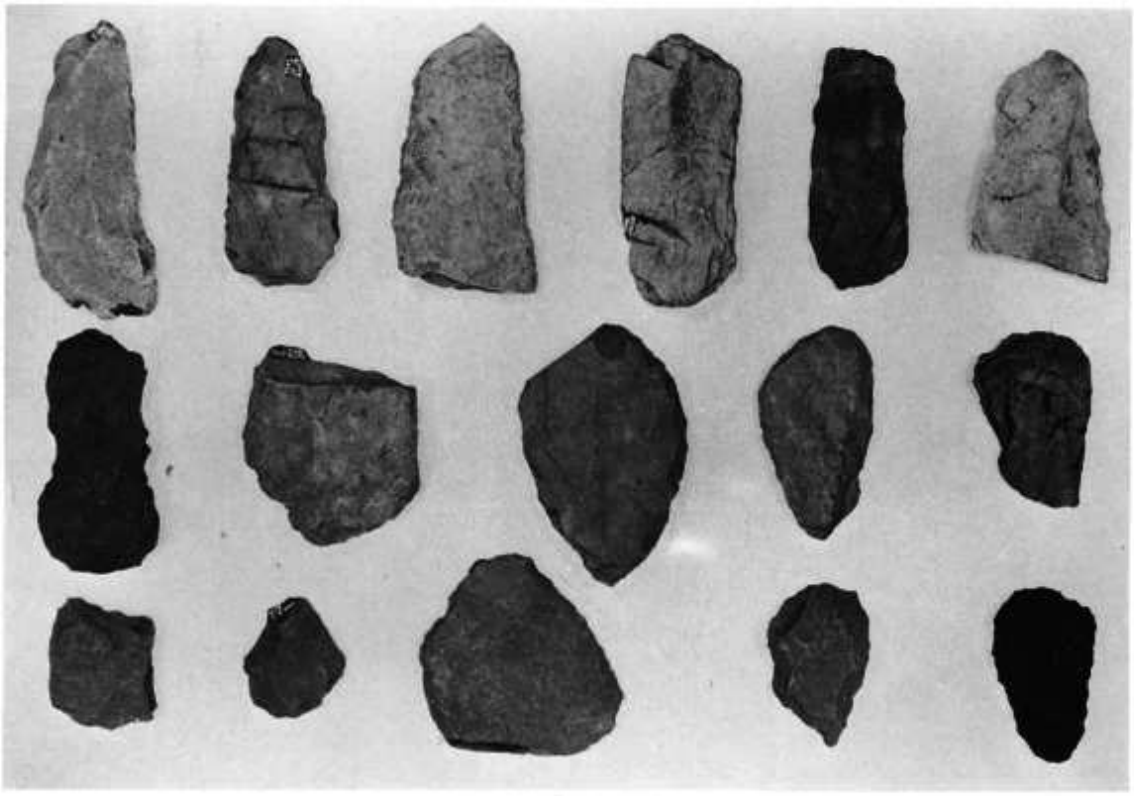
竹之城原遺跡　土器



竹之城原遺跡　土器

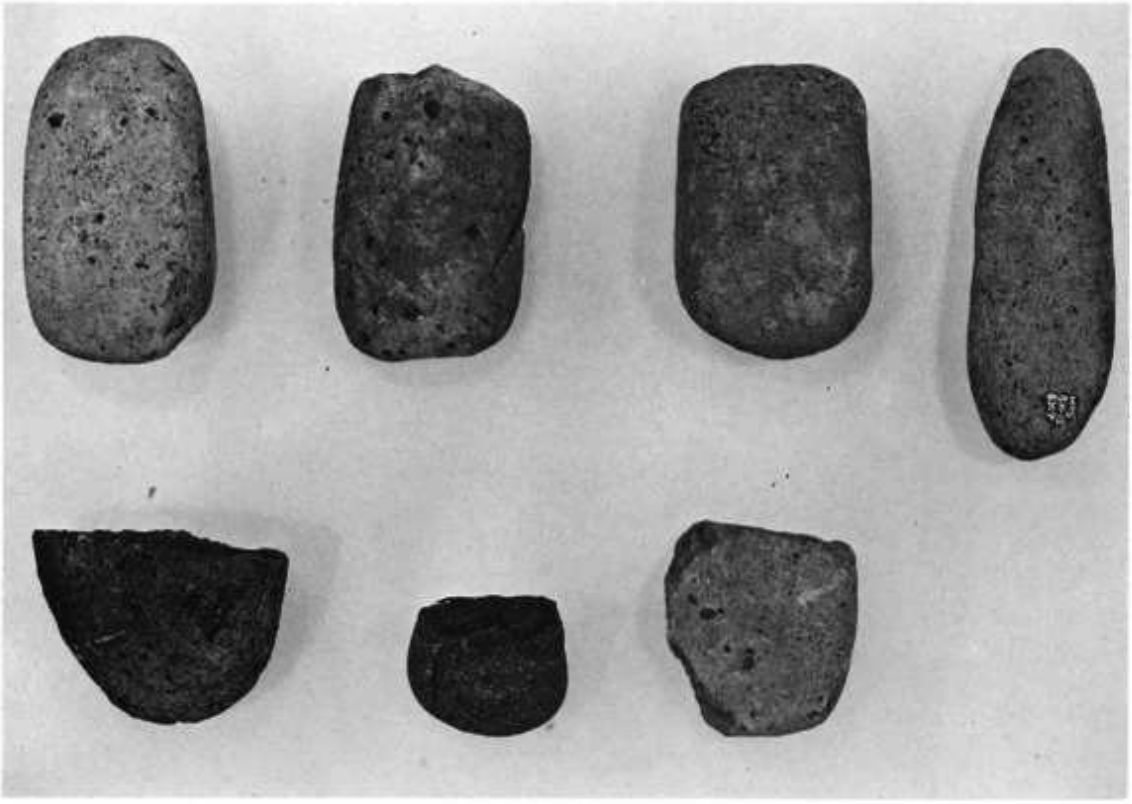


竹之城原遺跡　土器

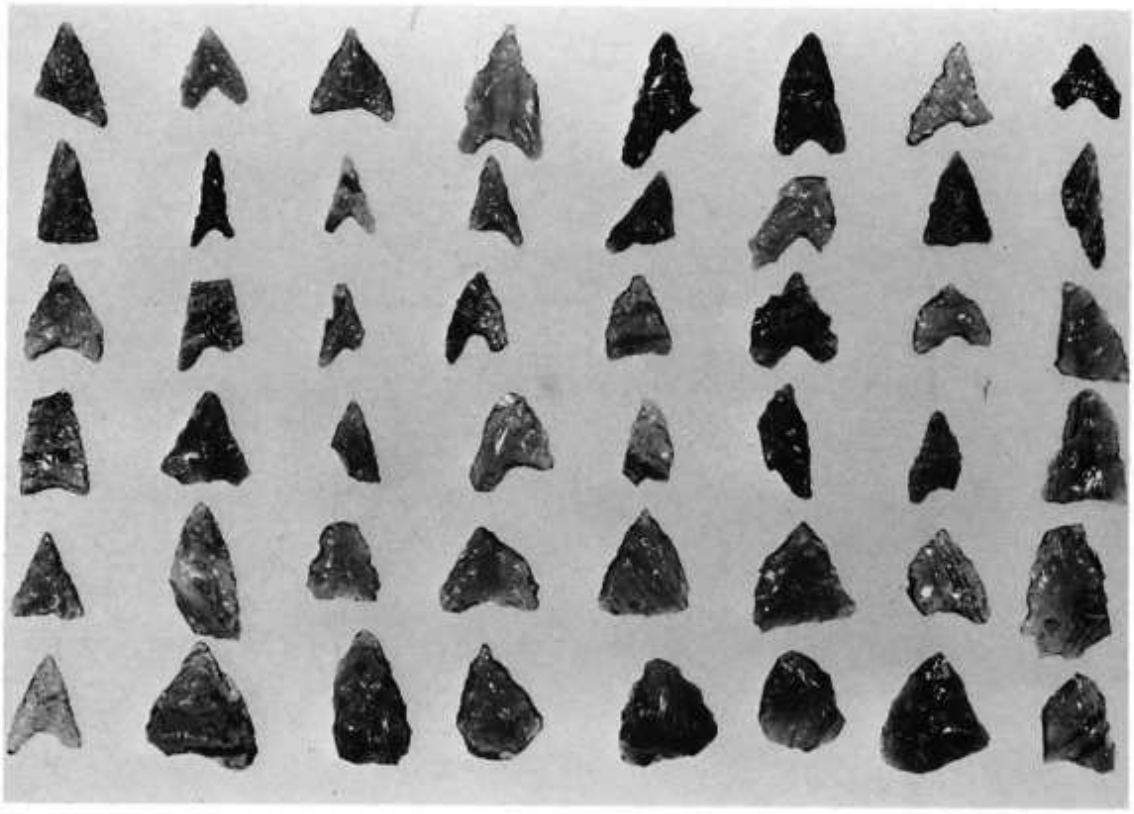


竹之城原遺跡　土器

竹之城原遺跡　土器



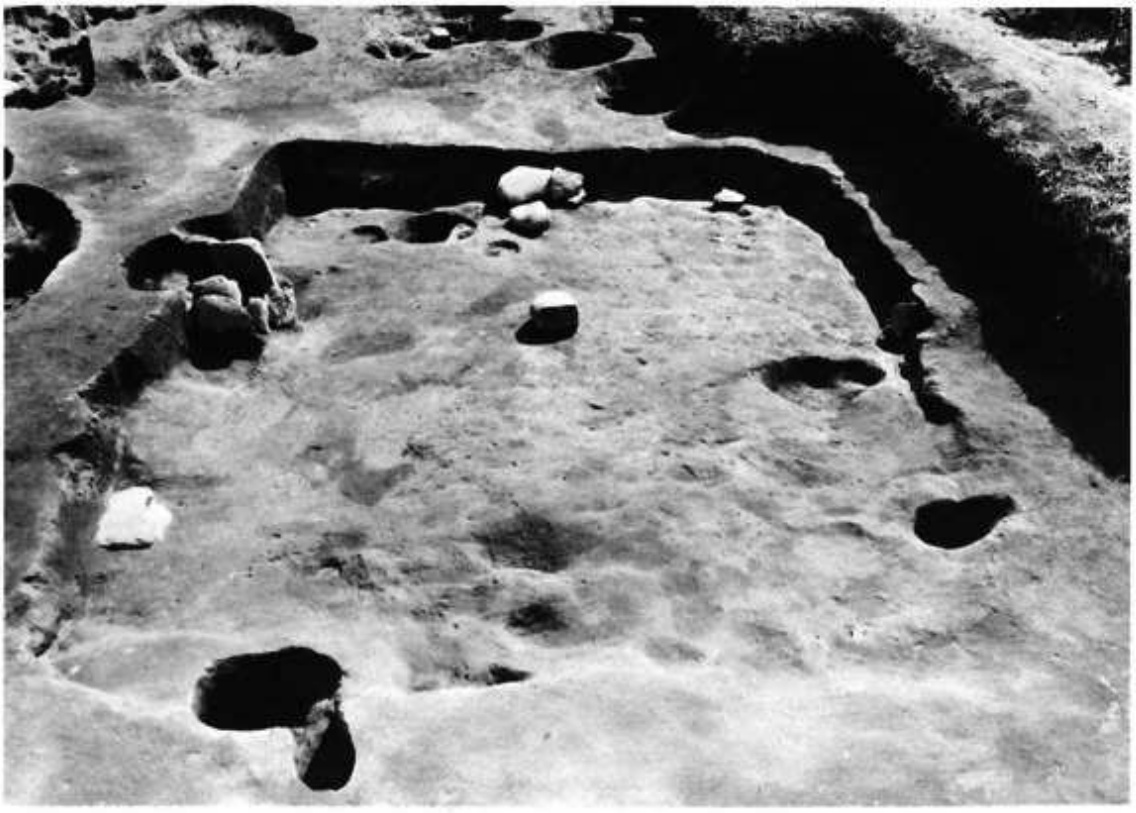
竹之城原遺跡　土器



竹之城原遺跡　土器

竹之城原遺跡　土器

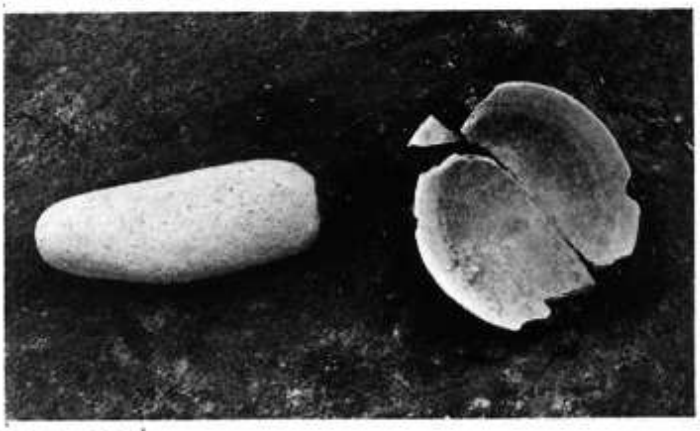
第 4 号住居址



第 4 号住居址完掘状態

第4号住居址カマド

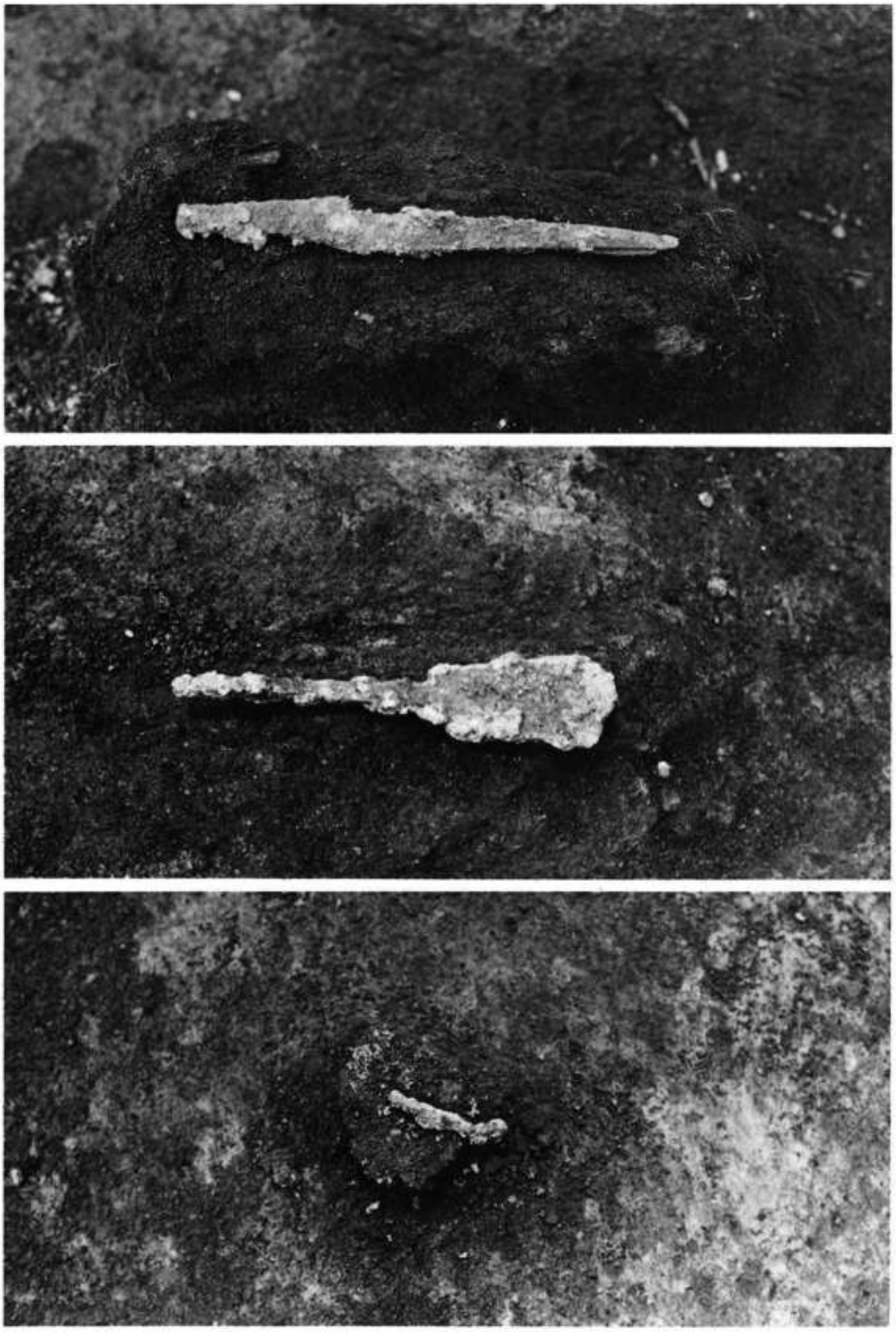
第4号住居址床面の状態



第4号住居址遺物出土状態

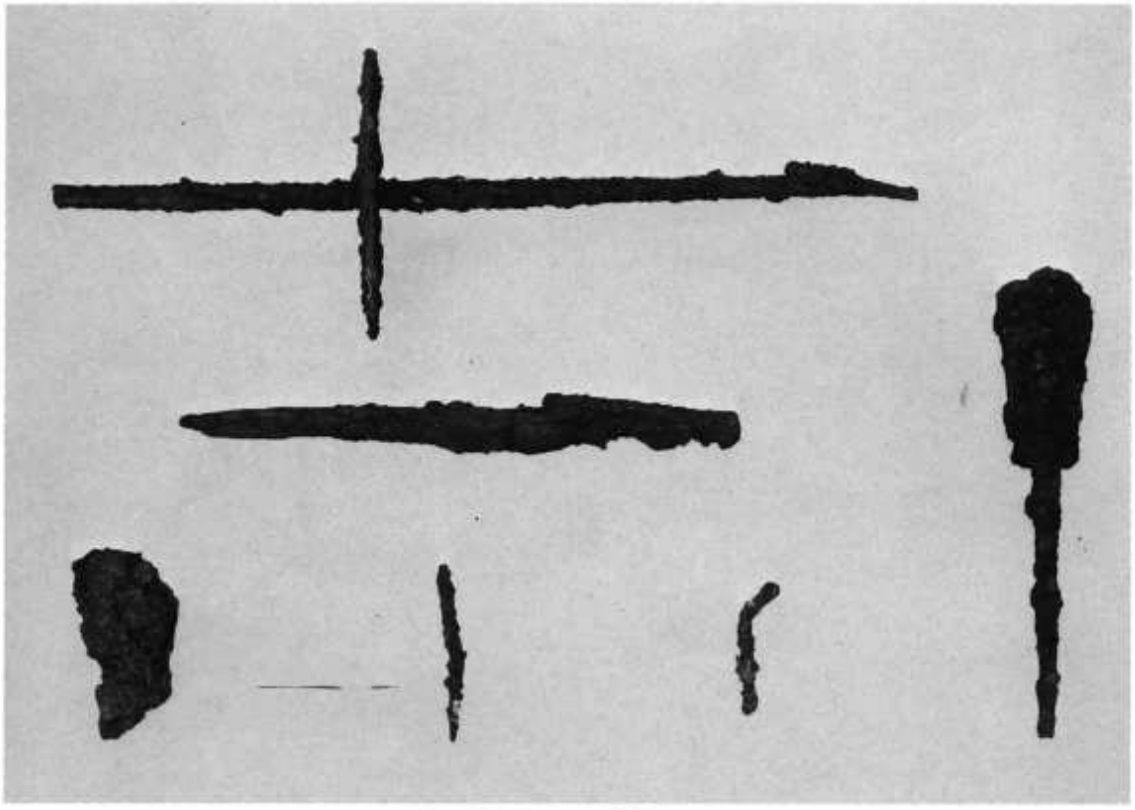
第4号住居址紡錘車、鉄鏃、鉄釘、鉄塊出土状態

紡錘車出土状態



第4号住居址鉄製品出土状態

第4号住居址土器



第4号住居址出土鉄製品

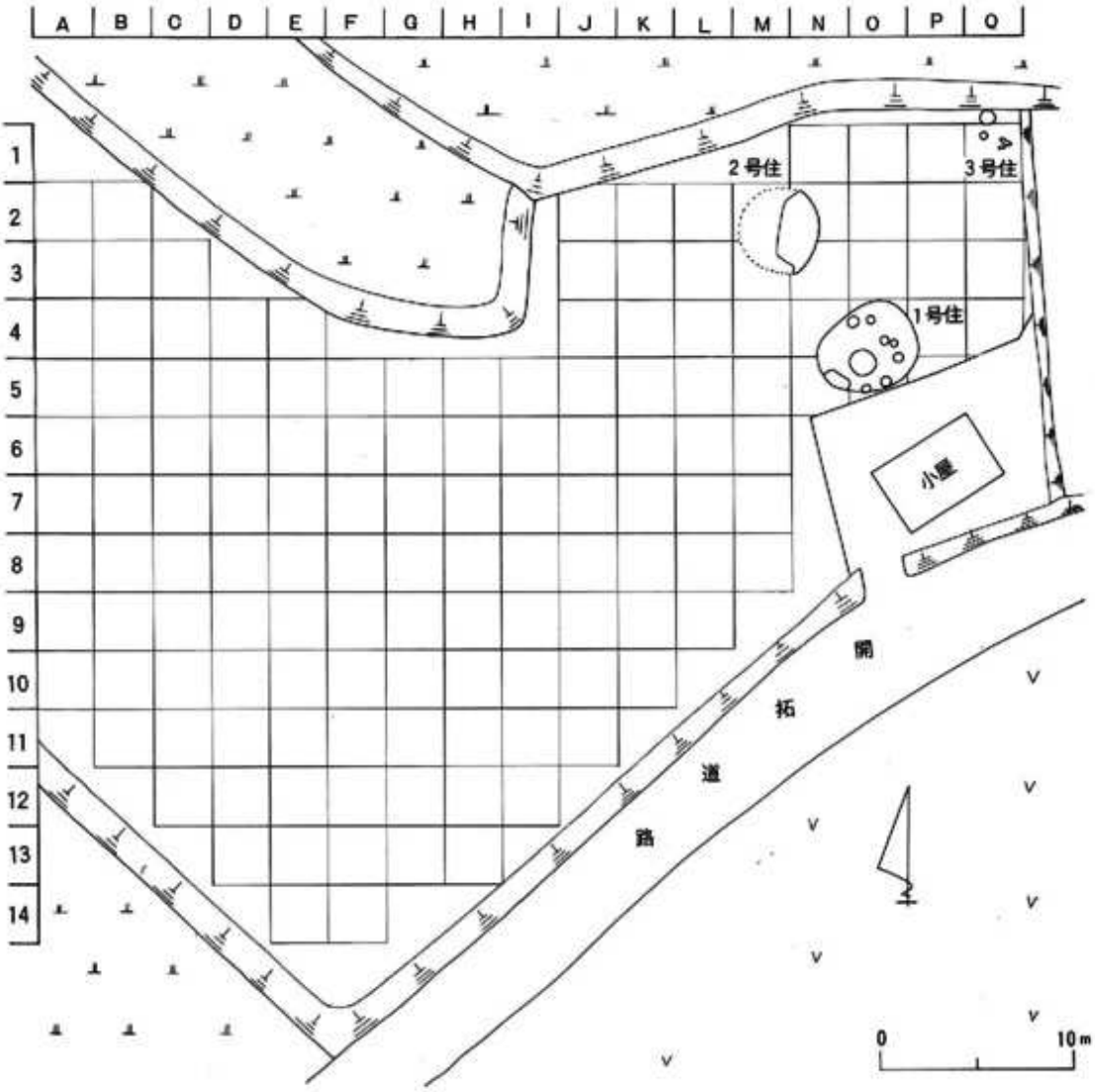
第4号住居址出土遺物

第IV章　浄永坊遺跡（ＭＪＥ）

第１節　縄文時代の住居址

１、縄文時代の住居址

浄永坊遺跡は、南西から北東にかけて延びるなだらかな尾根状台地に位置し、調査地域を設定



第27図　浄永坊遺跡グリッド配置図及び遺構全体図（１：400）

した部分は、北側へ緩傾斜し、南側は開拓道路、北側は水田面のある低湿地となっている。低湿地はかつては調査地域の大部分をも含める沢状の地形であったと思われ、厚い黒色土層の下部は、大礫、小礫が混在して層を成し、部分的には黒色土下層に青色の粘土層が堆積しており、調査当初から激しい水の流れ出しがあった。遺跡のある尾根状台地のほぼ全体は黄色のローム層により覆われており、丁度沖積面と洪積面の接点的位置を調査する状況であった。その接点部は、調査地域北東部の遺構が検出された箇所であり明瞭に区分することができた。

検出された遺構は、縄文時代早期住居址２棟、同中期住居址１棟で、沖積面での遺構検出はできなかった。

1)、第１号住居址（第28図１、図版35）

本址は、調査地域の北東側で検出された縄文時代早期の住居址である。平面形態はやや不定形な楕円形をしている。規模は東西５m、南北4.15mを測り、東側にやや張り出している傾向がある。壁高は８～10cm と浅く、北側程深くなる。床面は部分的に固く締っているが全体に軟弱である。ピットは柱穴と思われるもの７個、土壙３基であるが、柱穴と土壙の区別のつかないものが１個ある。１基の土壙を除いてはかなり浅い。住居址西側には礫の散乱している部分があり、礫そのものでは遺構になりそうもない。

遺物は、土器片が小量であったが確実に床面から捉えることができており、茅山式期のものと把握した。

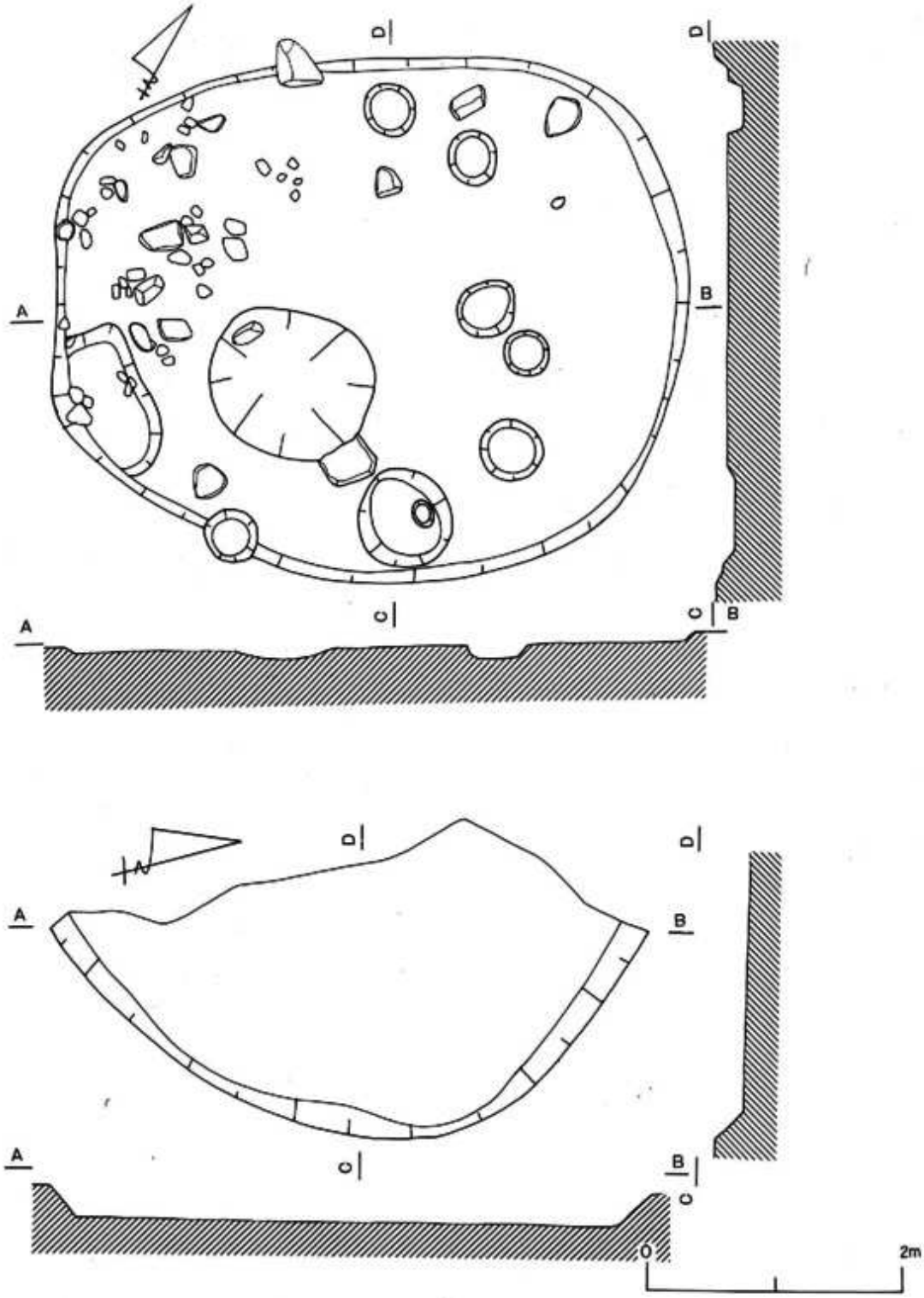
2)、第２号住居址（第28図２、図版36）

本址は、調査地域北東部の第１号住居址に隣接して検出された。耕作による深掘りがこの付近にあったらしく、西側の半分以上が攪乱されていた。平面形態は残存部から想定で円形かもしくは楕円形であったと思われる。規模は直径５m前後と推定し、壁高は25～28cm を測る。床面及び壁は小礫が地山に混入しはじめており、所々に突出している部分がみられたが、かなり良好で固く締っていた。床面はやや北側に傾斜する傾向がある。

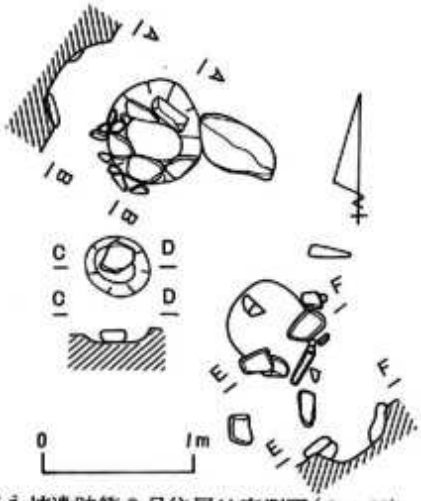
遺構は、土器片が少量出土しており、第１号住居址と同様茅山式土器が中心であった。

3)、第３号住居址（第29図、図版36・37）

本址は、調査地域の北東部隅で検出された。本址の位置する部分は黄色のローム層が地山となっている。しかしながら耕作がすでにローム層にまで達していたため床面や壁が攪乱され、炉址と柱穴だけが検出された。炉址は礫で囲まれていたが、北西部は抜き取られていた。内部には僅かな焼土が堆積し、土器片が出土した。柱穴は２個で、そのうちの１個は石で囲むように検出され、柱の補強とも考えられるものである。



第28図　浄永坊遺跡第１・２号住居址実測図（１：60）



第29図　浄永坊遺跡第３号住居址実測図（１：60）

第２節　縄文時代の土器

浄永坊遺跡から出土した土器はかなり少なかったが、住居址に伴うものが出土しているため、貴重な資料となりうる。時期的には、縄文時代早期末葉の１群、前期初頭の１群、中期中葉から後葉にかけての１群、後期後葉の１群であり、その中心は早期末葉から前期初頭の資料であった。数が少ないとはいえ、早期末葉の茅山式土器が住居址から出土したことは、本地域の大きな成果である。

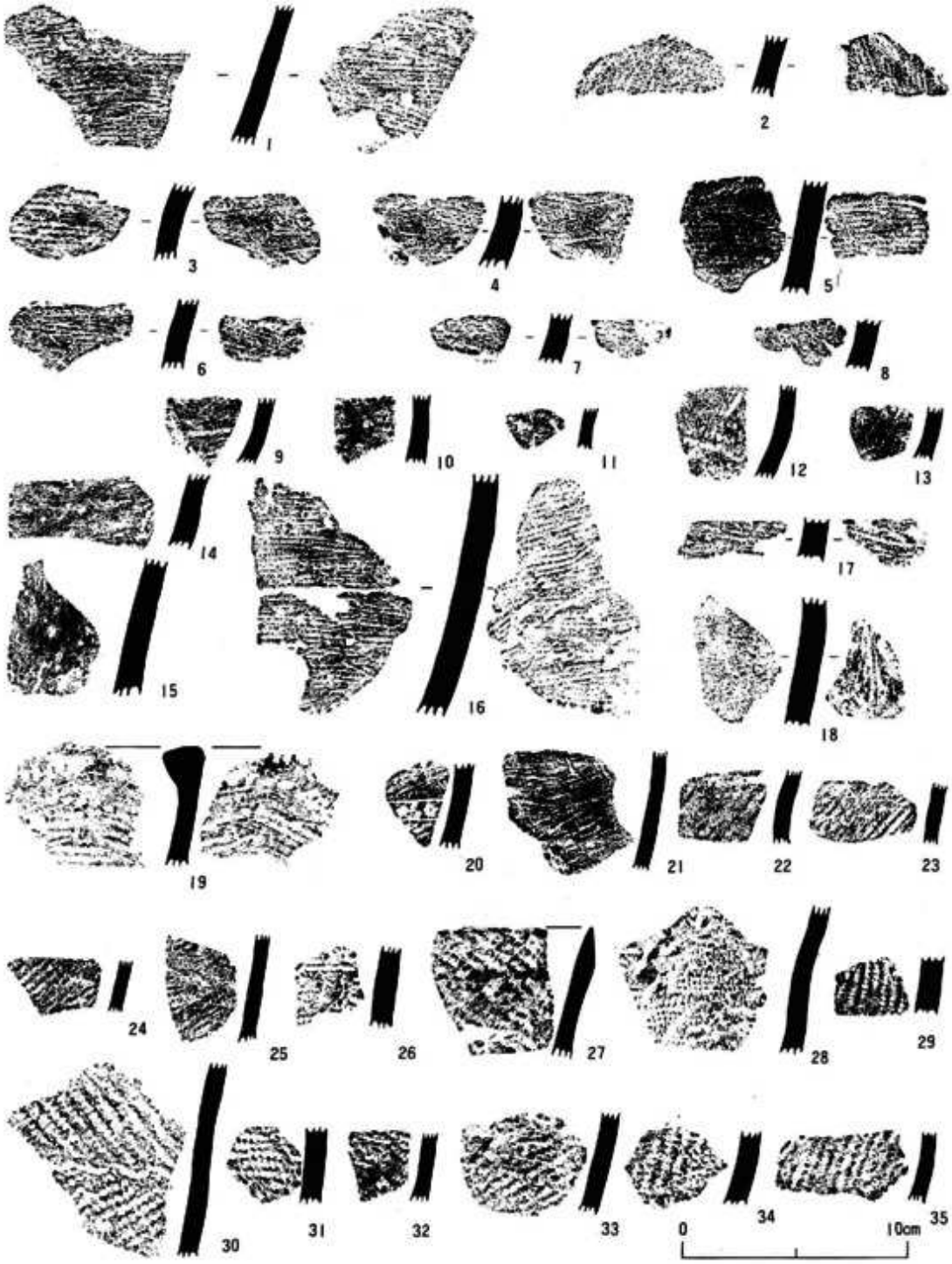
以下に示す分類は、出土量が少ないため住居址出土土器も含めて行なうことにする。

第Ｉ群土器

縄文早期末葉のものを本類とする。

第１類（第30図１～８・16～20、図版38）

茅山下層・上層式を本類とする。茅山下層式と上層式を地域で分類することはかなり難しい作業であり、しかも本遺跡の場合出土数が少なく極めて困難である。多くの報告例を概括すると、茅山下層式は、口縁部が波状のものと平縁のものがあり、胴部上半に刻み目をもち隆帯がめぐり、この隆帯部で器形がやや屈曲するものもあるが、屈曲しないものの方が多い。胎土には繊維が多く混入し、器厚が厚い。色調は褐色または暗褐色で刺突や指頭がみられ、曲線文などがみられる。表面には条痕がみられるが上層に比べると弱く、また裏面も同様である。茅山上層式は、表裏に条痕文が強く施文され、条痕以外には文様を施文したものは少ない。口縁は、波状ないしは平縁で、胴部は余り変化がない。底部は平底を主とするが、一部に尖底もある。などであり、条痕文や他の文様で区別する以外はむずかしい。しかし、新たな資料により、遺跡によっては全く逆転している特徴があるためかなりの真重さを必要とする。



第30図　浄永坊遺跡出土土器（1：3）

19は、茅山下層式に比定するものである。波状口縁をなしており、波状の頂部は指頭によりラッパ状に凹が付けられ、表裏に向って丸みを帯びて広がりをみせている。口唇には刻み目が連続して施文され、またラッパ状に広がる波状頂部にもくまなく施文されている。また口縁部直下には底部に向って僅かな貝殻による押し引きが行なわれ、さらに、器面をめぐる列点状の刺突文が施文されている。これらの文様の空間部は条痕が施文されている。裏面には、口縁部直下にやはり器体をめぐる列点状刺突文が施文され、所々に不規則な刺突も行なわれている。その空間部には条痕文が施文されている。胎土には、大粒の石英と長石が混入し、繊維も多く入っている。色調は表面が暗茶褐色、裏面が茶褐色で、焼成は比較的良好である。20は併行する二本の沈線とその間に交互に方向を変えて施文する刺突文が行なわれており、さらに沈線により曲線を描き刺突文が行われている。内外面とも弱い条痕が施文され茶褐色の薄手の土器である。胎土には大粒の小石や繊維が混入している。本資料は下層式というよりも上層式に近い感じを受けるものである。他の資料は上層式と考えられ、内外面ともに条痕文が施文され、胎土には大粒の石英、長石などが混入し、また繊維も混入している。なお、1～5は第1号住居址出土、6～8は第2号住居址出土資料である。

第2類土器（第30図9～15・21～23、図版38）

撚糸文土器、無節縄文土器、無文土器を本類とする。9～11、13、21は撚糸文が施文されている資料である。胎土には極めて多量の石英が混入している特徴的な資料である。繊維は混入していない。10と21は裏面に指頭による整形痕が残っている。17、22、23は無節の縄文を施文しているもので、胎土には繊維の混入はなく、小粒の石英、長石が多量に混入し、焼成は極めて良い。14と15は無文の土器であるが、小片であるので有文土器の無文部かも知れない。胎土には、微量の石英、長石の外に金雲母が目立って混入している。内外面茶褐色で焼成は極めて良い。

本類の資料は、早期末葉であるが、型式にあてはめるのは難しい。

第II群土器

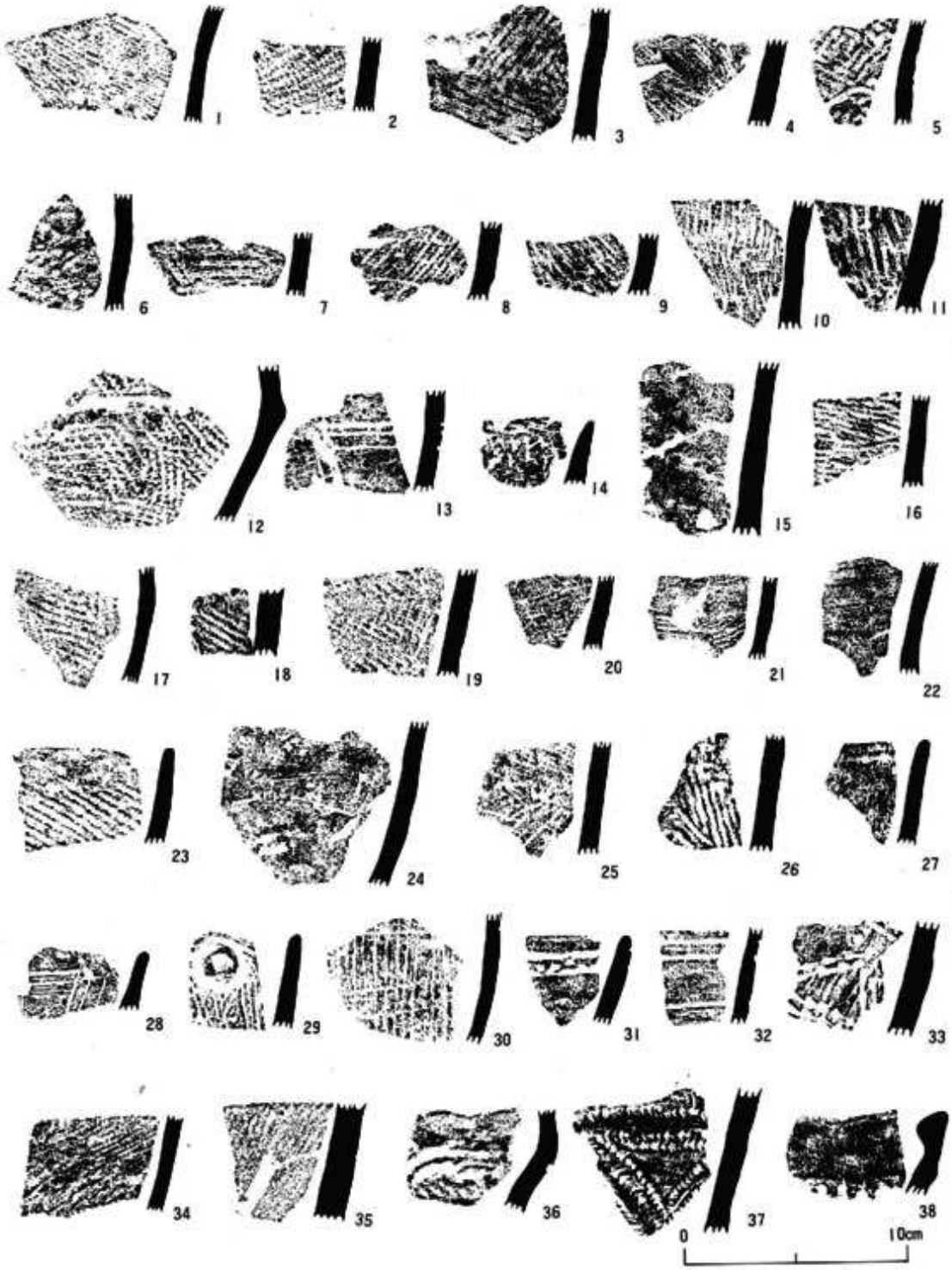
縄文前期前半の土器を本群とする。

第1類（第30図26、図版38）

花積下層式の押圧縄文土器を本類とする。26の1点だけである。原体を直接的に施文したものであり、繊維の混入はない。

第2類（第30図24・25・27～35、第31図1～12・16～20・23・25・26、図版39）

第1類以外の縄文土器を一括し本類とする。第31図7と11は、R縄文の原体2本揃えの単軸絡条体を縦位に回転施文したものであり、僅かに2片出土しただけである。胎土には僅かに繊維と砂粒が混入している。24、25、27～35は繊維が混入していない資料、第31図の資料は多量に繊維が混入しているものである。関山式にかかるものも含まれていると思われる。



第31図　浄永坊遺跡出土土器（1：3）

第Ⅲ群土器

縄文前期後半の土器を本類とする。

第１類（第31図28～32、図版39）

縄文前期後半の土器を一括して本類とする。沈線文が主体となり文様構成が成されているものである。29は粘土粒の貼付文、31は二本の沈線間の無文部に交互に刺突文が施文されているものである。

第Ⅳ群土器

縄文中期後半の土器を本群とする。

第１類（第31図34～38、第32図１～２、図版39・40）

37は新道式で、粘土紐の貼り付けにより三角形を基調とした区画を作り、隆帯の内外に押し引き文を施したものである。他は時期設定が難しいが、第32図１、２は曽利期と思われる。

第Ⅴ群土器

縄文後期の土器を一括して本群とする。

第１類土器（第32図３・４、図版40）

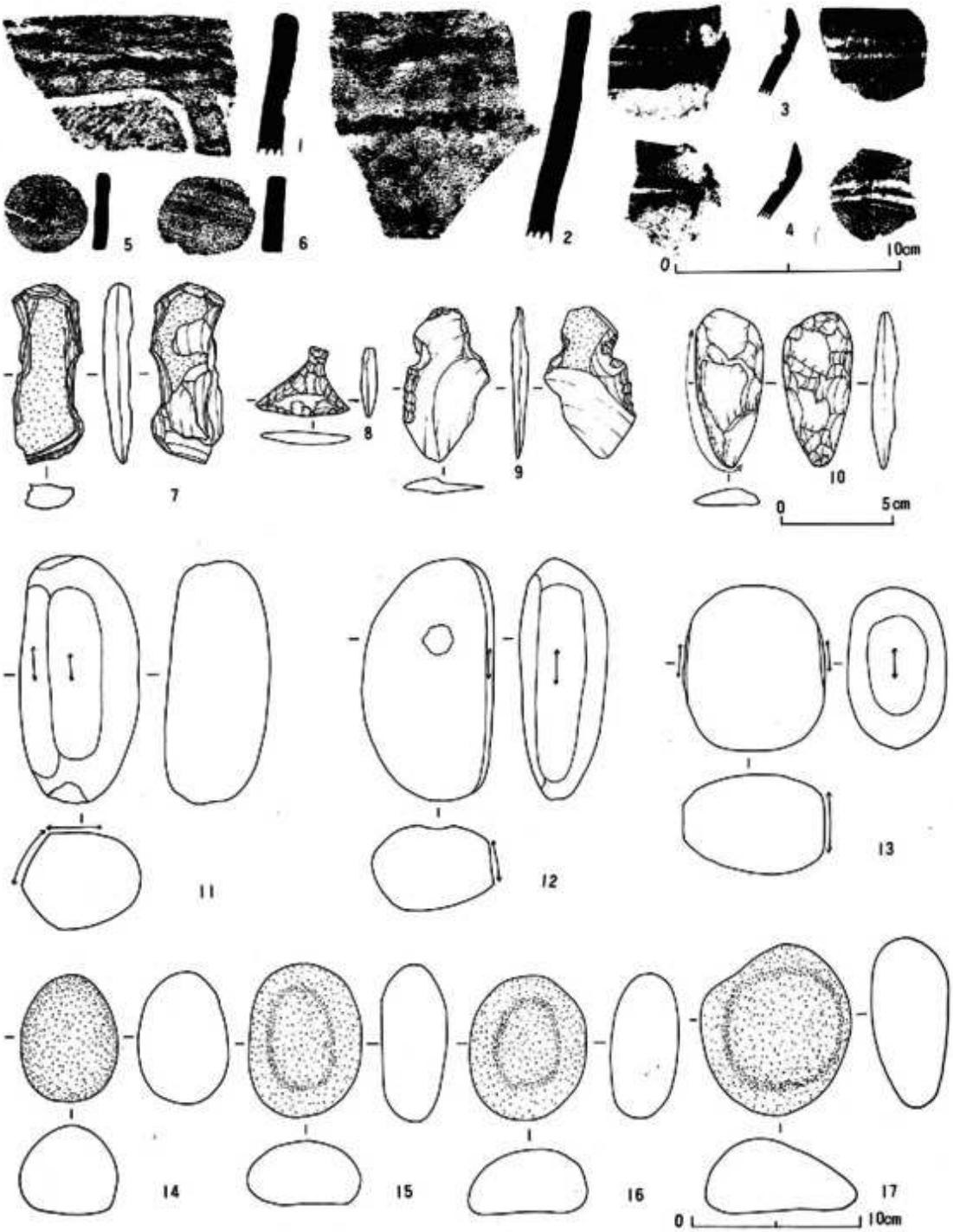
出土した土器は２片だけである。加曽利ＢⅡ式と思われ、表裏の口縁部直下には二本の沈線がめぐっており、表面の沈線部から口縁部が内湾している。内外面とも黒色で、よく研磨された精製土器である。

第３節　縄文時代の石器

浄永坊遺跡から出土した石器は、土器とともに極めて少ない。また出土した石器の時期を判断することは難しい。したがって、一括してその概略を示すことにする。

器種は、石鏃、スクレイパー、石匙、両極石器、打製石斧、横刃型石器、多面体磨石、凹石、磨石、その他加工痕のある石器やフレイクなどがある。（第32図、図版40）

石鏃は２点だけ出土し、いずれも基部が欠損している。スクレイパーは、サイドスクレイパーとエンドスクレイパーのいづれもが出土しているが、両側辺加工のサイドスクレイパーが多い。石匙は縦長と横長の２点が出土し、石質は縦長が砂岩製、横長が頁岩製であり、横長の資料は極小であるが、つまみから刃部まで全体を丁寧に加工している。両極石器は８点出土しており、一方の打撃痕が反対側の打撃痕ないしダメージに直線的に当たるものを全て含めた。形態は長方形ないし方形に近いものが多く、紡錘型のものはなかった。打製石斧は欠損品が１点、横刃型石器も欠損品が１点出土している。多面体磨石は２点あり、その１点はハンマー、もう１点は凹石に再利用されている。凹石は２点、磨石は６点あり、他は加工痕のある石器やフレイクであった。

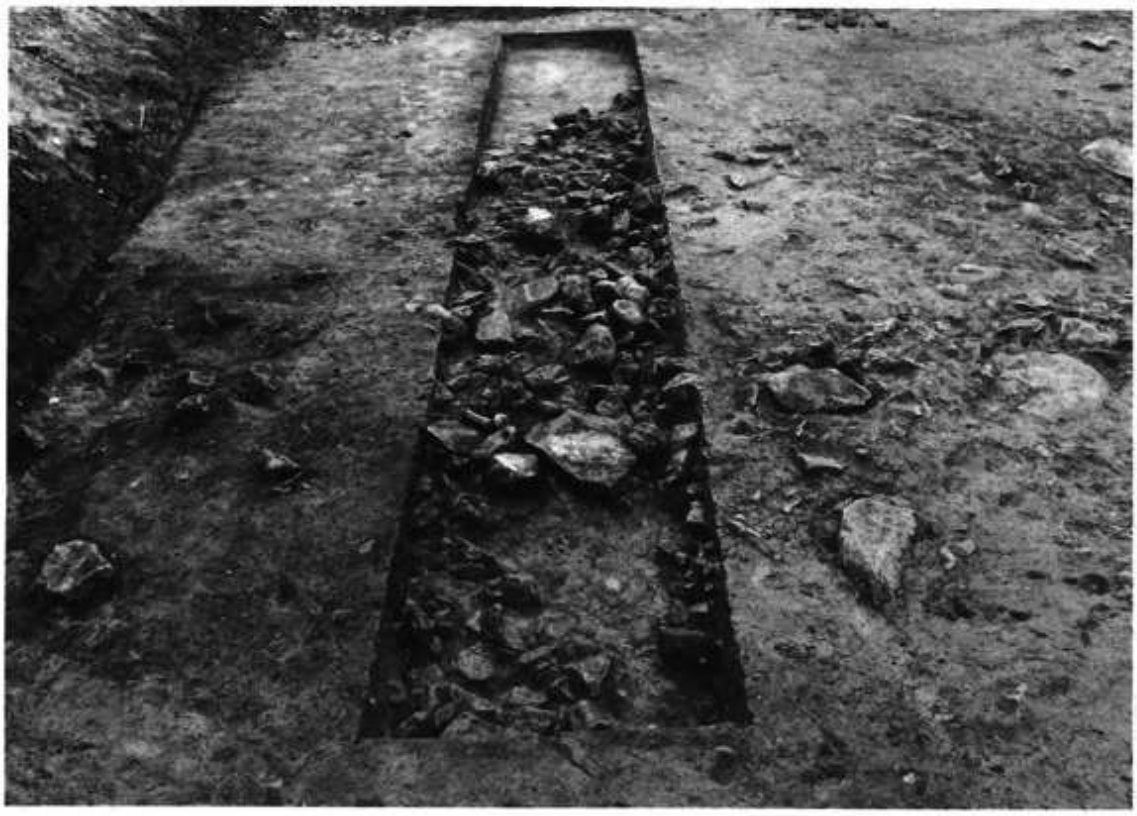


第32図　浄永坊遺跡出土土器、土製品、石器(1～6・8～10、1：3、他1：4)

図　　版

浄永坊遺跡全景

浄永坊遺跡全景



トレンチ内集石

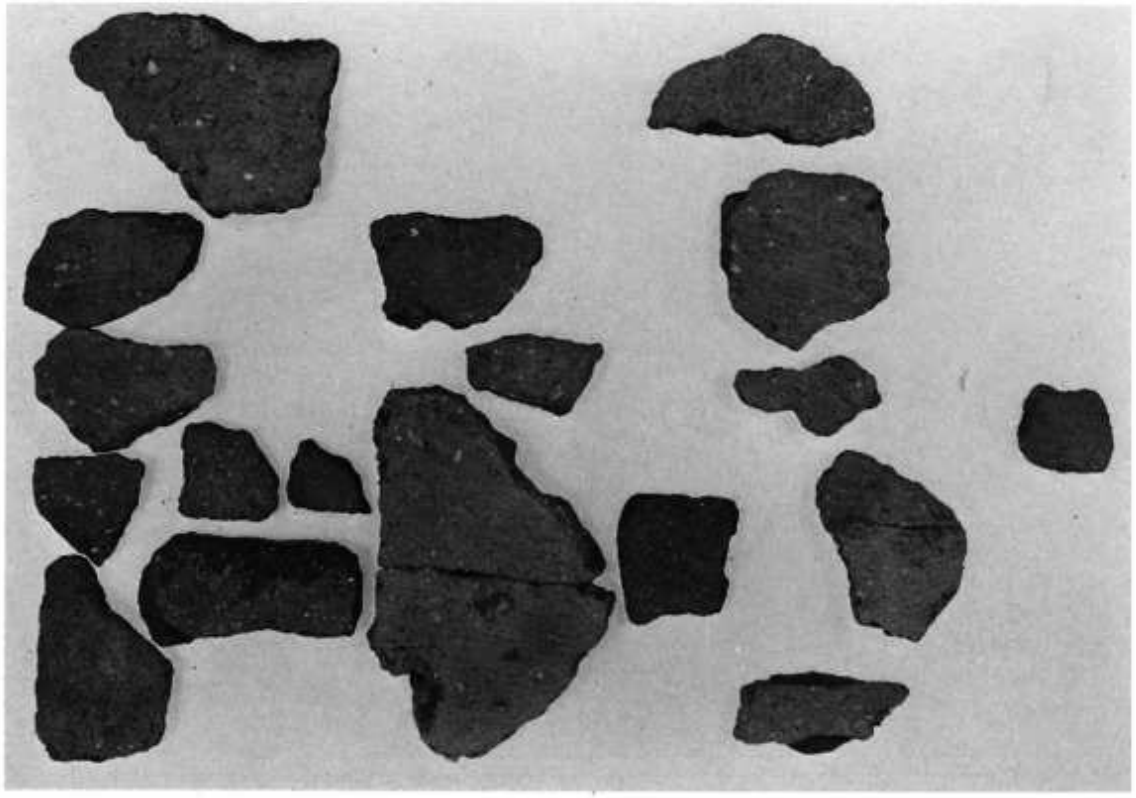
第1号住居址

第2号住居址

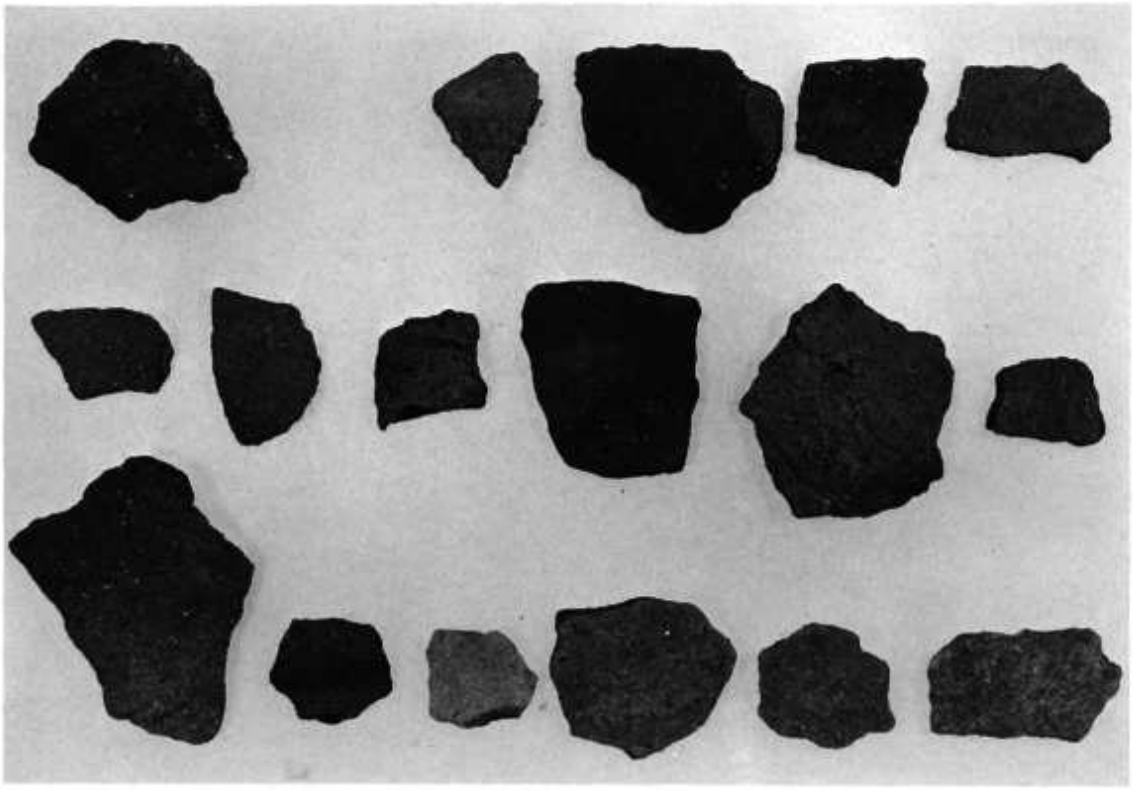
第3号住居址

第3号住居址炉址

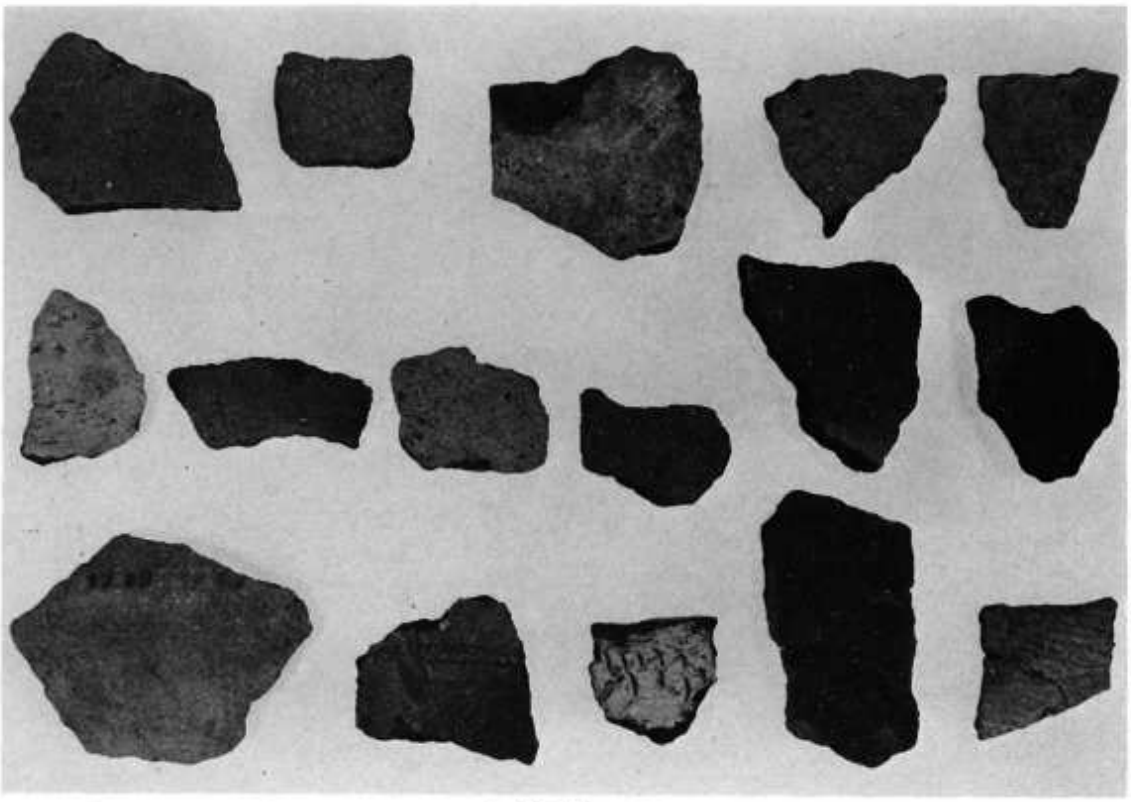
調査風景



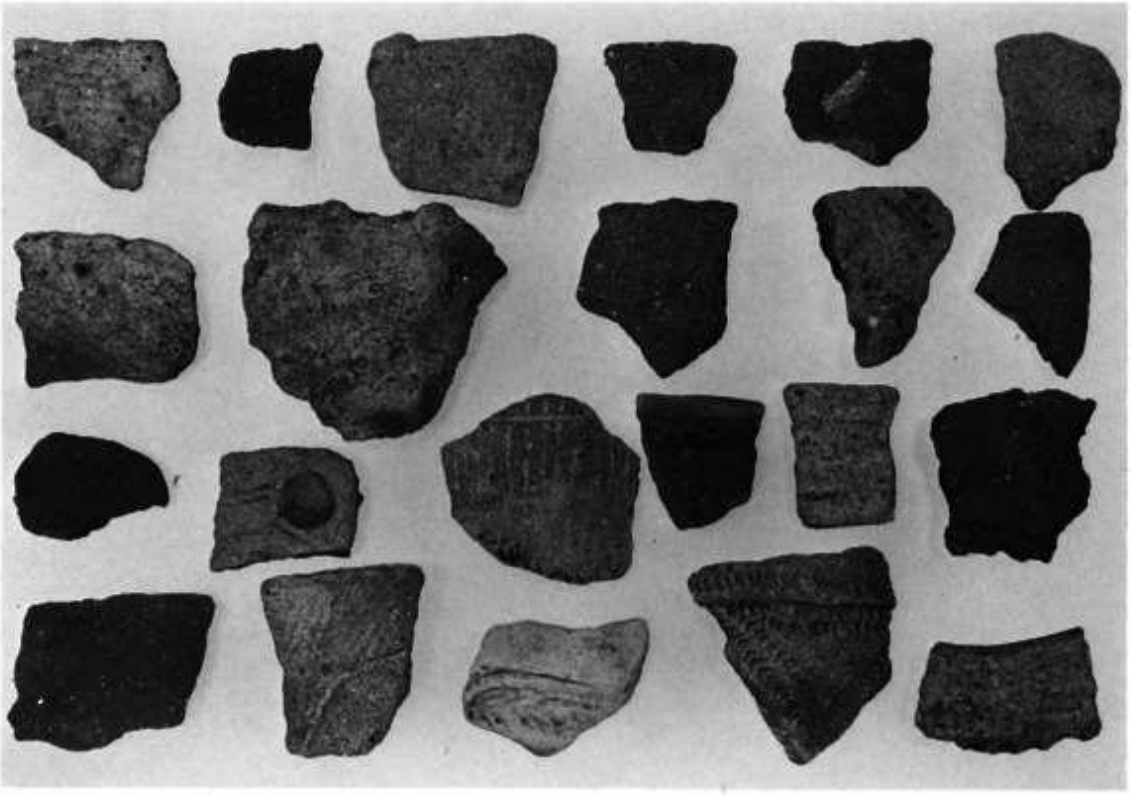
浄永坊遺跡　土器



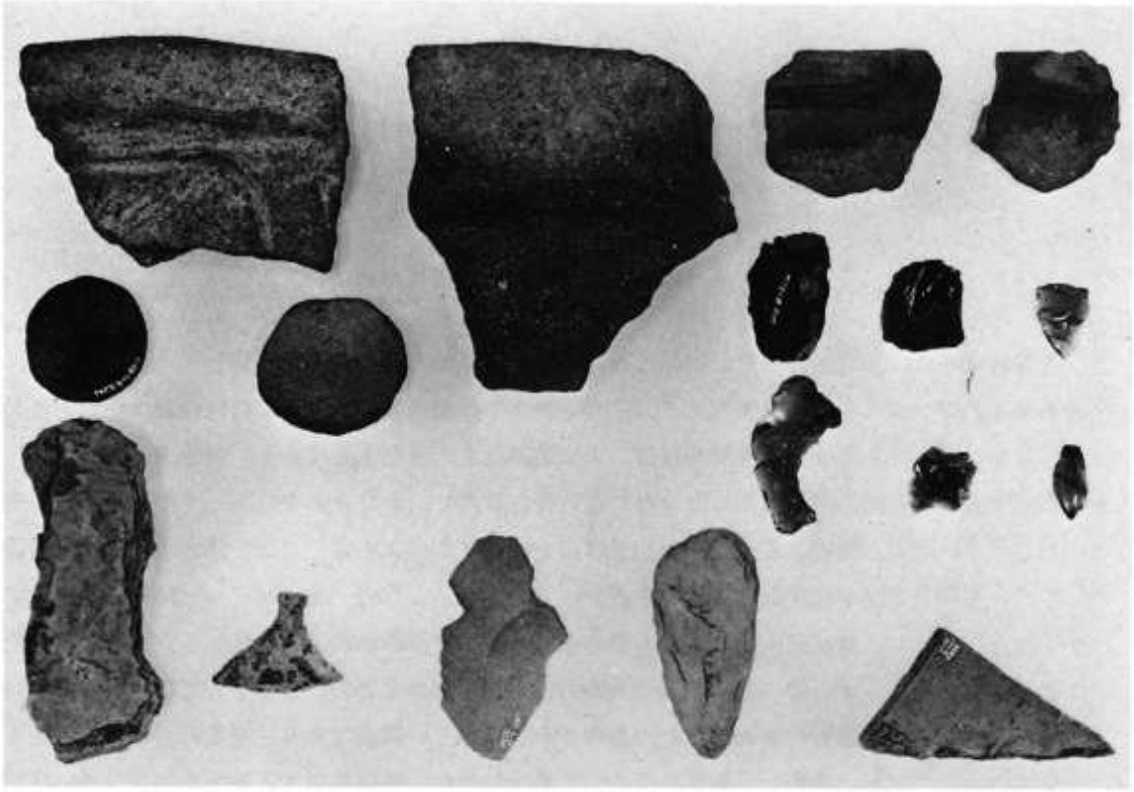
浄永坊遺跡　土器



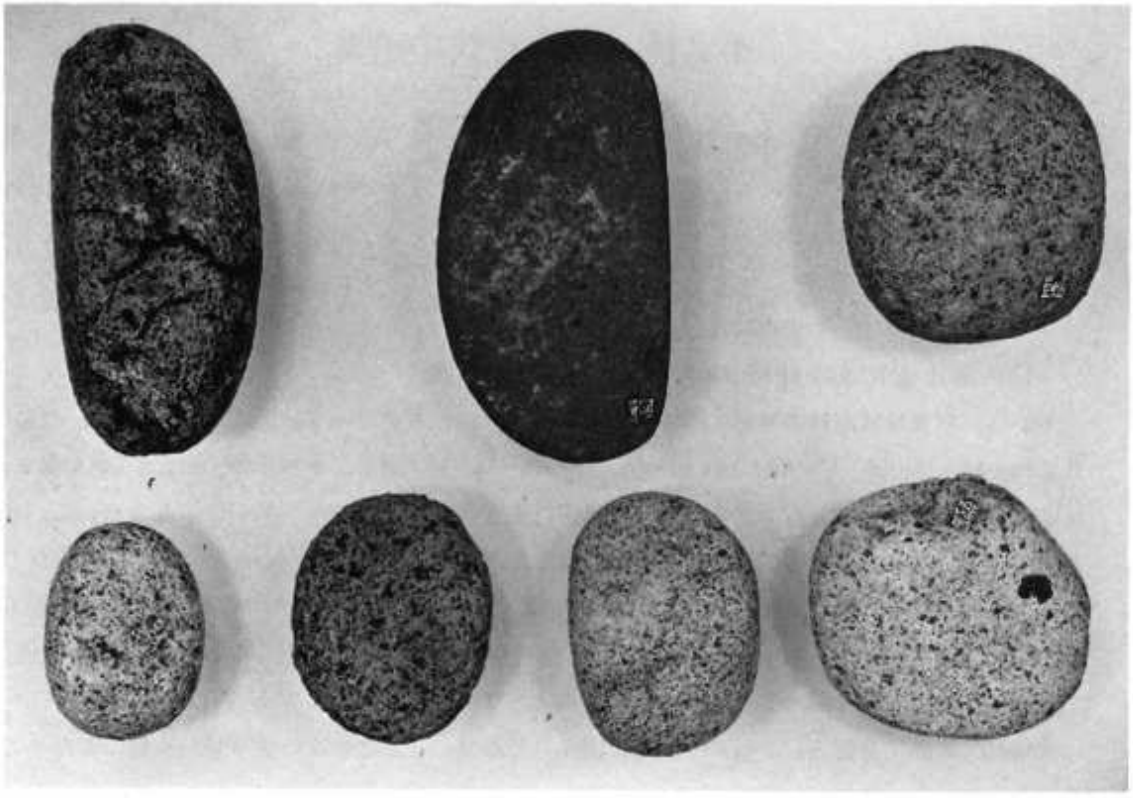
浄永坊遺跡　土器



浄永坊遺跡　土器



浄永坊遺跡　土器、石器



浄永坊遺跡　土器、石器

第V章　浦谷B遺跡（MUY・B）

第1節　遺跡と調査の概要

浦谷B遺跡は、蓼科山の裾野が低位に発達している尾根の東向斜面に位置している。層位は、大小多量の礫が混入する厚い黒色土と、その下層に小礫が多量に混入する固い砂質ロームが堆積しており、遺物包含層及び遺構構築面は、大小の礫混りの黒色土層である。耕作土そのものがこの黒色土であるため、調査前からおびただしい礫が散乱し、またその中に混って無数の黒曜石製の石器やフレイクが散布していた。当初遺構面を把握するのに苦慮したが、黒色土中の自然に混入している礫と遺構面の礫群との区別が面的に可能であったためプライマーリーに把握することができた。しかし、遺構面上の礫が、人為的なものであるか否かの区別は難しく、問題点として最後まで残された。また礫の集中箇所や人為的に見える部分などで、遺構として理解してもよいものか否かという問題も残された。その意味でかなり難しい調査であり、通常の沖積地の調査とは勝手が違っていた。遺物は、全体に平均して出土したが、特に集中する箇所をブロックに区分した。遺物の集中箇所により遺構を確認したという方が当を得ているかも知れない。

第2節　縄文時代の遺構

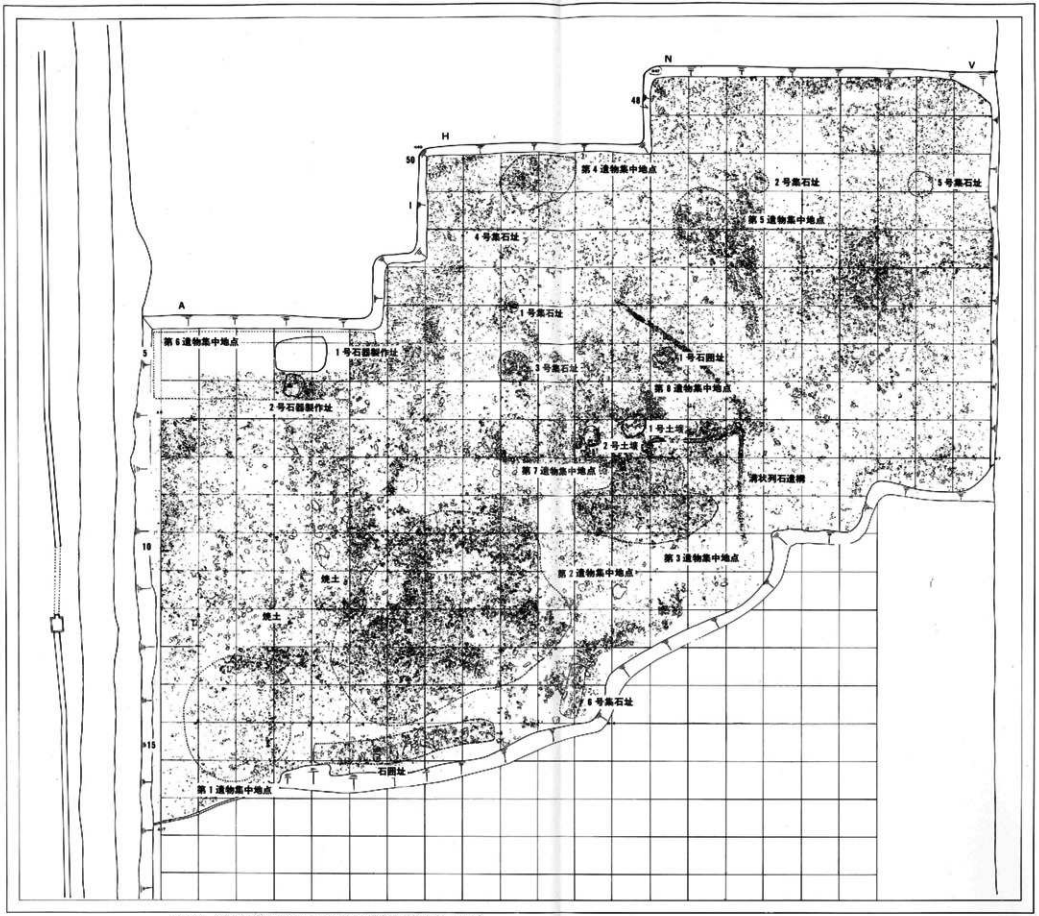
浦谷B遺跡で検出された遺構は、遺物集中地点（集石も伴う）8ヶ所、石器製作址2基、方形石囲址1基、遺物集中地点以外の集石址4、溝状列石址1ヶ所が検出された。他に焼土塊2ヶ所があるが、遺構から除外した。

1、遺物集中地点（同集石）

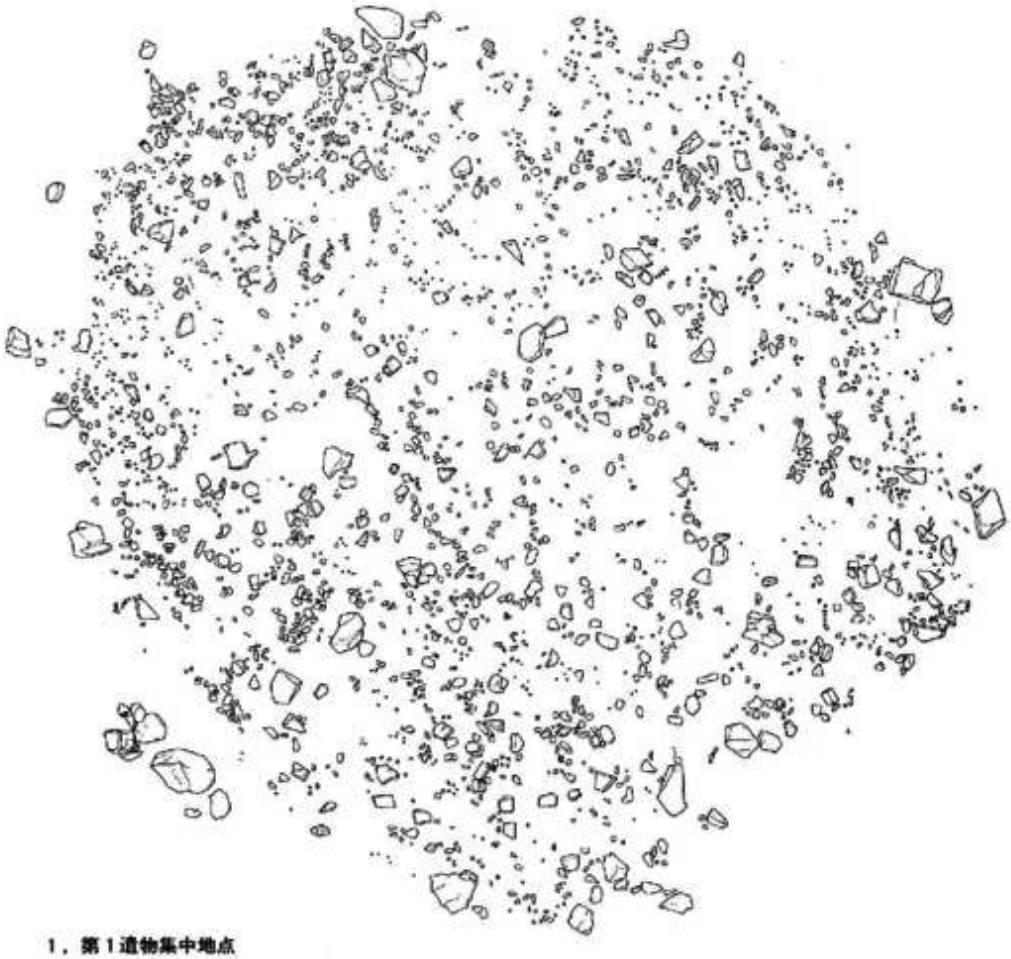
1)、第1遺物集中地点（集石）（第33図、図版75～78）

本址は、調査地域南側の農道に隣接して検出され、かかるグリッドは、A－13・14・15・16、B－13・14・15・16、C－13・14・15・16、D－13・14・15・16で、東西10m、南北8.5mを測り、ほぼ円形に近い範囲である。この範囲からはずれると礫の在り方が散在的となるところから、集石として理解をしてよいのではないかと思われる。礫は、拳大のものからそれよりも小さくなるものが圧倒的に多く、人頭大のものも中にはあるが極く僅かである。一ヶ所だけではあるが長方形石囲らしい部分があったが、個別には扱わず集石全体として一括した。本遺物集中地点の土色は、他の部分に比べて極めて黒色が強く、遺構としての把握に確証を与えている。

遺物は、土器、石器ともに極めて多量に出土しており、土器は縄文時代後期の全般にわたって



第33図　浦谷B遺跡グリッド配置図及び遺構全体図（1：300）



1．第1遺物集中地点

2．第7遺物集中地点

第34図　浦谷B遺跡第1遺物集中地点、第7遺物集中地点実測図(1：80)

出土し、復元可能なものもある。また、注口土器の出土が多かったのも本地点の特徴である。石器は、石剣、石棒など祭祀的遺物の出土や、磨石、凹石など鈍器的色彩の強いものが多い。全域にわたって焼成された骨片が散乱していたのも重要である。本遺跡の遺構ないし遺物集中地点の中ではここだけである。

以上の状況からすれば単なる遺物集中地点ではなく、何かしら祭祀的な集石遺構のような感を受ける。しかしこれ以上の域は出ない。

2)、第2遺物集中地点（集石）（第35図、図版79～81）

本址は、調査地域南部の第1遺物集中地点の北側に隣接して検出され、かかるグリッドは、E—11～14、F—10～15、G—9～15、H—9～14、I—9～14、J—9～14、K—10～13で、北西—南東を結ぶ位置が最大長となり20m、北東—南西14.8mを測り、やや変則的な楕円形の範囲である。本地点は明らかに第1地点とは分離され、また地点外とは礫の密度や様子が異なるため、遺物集中地点であるとともに、集石址として理解してよいと思われる。礫は拳大のものからそれよりも小さなものがほとんどであるが、所々に人頭大のものも存在していた。第1地点の集石は、比較的平面的であったが、本址は中央部で厚く、周辺部で薄いという円錐形の形態である。しかし極端に中央部と周辺部に差があるという状況ではない。

遺物は、土器、石器とも極めて多量に出土しているが、その中でも中央部から南側にかけて特に集中していた。土偶や耳飾りなどが目立った。

3)、第3遺物集中地点（集石）（第33図、図版82）

本址は、調査地域のほぼ中央部、第2遺物集中地点の北西部で検出された。かかるグリッドは、K—9、L—8～10、M—8—10、N—8～10、O—8～10で、東西6.8m、南北11.5mを測り、丁度南北に長い石匙のような形状を成している。本址も周辺部とは礫の在り方が明らかに異っており、また第1・2集中地点に比べてもより密集している。礫の大きさも全般に拳大のものが目立つ。

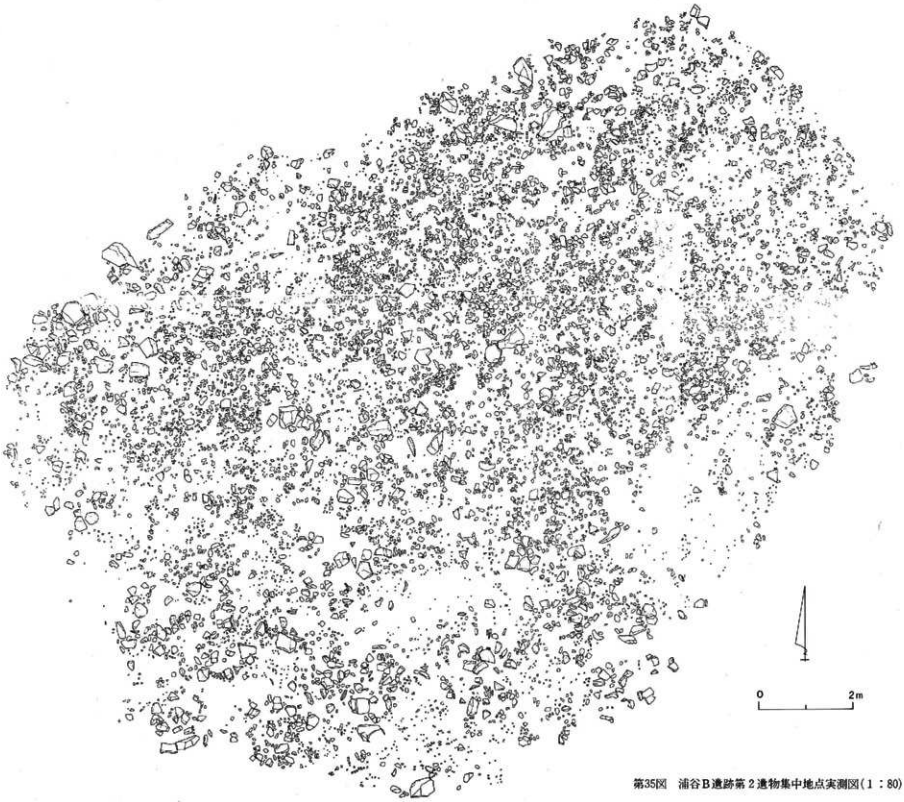
遺物は、第1・2集中地点に比べるとやや集中度に欠けるが、やはり土器を中心とする多量の遺物が出土している。

4)、第4遺物集中地点（第33図）

本址は、調査地域の西側中央部で検出された。かかるグリッドは、J—49・1、K—49・1、L—49で、北西—南東で5.5m、南西—北東で4.5mを測る規模の小さなものである。礫は拳大以下のものが多いが概して密集しているという状況ではない。遺物は土器の小片が多量に出土しており、本址では礫の上というより黒色土中から出土する傾向にあった。翡翠の大珠が出土したのも本址である。全体の様相から住居址ではないかとの見方もできるが、炉址や焼土などが存在しないなどから極論は避けた。

5)、第5遺物集中地点（集石）（第33図）

本址は、調査地域西側のほぼ中央部、第4遺物集中区の北側で検出された。かかるグリッドは、



第35図　浦谷B遺跡第２遺物集中地点実測図(１：80)

N－1・2、O－49・1・2、P－1・2で、規模は、東西5.3m、南北5.2mを測るほぼ円形の範囲である。礫は拳大からそれ以下のものもあるが、人頭大以上のものが目立っている。また、範囲内全体に密集しているのではなく、部分的に集中している傾向である。本址も住居址ではないかとの見方をしたが、極論は避けた。

遺物は、他の集中地点の中では希薄な方であるが、遺跡全体から見ればかなり出土量は多い。

6)、第6遺物集中地点（第33図）

本址は、調査地域南西部の調査地域境に接して検出された。かかるグリッドは、A－4～6、B－4～6、C－4～6、D－4～6、E－4～6、F－4・5で、規模は、東西5.2m、南北17.8mを測る。しかし、遺物の集中範囲は、調査地域外の西側にさらに広がっているのは確実であり、測定できる規模は現状しかできない。本址は礫の数よりも土器の数の方が多い程に多量に出土しており、また、後に記述する第1号、第2号の石器製作址をも含んでいる。したがって石器、フレイク、チップ等も全体に散乱し、おびただしい出土状況をみせていた。

7)、第7遺物集中地点（第33図）

本址は、調査地域のほぼ中央部で検出され、かかるグリッドは、J－6・7である。規模は、東西3.2m、南北2.9mで、円形の範囲である。本址は、第8遺物集中地点とともに遺跡全体の中でも極めて礫が少なく、拳大以下のものが散在する程度であった。

遺物は、土器の小片と黒耀石の石器やフレイクが集中して出土した。

8)、第8遺物集中地点（第33図）

本址は、調査地域のほぼ中央部で、第7遺物集中地点の北西部で検出された。かかるグリッドは、L－5・6、M－5・6であり、規模は、東西4m、南北3.2mを測り、ほぼ楕円形を呈している。第7号遺物集中地点に比べれば、拳大以下の礫の集中はみられるが、他の状況からすればかなり希薄である。

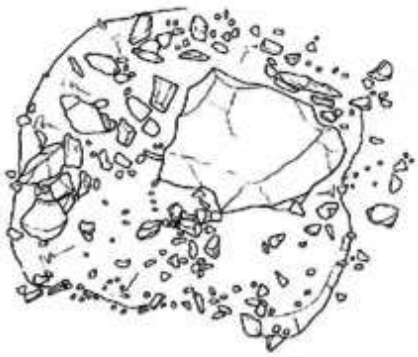
遺物は、土器の小片と黒耀石の石器やフレイクが多く出土していた。

2、石器製作址

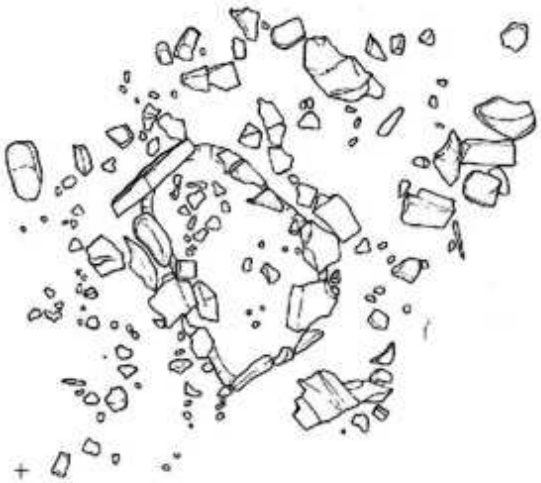
1)、第1号石器製作址（第33図、図版83・84）

本址は、調査地域南西部の調査地域境に接して検出された。かかるグリッドは、D－4・5、E－4・5で、規模は、東西2.7m、南北4.2mを測り、やや楕円ぎみの長方形の形状をしている。深さは15～20cmを測るが、低面が一定しておらず多少の差異はある。全体に浅い土壙状の遺構と見てよい。低面や壁に当る部分は特別な構築はしてない。

グリッド掘りで遺構確認段階からすでにおびただしい量の黒耀石が出土し、土壙状遺構の掘り込み部から盛り上って密集していた。黒耀石を種別すると、原石、コアー、石器の未製品（加工途中）、完成品、欠損品、欠損部分、フレイク、チップなどとなり、これらの中で当然ながらチップが多いが、全てが茶褐色土に近い砂質の黒色土の中に混在していた。黒耀石以外にも僅かにチ

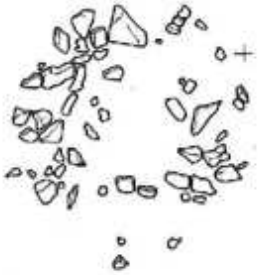


1．第2号石器製作址



2．第1号石囲址

3．第1号集石址



4．第2号集石址

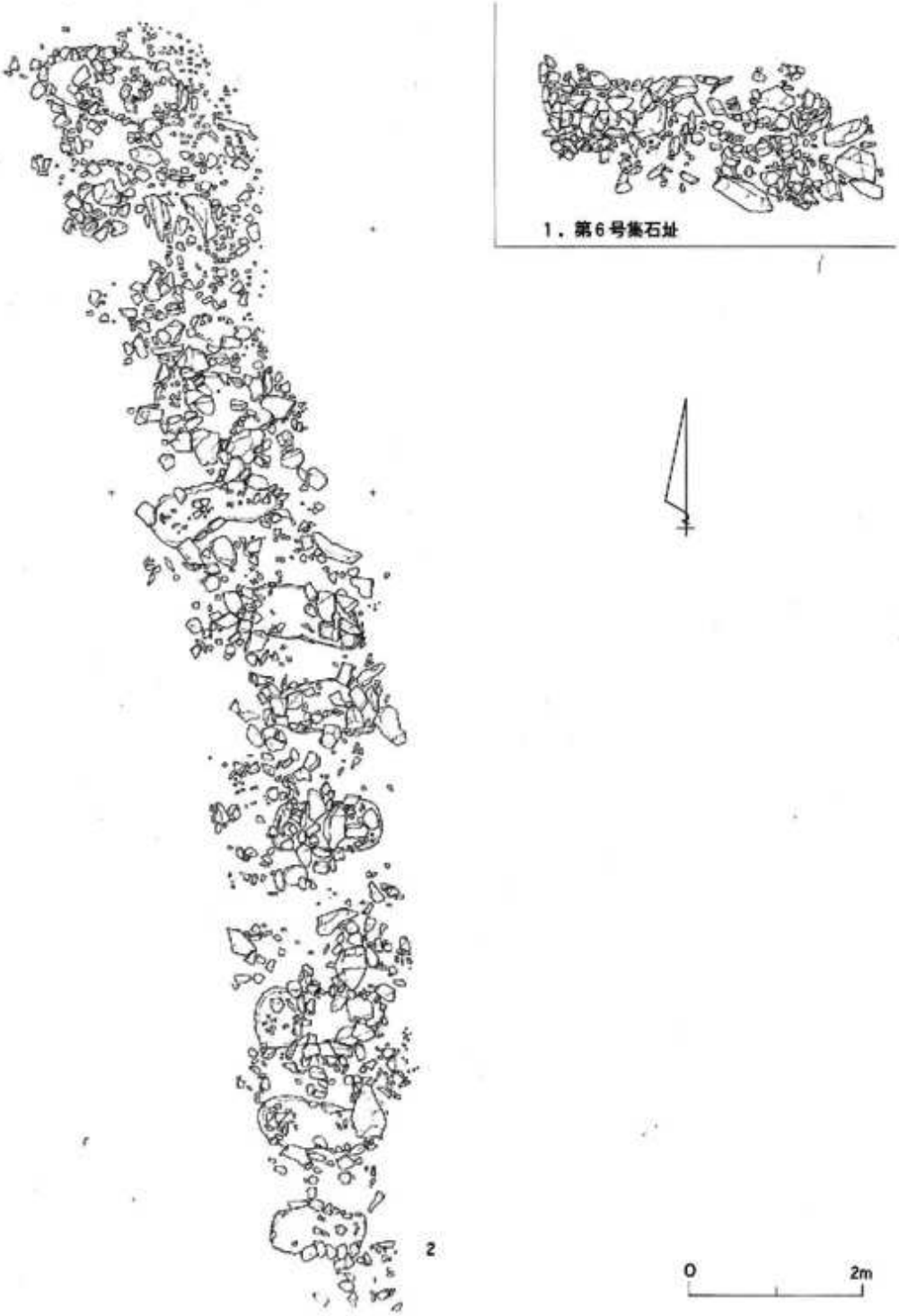
5．第3号集石址

6．第4号集石址

7．第5号集石址

0　1m

第36図　浦谷B遺跡第2号石器製作址、石囲址、集石址実測図（1：40）



第37図　浦谷B遺跡集石址・石組遺構実測図（1：80）

ャートや頁岩、安山岩などの石器やフレイク等がみられた。これらの資料はできうる限り採集し、保管している。

2)、第2号石器製作址（第36図1、図版84）

本址は、調査地域南西部の第1号石器製作址に隣接して検出された。かかるグリッドは、D—5・6である。規模は、東西1.75m、南北1.85mを測り、方形に近い円形の平面を成している。深さは、中央部が最も深く25cm、壁の直下で平均20cmを測る。低面は一定しておらず、自然礫の突出があり凹凸が激しいが、かなり固く締っている。また、壁も自然礫の突出があり凹凸が激しいが、地盤の自然環境により小礫混りの黄色砂質ロームに達するまでは、このような状況が続く。低面は地山までは達しておらず、大小礫混りの黒色土中に構築されている。本址の北東側から中央部にかけて、50cm×38cm、厚さ20～25cmの大礫が設置してあり、明らかに石器の製作台として理解することができる。表面は凹凸があるが全体に扁平で、やや傾斜しており、おびただしい量のチップがびっしりと付着していた。

グリッド掘りで遺構確認段階からすでに大量の黒曜石が出土し、第1号址と同様に本址の掘り込み部から盛り上って、茶褐色土に近い砂質の黒色土中に混り密集していた。この密集状態は、上面から低面までむらなく続いた。出土した黒曜石を種別すると、原石、コアー、石器の未製品（加工途中）、完成品、欠損品、欠損部分、フレイク、チップなどで、やはりチップの量が圧倒的に多く、次いでフレイクである。黒曜石以外にも、チャートや頁岩、安山岩などの石器やフレイク、チップなどがみられた。第1号址とともに、いわゆる大型石器の成品やフレイク等は全く見ることができず、小型の鋭利な石器の製作址として位置づけることができる。

3、石囲址

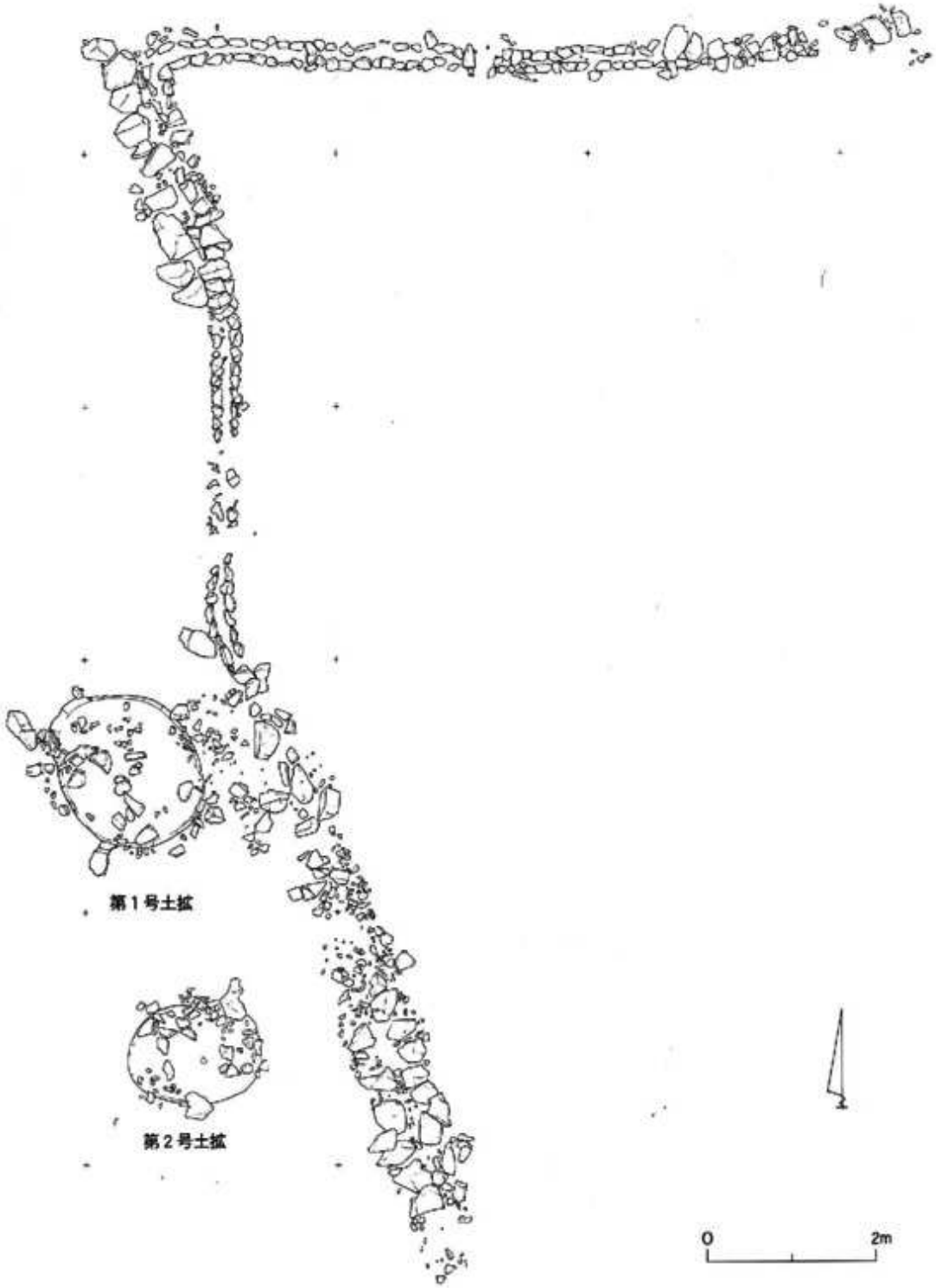
1)、第1号石囲址（第36図1、図版88）

本址は、調査地域のほぼ中央部で検出された。かかるグリッドは、N—5である。規模は、東西75cm、南北120cmで、深さ25cmを測り、平面が長方形である。北側には、両面が扁平な礫を1個立て、南側には、やはり扁平の礫を3個組み合わせて立てている。両側面の石は、角のない丸味を帯びた楕円形の礫を横長に組んで石囲いを行なっている。低部には一部扁平な礫を置いてあった。北側には、無文粗製の深鉢形土器3個体分が出土しており、いづれの破片も内面を上に向けた状態であった。これらの状況から、石棺墓ではないかと推察されるが、現段階のところ石囲址として止めておきたい。

2)、その他の石囲址（第37図2、図版87）

第1号石囲址の外に、石囲址ではないかと思われるものが各所で検出されたが、確実に遺構としてつかめるものはなかった。以下示すものは、確認作業を実施した経過を図にしたものであり、遺構として把握できるものではないことを断っておきたい。

第37図2に図示したものは、E—15・16、F—15・16、G—15・16、H—15・16、I—15・14、



第38図　浦谷B遺跡溝状列石遺構第1・2号土拡実測図(1：80)

の各グリッドに位置しており、大礫が南から北へ連続している中に石囲址と考えられるものの確認を行なったものである。合計12ヶ所程の確認作業を行なったが、第1号石囲址のように、遺構として把握できるものはない。

4、集石址

1)、第1号集石址（第36図3）

J－3・4グリッドで検出。東西65cm、南北70cmで小規模な密集状態。

2)、第2号集石址（第36図4）

P－49・1、Q－49グリッドで検出。東西1.2m、南北1.3mで円形に囲む状態を示している。

3)、第3号集石址（第36図5）

I－5、J－5グリッドで検出。東西2.45m、南北2.2mで比較的大礫が密集している。

4)、第4号集石址（第36図6）

I－2グリッドで検出。東西70cm、南北60cmで小規模に小礫が密集している。

5)、第5号集石址（第36図7）

T－49・1、U－49・1グリッドで検出。東西1.8m、南北1.8mで大礫が混入する円形の集石。

6)、第6号集石址（第37図1）

K－13・14、L－13・14グリッドで検出。東西3.9m、南北1.25mで方形を示す。

集石址は、先に記述した第1～8遺物集中地点もその分類に入るが、遺物の集中ということを主体に置いたので、集石址に入れずに分離した。ここに示す以外にも詳細に精査すれば集石址は限りなく把握できるが、自然礫との区別が大きな問題であるので、したがって本稿はこれに止どめた。

5、土壙

1)、第1号土壙（第38図、図版89）

本址は、調査地域のほぼ中央部で検出され、かかるグリッドは、M－6・7である。規模は、東西1.7m、南北1.85mで楕円形を呈している。深さは34cmで、壁がほぼ垂直に落ち、底部は平らである。自然礫が内部に突出し、また底部にも入り込んでいる。後期の土器片が少量出土した。

2)、第2号土壙（第38図、図版89）

本址は、第1号土壙の南側に隣接して検出され、かかるグリッドは、L－7である。規模は、東西1.6m、南北1.2mを測り楕円形を呈している。深さは32cmで、1号址と同様な形態をとる。

6、溝状列石址（第38図、図版91）

本址は、調査地域のほぼ中央部に広範囲に検出された。東西9.5m、南北7.5mで直角に曲がっており、なおその先は、曲線を描きながら続いている。また西南へも13m続いており規模の大きさを示している。確実なる時期を把握することはできなかった。

第3節　縄文時代後期・晩期の土器

浦谷B遺跡から出土した土器は、縄文時代早期の山形押型文土器1点と弥生時代櫛描波状文土器1点、奈良時代～平安時代にかけての土師器坏・甕少量の他は全て縄文後期・晩期の土器である。出土量は、数万片あるいはその桁を超えているかも知れない。出土地点は、先にもあげた集石址に伴ういわゆる遺物集中地点に最も多く、各所にブロック状に出土している。これらの中で、遺物集中地点から出土した埋甕3点（無文土器1点、有文2点）と石囲址に伴う無文土器3点が出土状況からしてまとまって得られたものである。その他の土器は散乱状態で出土している。

これらの土器は、全体の器形の様子が解るまでに復元できるものがかなりあり、さらに図上復元可能なものは計り知れないものがある。しかし、残念なことながら時間的な都合により、図上復元が可能な資料であっても拓本により図示せざるを得ない状況である。膨大な資料の中から僅かなものを取り上げ、短時間の整理作業の中でその内容をまとめ、重要性を認識していただけるだけの形にするのは大変なことである。その状況をふまえながら内容に触れていきたい。

縄文後期・晩期の資料は、最近徐々にではあるが県内において増えつつあるが、限定された時期の資料や、希薄なものが多く、今だ編年の空白部として残されているのが現状である。学史的にみて、かろうじて称名寺式併行期に大安寺式土器が設定され、編年の中に標式遺跡として取り上げられたが、資料内容の乏しさから誰しも認めるところとはならず、その存在は宙に浮いているものとなっている。それ以後の時期においても、単発的に他地域と併行関係にある資料が得られているにすぎず、ひとつの文化期として標識となりうる基本資料はあまり出土していないのが現状であり、したがって編年作業の取り組みもなされず、空白部として現在に至っている。また晩期は、佐野Ⅰ・Ⅱ式と氷Ⅰ・Ⅱ式の型式設定が成されているが、晩期初頭あるいは初頭から佐野式への連なる段階、佐野式と氷式の空白時期、さらに晩期末葉における段階が今だ不明なものになっている。

本年度発掘調査によって得られた浦谷B遺跡の資料は、後期初頭から晩期初頭までの一貫した体系の中で、系統的に把握することのできるものであり、しかも密度が濃いものである。恐らくは長野県においては初めてのことであり、各時期を段階的に押えながら、しかも段階的な結かりを土器の中で捉えることができるものである。さらに重要なことは、浦谷BⅠ～Ⅴ（称名寺式～加曽利BⅡ式）における関東的諸段階に比定される土器群に対して、浦谷BⅤ～BⅩ期における信州的とでもいうべき、かなり独自性のある土器群が存在するという事実を把握できるまでに至っており、したがって移入的意味あいの強かったこの時期において、独自性のある文化期を設定しうるだけの条件が十分に整いはじめたという状況である。

以下に示す内容は、各時期を分類上（群）で分け、それぞれの細分された類別の内容を系統的に示したものであり、長野県の後期初頭から晩期初頭における空白部を埋めるべき編年の試案でもある。

第2表　浦谷B遺跡土器編年対比表

時代＼地域	東海	東北	関東	長野県	(浦谷B)
後期	＋	＋ 門前	称名寺	←	浦谷B I
	蜆塚 I	袖窪 ＋	堀之内 I	←	浦谷B II
	蜆塚 II	宮戸1 大湯	堀之内 II	←	浦谷B III
	八王寺	宮戸2 a ＋	加曽利B I	←	浦谷B IV
		宮戸2 b ＋	加曽利B II	←	浦谷B V
		西ノ浜	加曽利B III	←	浦谷B VI
	蜆塚 III	宮戸3	曽谷 高井東	←	浦谷B VII
	蜆塚 IV	宮戸4 ＋	安行 I	←	浦谷B VIII
	蜆塚 V	宮戸5 ＋	安行 II		
晩期	寺津	大洞 B	安行 IIIa	←	浦谷B IX
		大洞 BC	姥山台	佐野 I ←	浦谷B X
	元刈谷	大洞 C_1	安行 IIIc		
			安行IIIb 前浦	佐野 II	
	桜井	大洞 C_2			
		＋	杉田 II		
	五貫森	大洞 A	千網	氷 I	
	水神平	大洞A 剣吉	荒海	氷 II	
		福浦島下層 砂沢			

※　東海，東北は「日本の考古学・縄文土器編年表」による。関東，長野県は加筆した。浦谷Bは新たに提唱するものである。

第3表　浦谷B遺跡編年・類別系統表

時代	対比型式	浦谷B編年	類別系統表（番号は図・図版と一致）
後期	称名寺	浦谷BⅠ	①
	堀之内Ⅰ	浦谷BⅡ	②③ ④
	堀之内Ⅱ	浦谷BⅢ	⑤ ⑥ ⑦⑧ ⑨ ⑩
	加曽利BⅠ	浦谷BⅣ	⑪ ⑬ ⑫ ⑭ ⑰⑱
	加曽利BⅡ	浦谷BⅤ	⑯ ⑮ ⑲ ⑳ ㉔ ㉕ ㉗ ㉙ ㉚㉛㉜ ㉒ ㉓
	加曽利BⅢ	浦谷BⅥ	㉑ ㉝ ㉞㉟ ㊲ ㊳ ㊴㊵ ㊸ ㊹ ㊶ ㊷ ㊽ ㊾ ㊿ ㊺ ㊻
	高井東	浦谷BⅦ	㊷ ㊷ ㊷ ㊷ ㊷ ㊷ ㊷ ㊷
	安行Ⅰ・Ⅱ	浦谷BⅧ	㊼ ㊶ ㊸㊺ ㊻ ㊸
晩期	安行Ⅲa・Ⅲb	浦谷BⅨ	㊽ ㊾ ㊿ ㊼ ㊻ ㊸
	安行Ⅲc・Ⅲd	浦谷BⅩ	㊹ ㊺ ㊻ ㊸ ㊷ ㊷ ㊷ ㊷
後晩		浦谷BⅪ	㊽の無文土器・浦谷BⅡ～Ⅹに共伴

例言にも概要を記述したが、本節の構成を改めて示すことにする。

① 本遺跡の出土土器を、基本的な型式に分類し、これを群とする。

② 1型式の中を、器形や文様など総体的な立場で細分し、○番号にした。類とする。

③ 類を系統別に把握し、系統図を作り第3表に示した。この中で、浦谷BXIは、II～X期までそれぞれに存在する無文土器を一括して区分したので、他の時期と連続性のない群である。

④ 第2表は、浦谷B遺跡の資料と関連する他地域の型式編年を示すことにより、本遺跡分類資料の時間的位置を明確にしたものである。

⑤ 分類の説明は、個別に行なうことができなかったので、型式を単位とし、類ごとに行なった。

⑥ 群及び類を単位に実測図（拓影図）に示した。なお図中には、類で細分する部分にアンダーラインを入れ解りやすくするとともに、群、類を図に明記した。

⑦ 図と図版は見開きで編集することにより、実測図と写真を照合して観察できるようにした。なお、完形に近い土器など、より大きく表現したいものは、最後の部分に付してある。写真の説明は、見開きの実測図に入れたので群のみ記載した。

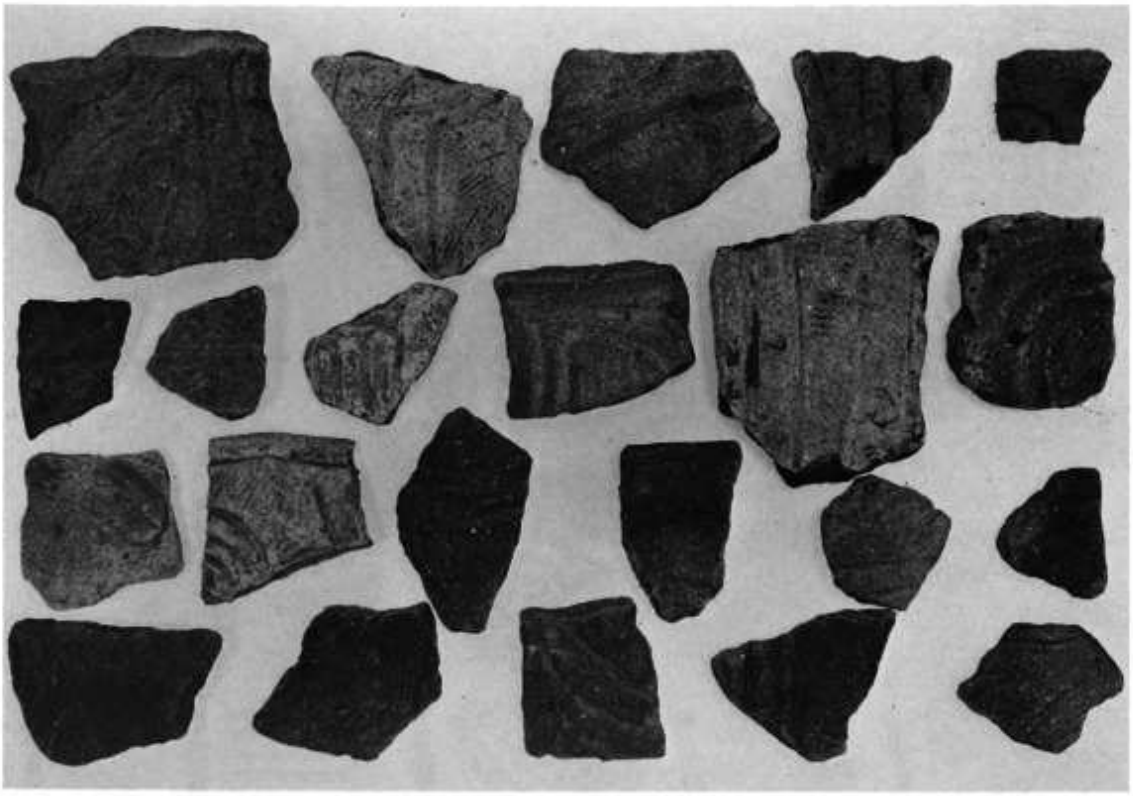
対比年代	群	類	図番号	概　　要
称名寺式	浦谷BI	1	①	器種・器形とも不明だが深鉢が主体らしい。文様の全体像も不明だが、縄文をもつものともたないものとがある。
堀ノ内I式	浦谷BII	1	②	丸い体部に大きく外反する口縁部がつく土器である（図40―5・6は誤）。口縁部にはいわゆる縁帯文が発達する。
		2	③	体部がくびれる深鉢の体部資料を一括した。
		3	④	②・③に近い器形の深鉢で、II―III群に属する。圧痕付きの隆帯や8の字状の瘤をもつ。図41―13は⑥に属する。
堀ノ内II式	浦谷BIII	1	⑤	浅鉢を一括する。外面は無文だが内面へ施文し始める。
		2	⑥	直線的に立ち上がる精製深鉢で、突起をもつものを含む。非常に薄く、口端部内面に1条の沈線をもつ。突起は小さく、8の字状のモチーフである。
		3	⑦	⑥と同タイプ・同器形だが文様モチーフが異なる。
		4	⑧	⑥・⑦と同器形の精製土器だがさほど薄くはない。口端部内面の小さな屈曲又は沈線と体部の三角形モチーフが特徴的である。口縁部に突起が付く例もあるが、突起は上向きで渦巻きが描かれる。
		5	⑨	圧痕付きの隆帯をもつ土器を便宜的に一括した（図42―28・29は誤）。
		6	⑩	外面は無文、内面に2～3条の沈線をもつ土器を便宜的に一括した。内面への施文の発達はより後出的要素だろう。
		1	⑪	浅鉢を一括した。外面は無文で内面にはアクセントのついた沈線帯や曲線モチーフの沈線帯をもつ。口縁部に突起をもつこともある。
		2	⑬	⑥の系統で器形・文様とも近い。沈線帯を連続的に区切るモチーフが現われる。
				⑬がさらに発達した精製深鉢で浅鉢を含むかもしれない。口縁部が内屈して

加曽利BⅠ式	浦谷BⅣ	3	⑫	内面には浮彫的沈線帯をもつ。外面の沈線帯に加えられる。短線やS字状の区切りが特徴的である。⑰～⑲の突起をもつ。
		4	⑭	⑫と同器形だが外面は無文で内面には刺突が目立つ。あるいは浅鉢なのかもしれない。
		5	⑰	⑰～㉑は⑪～⑯・㉕に付く突起である。⑰は第Ⅲ群にみられた8の字状の突起（図44—23）が上方に立ち上がって発達を始め、S字状に近くなっている。
		6	⑱	⑰の突起の反対側も発達し、突起の左右両側にS字状のモチーフが描かれる。突起直下にも刺突がなされる。
加曽利BⅡ式	浦谷BⅤ	1	⑲	突起の頂部にさらに瘤状突起が貼付され、その周囲には「えり」状の加飾が加えられる。
		2	⑳	瘤状突起が上方に突出する。突起直下の口縁部には、弧状の区切りが採用され始める。
		3	⑮	⑭の系統で器形も似た深鉢・浅鉢である。体部に屈曲をもち、口縁部が大きく開いて端部が直立する深鉢を含むかもしれない。内面には弧状のモチーフもあるが文様帯は退化して1条の隆線となる。
		4	⑯	⑫の系統で同器形の深鉢とみられるが、体部に屈曲をもつ可能性もある。外面の沈線は巾広になり、連続する短線やS字状の区切りは弧線に変化する。内面の文様帯も⑮同様に退化する。
		5	㉕	⑮・⑯の系統の末に位置する。外面の文様は縦位の弧線をつなぐ横位弧線に転化し、口端部の屈曲は甘くなる。
		6	㉒	体部に羽状沈線をもつタイプの深鉢である。外反して立ち上がりいったん内屈した後口端部が直立する器形が基本の平口縁の土器である。肩部の文様帯が特徴的で、上向きの弧線及び弧線のつなぎめの縦位沈線・粗大な刺突が目立つ。厚手でつくりは荒い。
		7	㉓	㉒と近いタイプで、口端部が直立しない深鉢・浅鉢である。深鉢は体部がくびれるかもしれない。文様は㉒と同一である。浅鉢の体部には曲線構図を描き刺突を加えている。
		8	㉔	㉓の系統かと思われるが、⑮・⑯にも似た類である。
		9a	㉖	体部に羽状沈線をもち大きな波状口縁となる土器で、口端内面が肥厚されるのも特徴である。体部は丸く、いったんくびれてから大きく開く器形になるだろう。㉖は口縁部文様帯が意識されており、波頂部に縦位の弧線をもつ。
		9b	㉗	㉖と全く同類で、波頂部に横位の弧線が描かれる。
		9c	㉘	㉖と全く同類で、波頂部の形状に差がある。
		9d	㉙	㉖と全く同類で、波頂部に向い合う弧線が描かれる。
		10a	㉚	㉖とほとんど同じだが、口縁部文様帯が意識されない深鉢で、波頂部が無文となる。
		10b	㉛	㉚と全く同類で波頂部には縦位の弧線が描かれる。
		10c	㉜	㉚と全く同類で、波頂部にも羽状沈線が描かれる。
		11	㉝	体部に羽状沈線をもち、体部がくびれて口縁部が外反する平縁の深鉢である。口縁部は無文帯となり、内屈の痕跡とみられる隆線が内・外面に残されている。あるいは第Ⅵ群に属すのかもしれない。
		12	㊼	⑮・⑯・㉕に近い系統の浅鉢である。
		1	㉑	⑳の次の段階の突起をもっており㉕の系統に属する。本来の突起部分は消失し、上方に突出した瘤状突起と加飾のみが残る。内面は㉕・㉝とよく似ている。

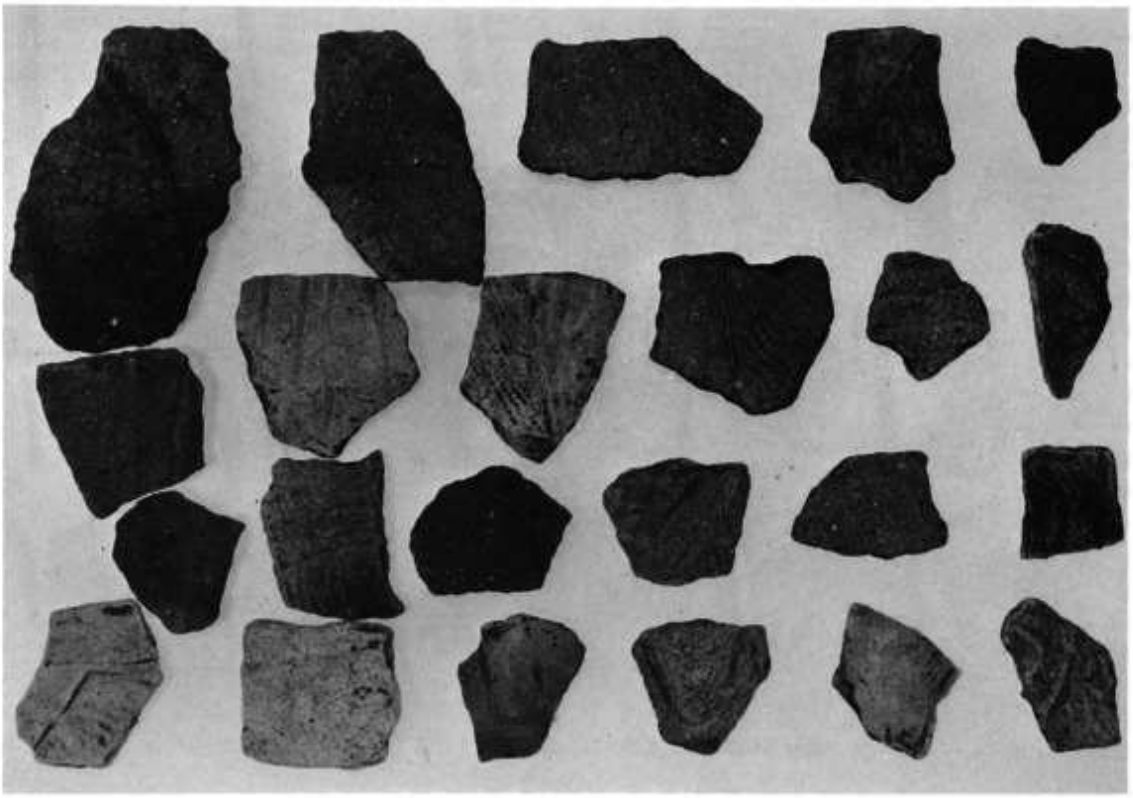
加曽利B Ⅲ式	浦谷B Ⅵ	2a	㉞	㉝の系統の土器だが内外面の屈曲の痕跡を失い、内面に1条の沈線が残る。
		2b	㉟	㉝の系統の土器で㉞に近く、内面の沈線を失った類である。
		3a	㊴	全面に羽状の沈線文をもつ平口縁の土器で、㉝～㉟に似た器形か体部がゆるくくびれる深鉢と思われるが、浅鉢も混在するかもしれない。㊴は内面に㉞同様の沈線をもつ。
		3b	㊵	㊴と全く同類で、㉟同様内面は無文である。
		4	㊼	体部に羽状の沈線をもつ平口縁の土器で器形は不明である。口縁部に縄文帯をもつ。
		5	㊻	㉝の系列の土器で、㊺に付された突起の次段階と思われる突起をもつ。棒状突起が退化し、凹線のみが残される。口縁部には㉝同様の屈曲の痕跡が残る。
		6a	㊼	㉞・㉟又は㊴・㊵に近い土器で、体部がくびれ、平口縁で突起をもつ。突起は㊺と同段階と思われ、㉑にみられた突出した瘤状突起の芯にあたる棒状突起がみられる。
		6b	㊽	㊼に近似するが突起が不明な深鉢である。
		7	㊶	㉚～㉜の系統の波状口縁の深鉢で、口縁部文様帯をもたない。
		8	㊷	㉖～㉘の系統の土器で、波状口縁をもち体部のくびれる深鉢である。口縁部文様帯が明白となる。
		9	㊸	㉞・㉟と近似した形態・文様をもつが波状口縁となる深鉢である。波頂部は小さく、無文となる。図55―6は次段階の㊹に属する。口端内面は肥厚されない。
		10	㊹	㊸の系統の土器で、波頂部が大きく上方に突出する。
		11	㊺	㉓と近似した文様帯をもつ平口縁の土器だが口縁部は屈曲せず突起を有する。突起は㉑の加飾を取り去った棒状突起で中央に凹線をもち、㊻の突起に先行するだろう。口縁部文様帯の刺突文も特徴である。
		12	㊽	㉒の系統の深鉢で、㉒とほぼ同じ器形となる。上向き弧線の変形した方形モチーフが描かれる。
		13	㊾	㉔の系統の深鉢で、器形もほぼ同じである。上向き弧線は平行沈線となるが、弧線のつなぎめに相当する部分の変化を知ることができない。
		14	㊿	㉔の系統だが㊾とは異なる深鉢である。上向き弧線は向かい合う弧線に変化する。弧線のつなぎめは突起や瘤などに転化する。
高井東式	浦谷B Ⅶ	1	㊻	㊺の系統の深鉢で、口縁部文様帯が退化し、2個の小突起が並んで貼付される。
		2	(51)	㊿の系統の深鉢で器形もほぼ一致する。口縁部文様帯は狭くなるが、モチーフが途切れる部分の様子がわからない。
		3	(52)	㊾の系統の土器で、(51)とごく近似した器形、文様をもつが、文様の切れめに丸い瘤が貼付される。
		4′	(62)	㊴・㊵の系統の土器で、平口縁をなし体部はゆるくくびれるだろう。全面に施される羽状沈線は間隔があき、幅広の工具が用いられている。口端は尖り気味である。
		5	(64)	㊷の系統の土器で、大きな波状口縁をもつ深鉢形土器である。口縁部は内屈し体部はくびれるだろう。口縁部文様帯のあり方は(51)・(52)によく似ているが波頂部の様子がわからない。
		6	(67)	㊷の系統かとみられる大きな波状口縁の土器の波頂部だが、(64)と一致するかどうか不明である。
				(51)・(52)の系統の土器で平口縁の深鉢・浅鉢である。器形は(51)・(62)と同じだが、

安行Ⅰ・Ⅱ式	浦谷BⅧ	1	㊸	口縁部の屈曲を失う例が出てくる。口縁部文様帯は沈線帯と化し、沈線間に連続圧痕をもつ例が目立つ。丸い瘤は縦長で圧痕付きの小突起などに変化する。
		2a	㊸	㊹の系統の土器かと思われるが位置づけが難しい。波状口縁で体部はくびれる可能性がある。口縁部は内屈せず、文様帯は沈線帯で、波頂部に連続小突起や㊸と同様の突起が付される。
		2b	㊺	㊸とほぼ同類かと思われる波状口縁の深鉢である。
		3	㊻	㊹の系統の土器である。大きな波状口縁の深鉢で体部はくびれるだろう。口縁部は内屈し文様帯は沈線帯に近くなる。波頂部には突起がつけられる。
		4	㊼	安行Ⅰ・Ⅱ式類似土器である。
		5	㊶	張瘤土器第Ⅲ段階又は第Ⅳ段階の土器と思われる。
安行Ⅲa・Ⅲb式	浦谷BⅨ	1a	㊺	㊸の系統の土器で口縁部の屈曲する深鉢又は浅鉢である。屈曲部には隆帯が貼付され、刻目が加えられて、小突起をもつ。
		1b	㊹	㊺の同類で口縁部の屈曲が甘く、痕跡的になる。口縁部文様帯には楕円モチーフも採用され、突起も残る。
		2	㊽	㊻の系統の土器で、大きな波状口縁をもち、口縁部は内屈する。口縁部文様帯には隆帯が採用され始め、圧痕が付される。楕円形モチーフも採用される。波頂部には著しい加飾を加えた突起が発達する。
		3	㊿	㊹・㊺・㊽の中間的な小波状口縁の土器である。
		4a	㊸	安行Ⅲ式に類似し、佐野式との関連が予想される土器である。図63－2～5は異なった位置づけをすべきかもしれない。
		4b	㊾	安行Ⅲ式に類似する瘤をもつ土器である。
		5	㊿	沈線間に列点をもつ土器で、的確な位置づけはできない。
		6	⑫	口縁部に弧線を描く土器で、やはり的確な位置がつかめない。
安行Ⅲc・Ⅲd式	浦谷BⅩ	1	㊹	㊹・㊺の系統の土器で、口縁部の屈曲は失なわれ、口縁部文様帯も指圧痕付の1条の隆帯に退化する。口縁部に小突起をもつ例があり、㊿の系統との関連もあるかもしれない。
		2a	㊾	㊽の系統の土器で大きな波状口縁をもつが、波頂部の突起は衰退してほとんどない。口縁部は内屈せず、文様帯も長縮する。
		2b	⑪	㊽の系統の土器で、㊾よりさらに波状口縁が小さくなる。
		3	⑬	㊾・⑪の系統の土器で、波状口縁をもち、体部はくびれる深鉢であろう。波状口縁は退化傾向にあるがまだ大きく、波頂部の突起は消失する。口縁部は内屈せず文様帯は圧痕のない隆帯1条に退化する。口端と隆帯の間に圧痕付きの小突起をもつ。口端内面の著しい肥厚が目立つ。
		4	⑭	無文土器だが突起や瘤をもつものを集めた。
		5a	⑯	口縁部に沈線帯をもつ土器を集めた。佐野式との関係が問われる資料を含む。図65—24は第Ⅱ又はⅢ群の土器である。
		5b	⑮	⑯のうち口端に突起をもつ土器である。
	浦谷BⅩⅠ	1	⑱	無文土器は多量で多様であるが、全く観察する余裕が無かった。恐らくは第Ⅱ群～第Ⅹ群に共伴する、息の長い系統の土器なのだろう。

第39図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅠ：①1～45〕

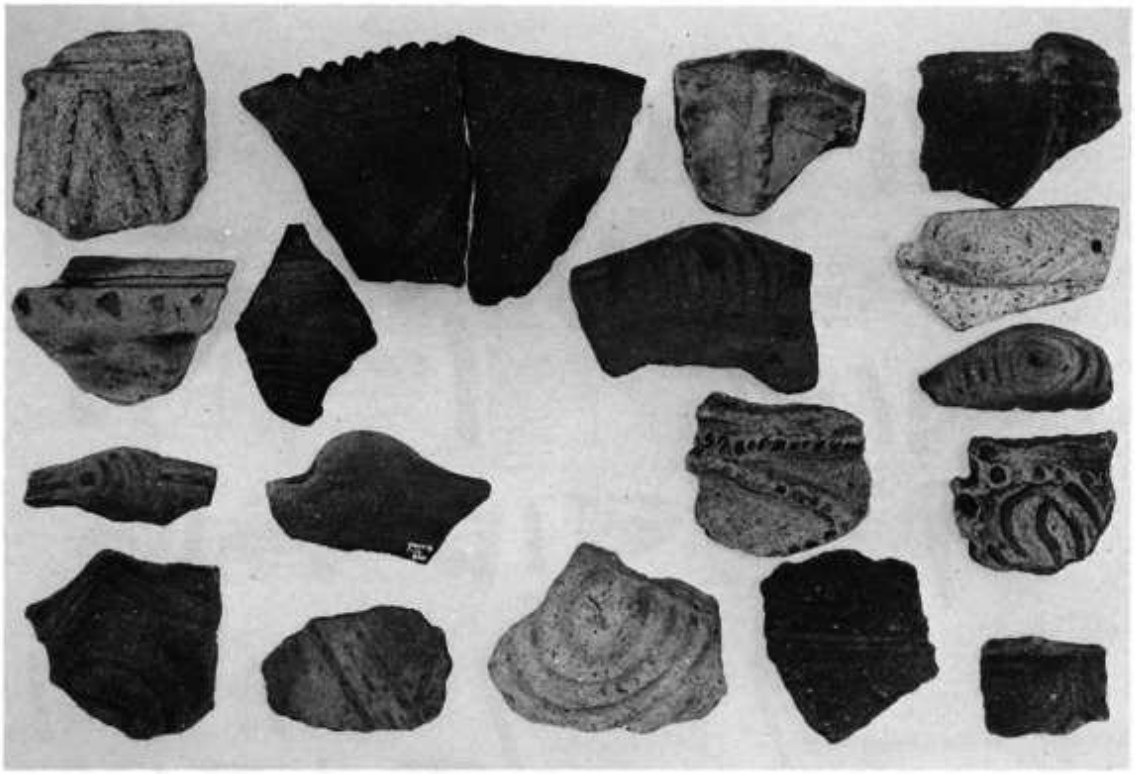


浦谷BⅠ

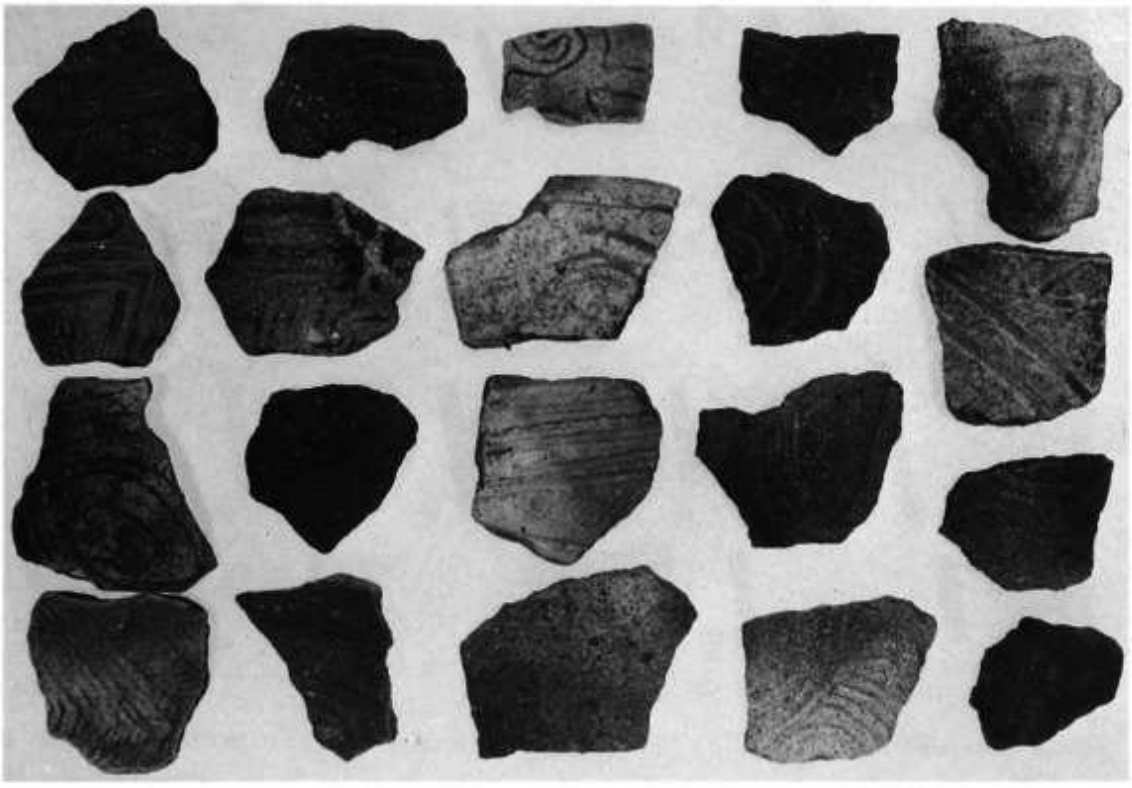


浦谷BⅠ

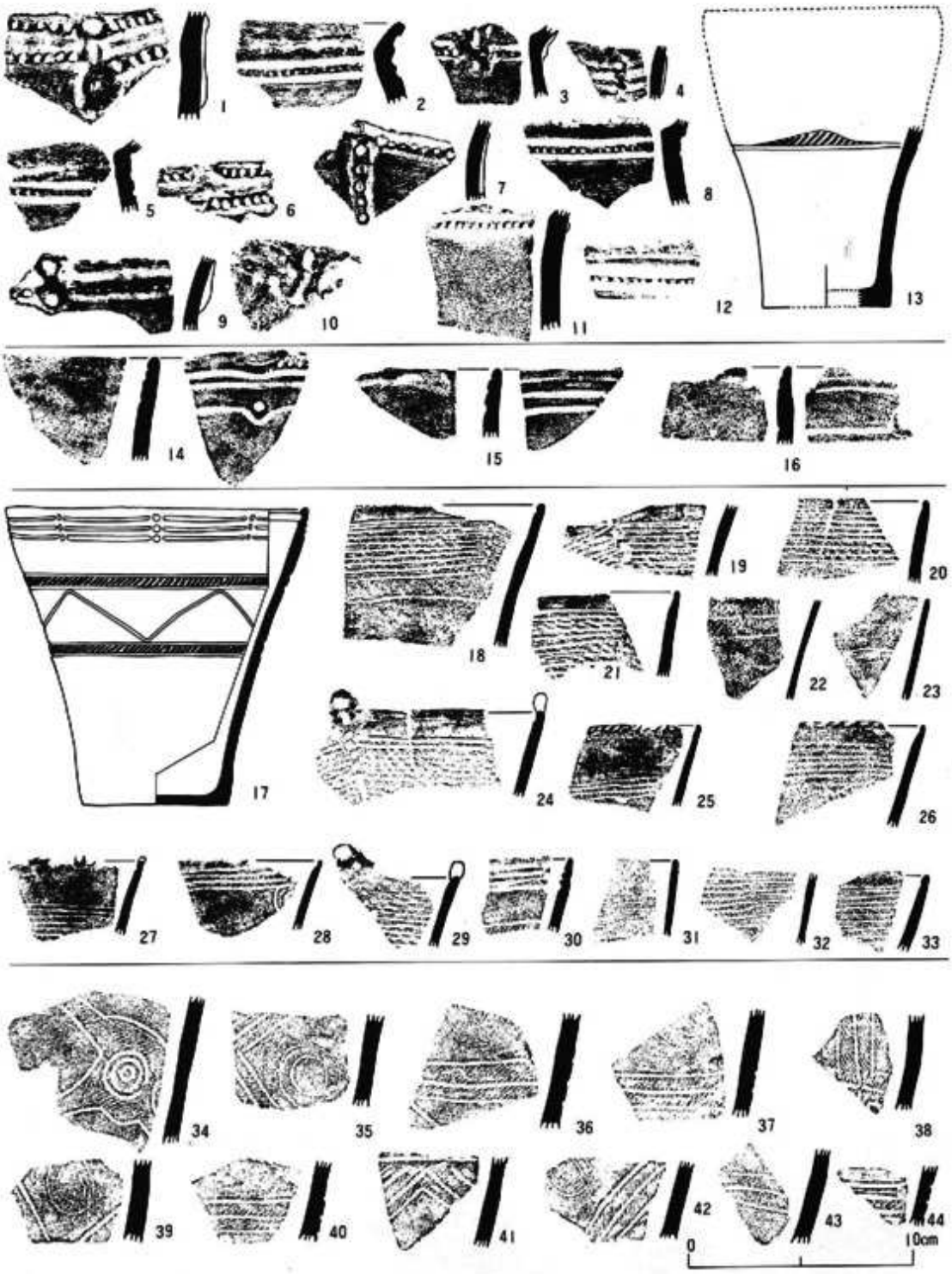
第40図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅡ：②1～12、③13～37〕



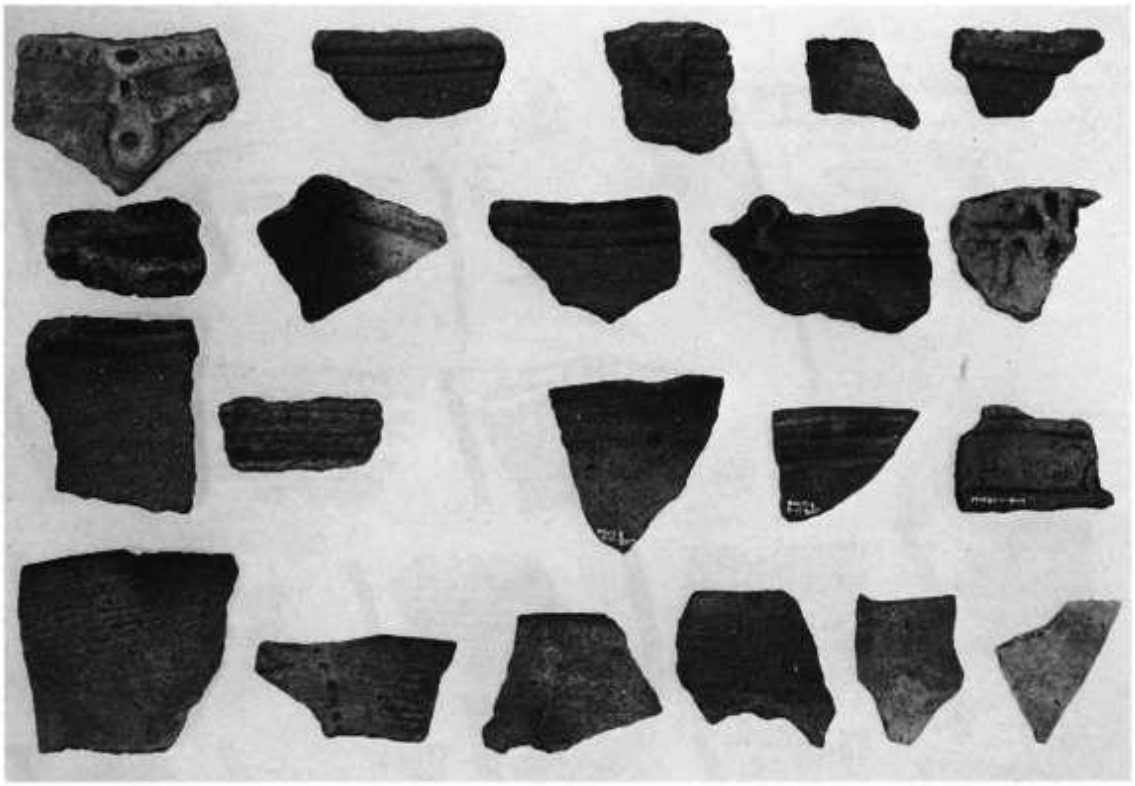
浦谷BII



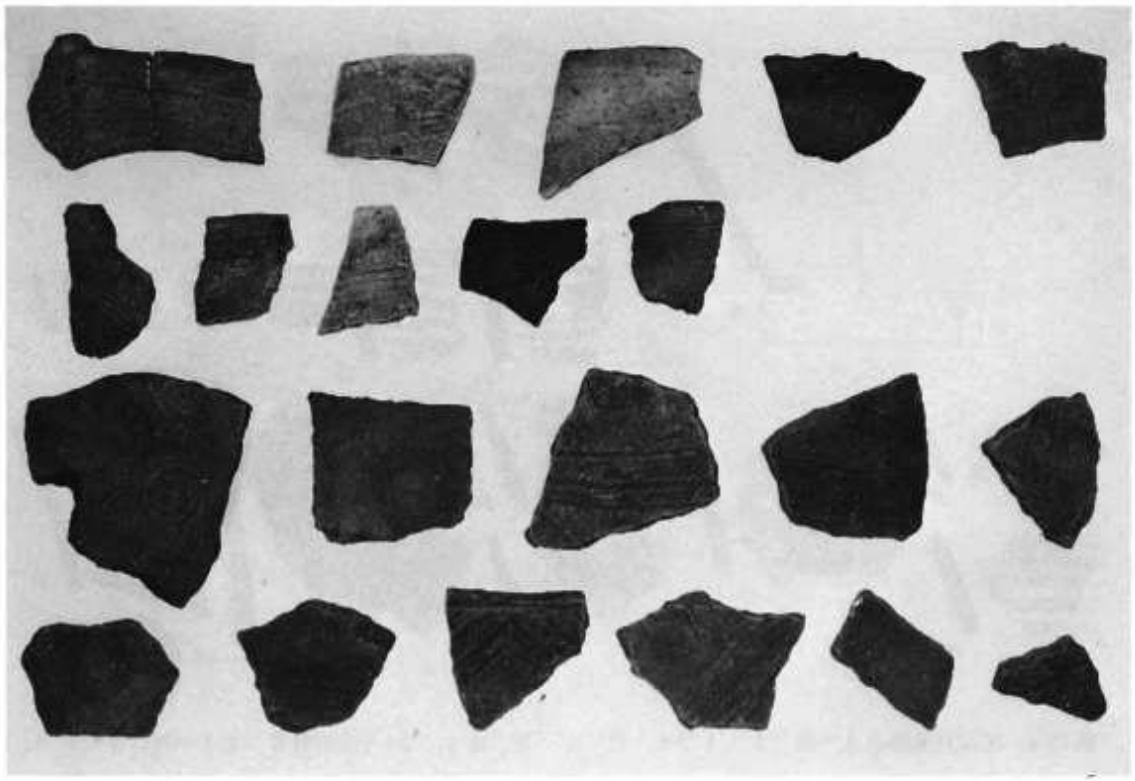
浦谷BII



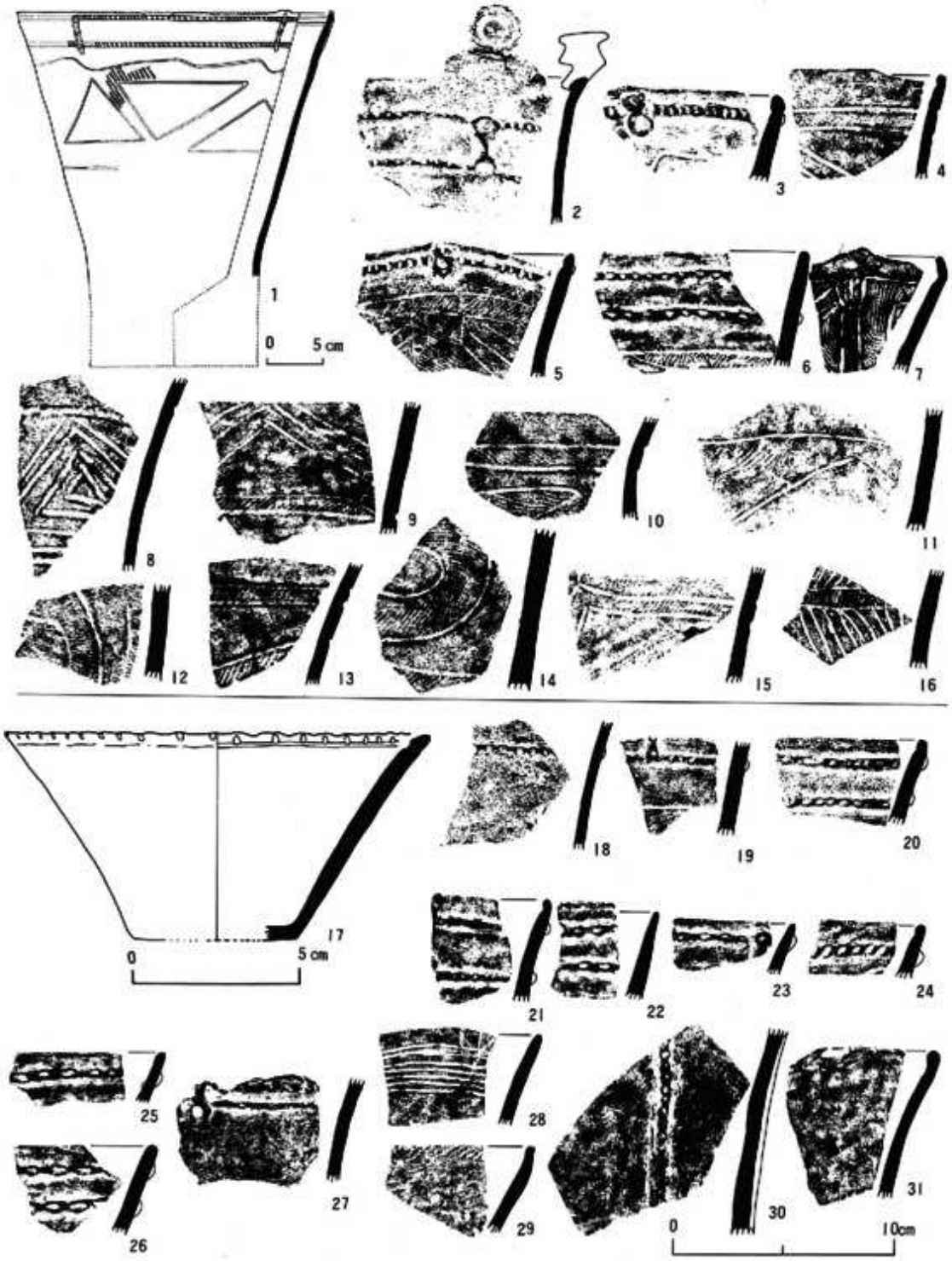
第41図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅡ：④1～13、浦谷BⅢ：⑤14～16・⑥17～33、⑦34～44〕



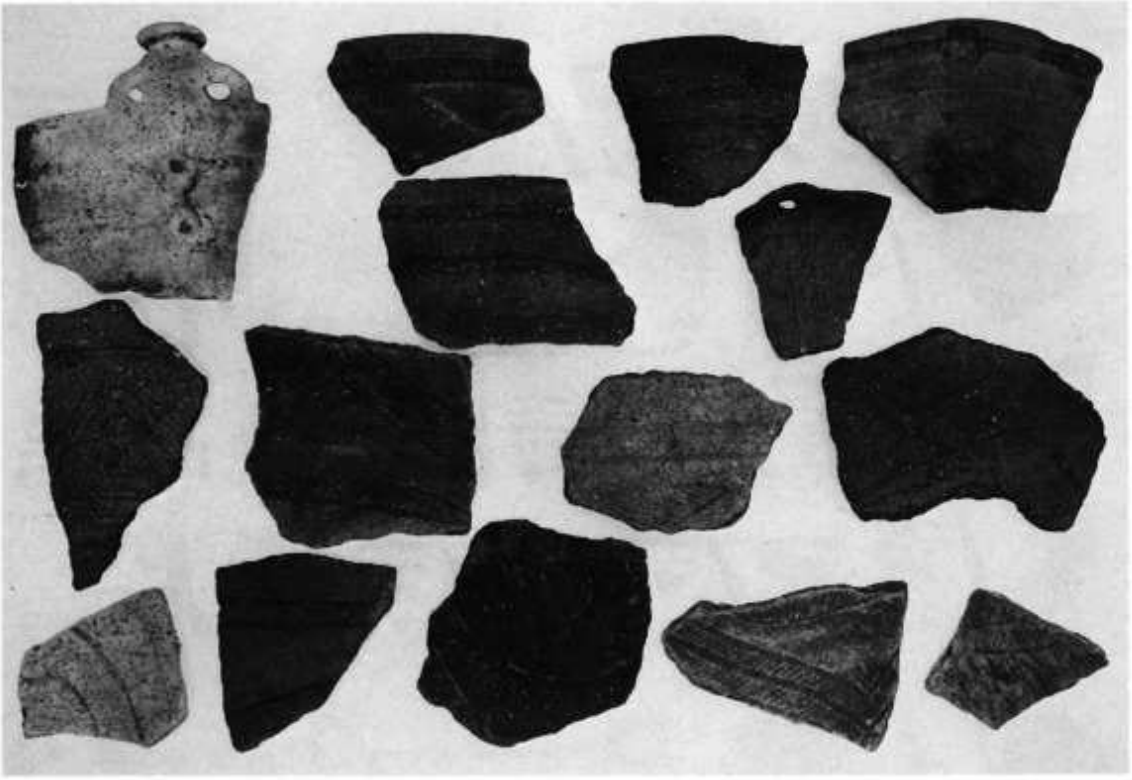
浦谷BII・III



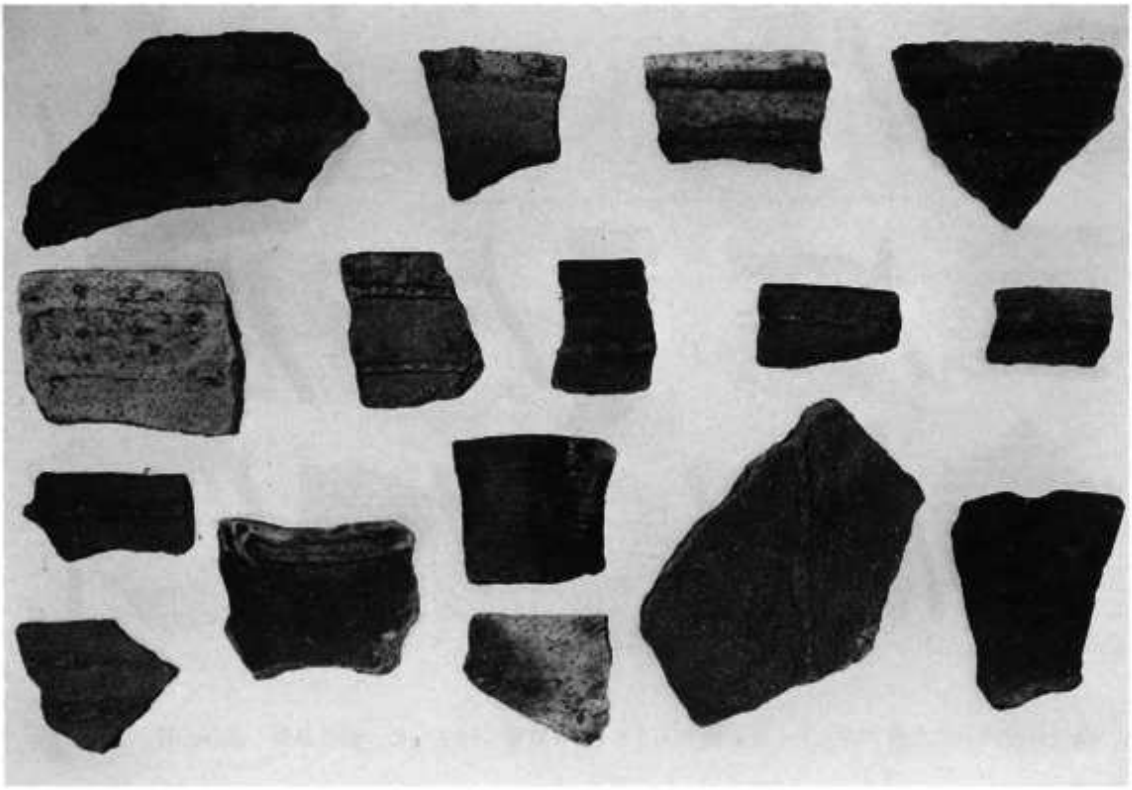
浦谷BIII



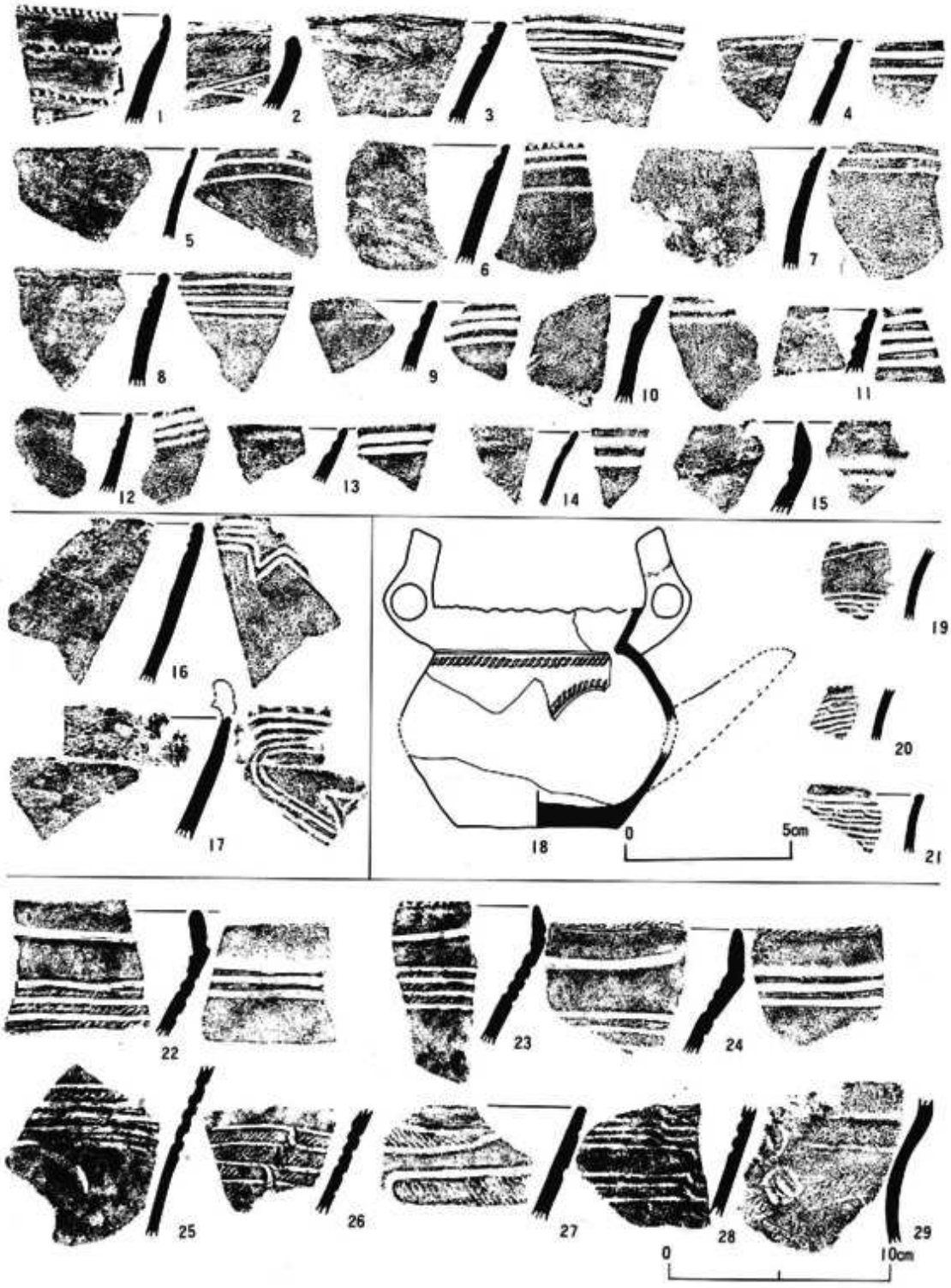
第42図　浦谷B遺跡出土土器（1・1：6、17・1：2、他1：3）〔浦谷BⅢ：⑧1～16、⑨17～31〕



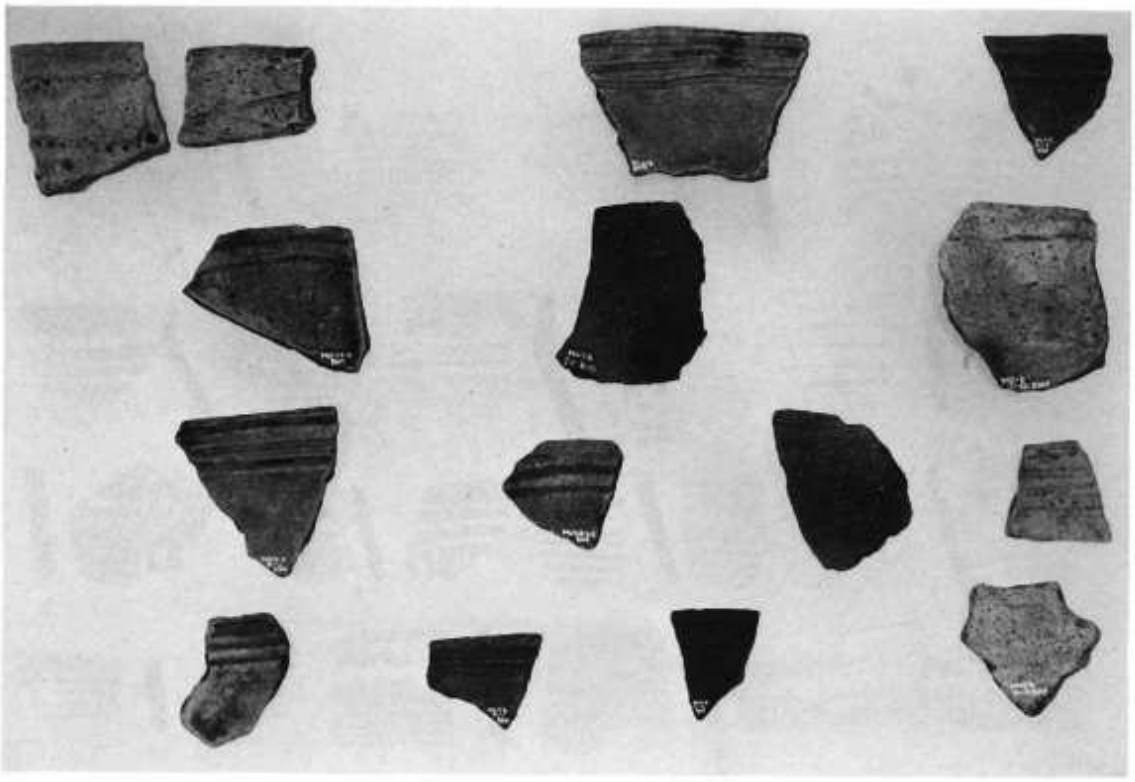
浦谷BⅢ



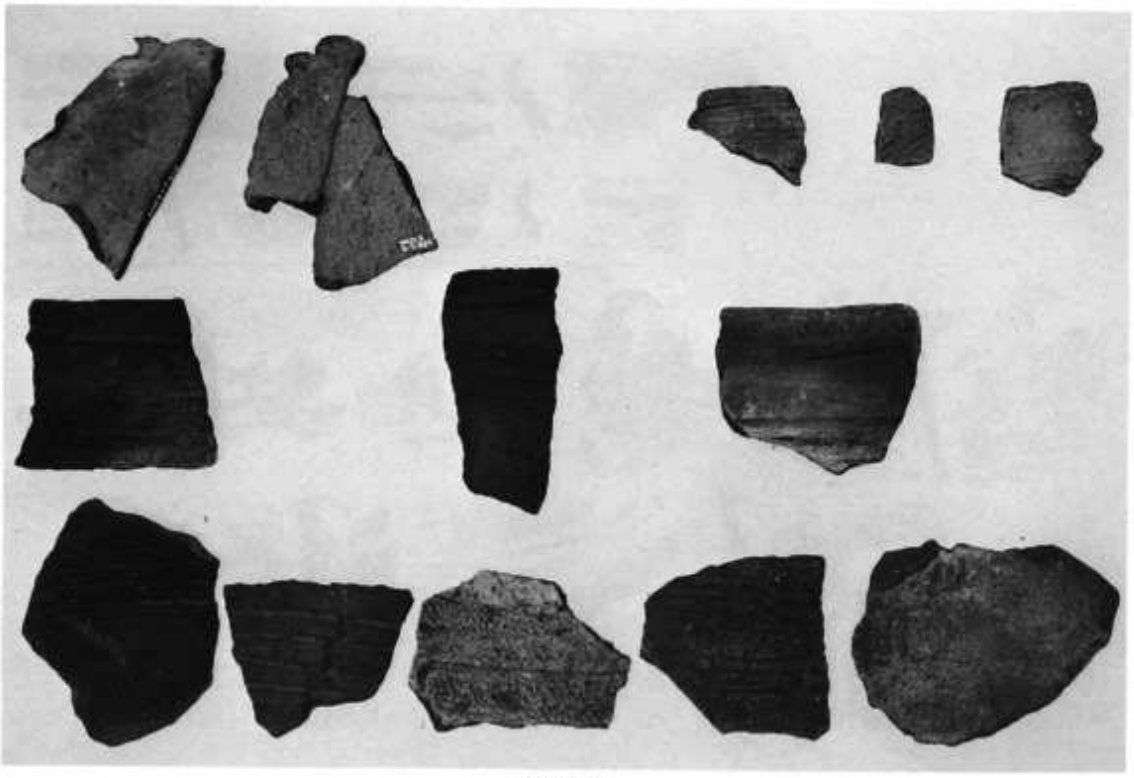
浦谷BⅢ



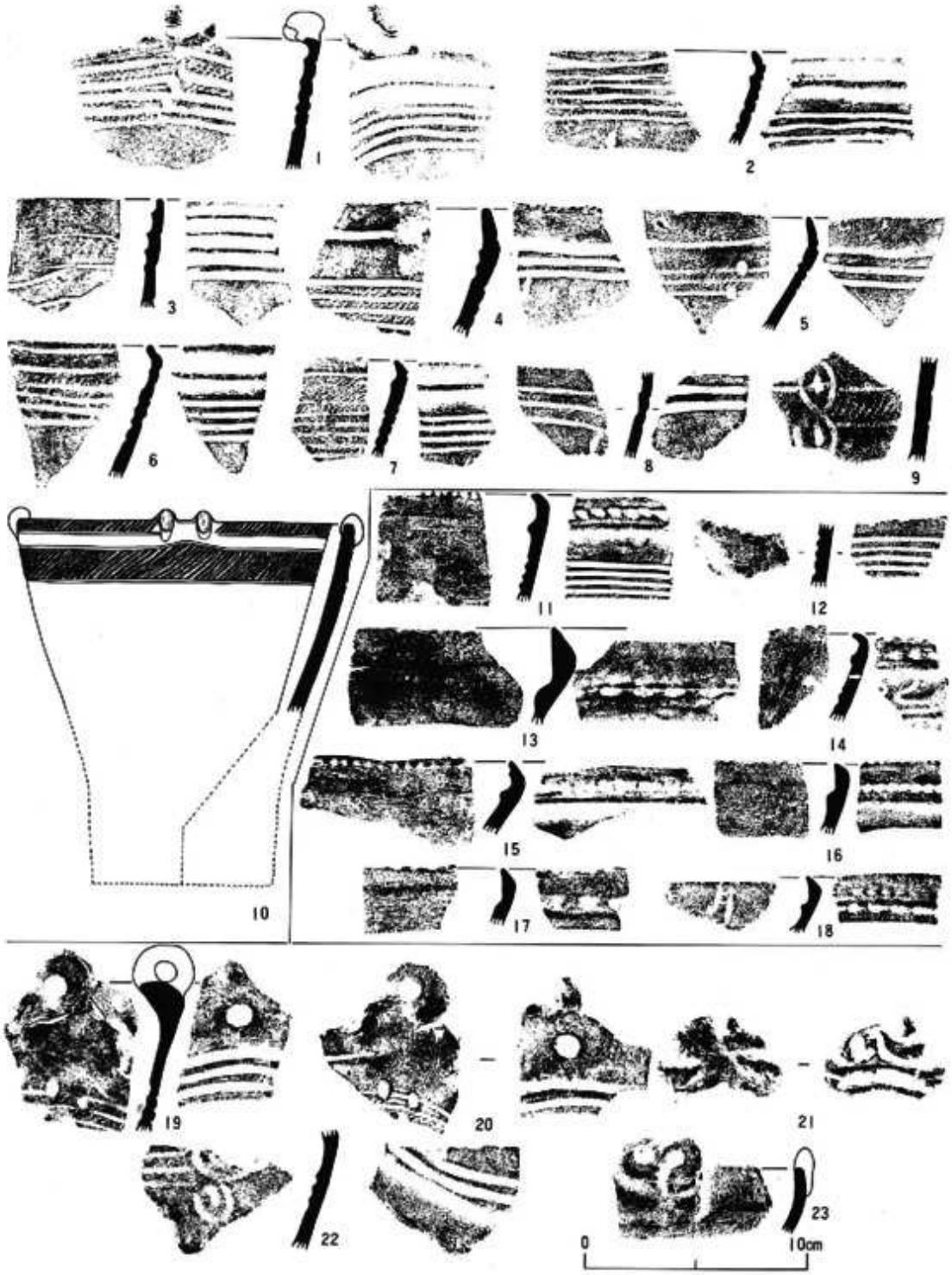
第43図　浦谷B遺跡出土土器（18・1：2、他1：3）〔浦谷BⅢ：⑩1～15、浦谷BⅣ：⑪16～17、⑬19～21、⑫22～29



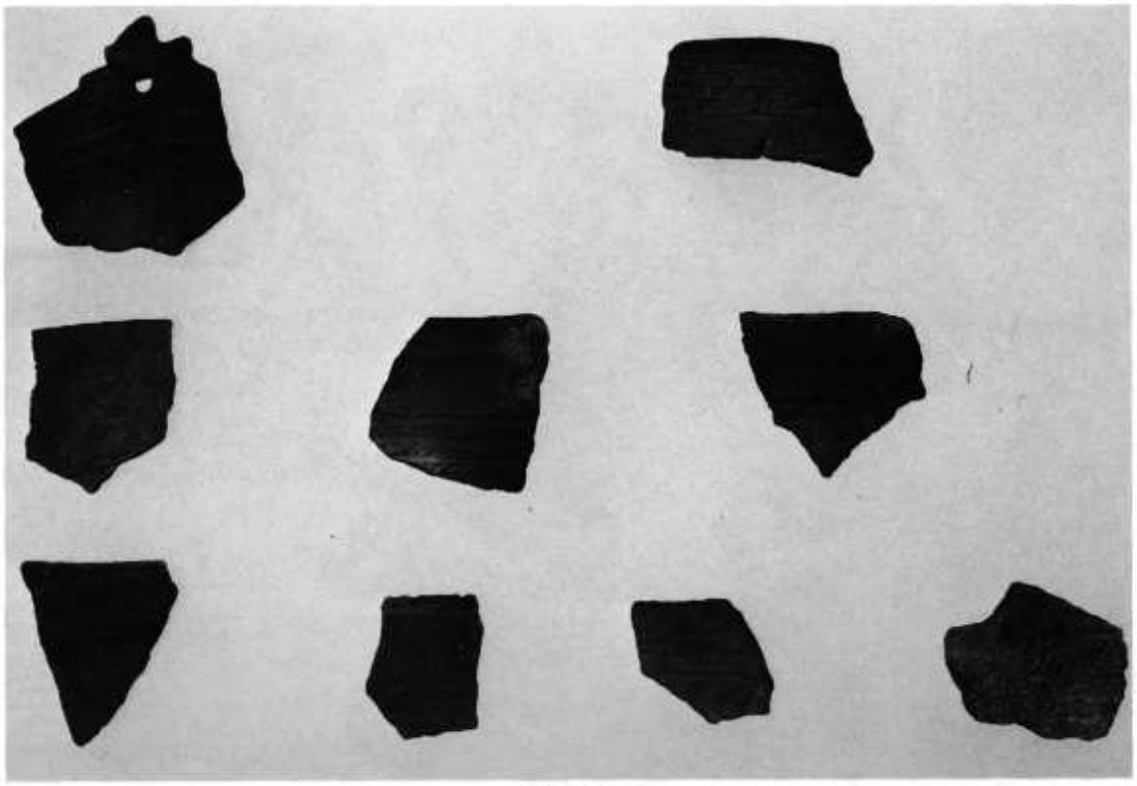
浦谷BIII



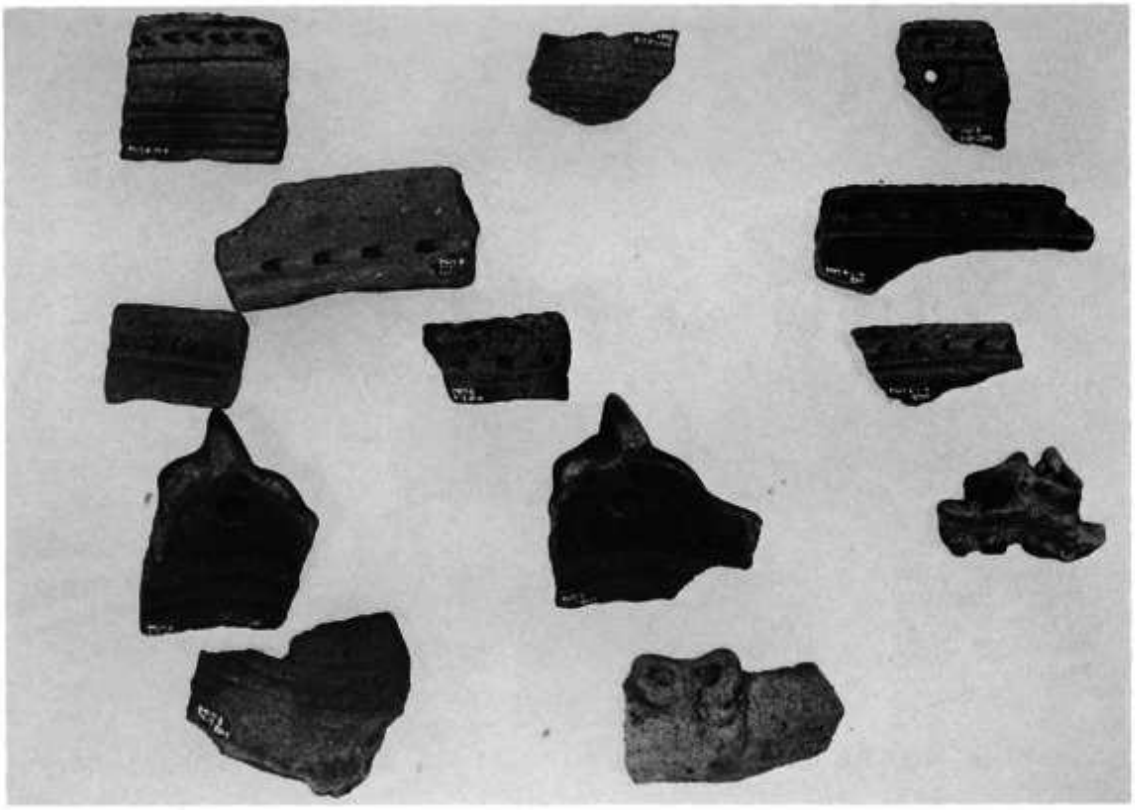
浦谷BIV



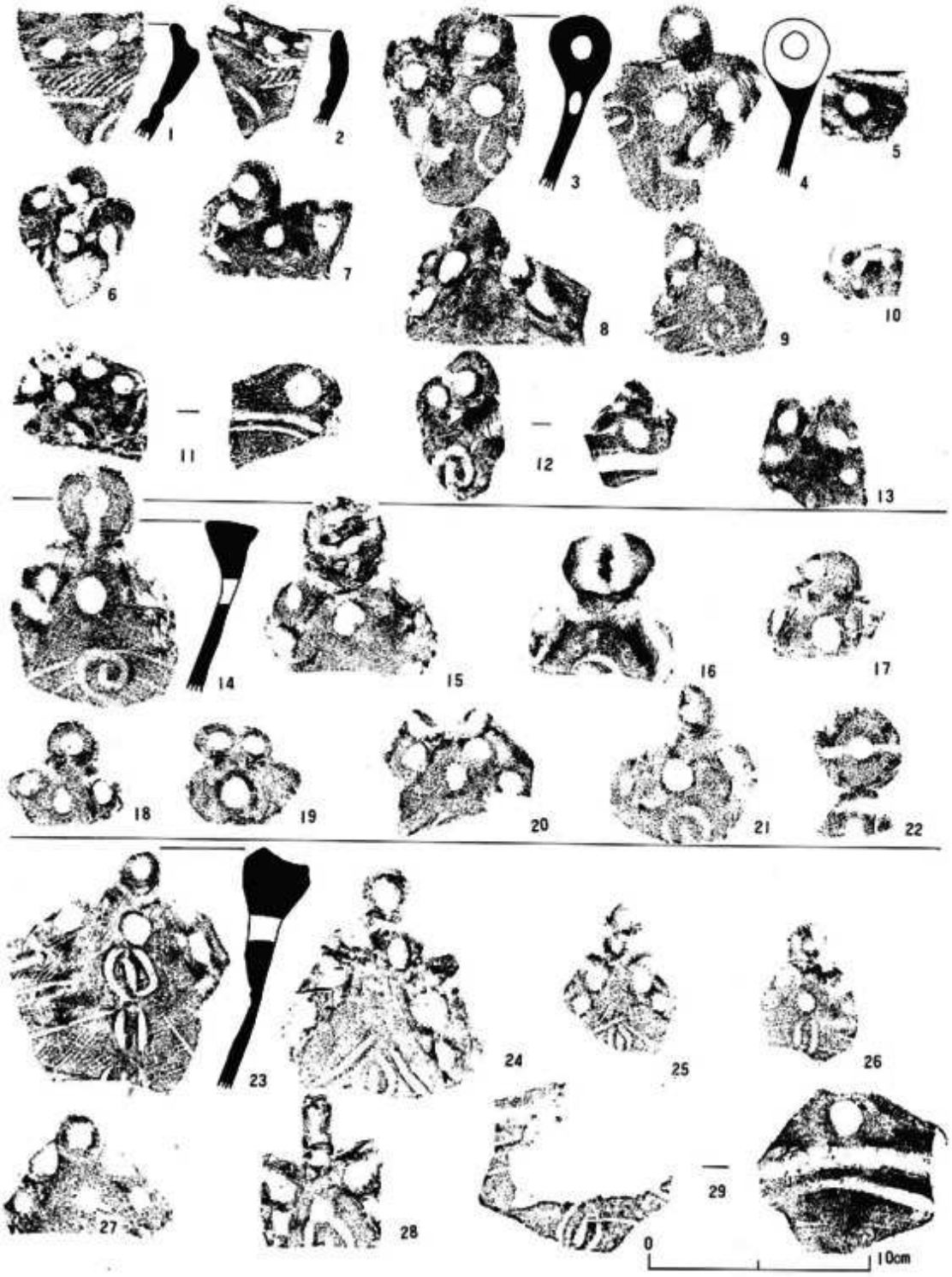
第44図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅥ：⑫1～10、⑭11～18、⑰19～23〕



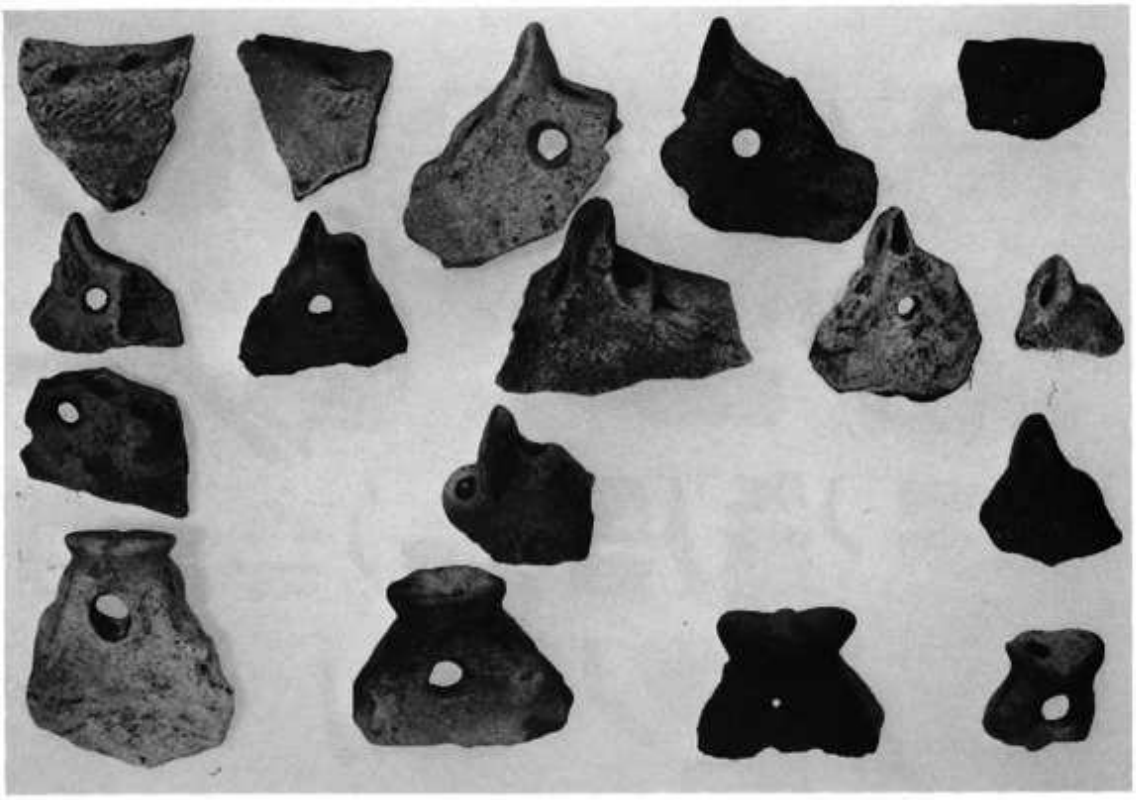
浦谷B Ⅵ



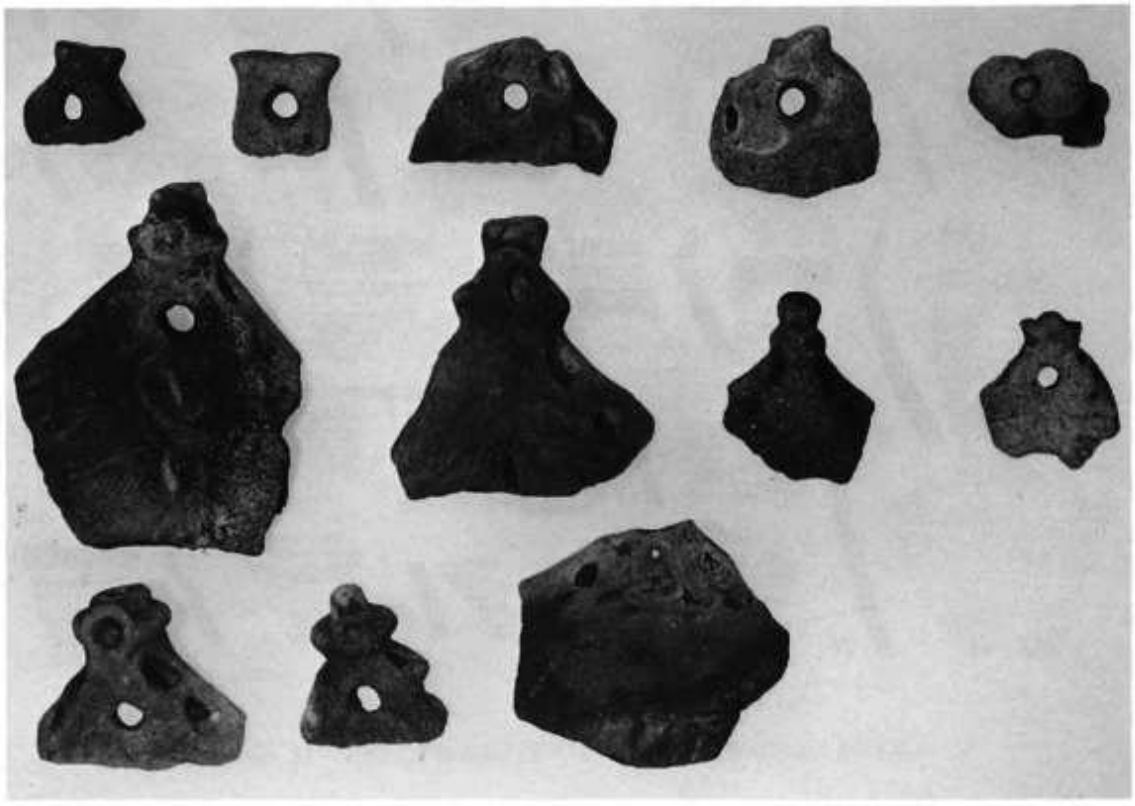
浦谷B Ⅵ



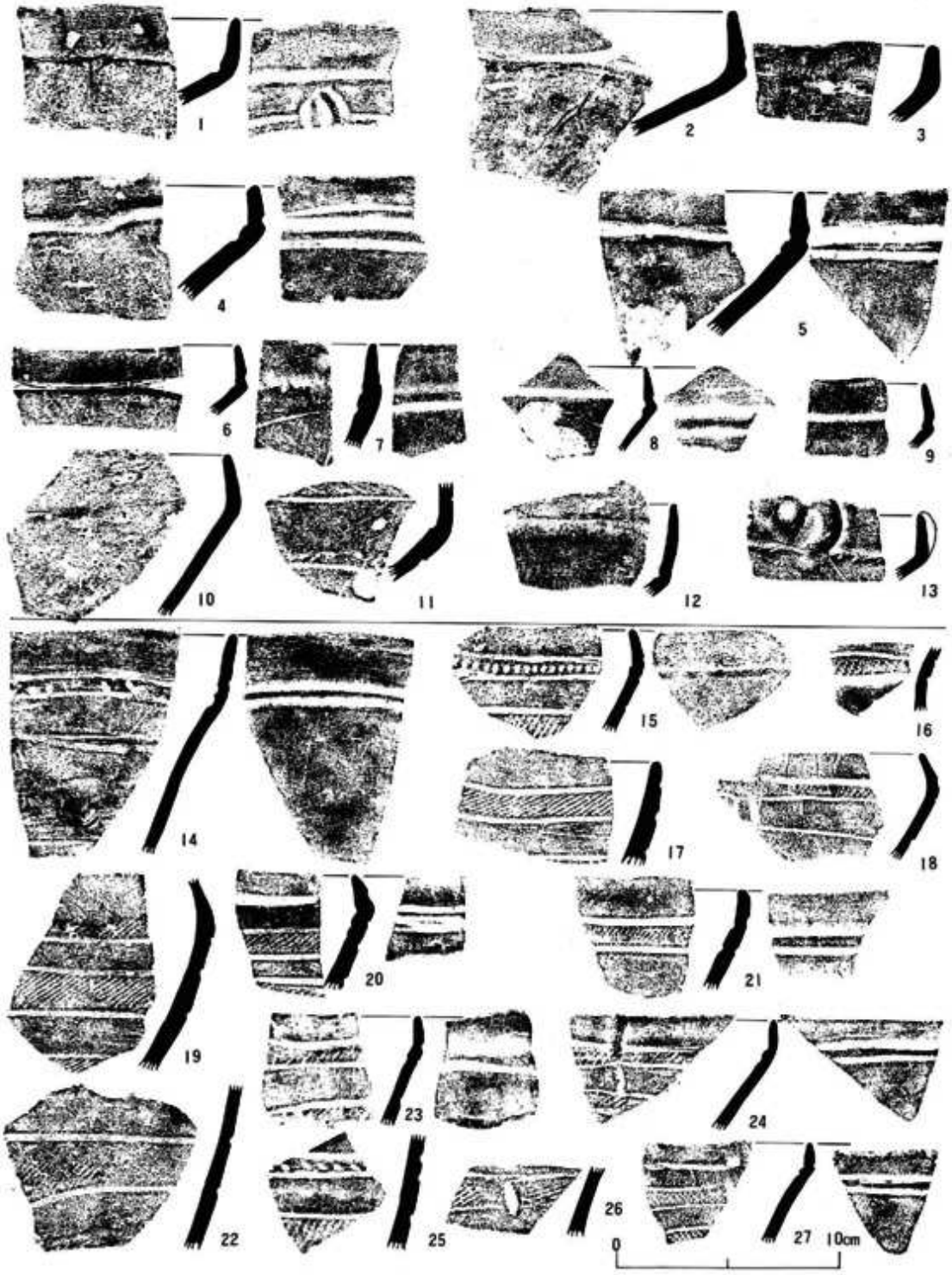
第45図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅥ：⑱1～13、浦谷BⅤ：⑲14～22、⑳23～29〕



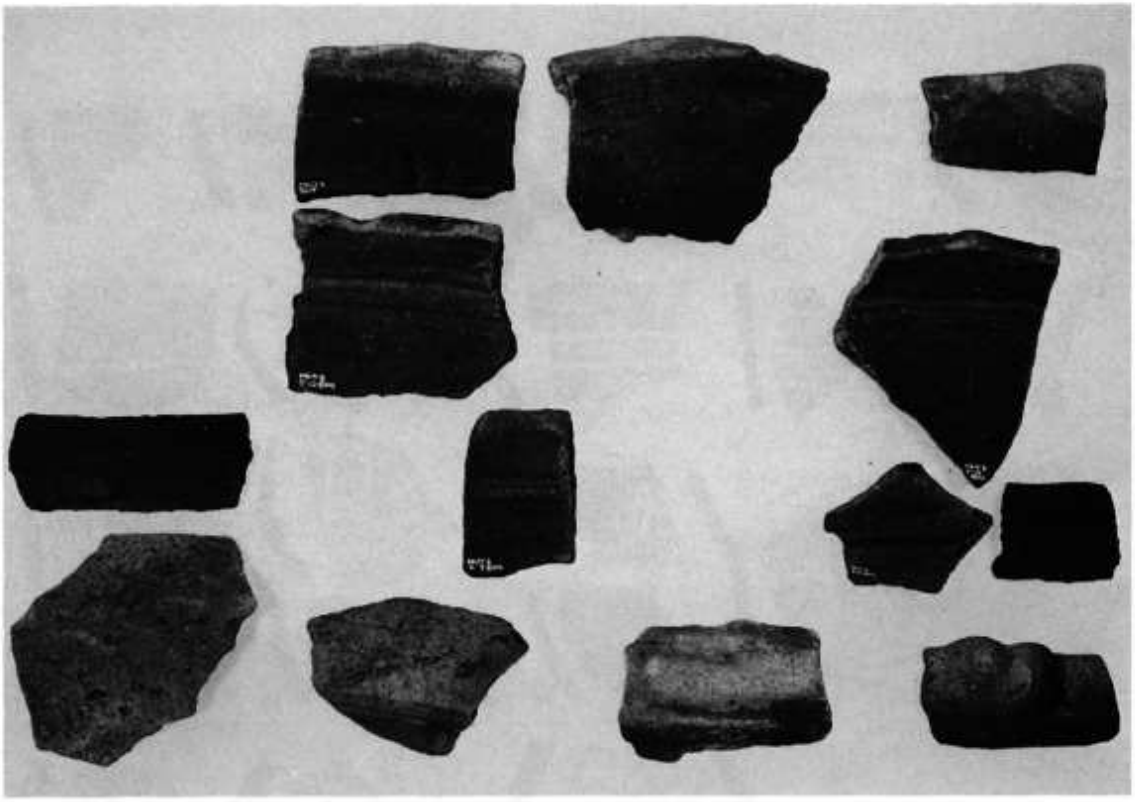
浦谷BⅥ・Ⅴ



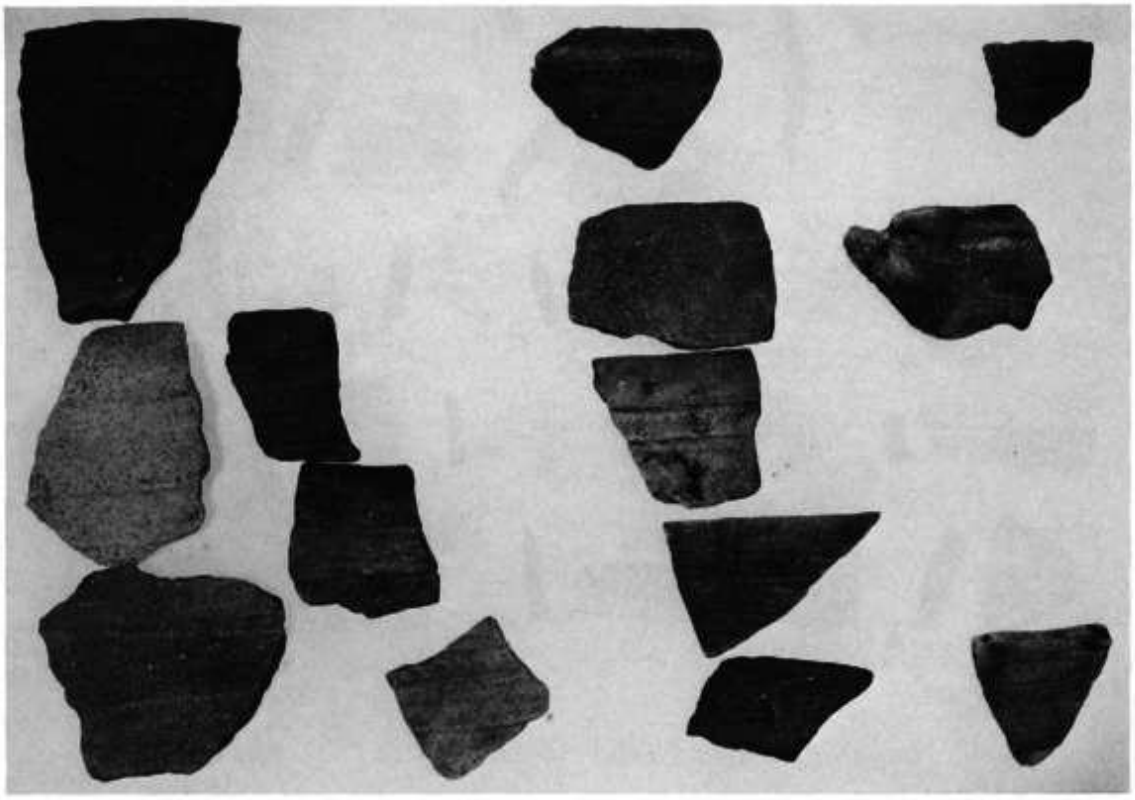
浦谷BⅤ



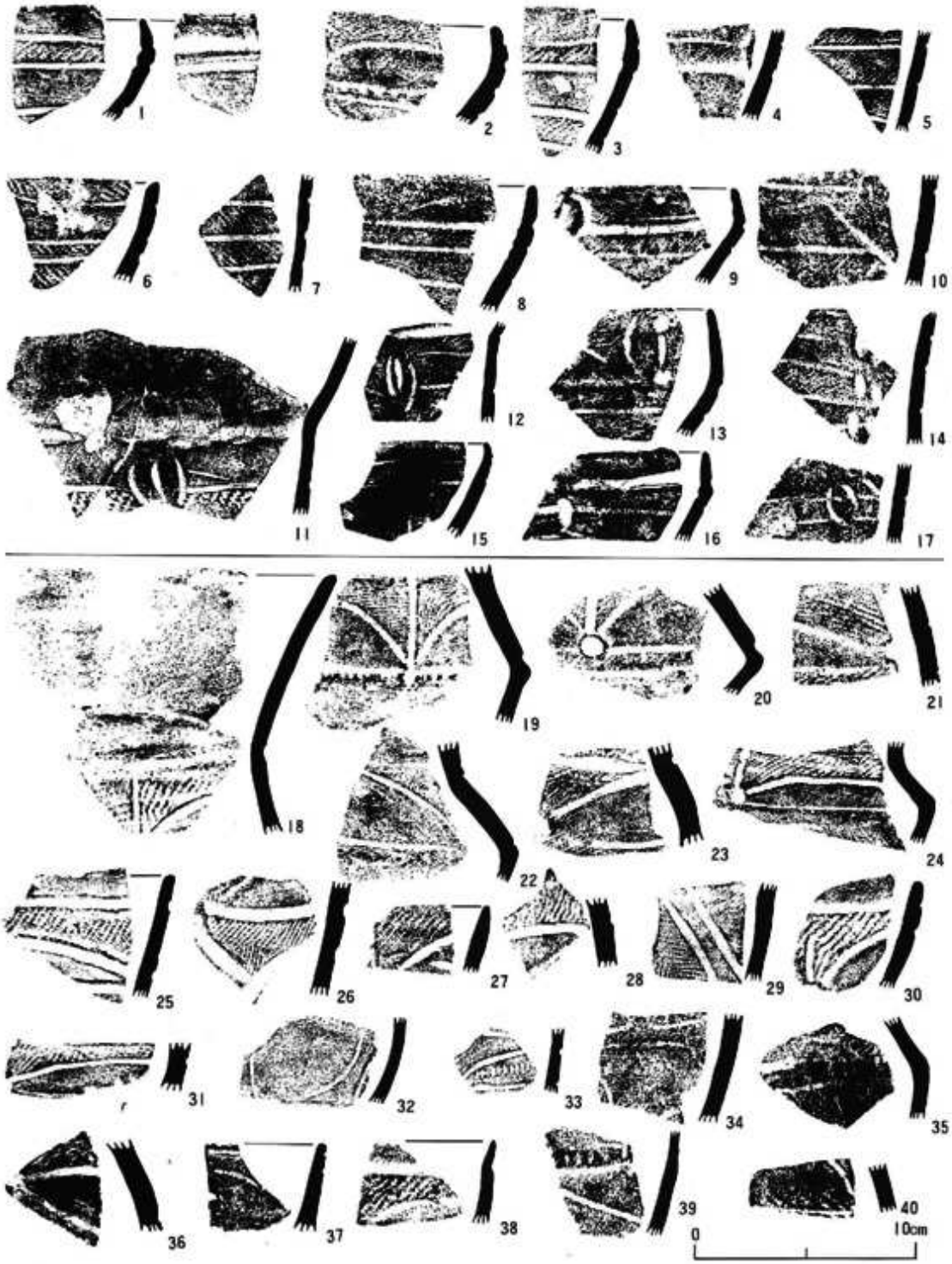
第46図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅤ：⑮1～13、⑯14～27〕



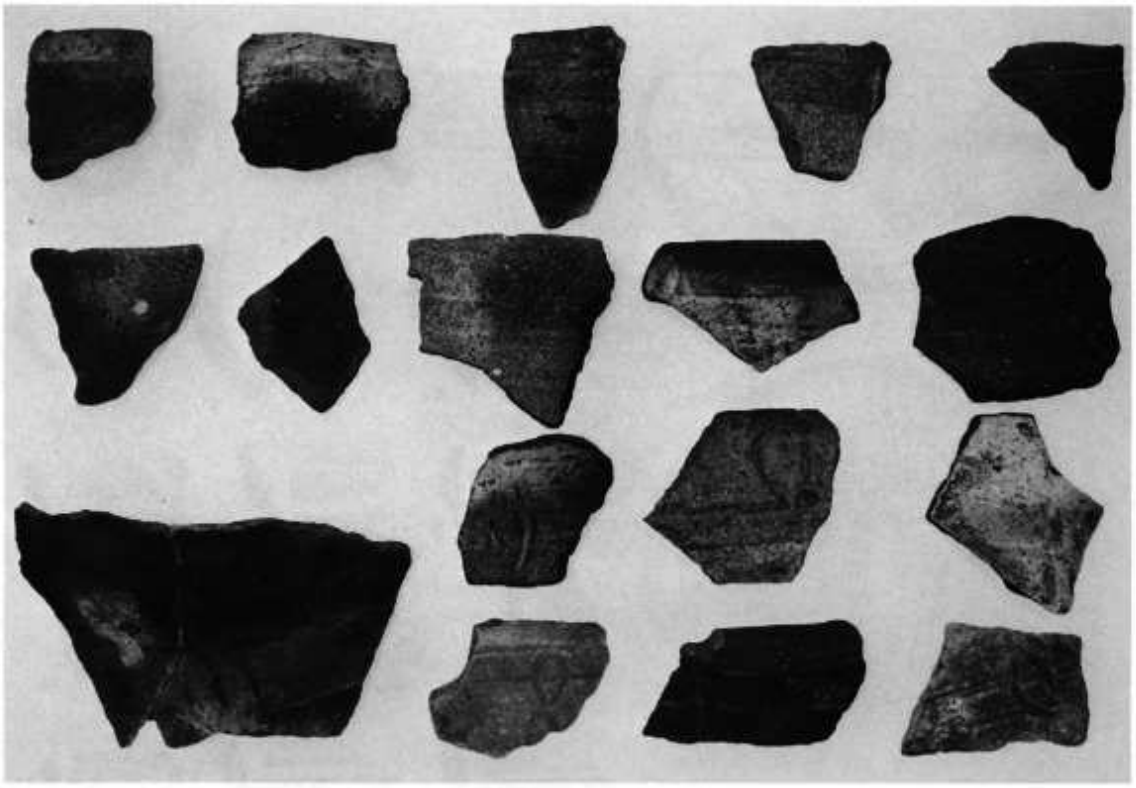
浦谷BV



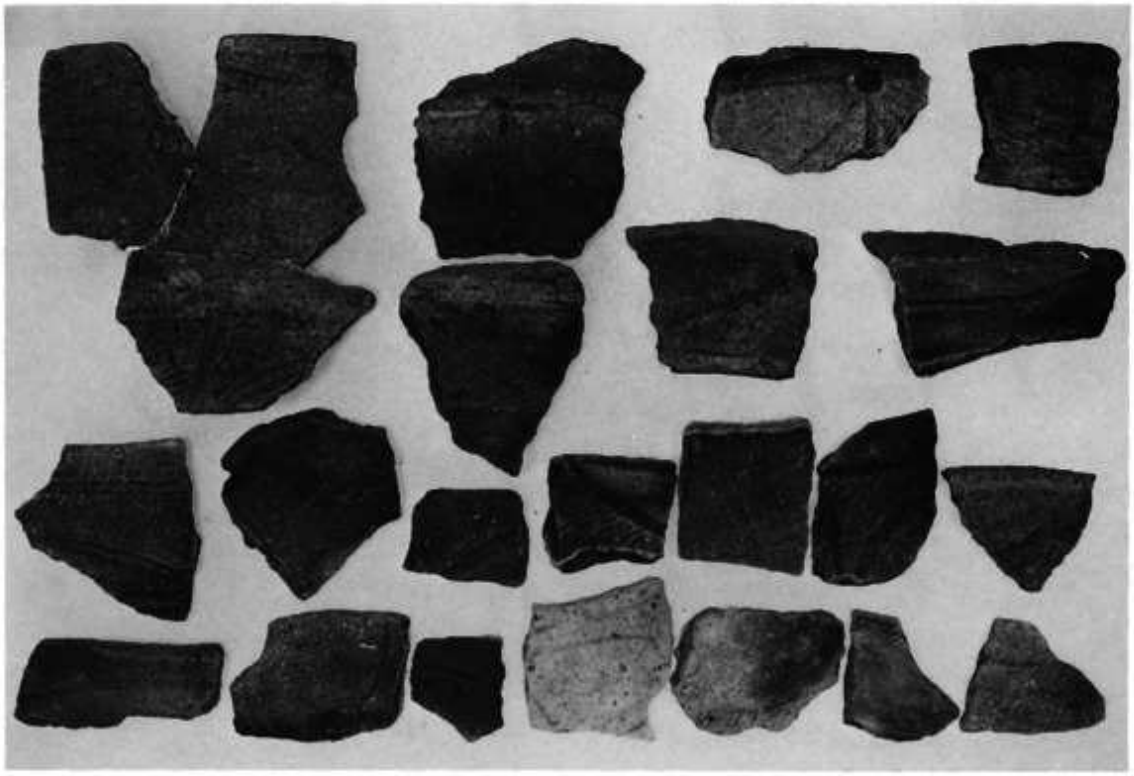
浦谷BV



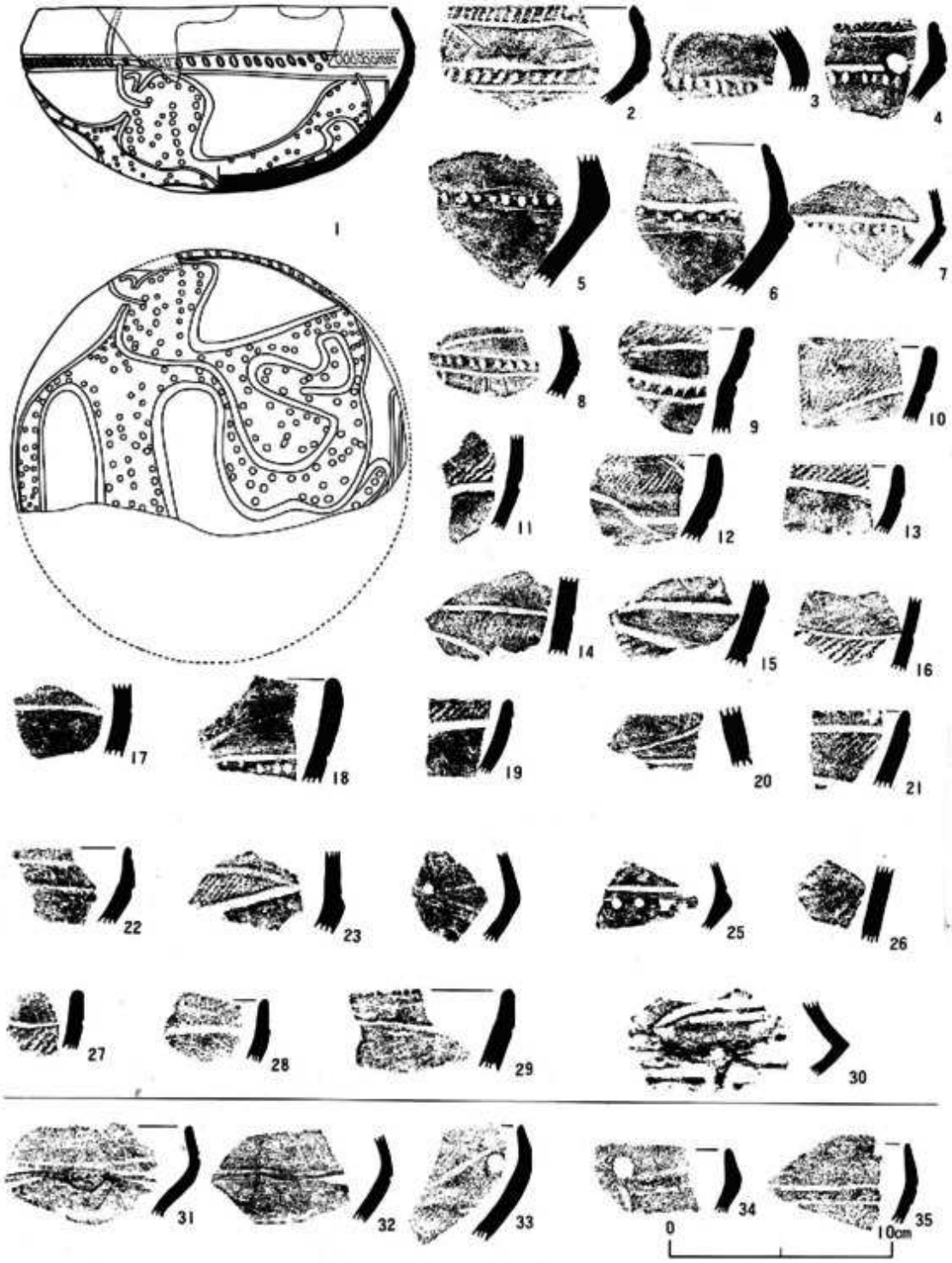
第47図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅤ：⑯1～17、㉒18～40〕



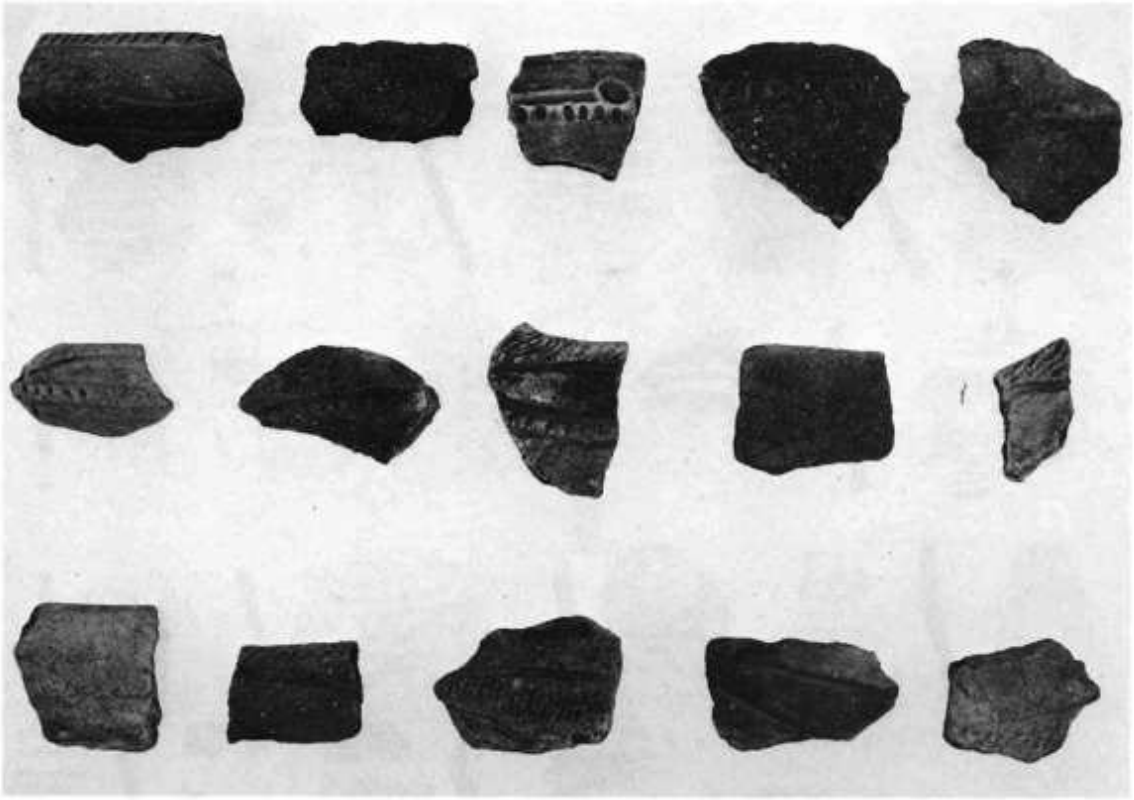
浦谷BV



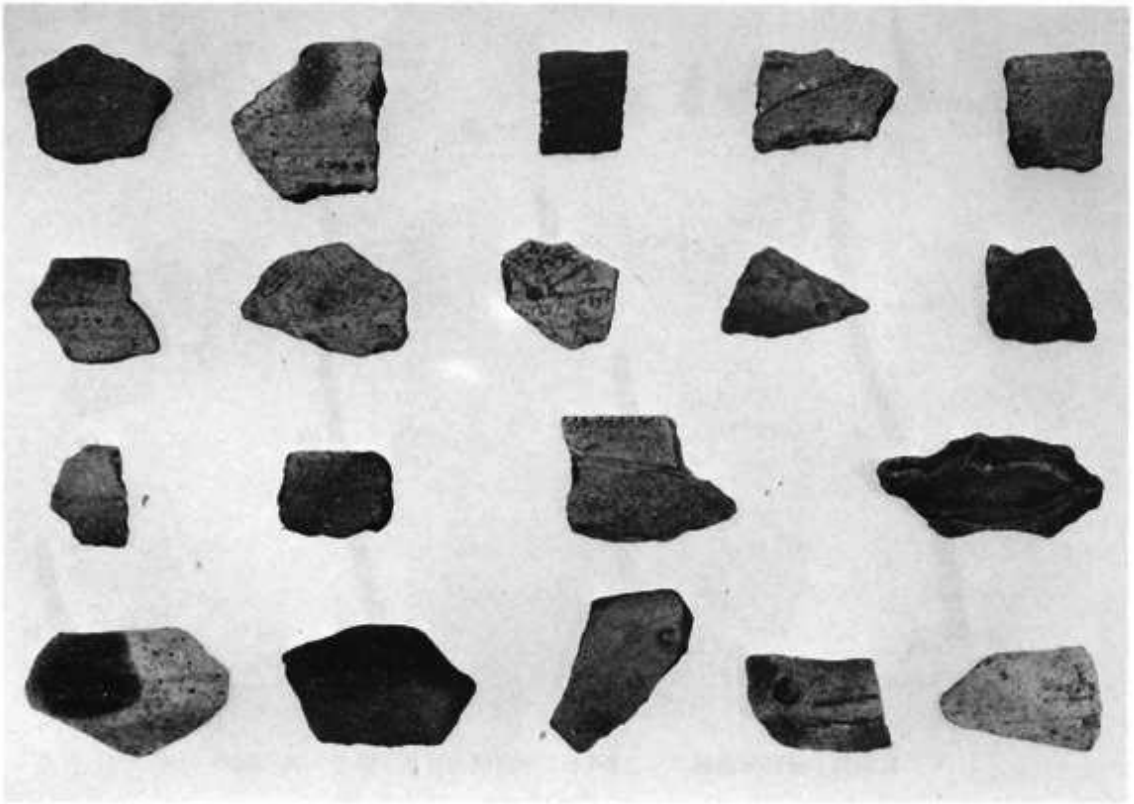
浦谷BV



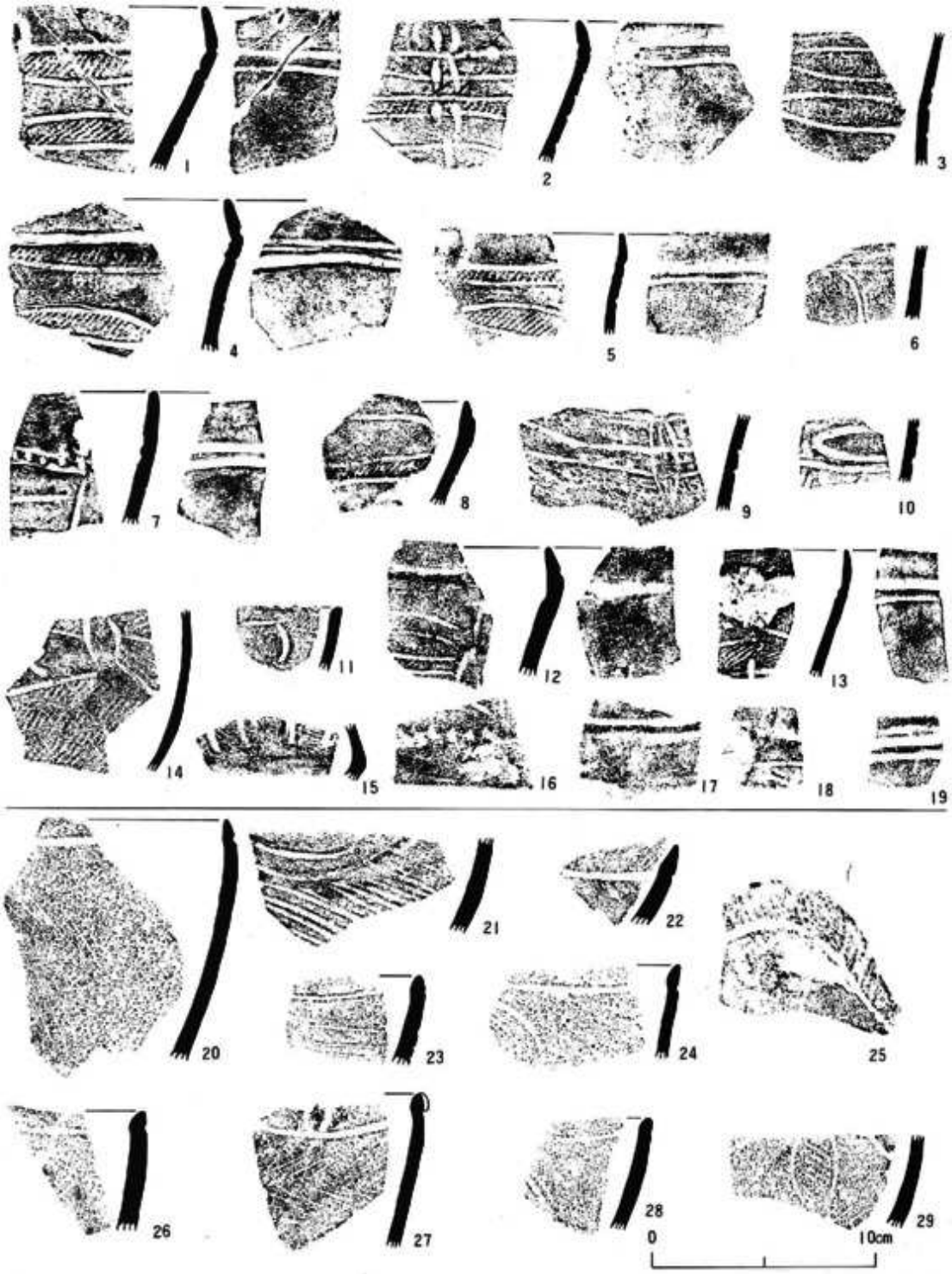
第48図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅤ：㉓1～30、㉔31～35〕



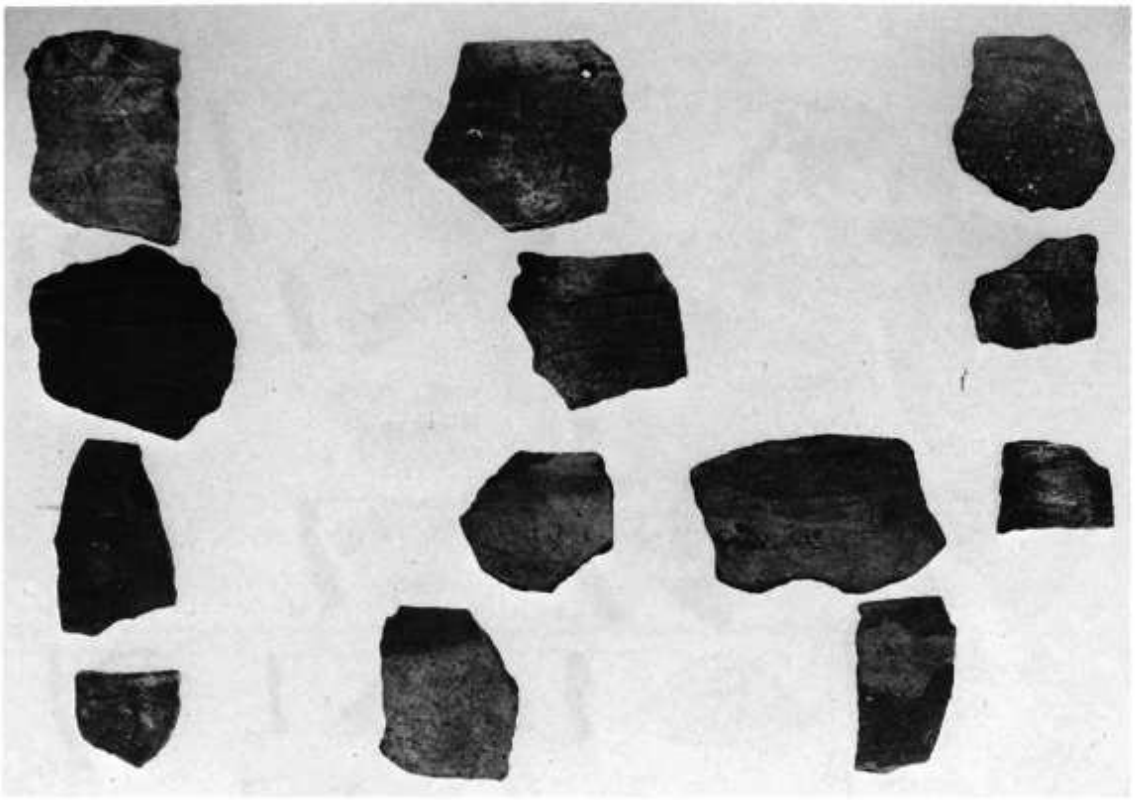
浦谷BV



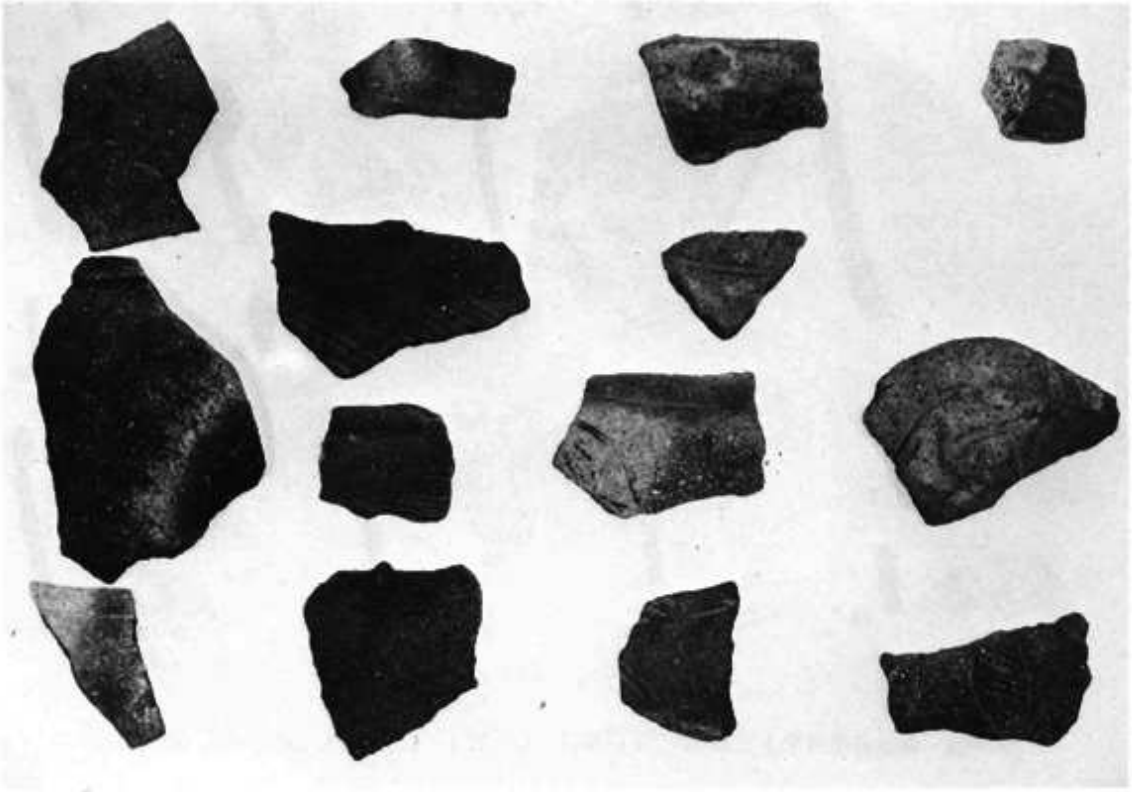
浦谷BV



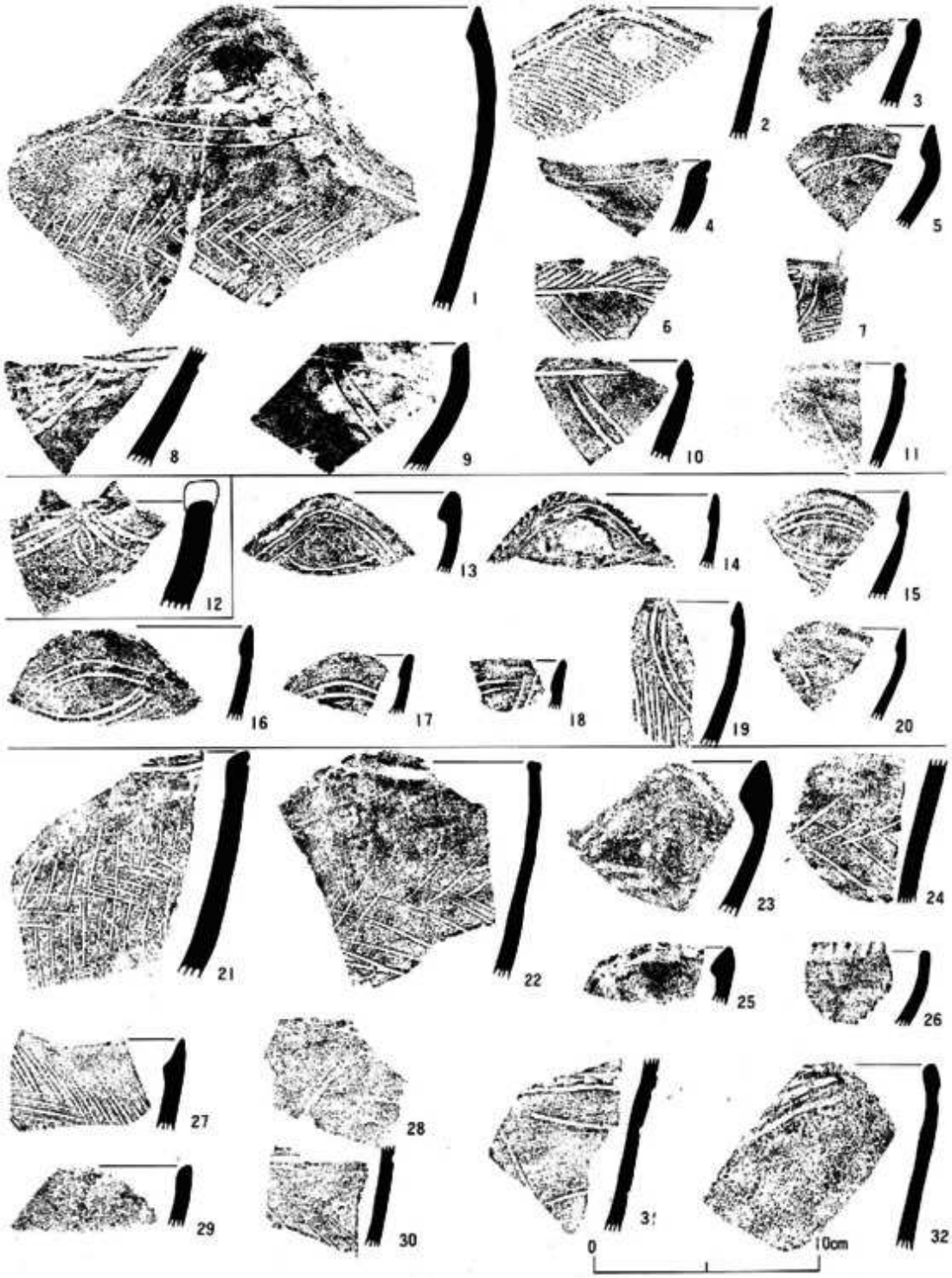
第49図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅤ：㉕1～20、㉖21～30〕



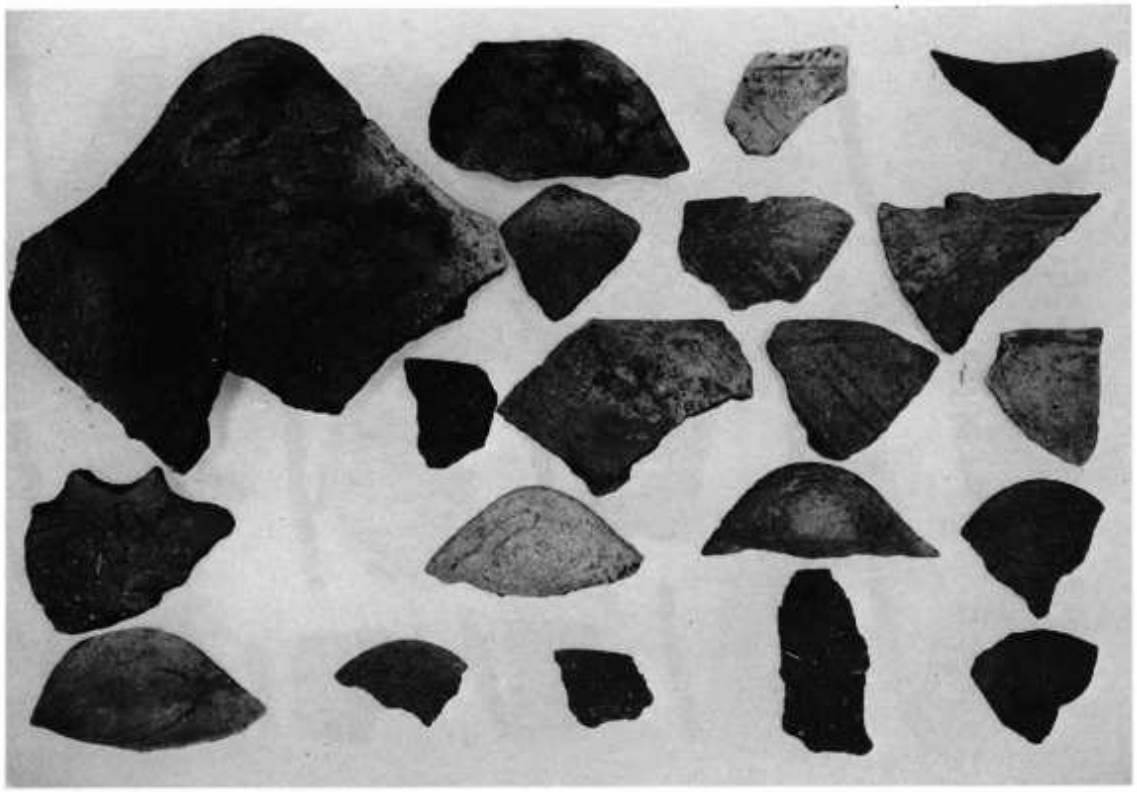
浦谷BV



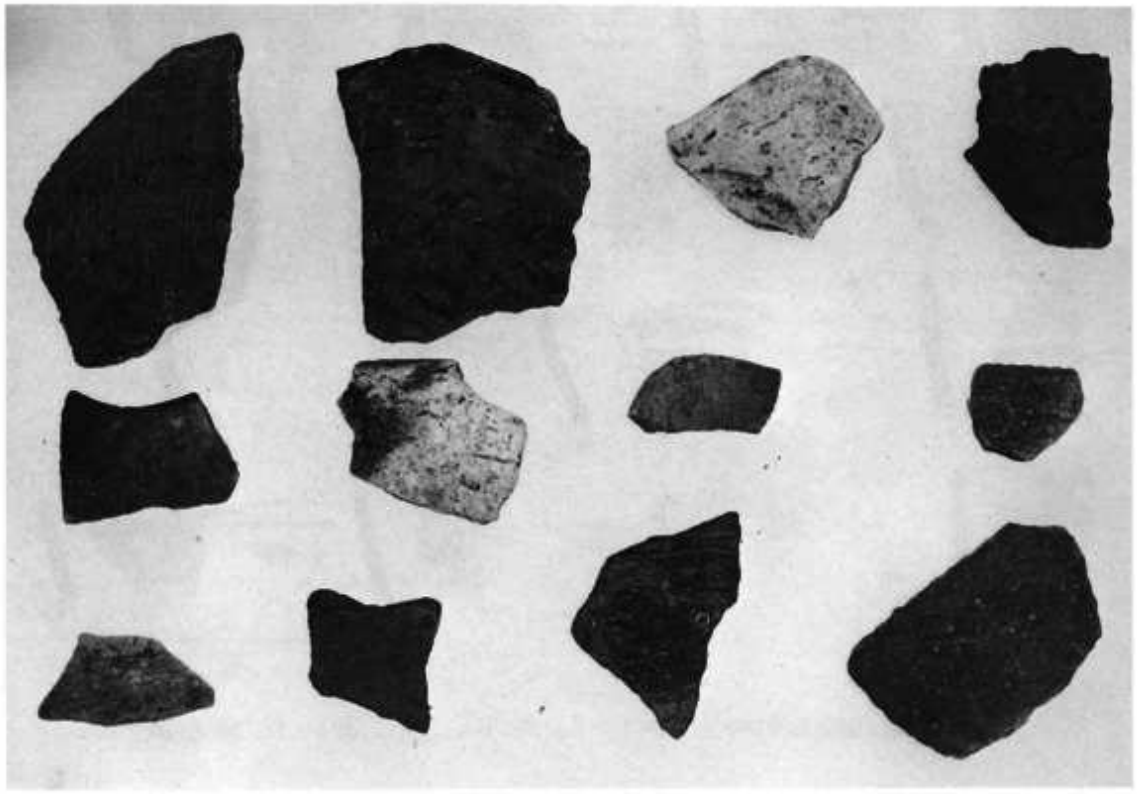
浦谷BV



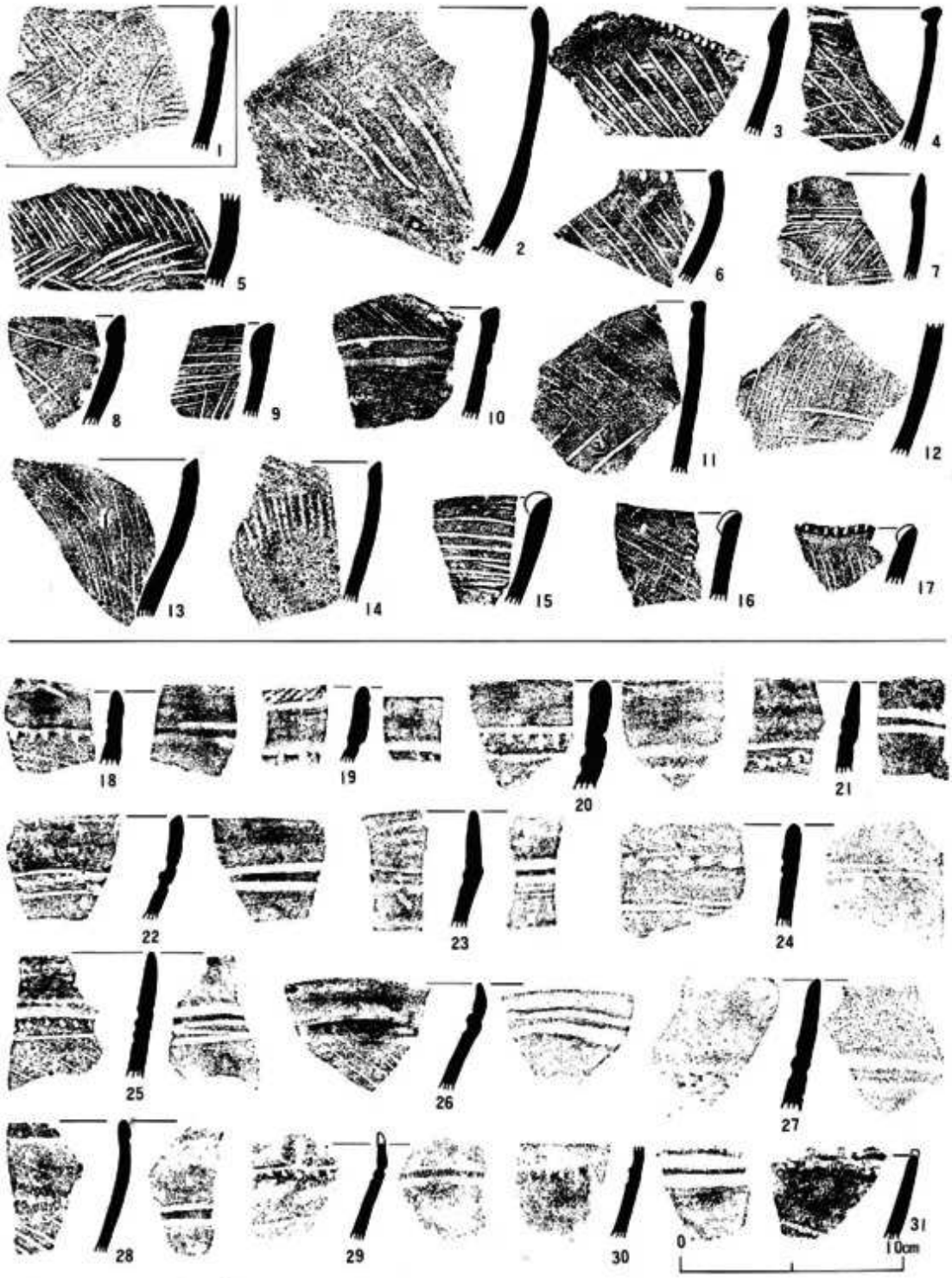
第50図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅤ：㉗1～11、㉘12、㉙13～20、㉚22～32〕



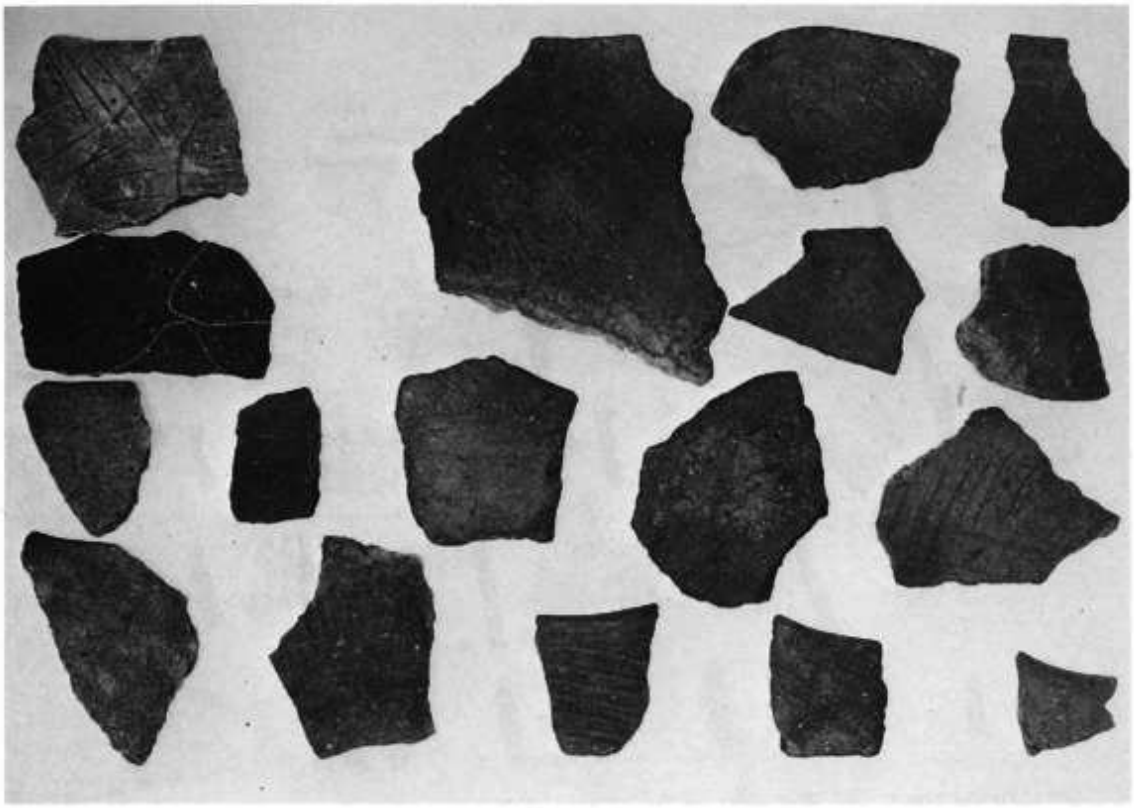
浦谷BV



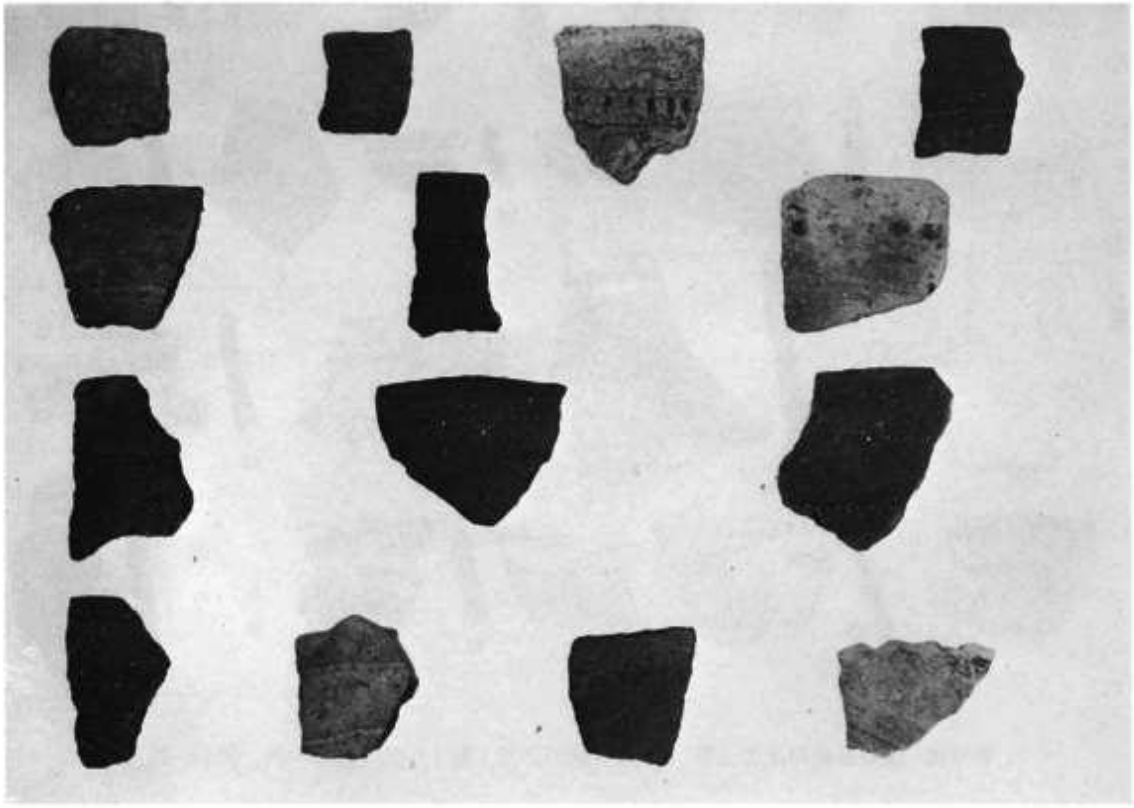
浦谷BV



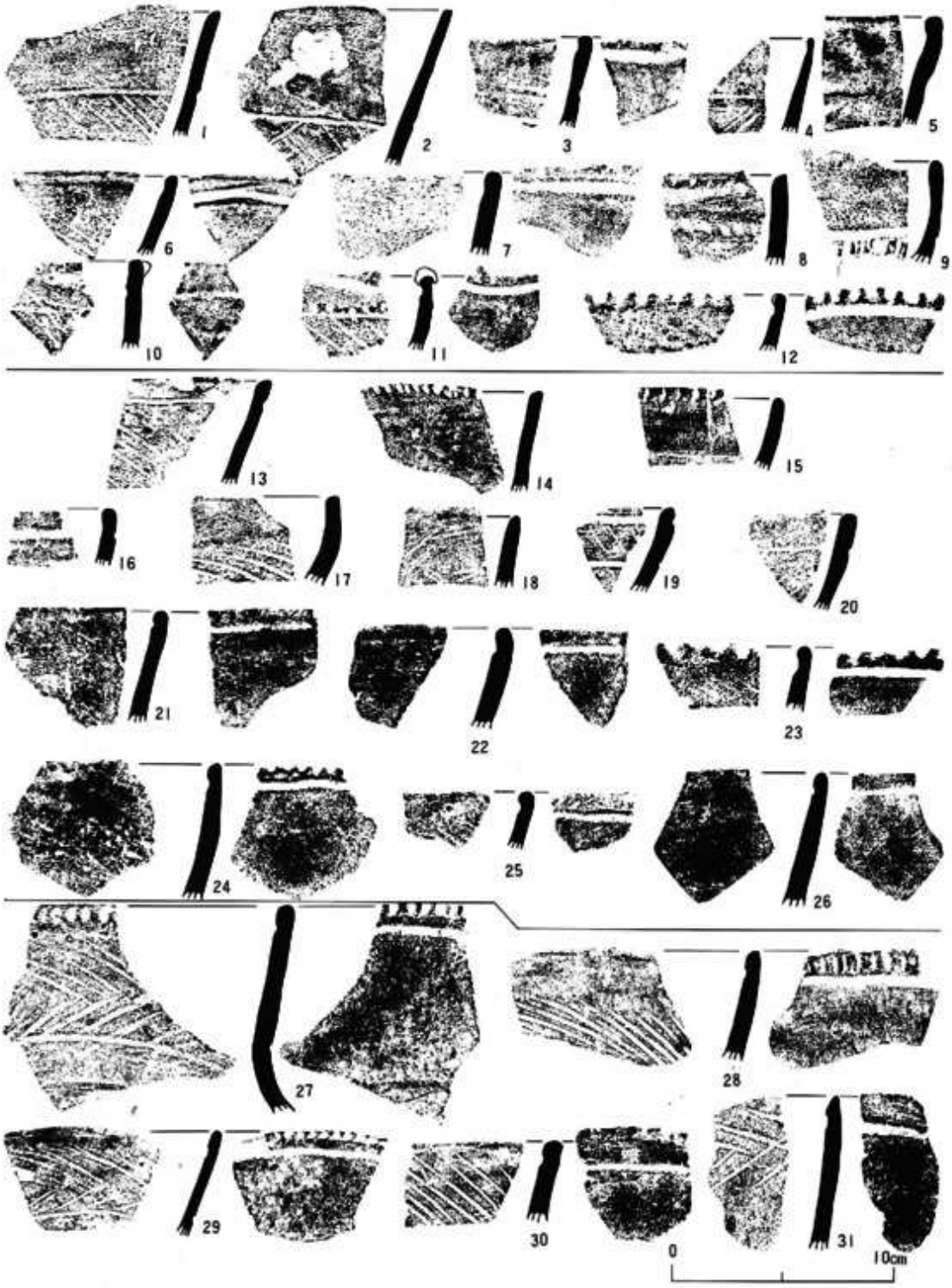
第51図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅤ：㊶1、㊷2～17、㊸18～31〕



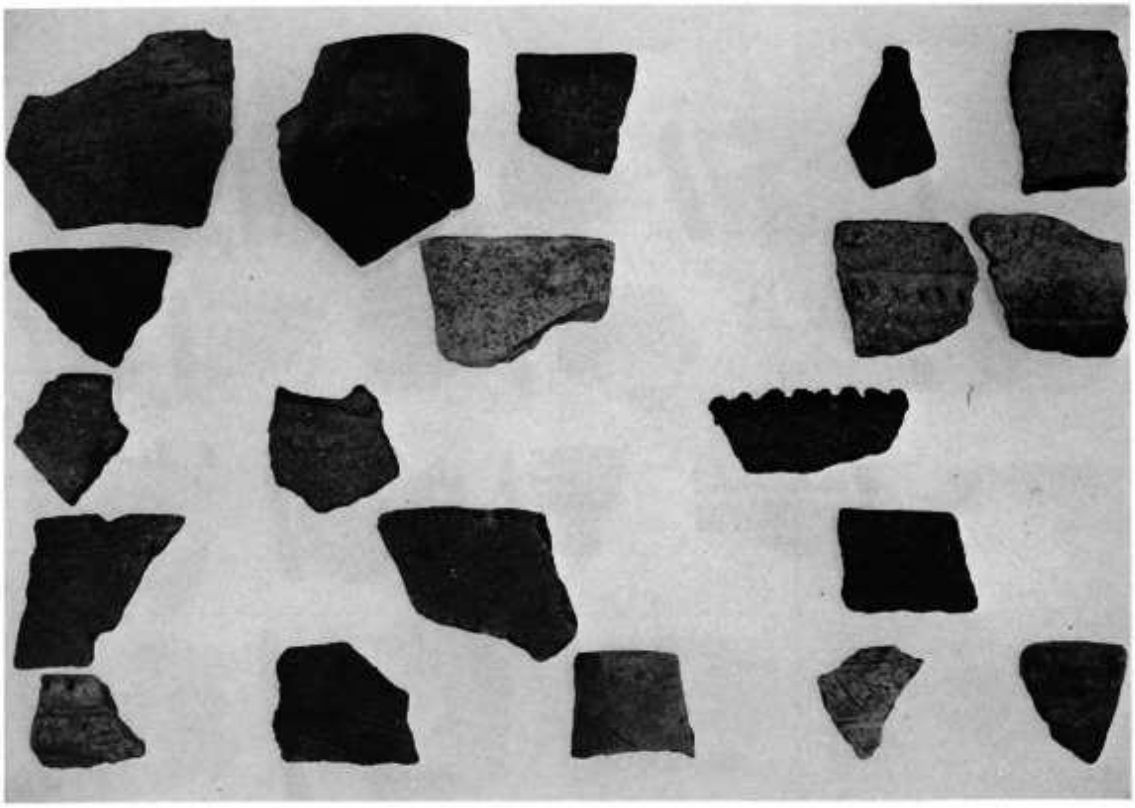
浦谷BV



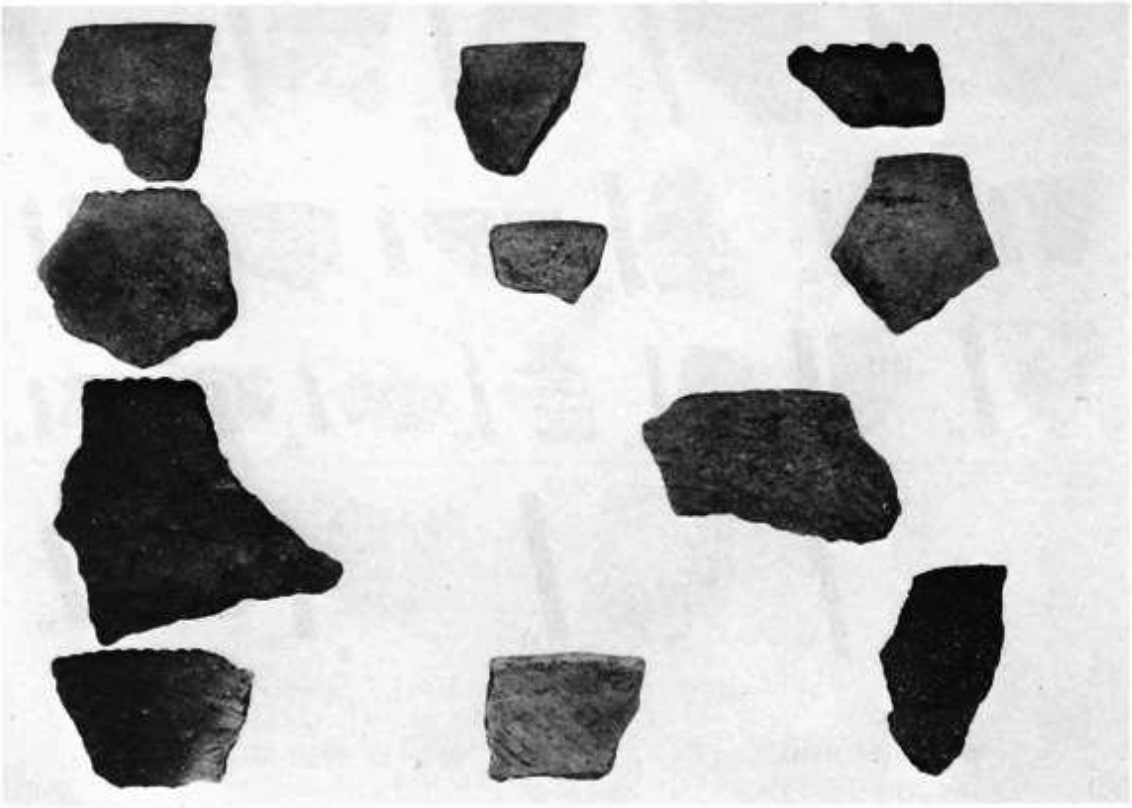
浦谷BV



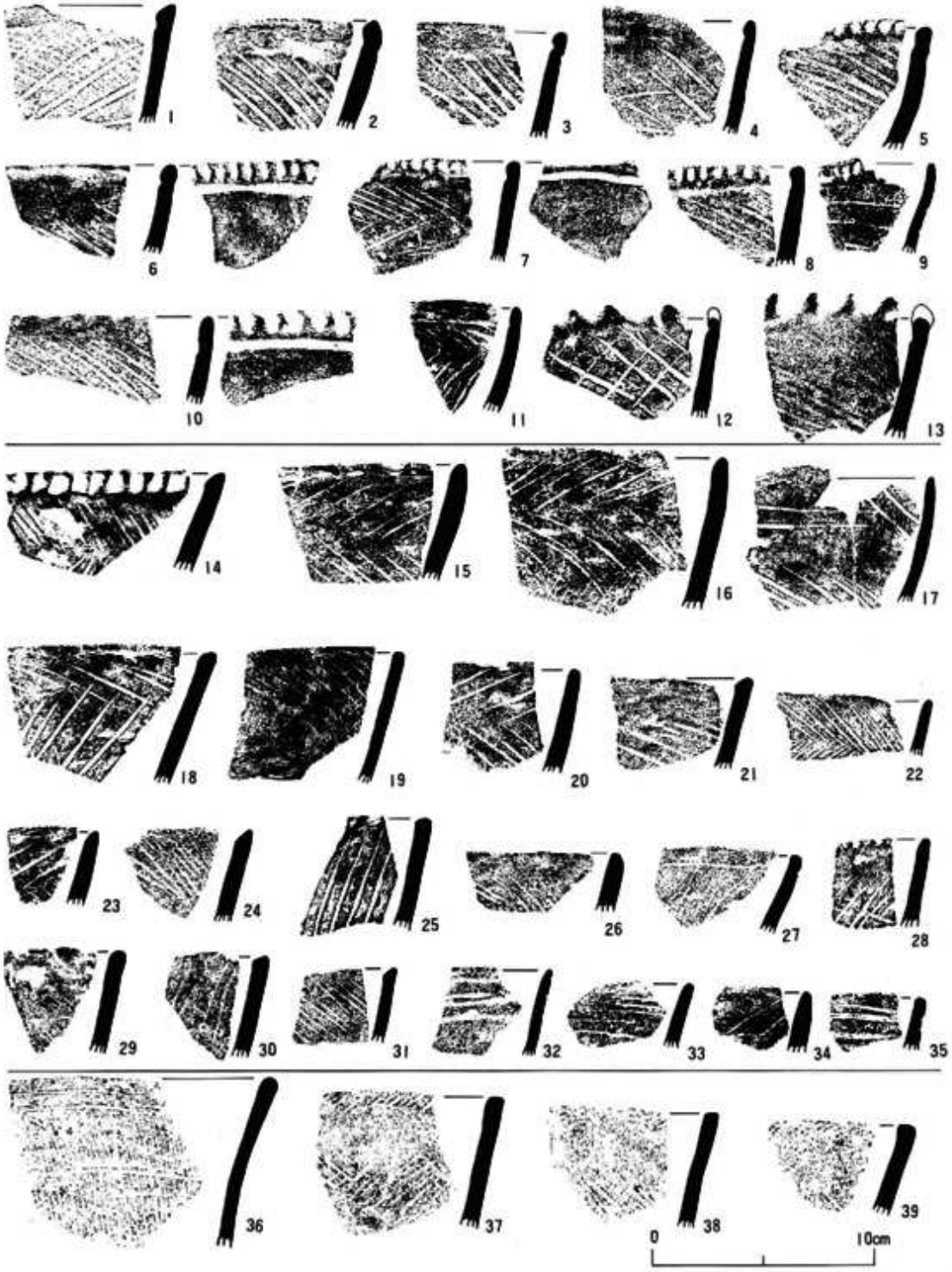
第52図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅥ：㉞1～12、㉟13～26、㊴27～31〕



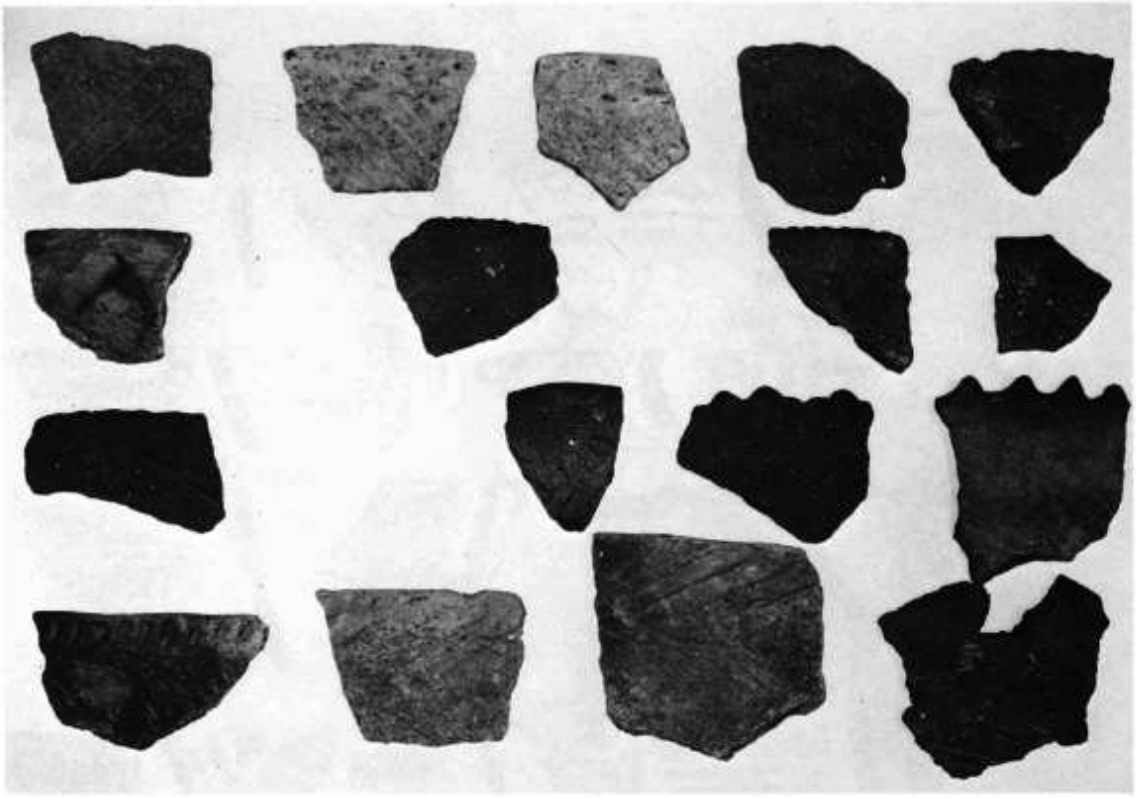
浦谷BVI



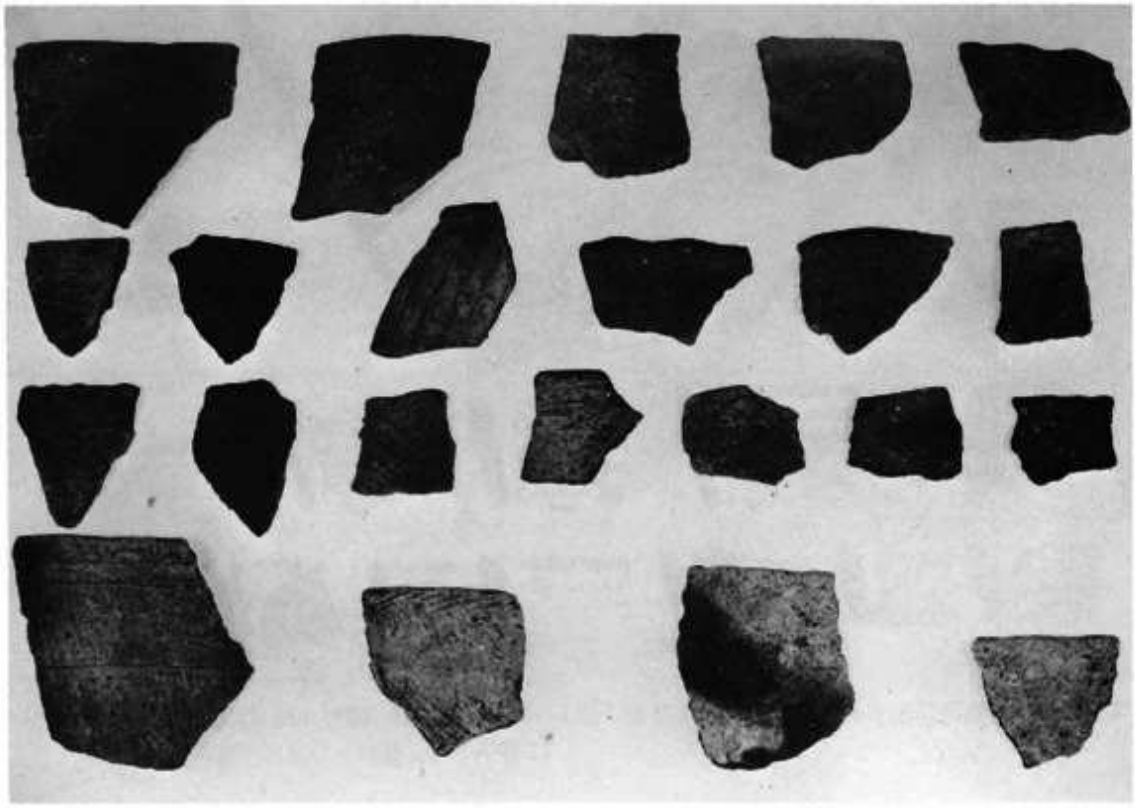
浦谷BVI



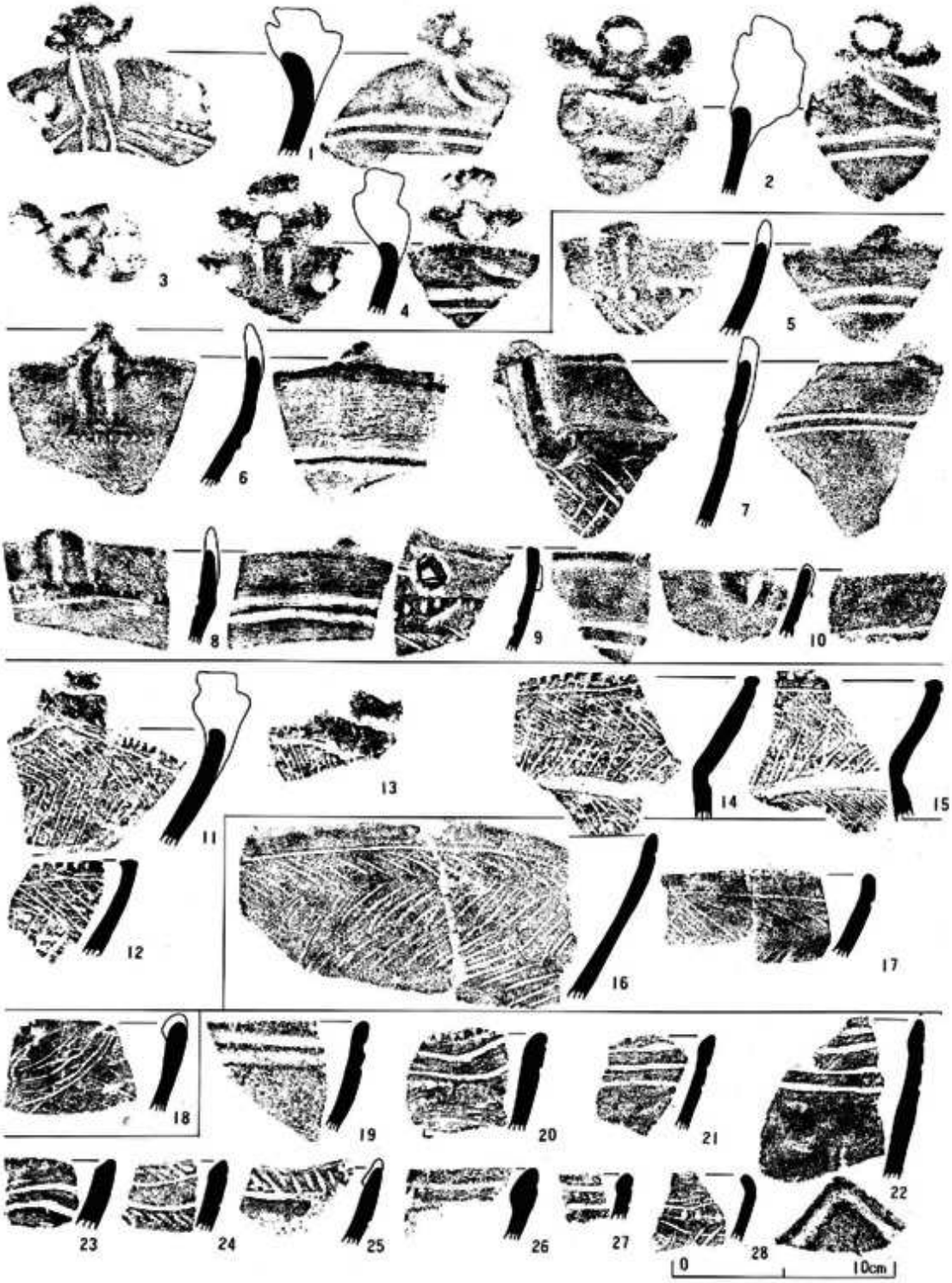
第53図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅥ：㊴1～13、㊵14～35、㊼36～39〕



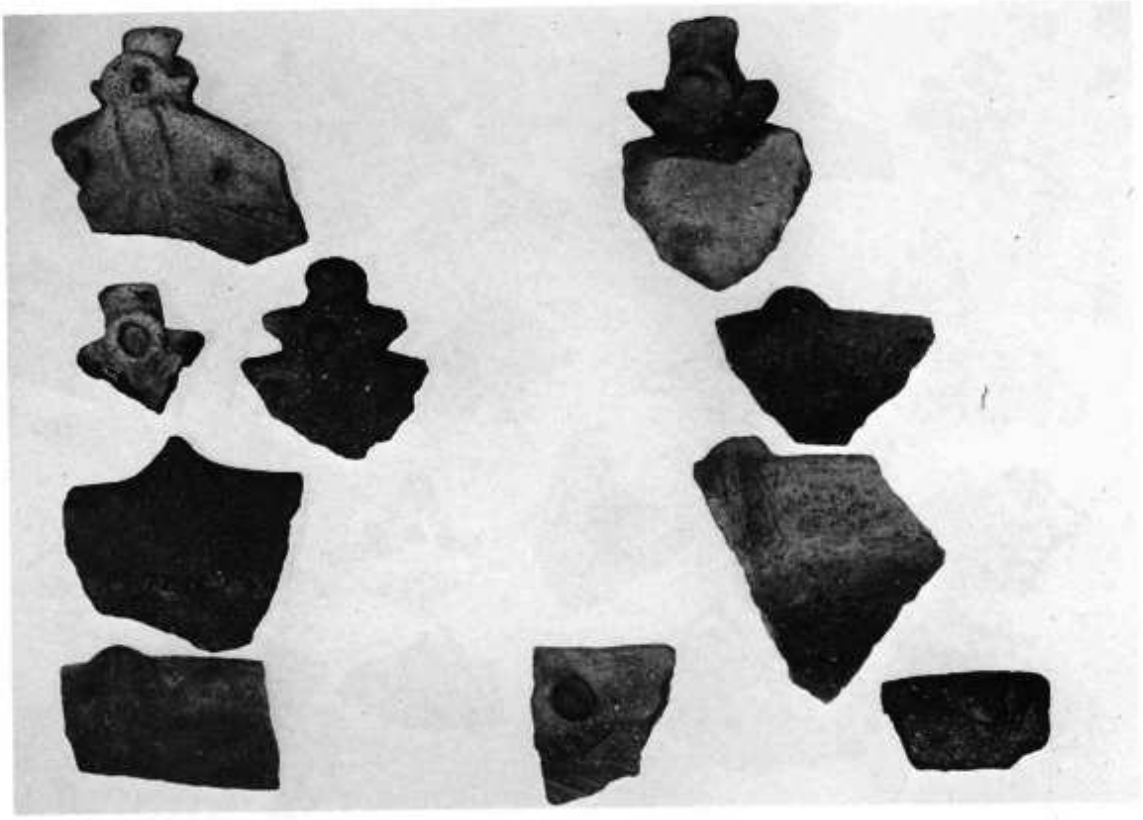
浦谷BVI



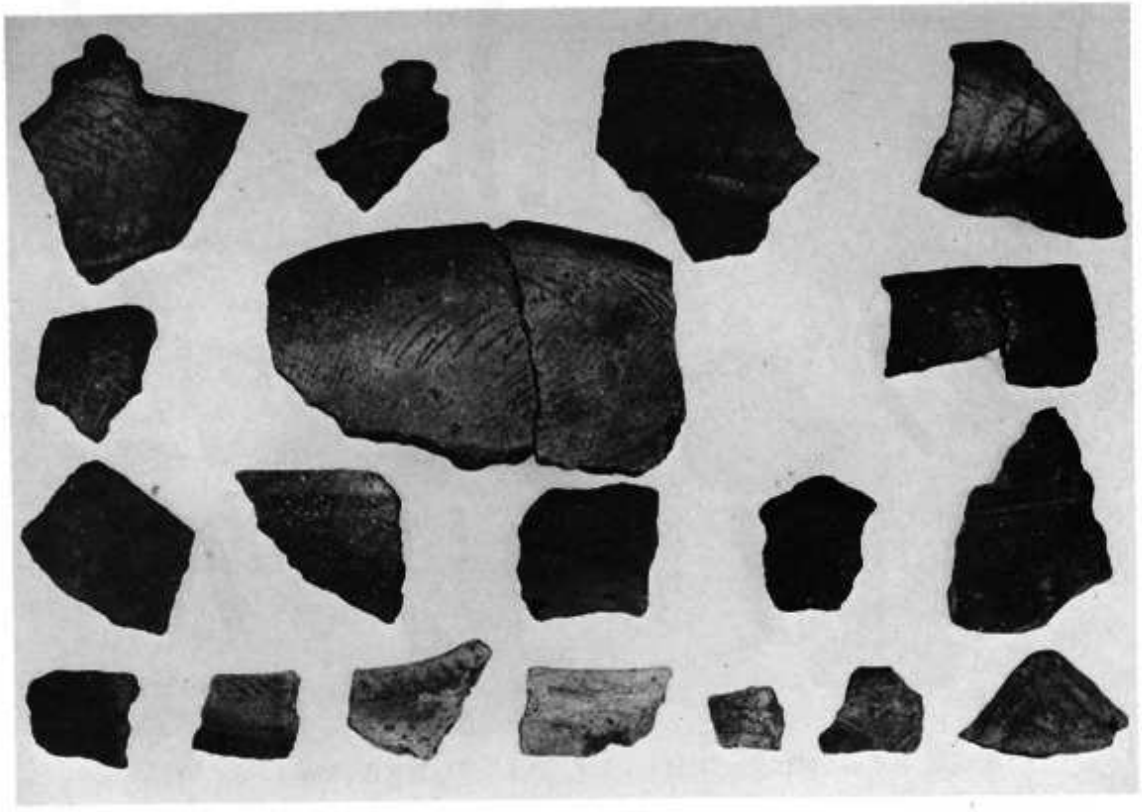
浦谷BVI



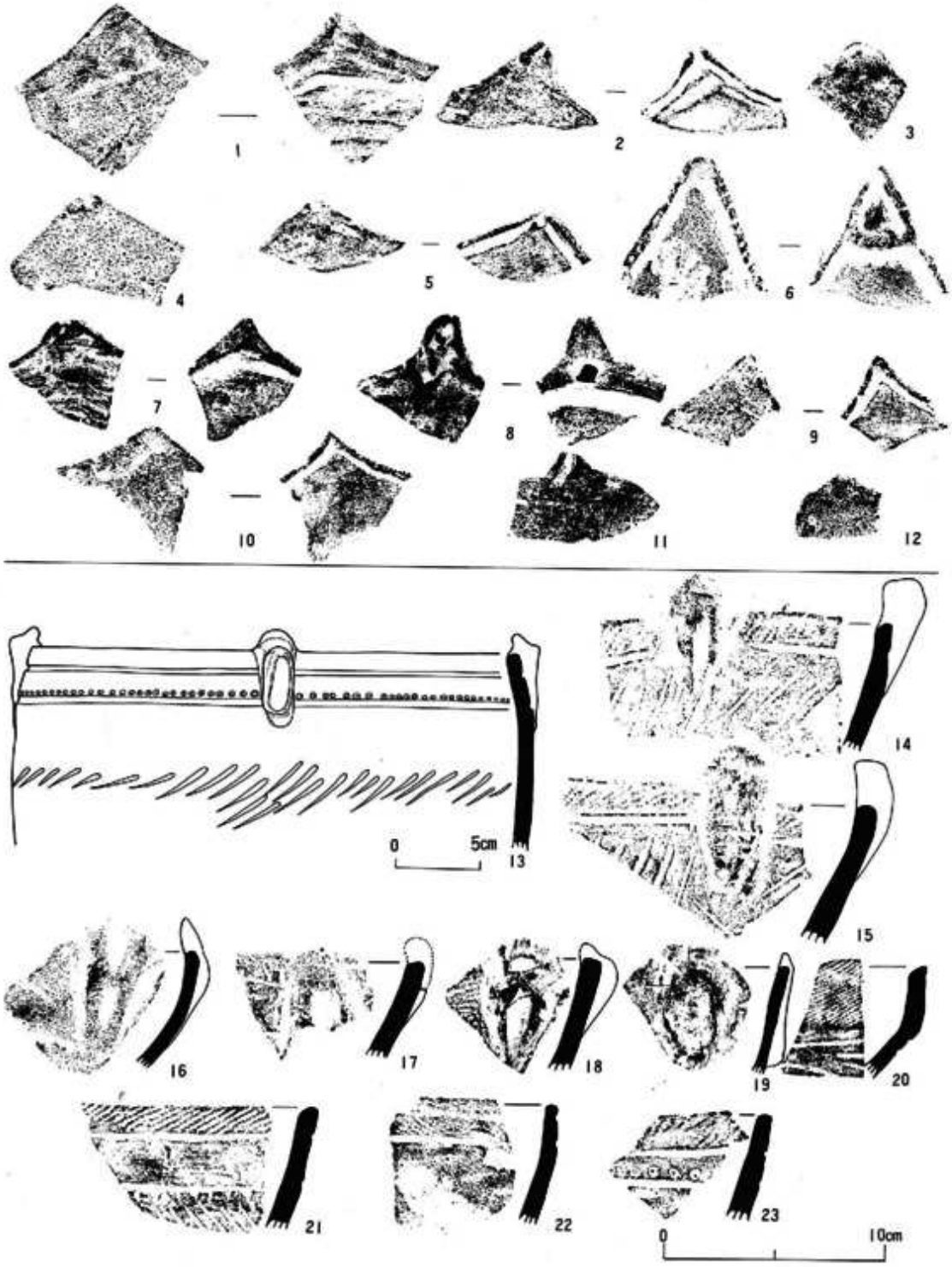
第54図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷B Ⅵ：㉑1～4、㊱5～10、㊲11～15、㊳16～17、㊶18、㊷19～29
22㊱5～10、㊲11～15㊳16～17、〕



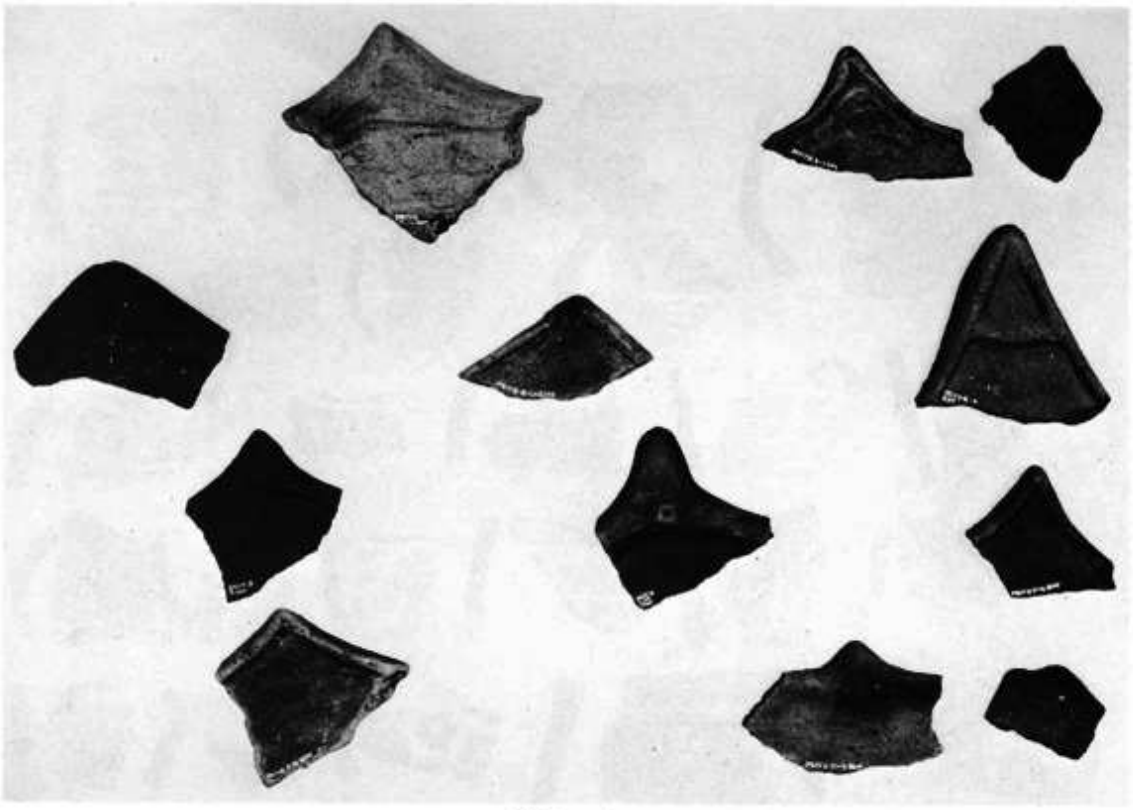
浦谷BVI



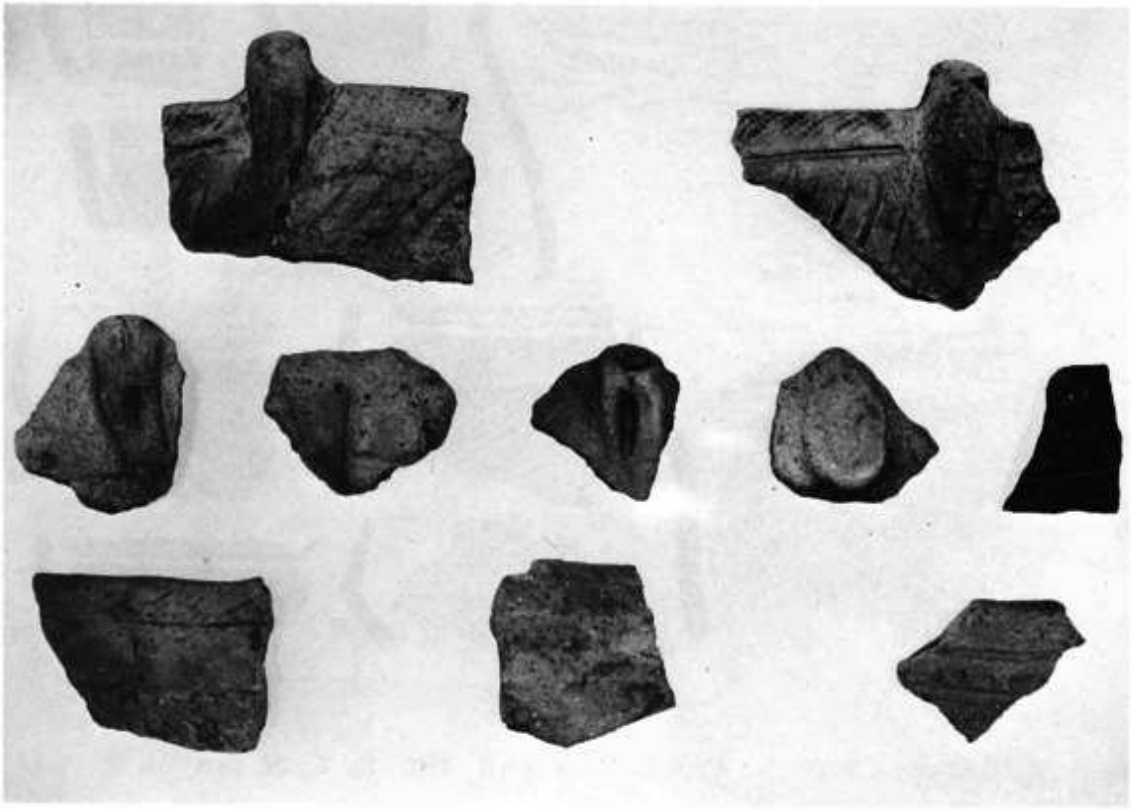
浦谷BVI



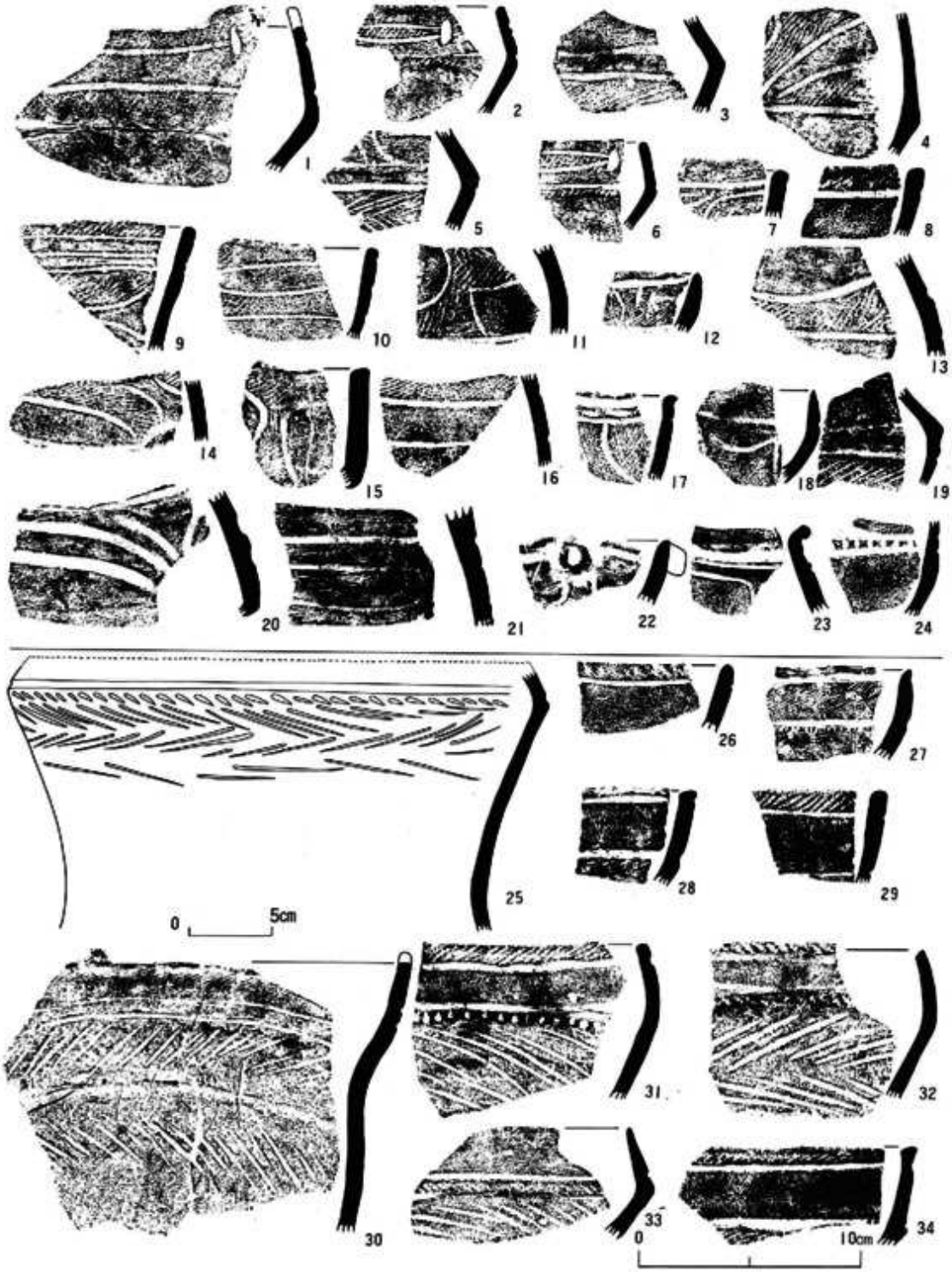
第55図　浦谷B遺跡出土土器(13・1：4、他1：3)〔浦谷B：Ⅵ㊸1～12、㊹13～23〕



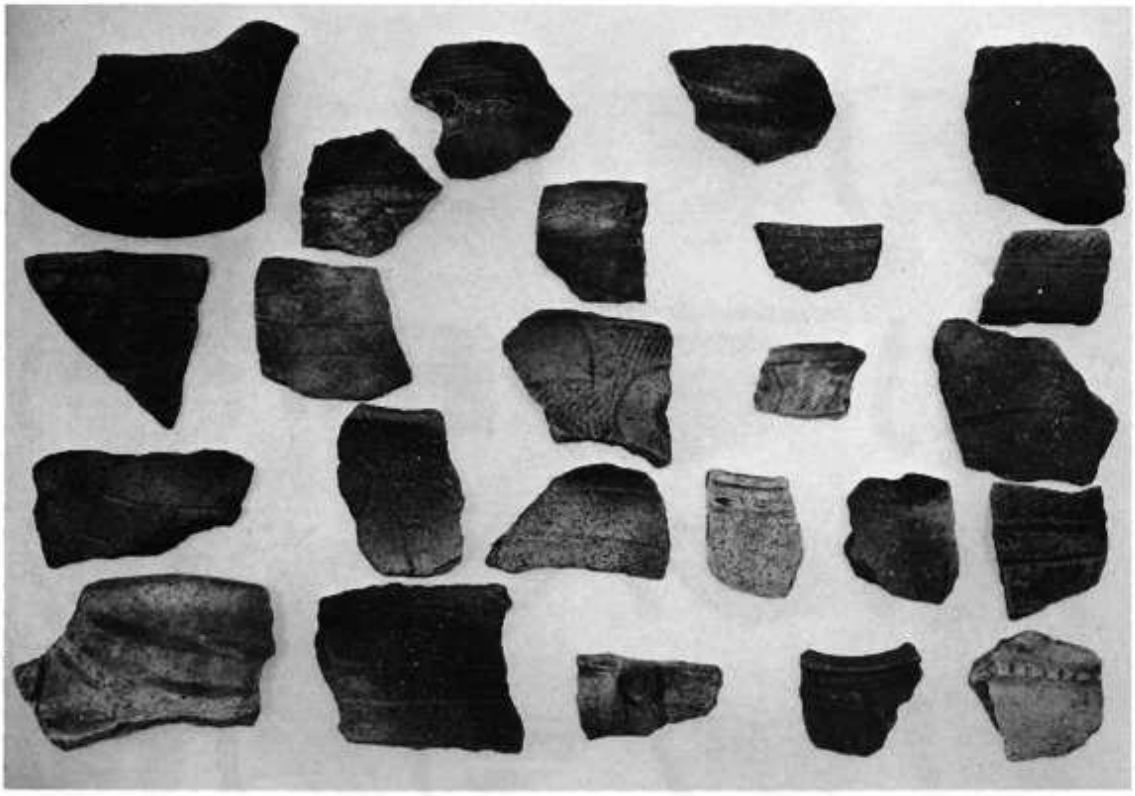
浦谷BVI



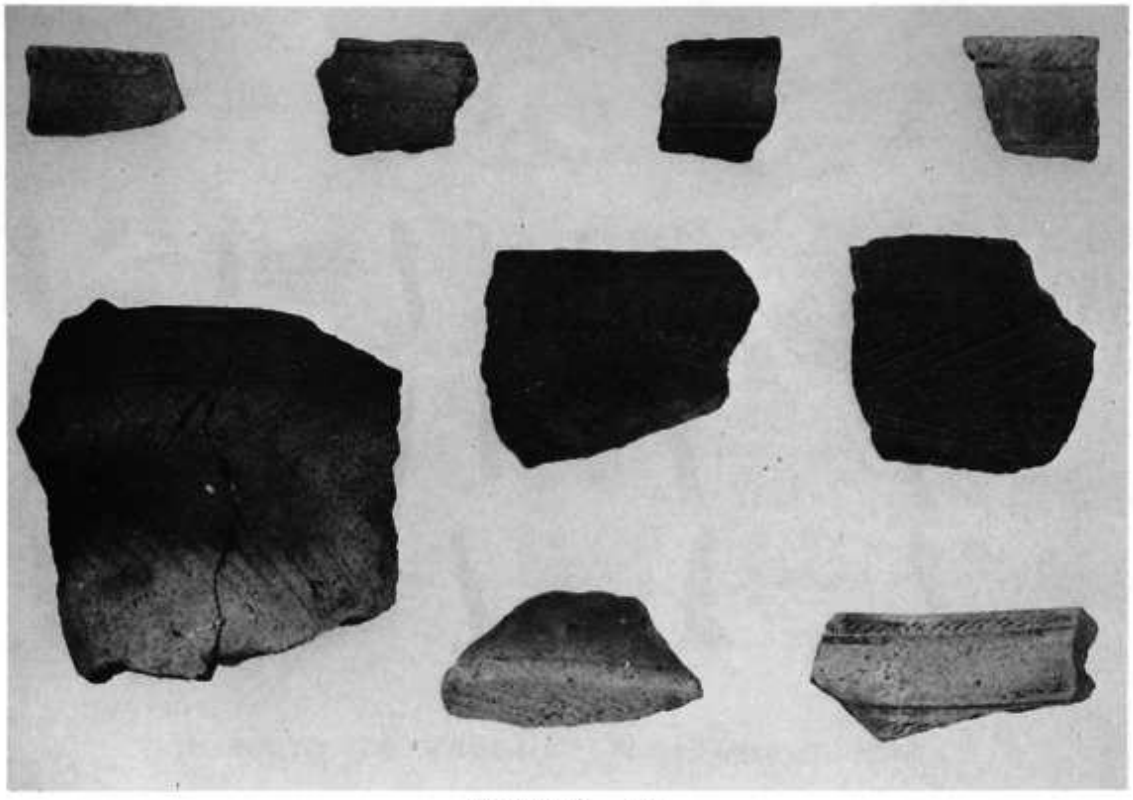
浦谷BVI



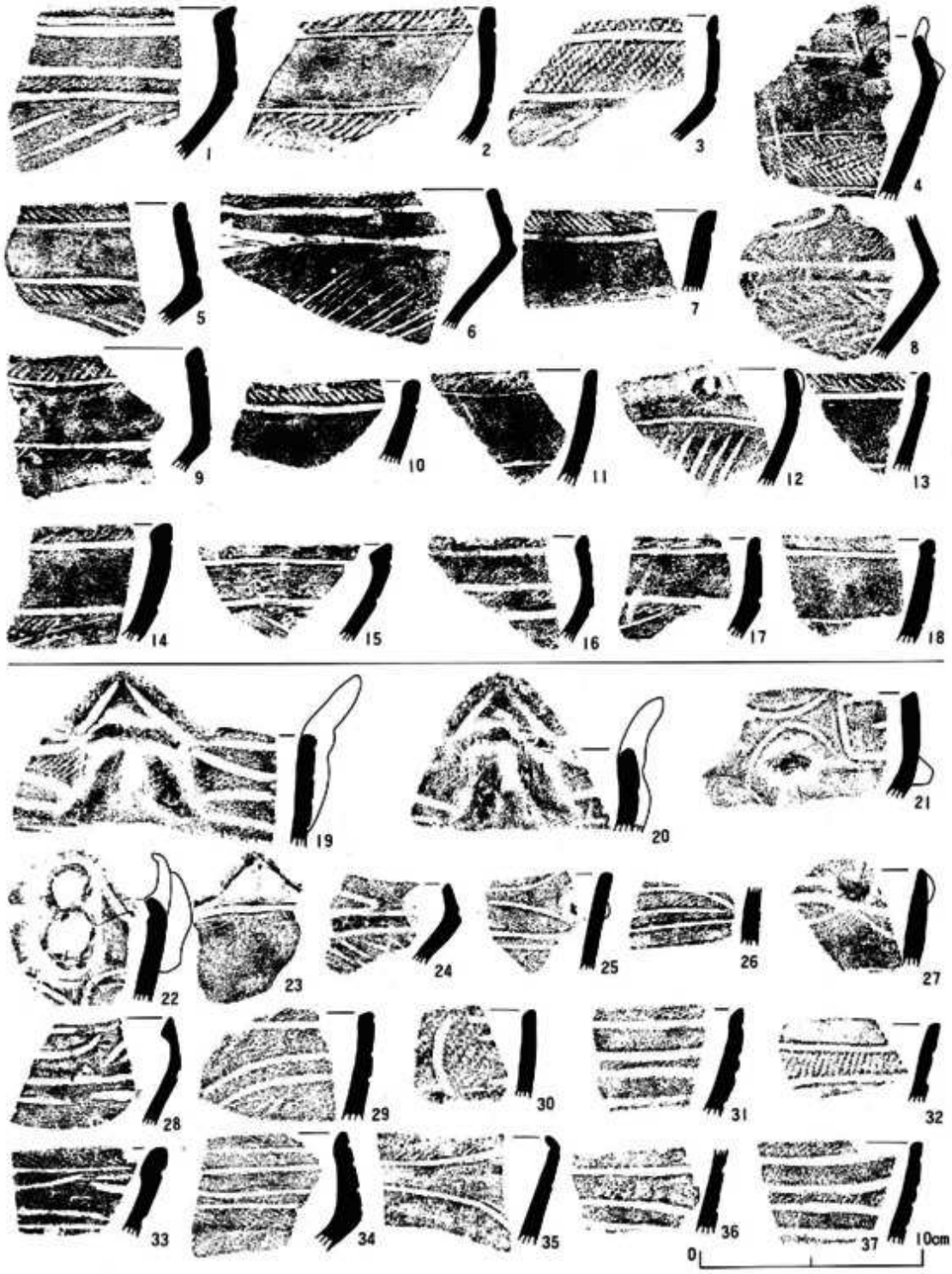
第56図　浦谷B遺跡出土土器(25・1：4、他1：3)〔浦谷BⅥ：㊽3～5、7～24、㊾25～34、㊼1、2、6



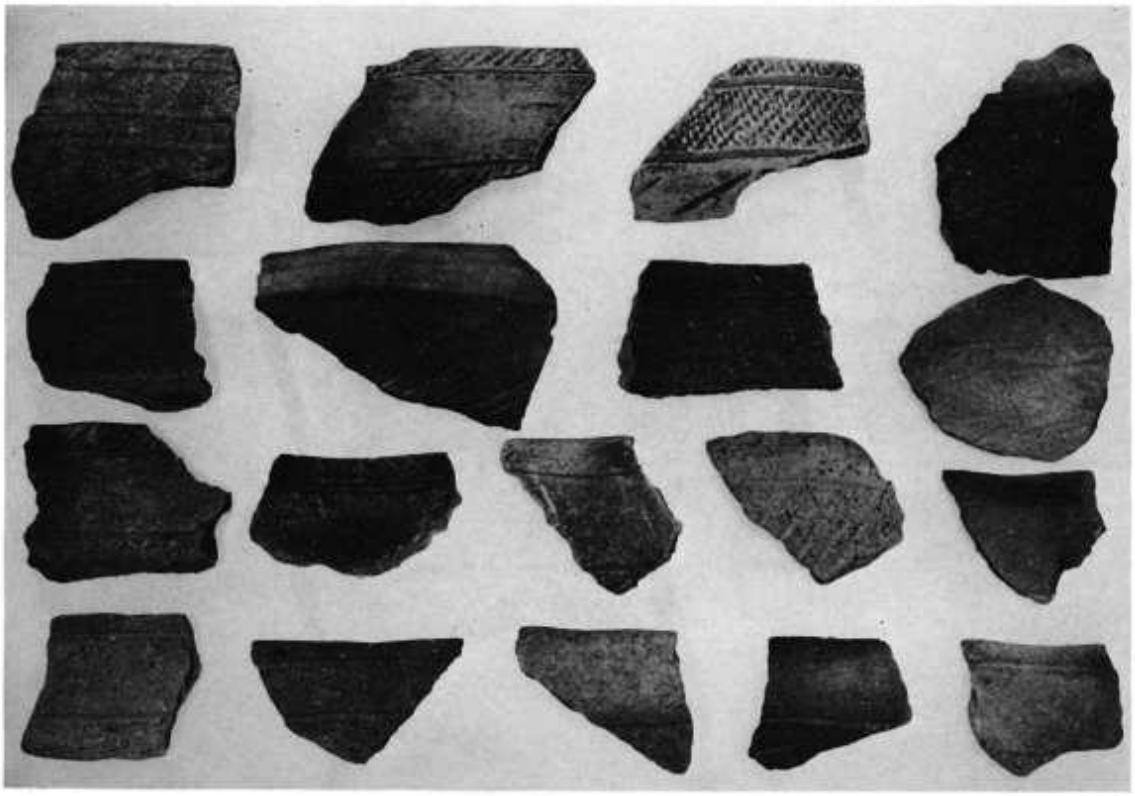
浦谷B遺跡　土器



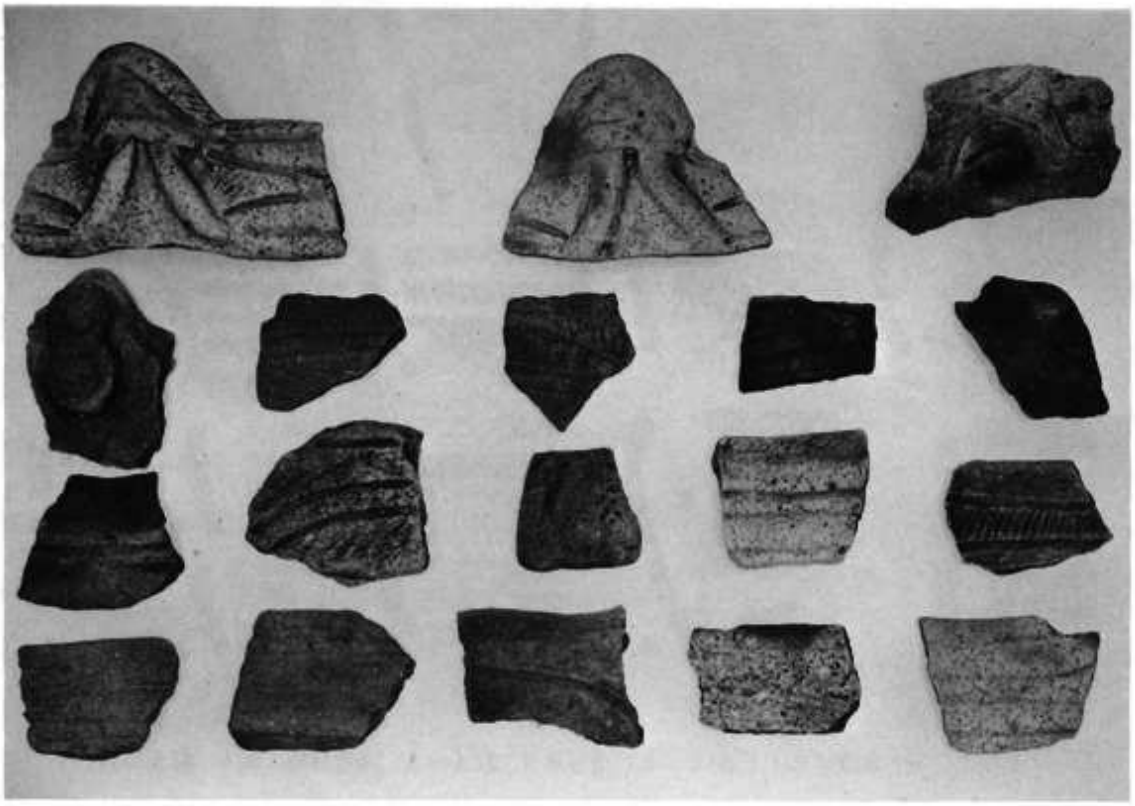
浦谷B遺跡　土器



第57図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅥ：㊾1～18、㊿19～37〕

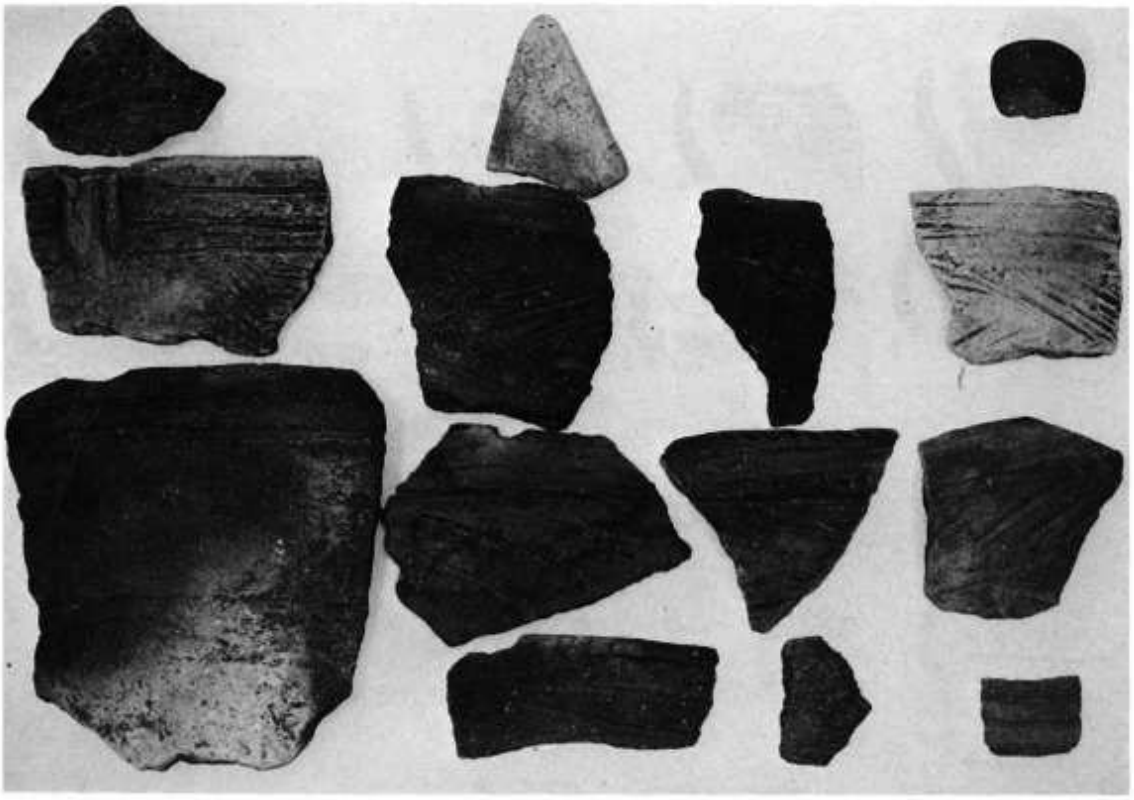


浦谷BVI

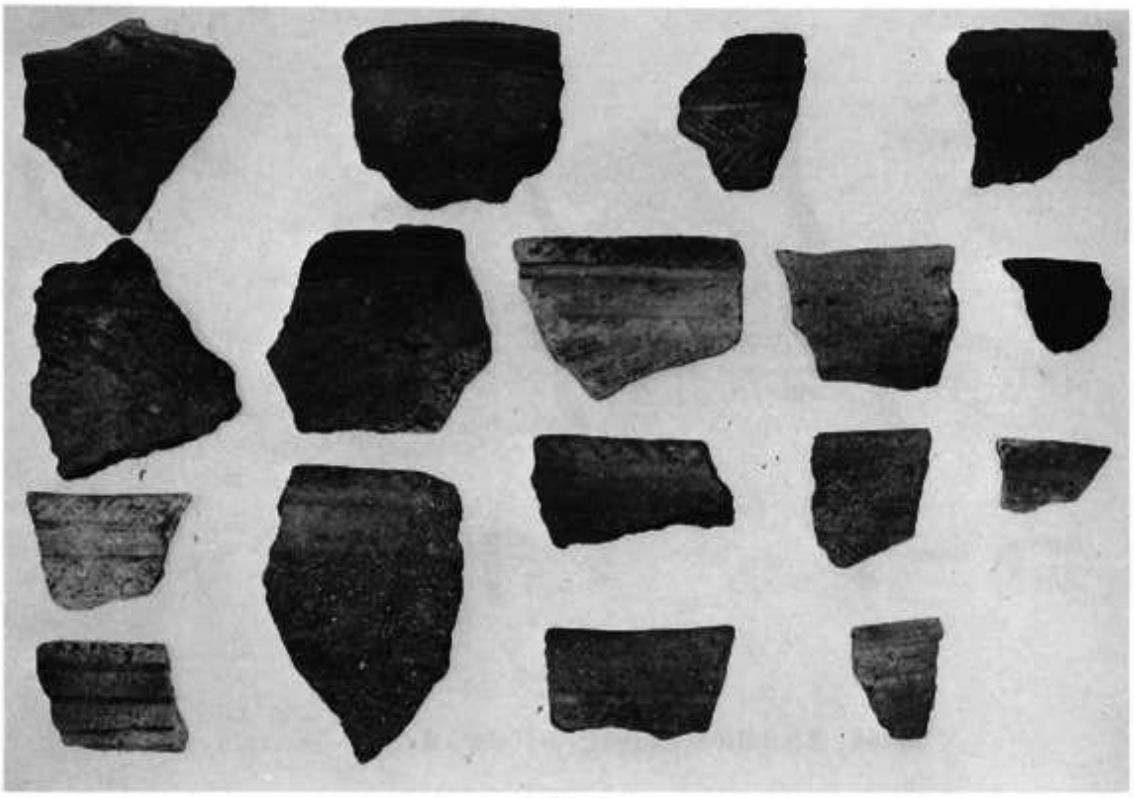


浦谷BVI

第58図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅥ：㊹1～3、浦谷BⅦ：㊻4、㊶5～31〕

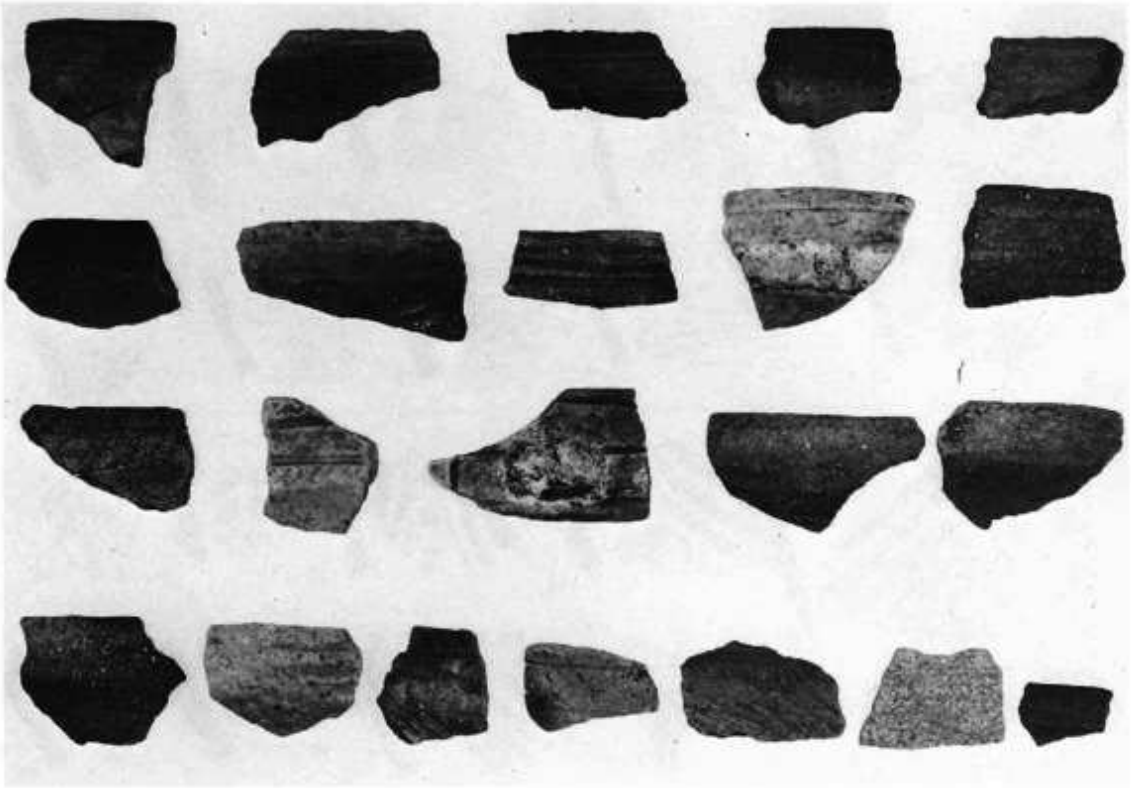


浦谷B VI・VII

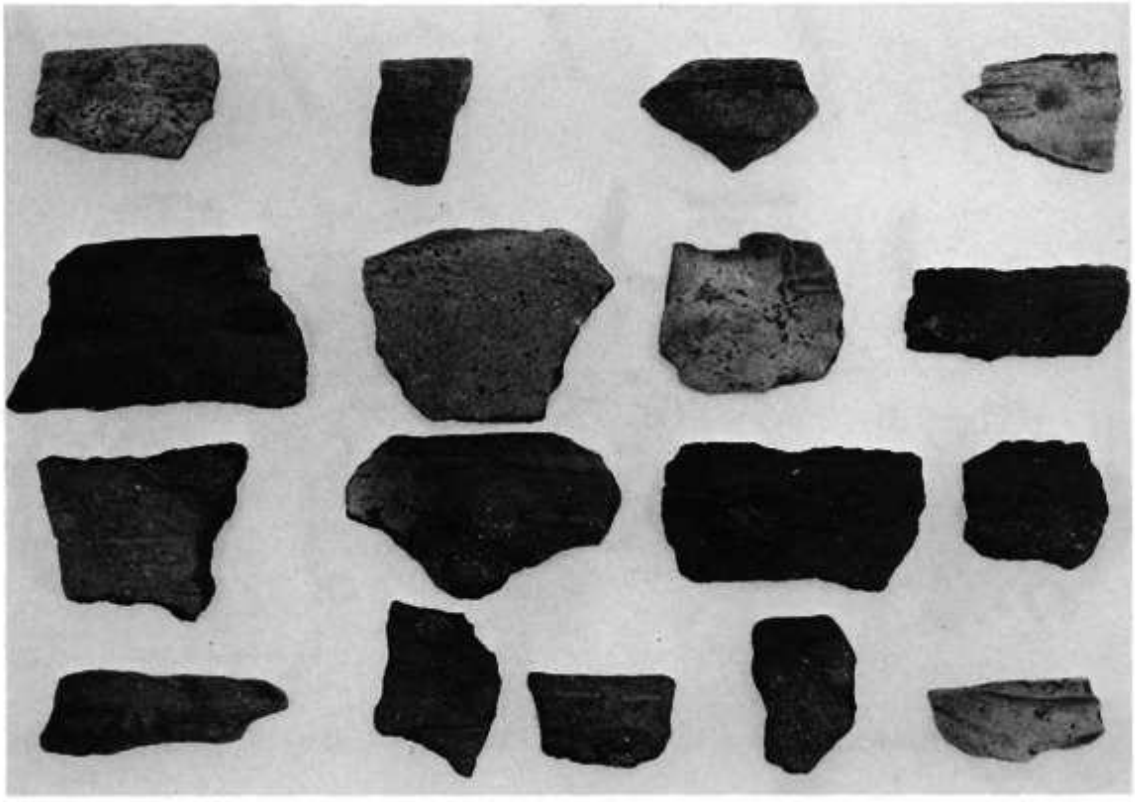


浦谷B VII

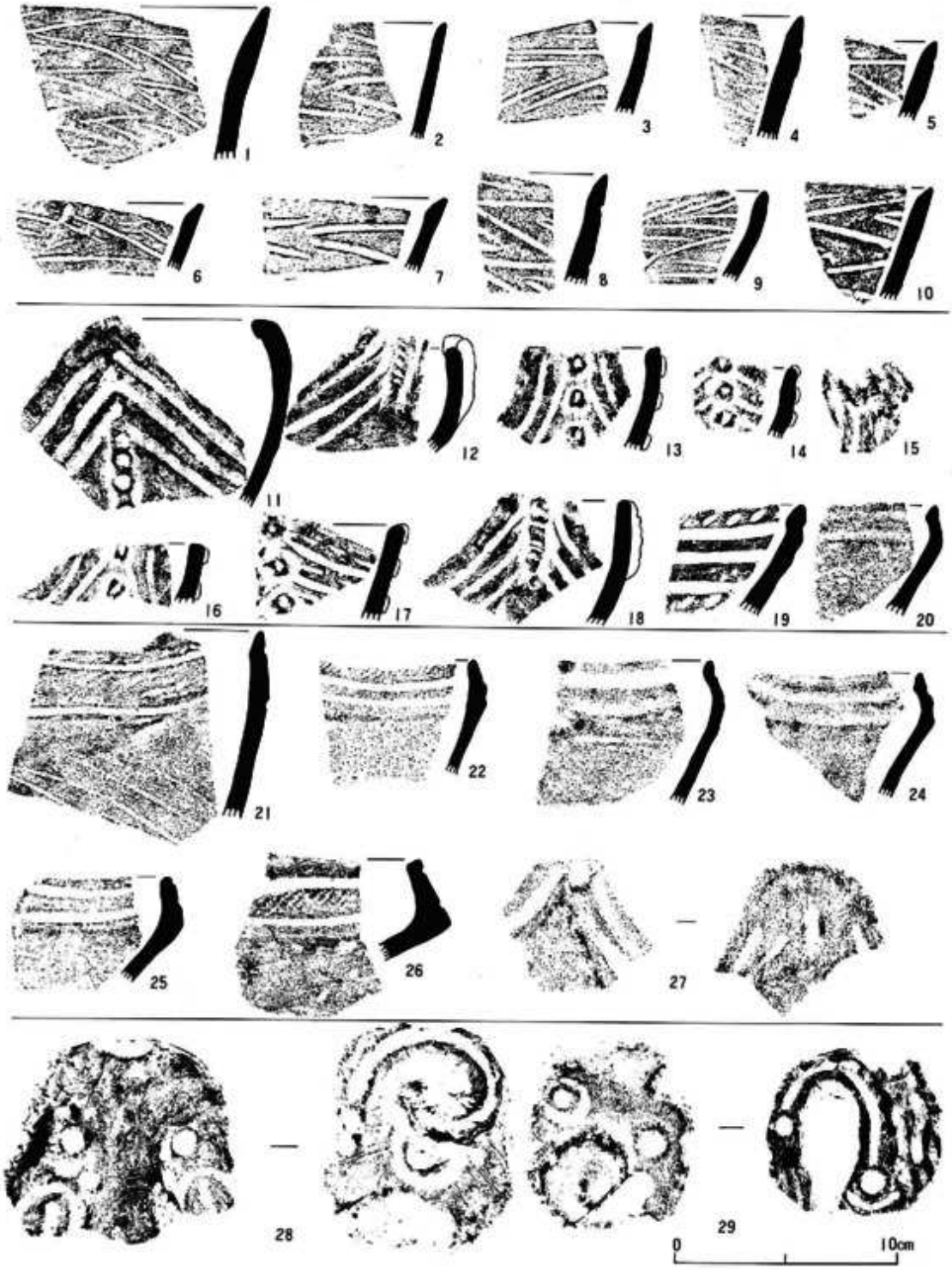
第59図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅦ：㊶1～26、㊷27～39〕



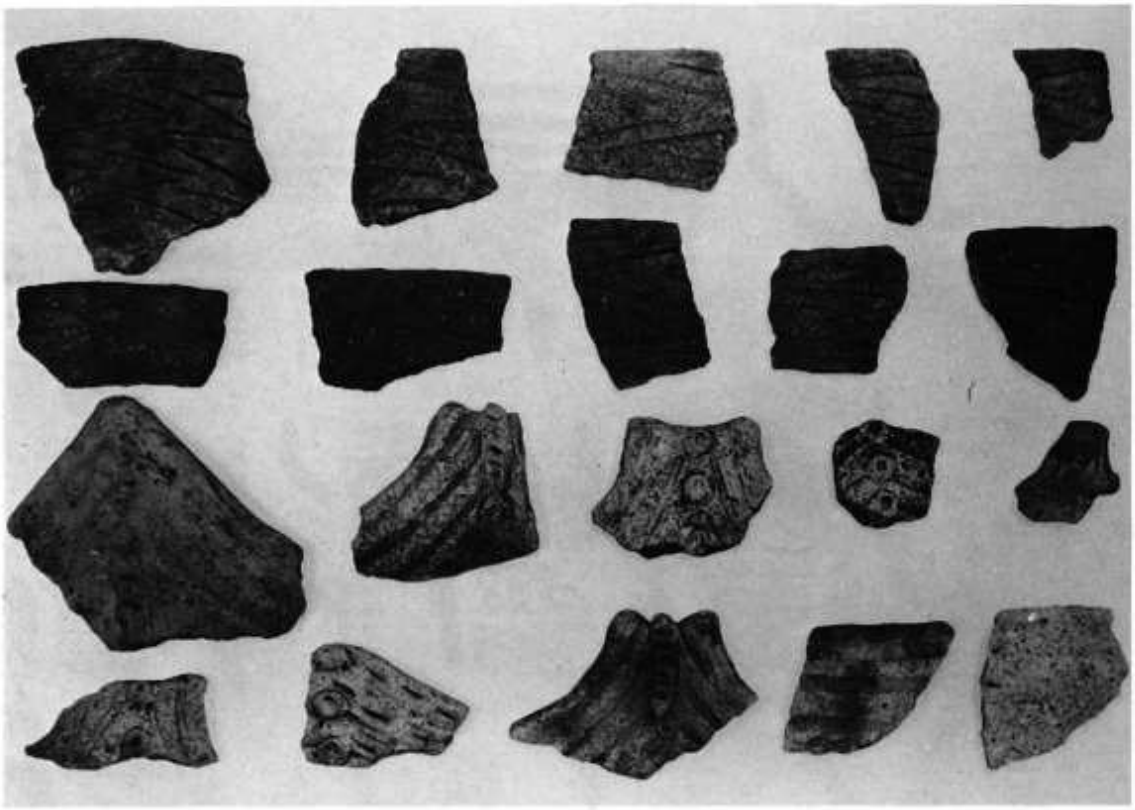
浦谷B VII



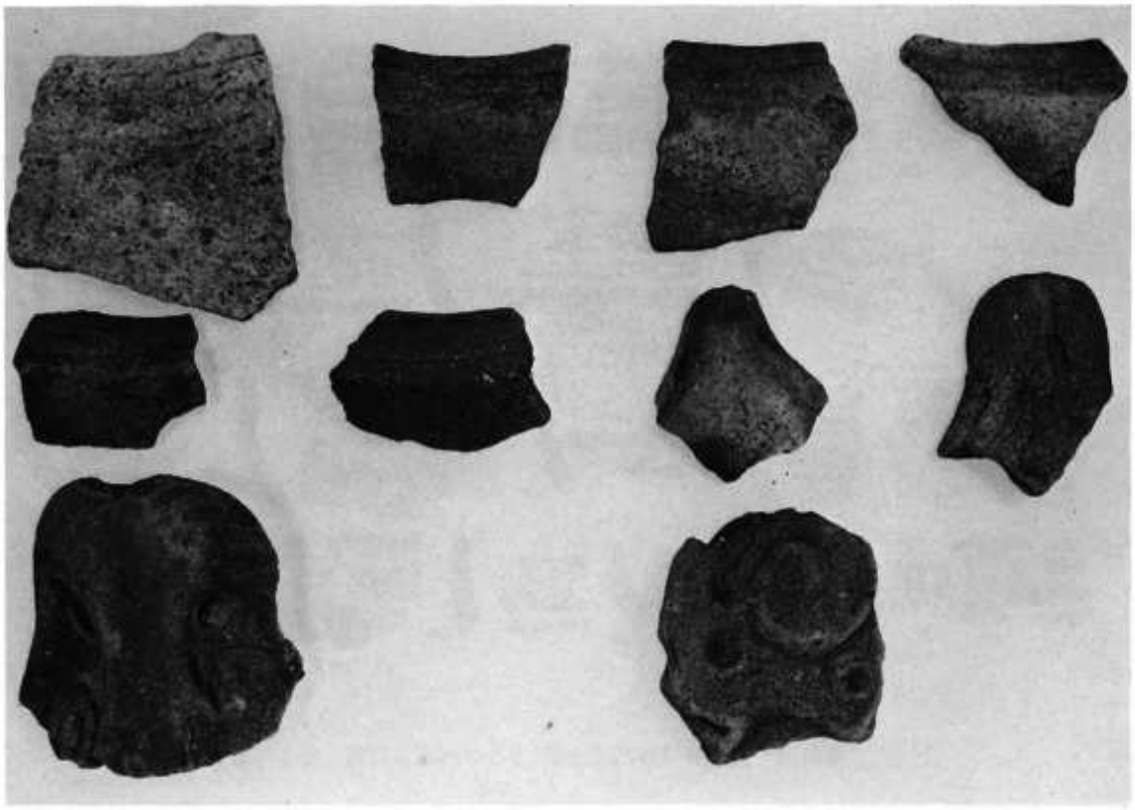
浦谷B VII



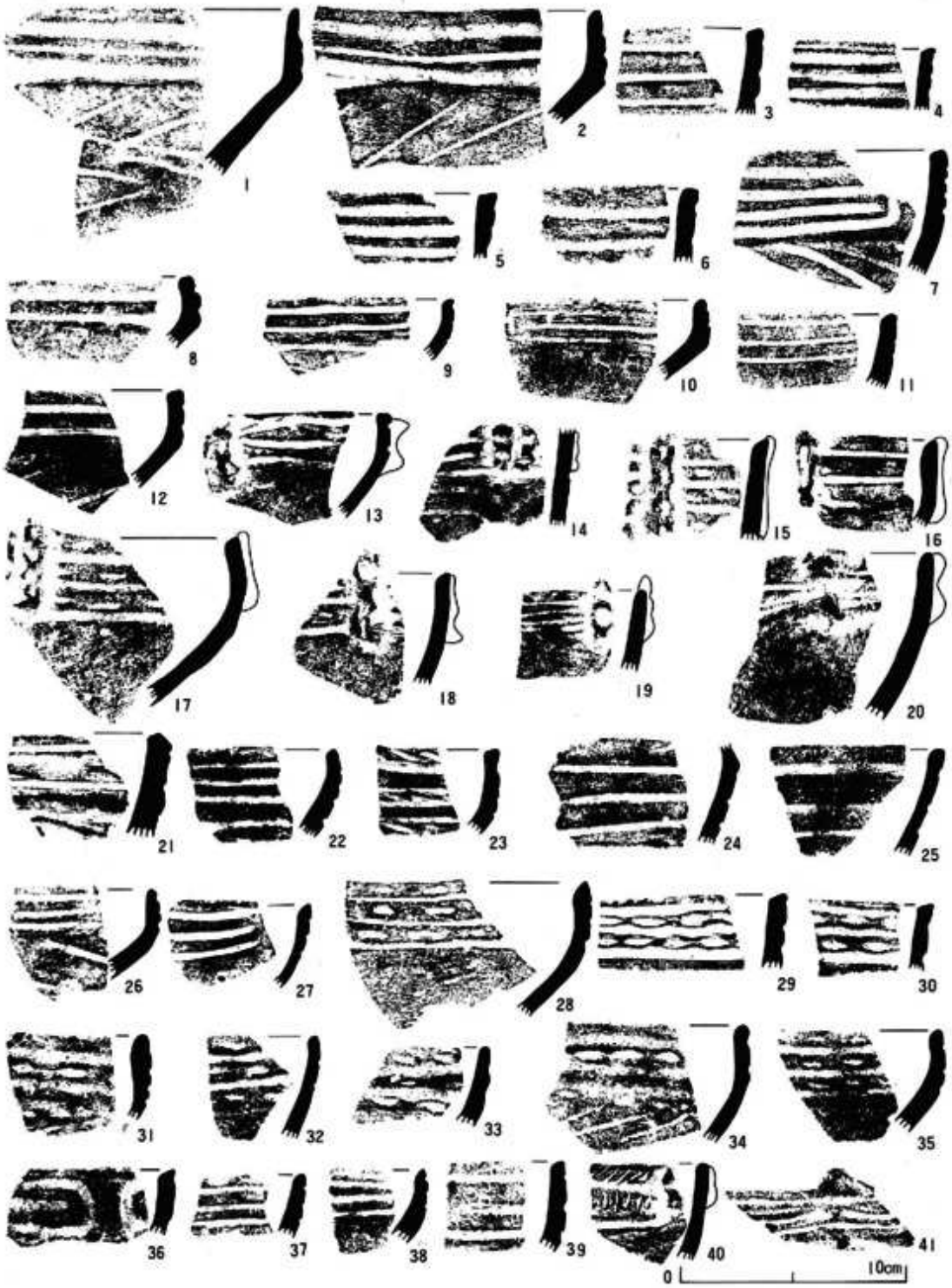
第60図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅦ：㊷1～10、㊹21～27、㊼28～29：浦谷BⅧ：㊸11～20〕



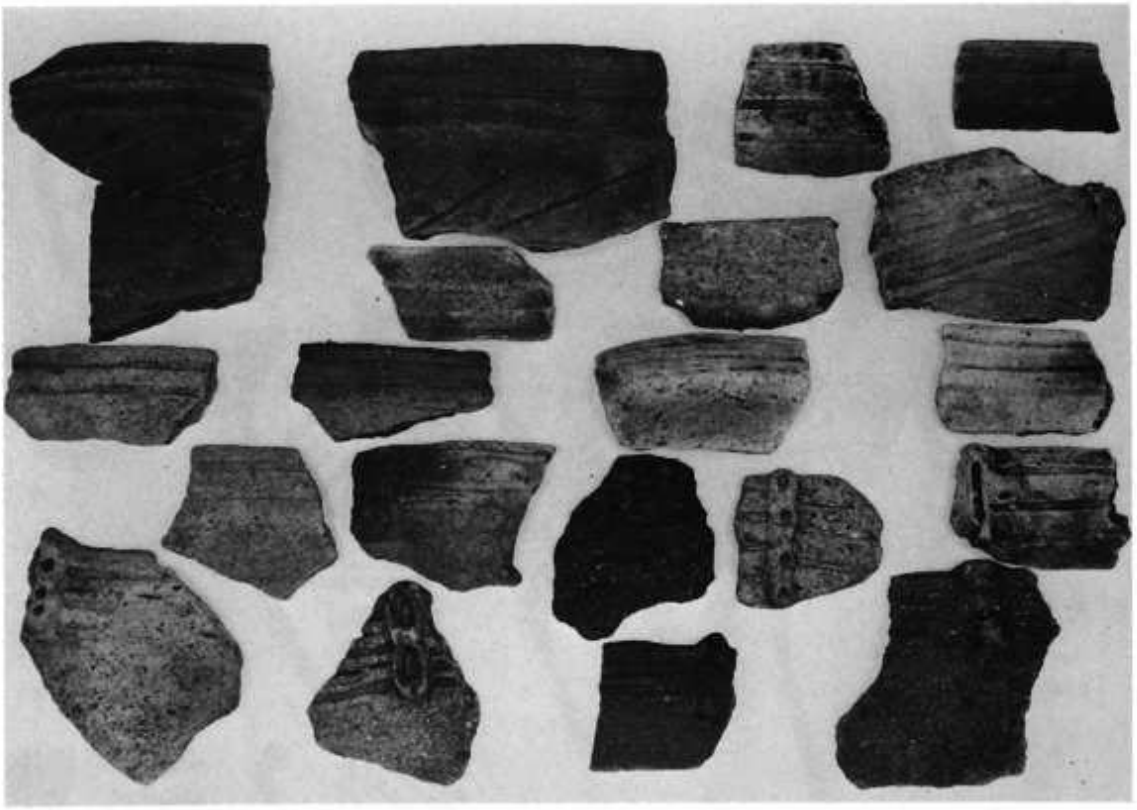
浦谷B VII・VIII



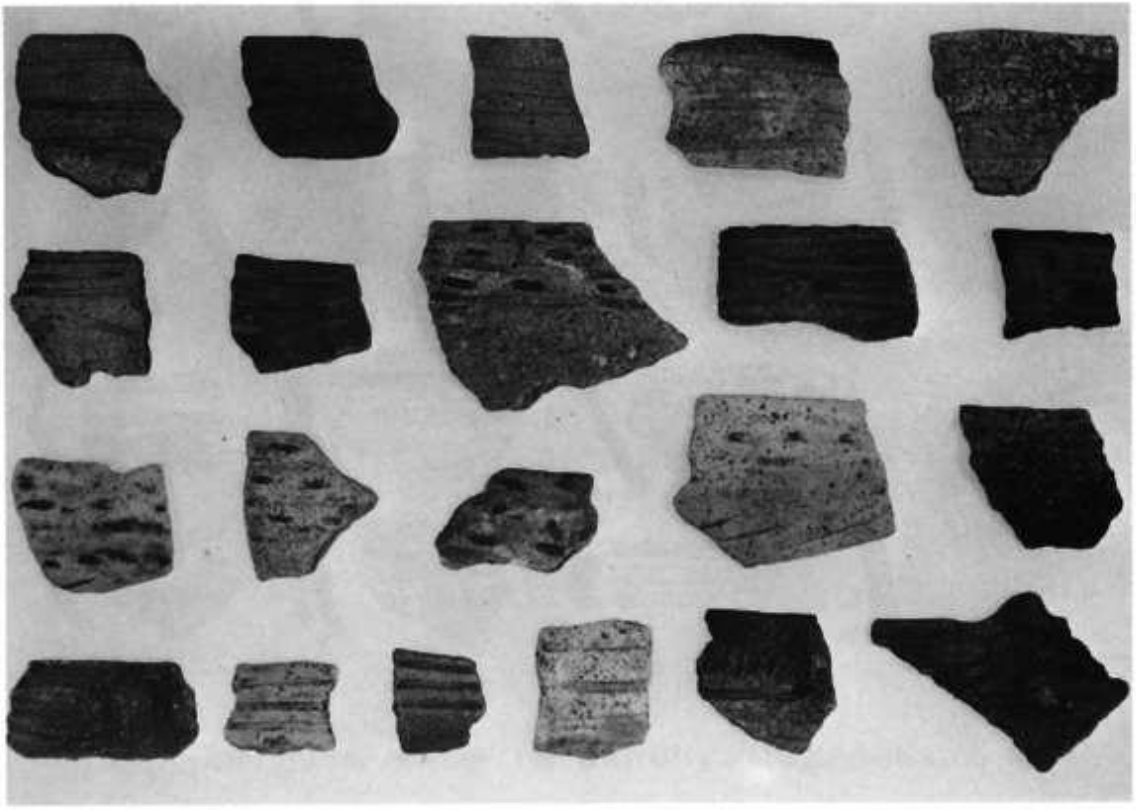
浦谷B VII



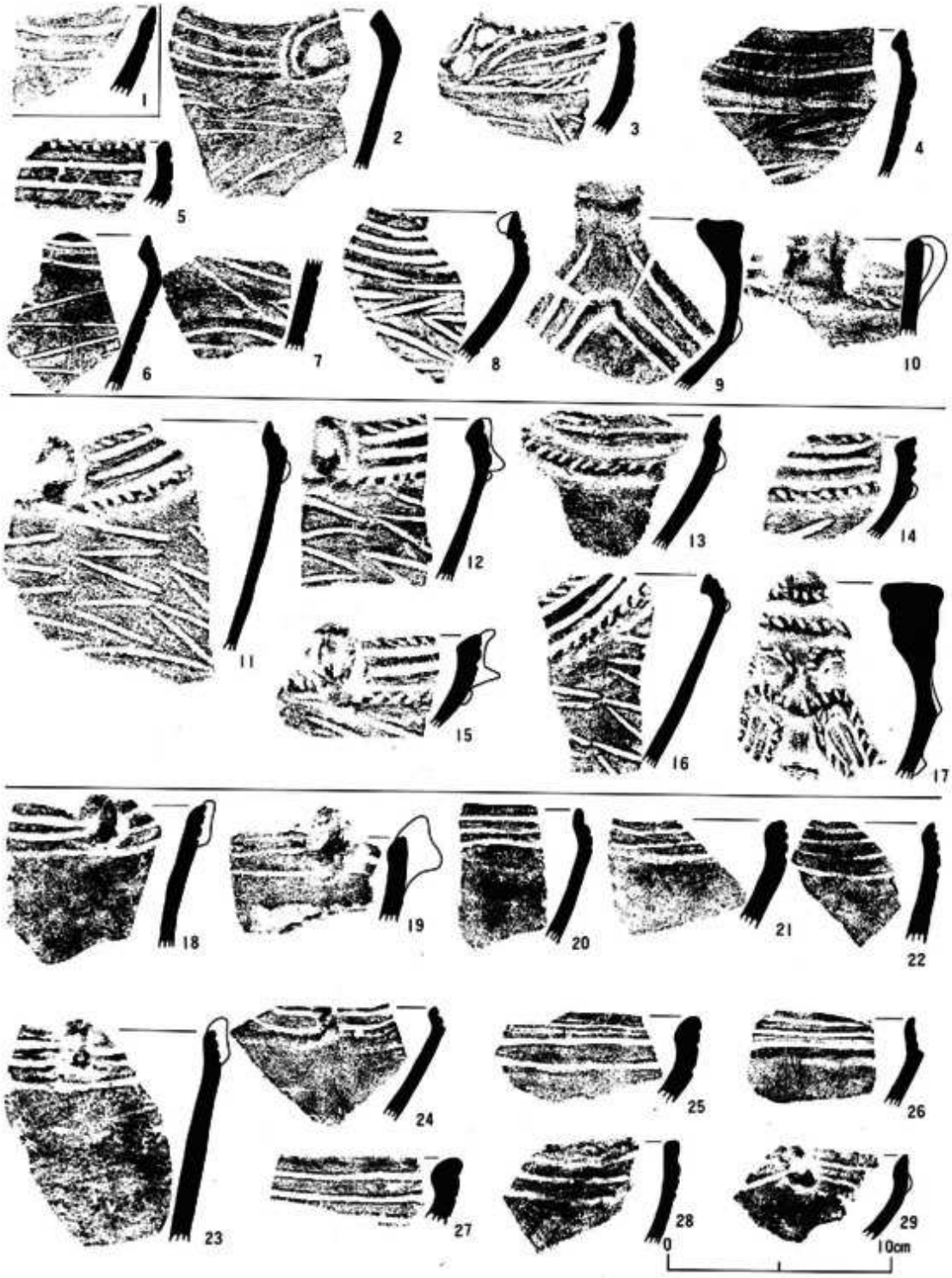
第61図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷B層：㊸1～41〕



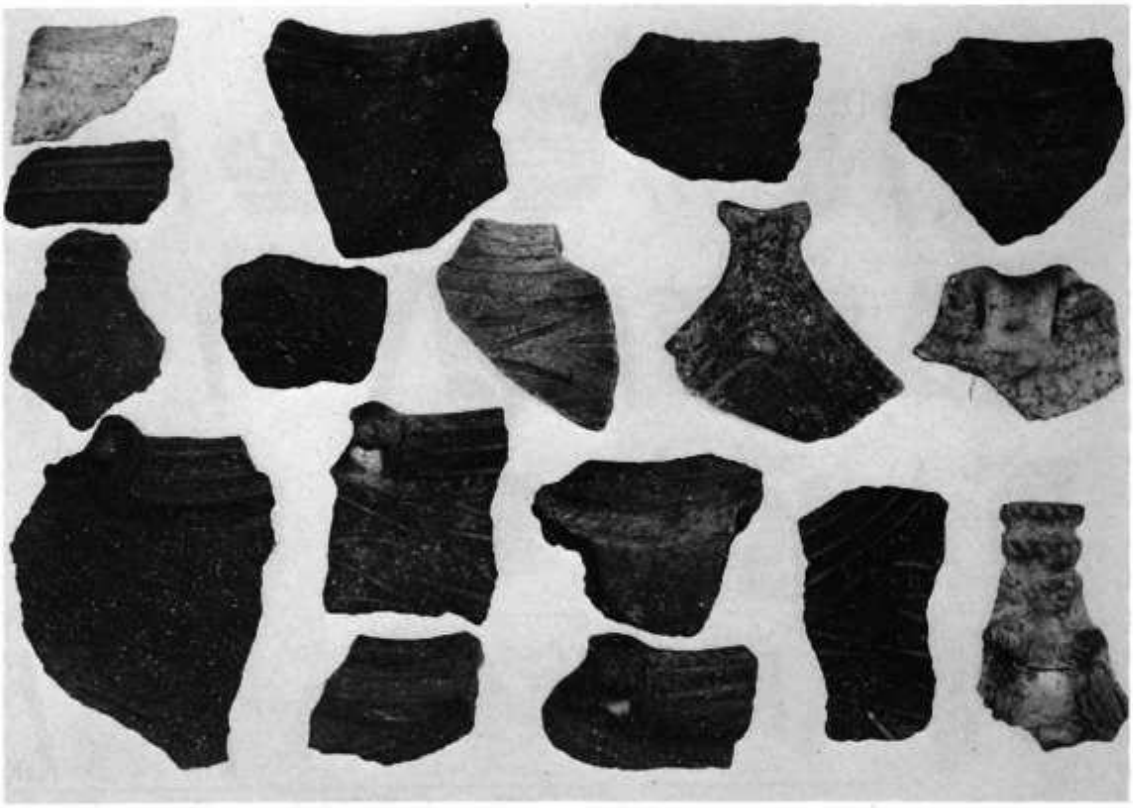
浦谷B Ⅷ



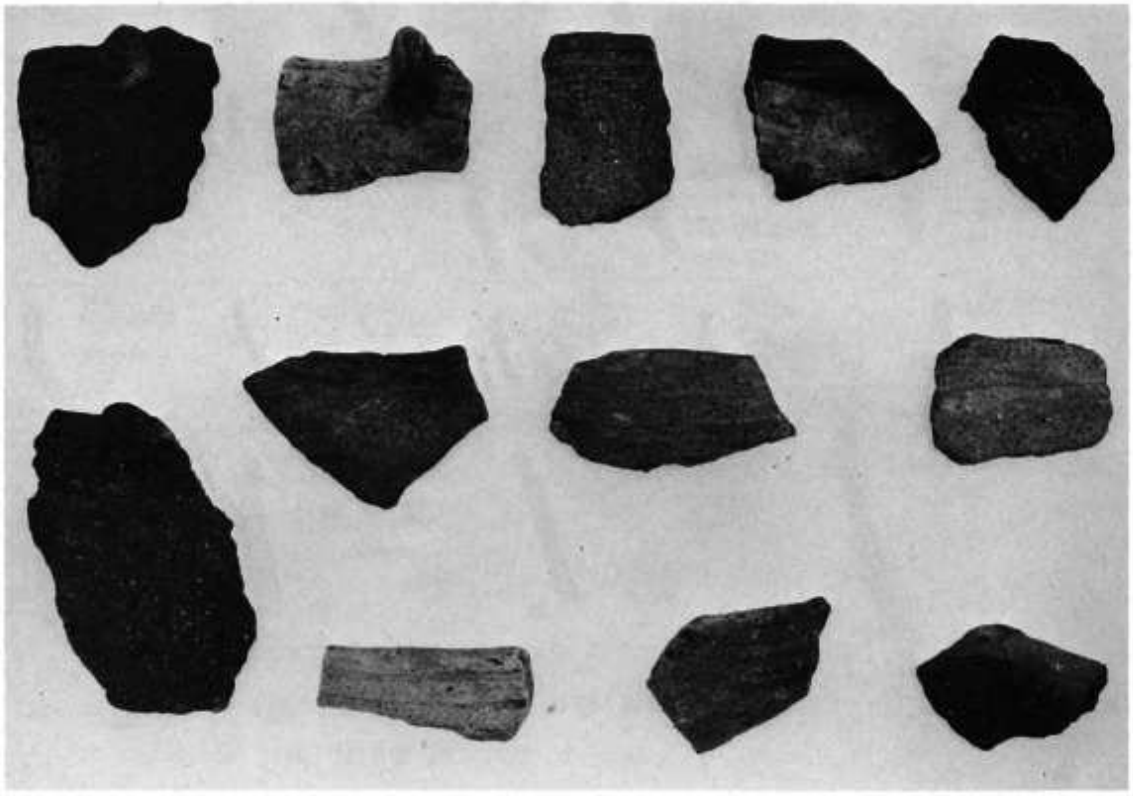
浦谷B Ⅷ



第62図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)〔浦谷BⅧ：㊺1、㊻2～10、浦谷BⅨ：㊽11～17、㊼18～29〕

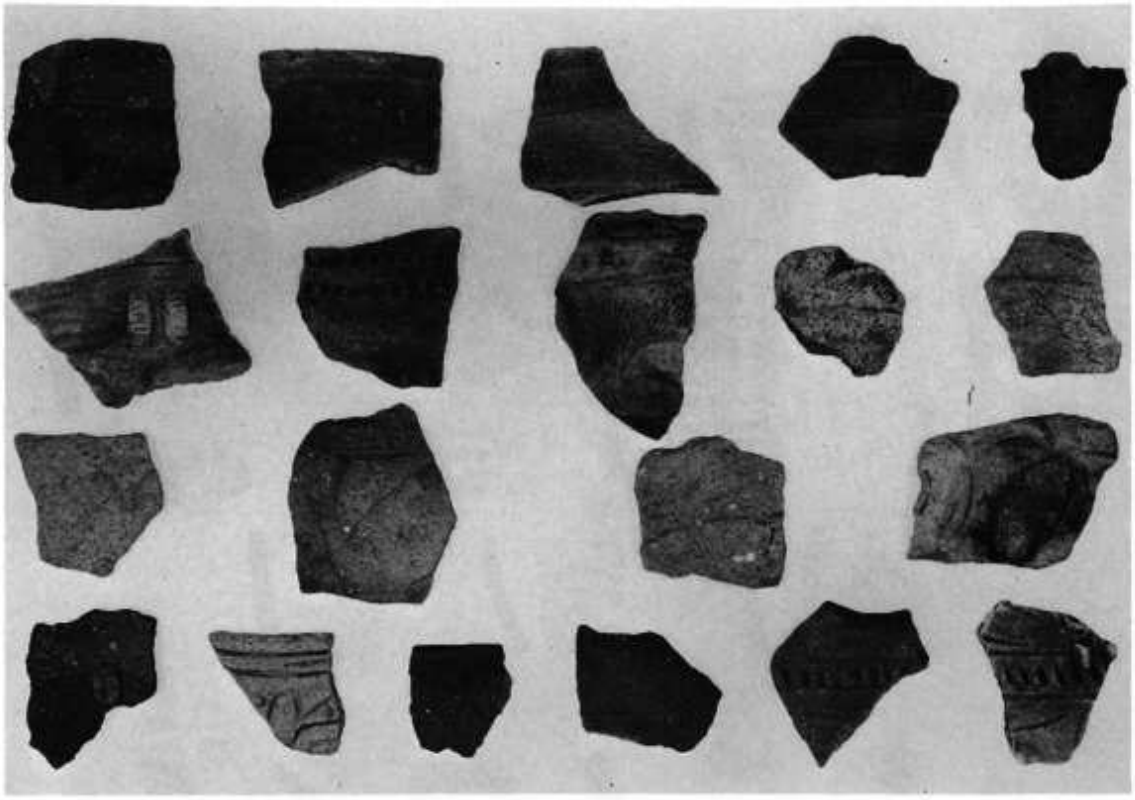


浦谷B Ⅷ・Ⅸ

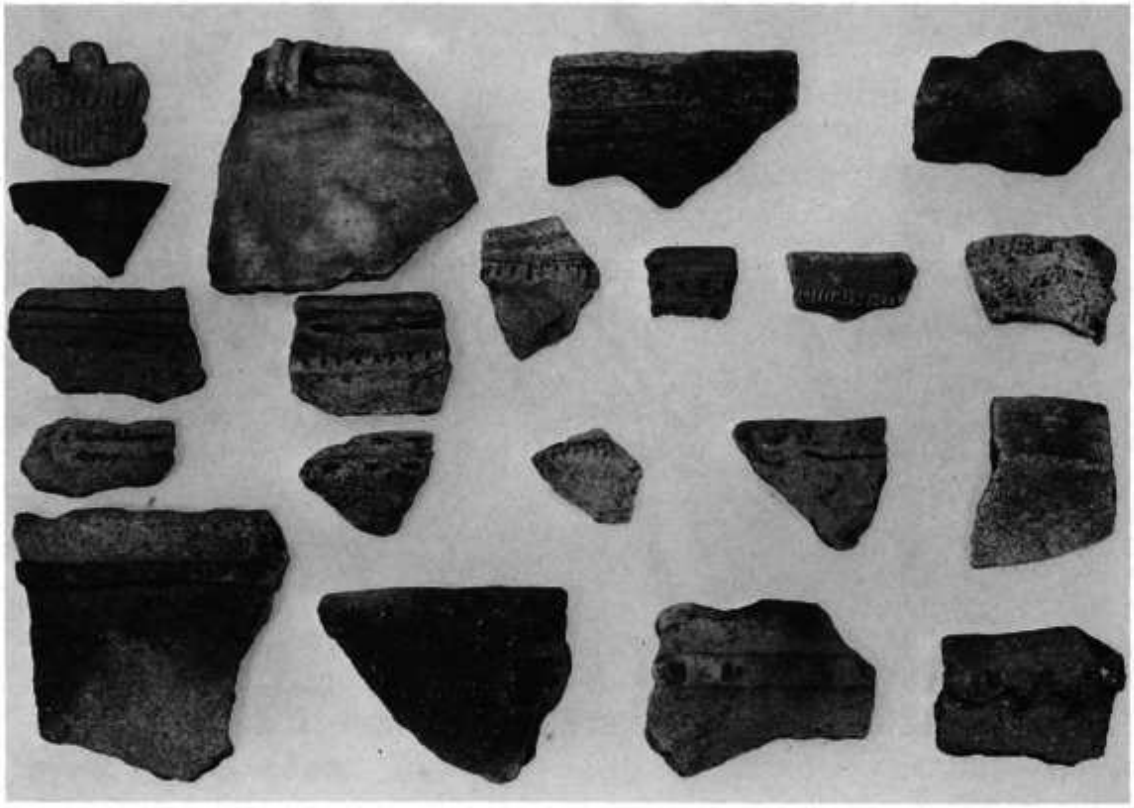


浦谷B Ⅸ

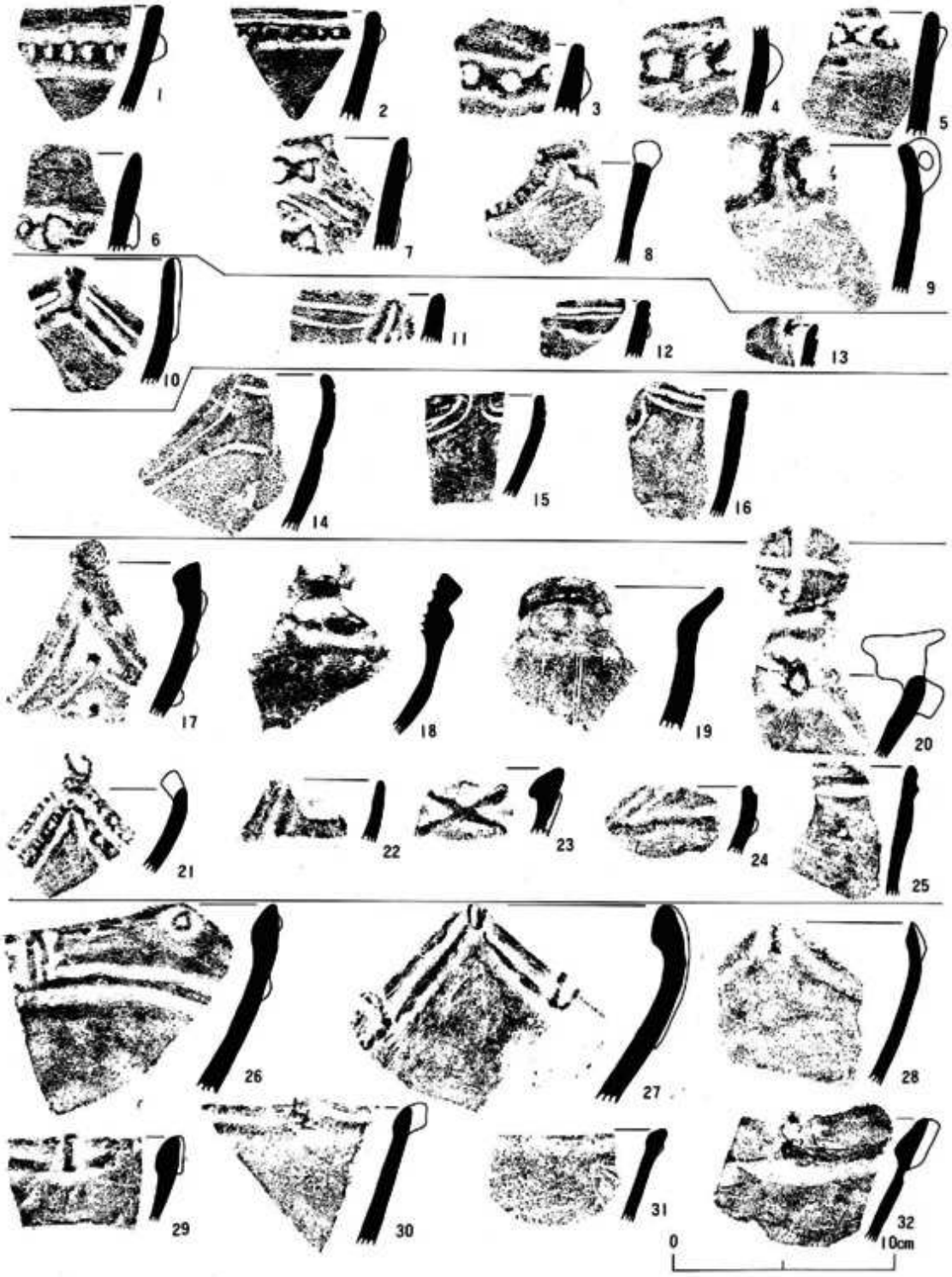
第63図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅧ：㊼1、㊶21～22、浦谷BⅨ：㊽2～14、㊾15～16、㊿17～20、(54)23～31、(55)32～36、浦谷BⅩ：(56)37～40〕



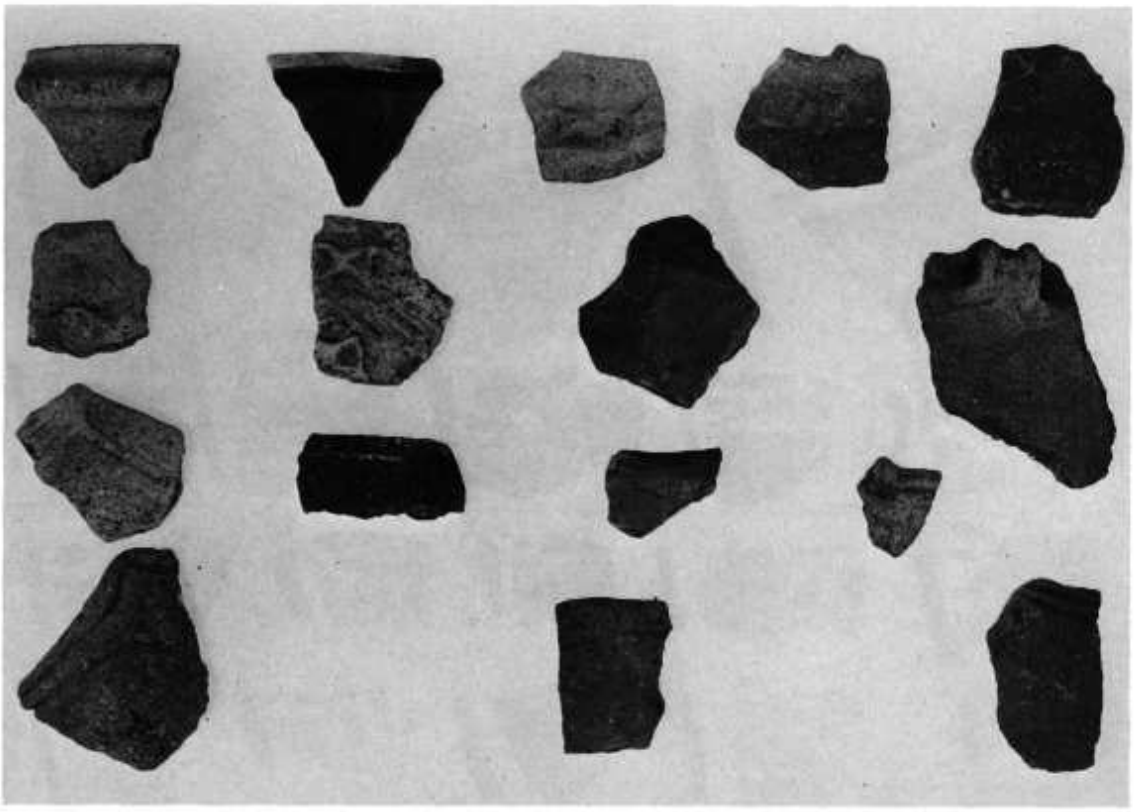
浦谷B Ⅷ・Ⅸ



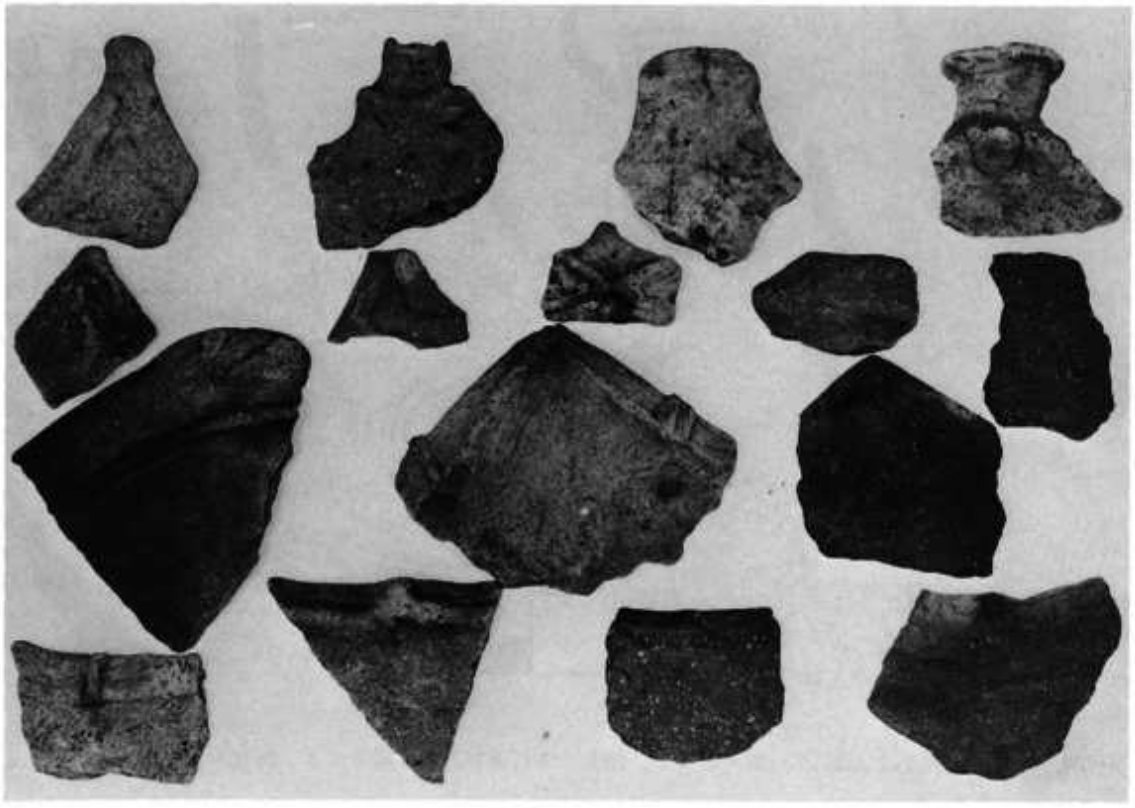
浦谷BⅧ・Ⅸ・Ⅹ



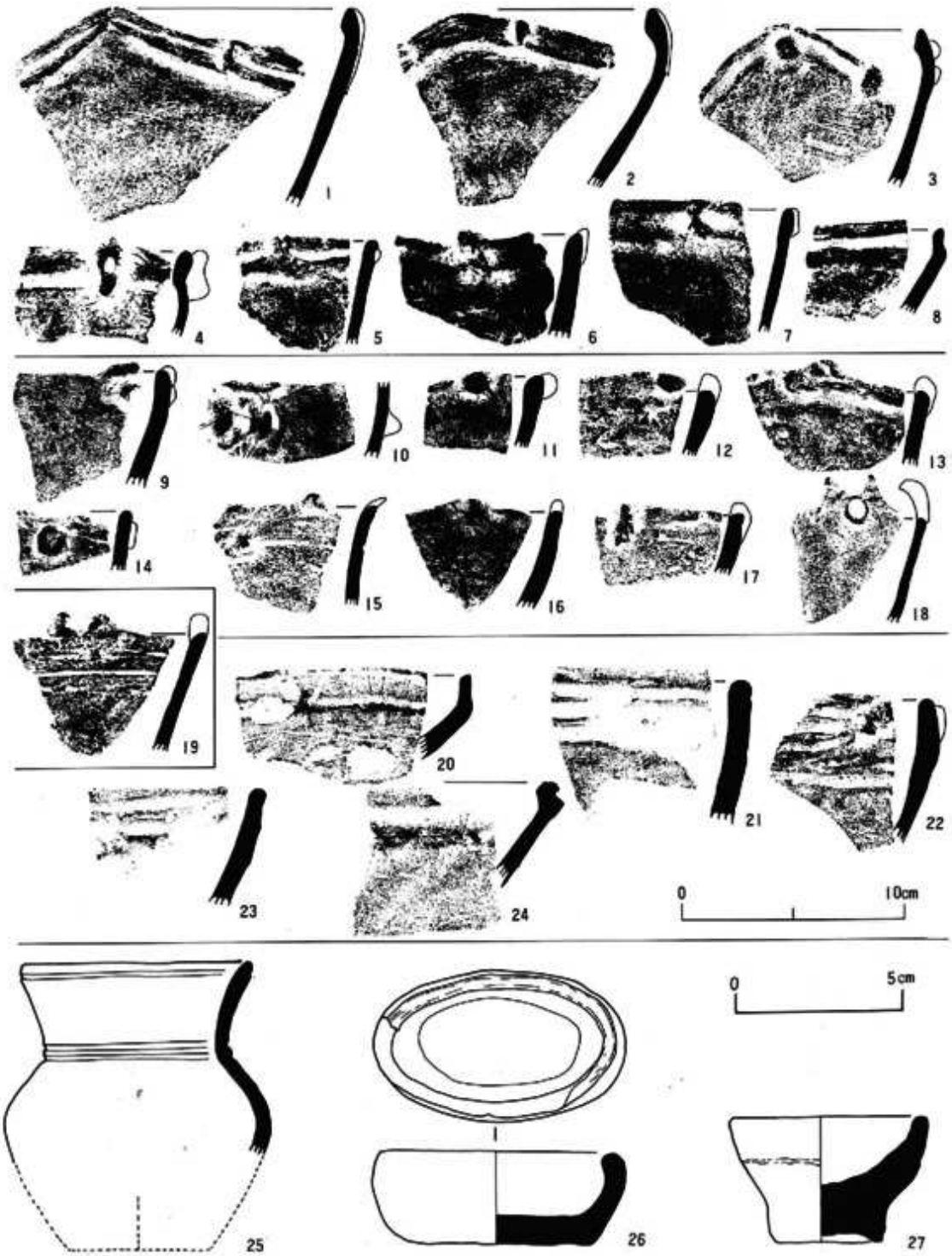
第64図　浦谷B遺跡出土土器（1：3）〔浦谷BⅩ：㊻1～9、㊼10～13、浦谷BⅨ：㊷14～16、浦谷BⅩ：㊾17～25、㊸26～32〕



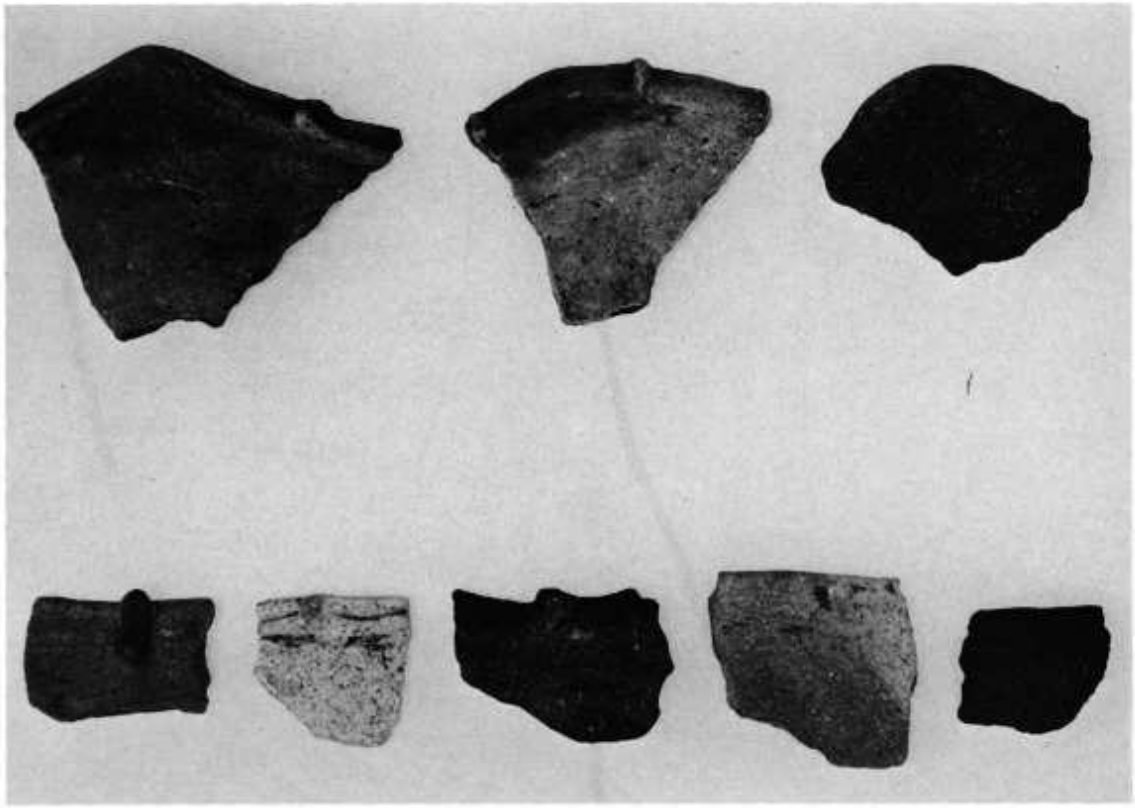
浦谷BX・IX



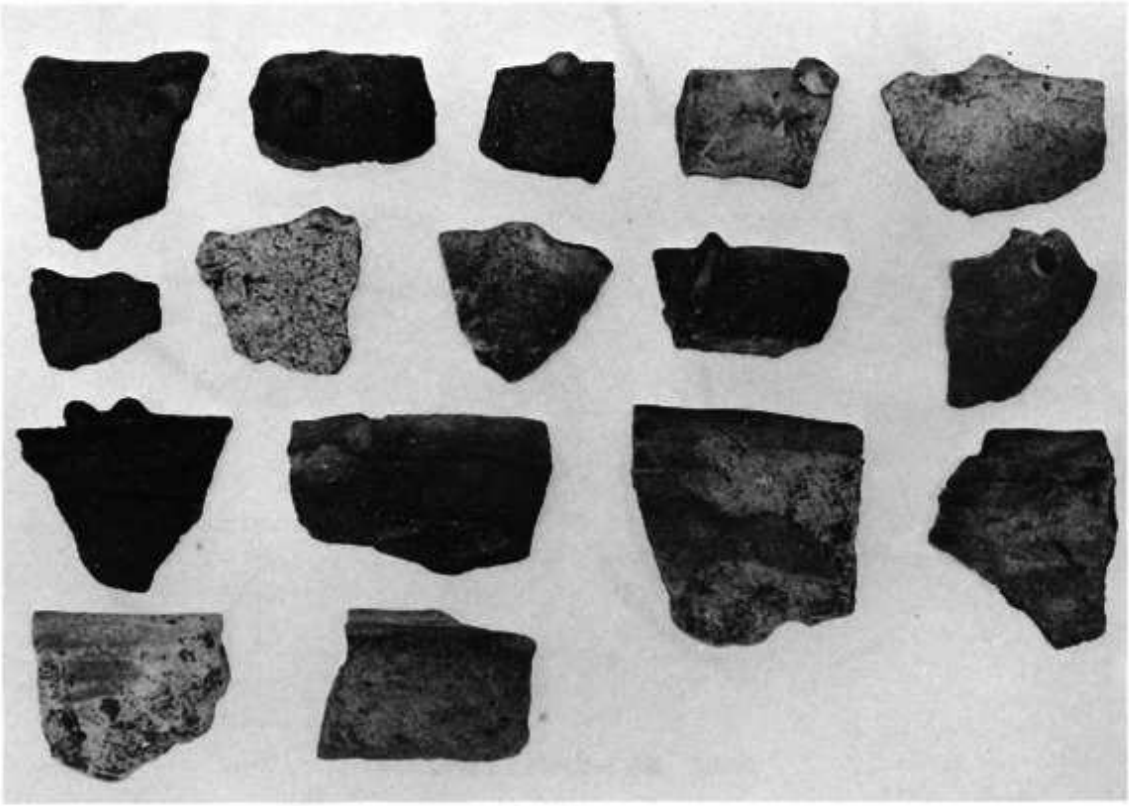
浦谷BX



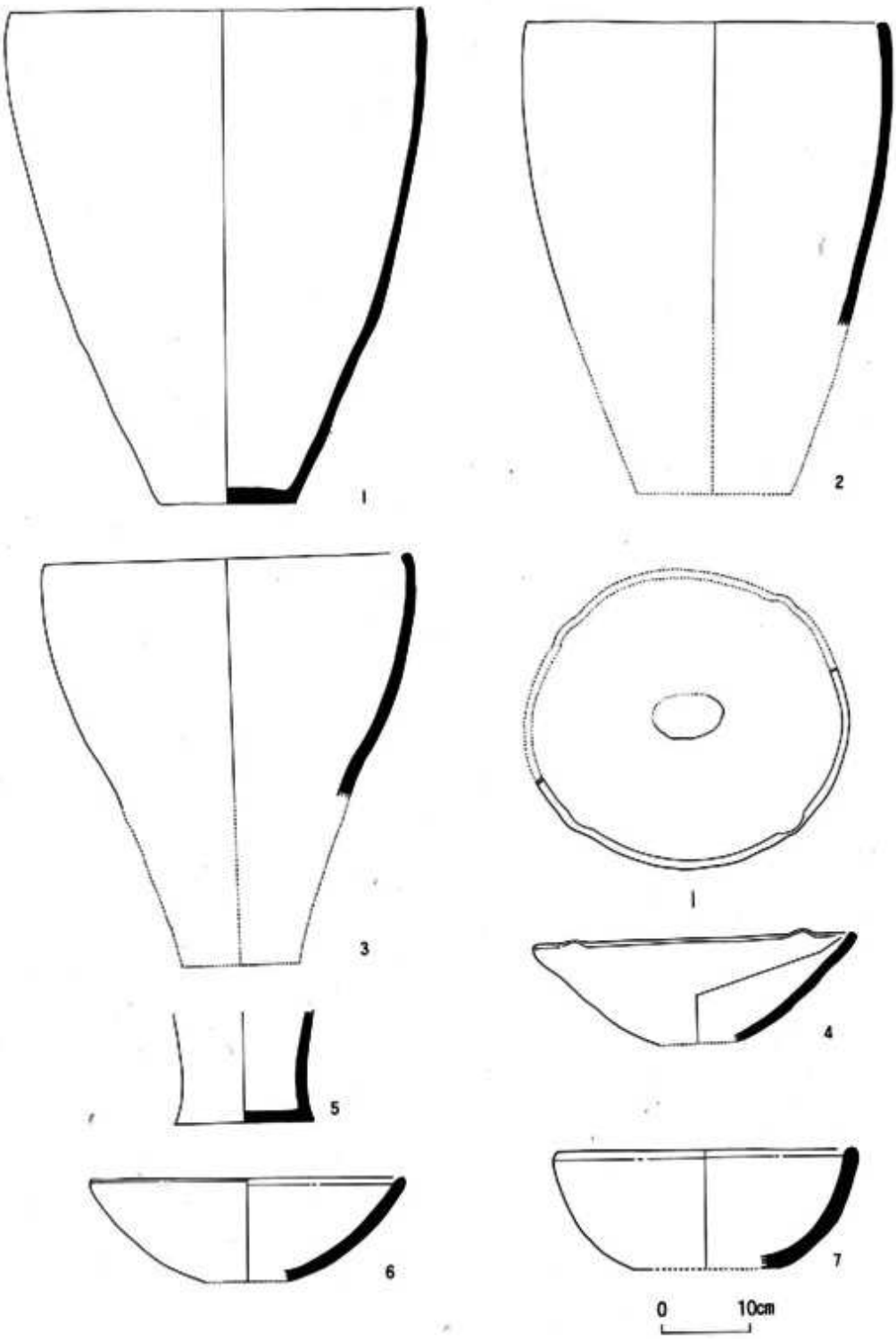
第65図　浦谷B遺跡出土土器(25～27・1：2、他1：3)〔浦谷BⅩ：㉓1～8、㉔9～18、㉕19、㉖20～24〕



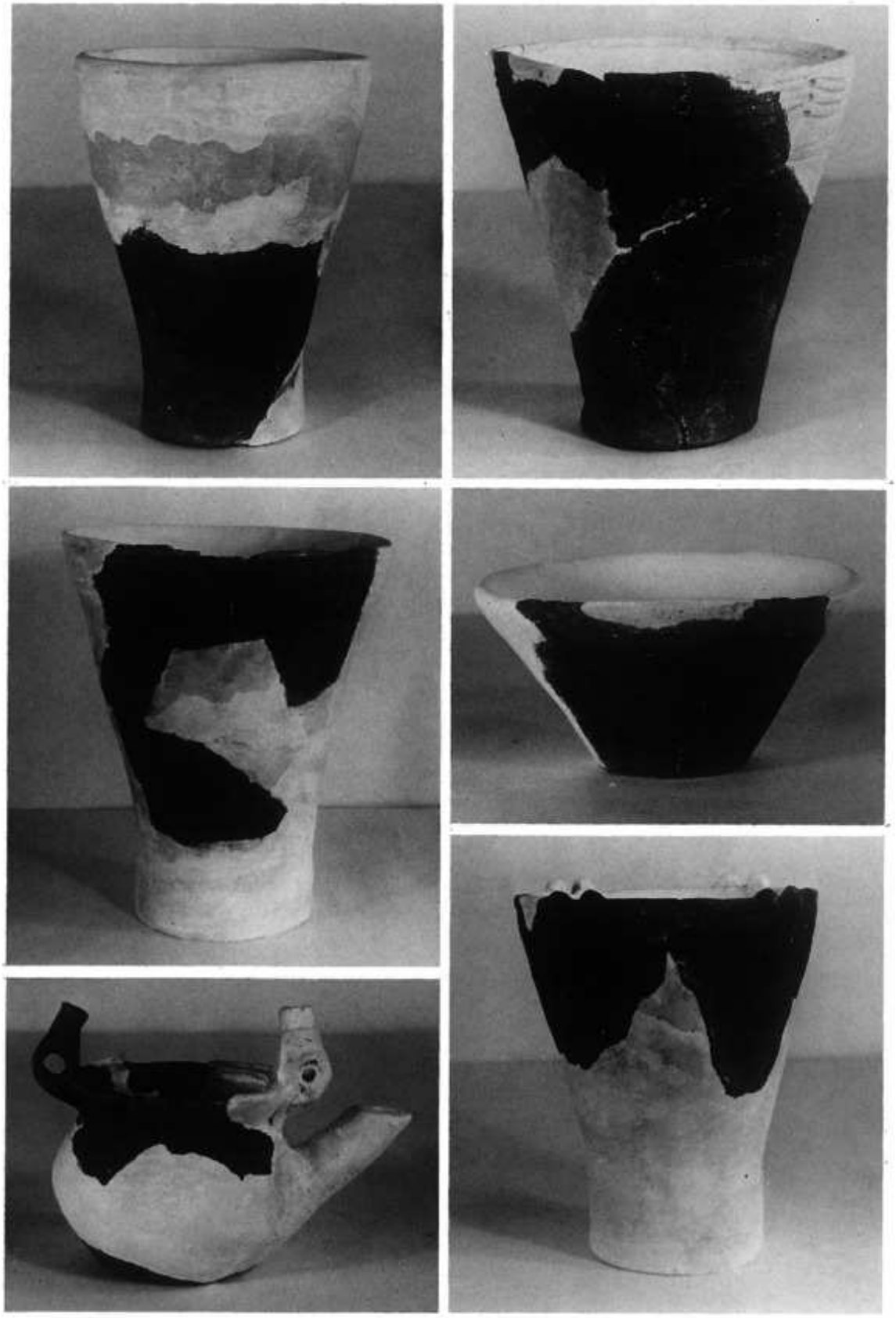
浦谷BX



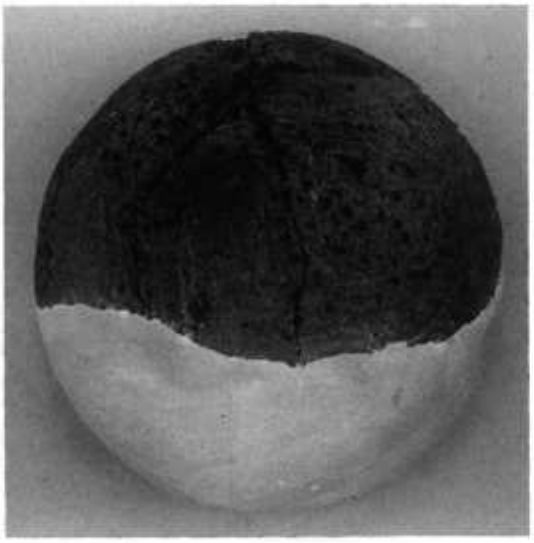
浦谷BX

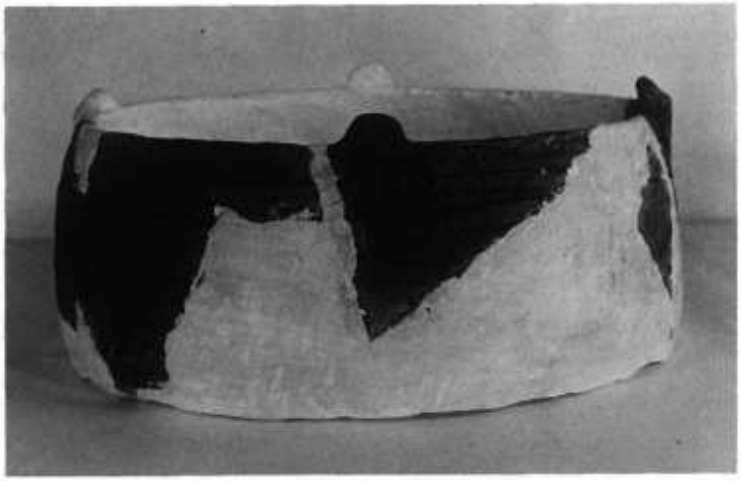


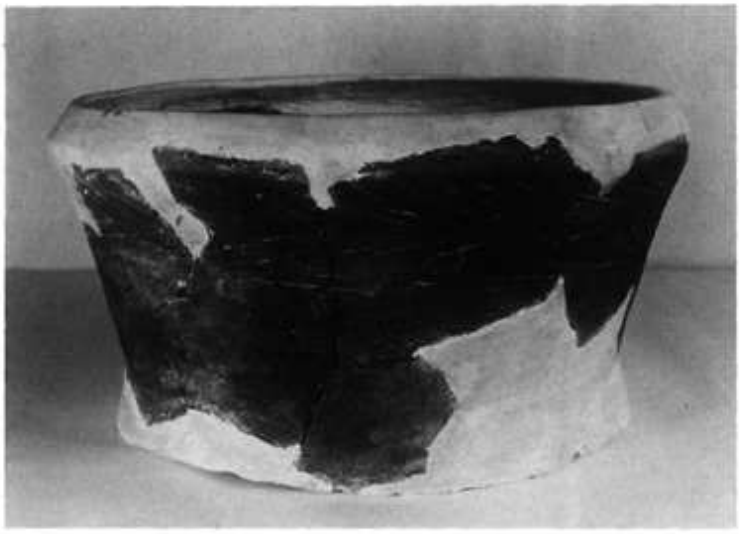
第66図　浦谷B遺跡出土土器(1：3)



浦谷B遺跡土器

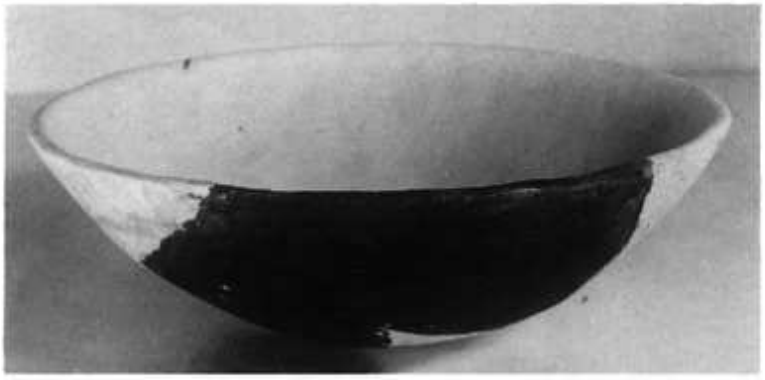




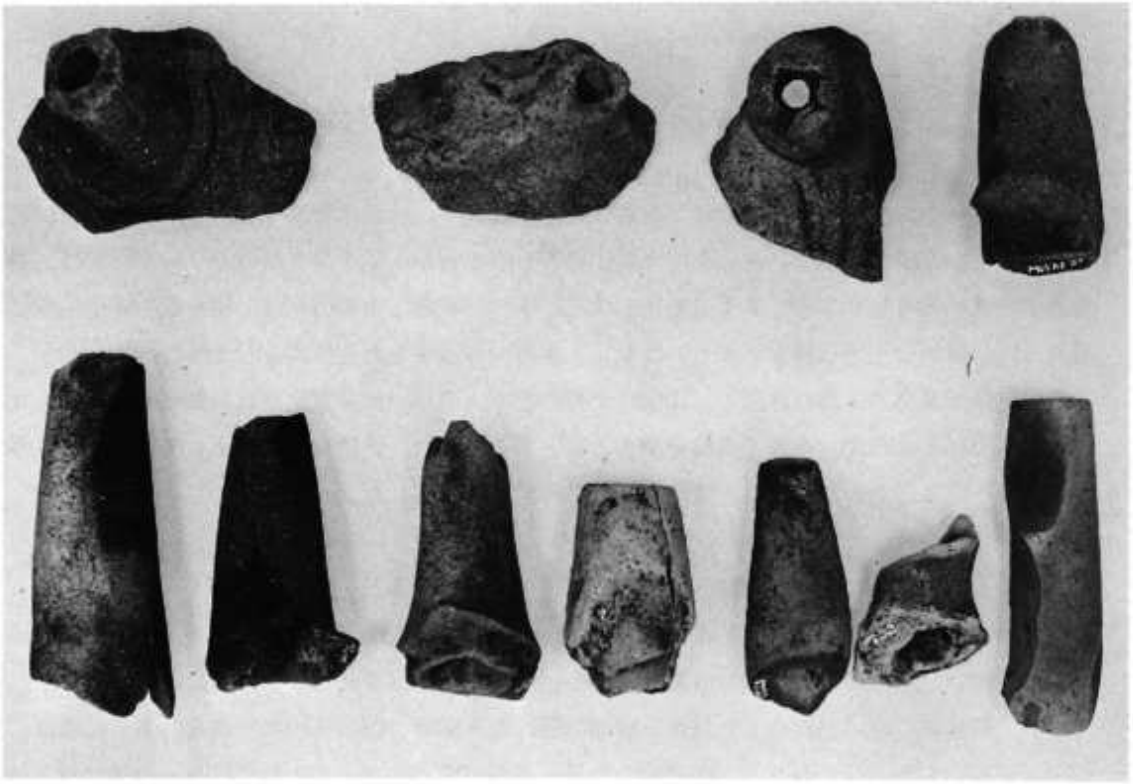


浦谷B遺跡　土器

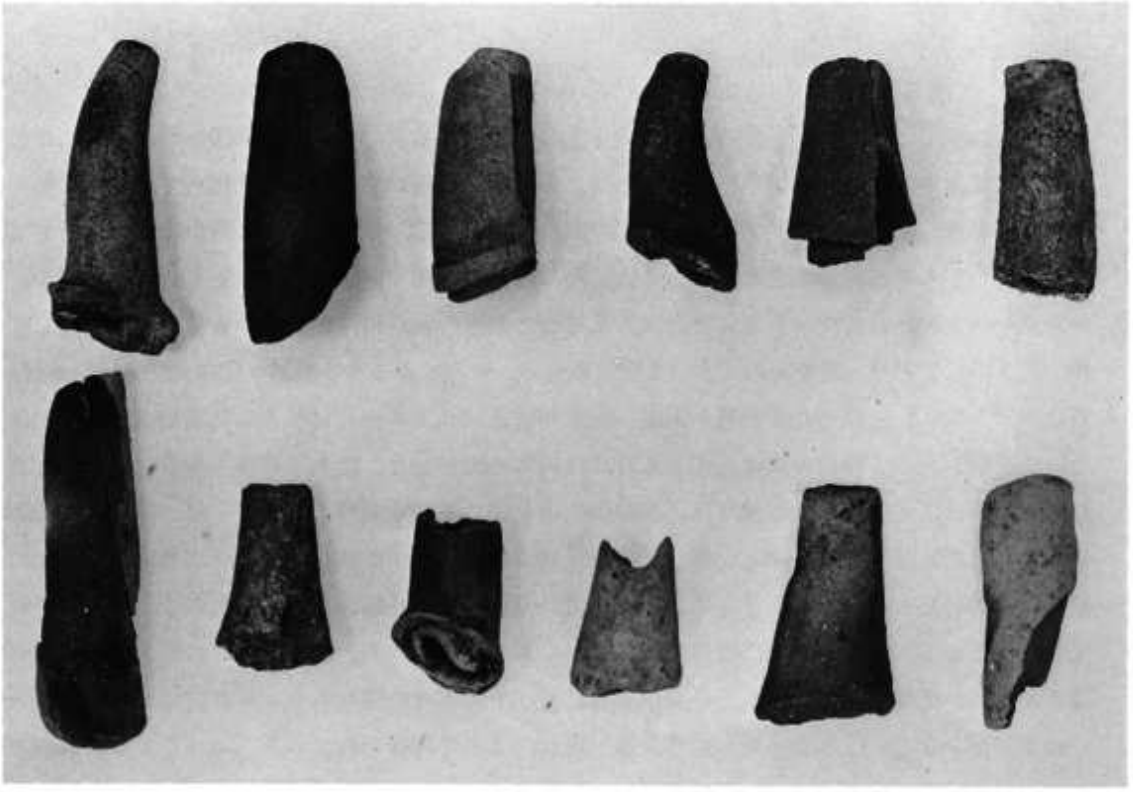
浦谷B遺跡　土器



浦谷B遺跡　土器



浦谷B遺跡　土器



浦谷B遺跡　土器

第４節　縄文時代の土製品

浦谷Ｂ遺跡から出土した土製品は、土偶24点、耳飾27点、環状土製品１点、土製円板353点で、さらに名称が不明のものや、明らかに土器以外のものとわかる破片などがある。出土状況は、遺物集中地点が最も多く、特に第１遺物集中地点に多い。耳飾と土製円板は、第６遺物集中地点に目立った。特別な出土状態を示すものはなく、土器や石器などと共に混在していた。

なお、顔面装飾の土器口縁部と、同様に土器の把手（突起）が抽象化された顔面の装飾になっているものがあるので、本節で概略を示すこととする。また、岩偶が１点出土しており、石製品として扱うべきであるが、土偶と性格が近いため、本節に示した。

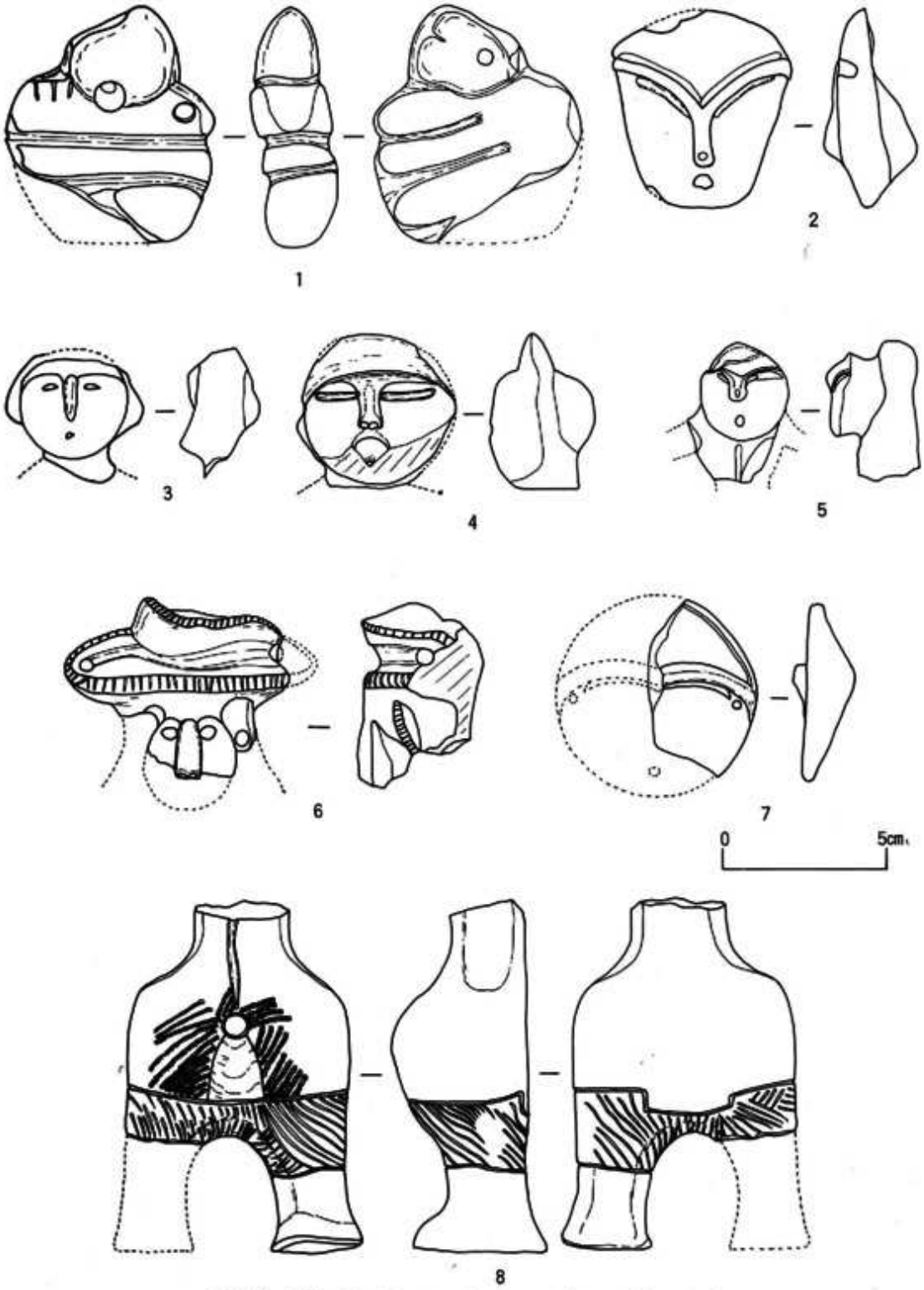
1)、岩偶（第67図１、図版92）

岩偶は１点出土した。高さ7.2cm、最大幅6.4cm、最大厚2.4cm を測る。胴部の１部から片足にかけて欠損しているが、他の部分は良好である。頭部と胴部はすり切り状の溝によって区別されており、前面の口位に当る部分と肩部、背面の目に当る部分に円形状の凹がある。さらに溝は、胸部と腰部に入れられており、人体部位の表現をさらに明らかなものにしている。全体に磨きがかけられ、石の自然面は残されていない。人体の抽象的な表現とも受け取れる。

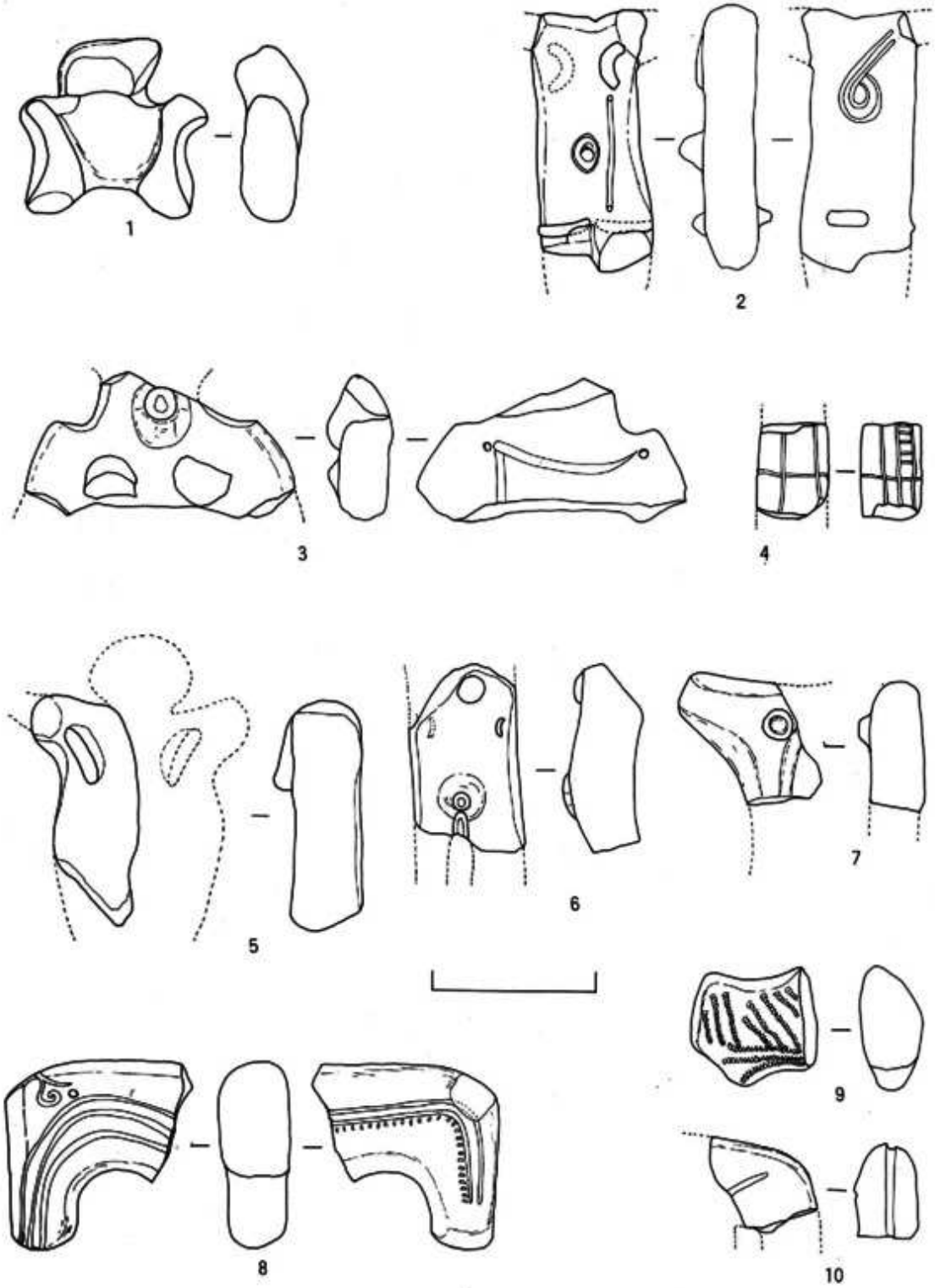
蓼科山北麓地域では、立科町の下屋敷遺跡に次いで２点目の出土である。

2)、土偶（第67図２～８、第68図１～10、第69図１～４、図版92～94）

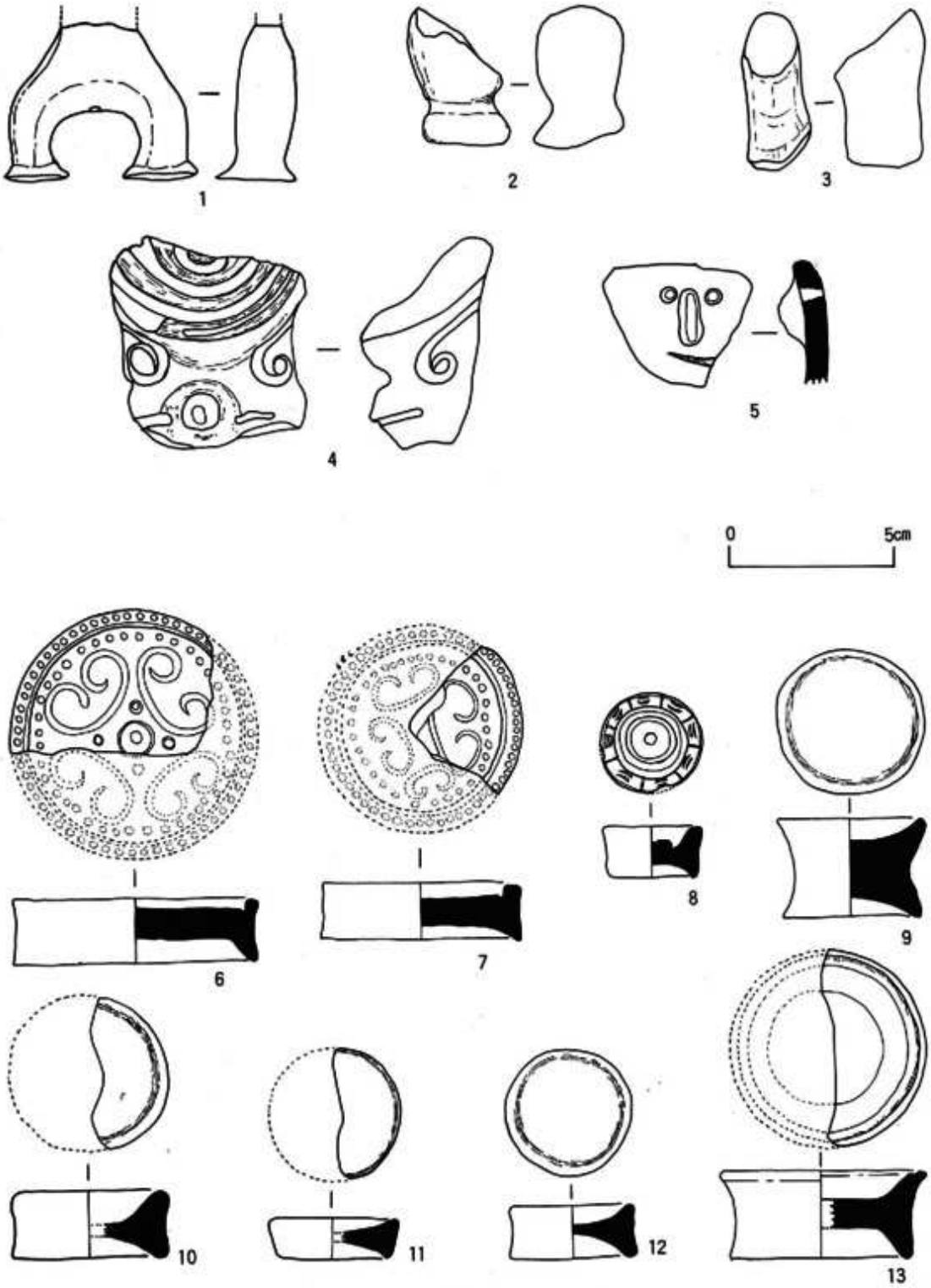
土偶は24点出土しており、そのうち主要なものを図示した。このうち顔面部が７点あり、その他は、胴部や手、足などである。第67図２は、顔全体が黒色研磨されており極めて丁寧な調整を行なっている。頭部背面に、半球形の粘土の貼り付けがある。３は、非常におだやかな顔をしており、髪型とも思われる表現がある。４は、厚みのある土偶で無表情の顔をしている。髪型か、かぶりものと思える表現がある。背面は、半球形の粘土の貼り付けがある。５は、胴部に対して顔が突き出しており、面装着のようにも受け取れる。おどけるような表情が印象的である。６は、頭に蛇（マムシ）と思われる表現がある。かぶり物というより蛇と見た方が当を得ているのではないかと思われる。側面に表現している耳には円形の凹があり、恐らく耳飾を着装していると思われる。頭には蛇、耳には耳飾りと、当時の生活を感じさせる資料である。７は、ほぼ円形の顔面になると思われるが、半分を欠損している。顔は黒色研磨が成され、背面には半球形の粘土の貼り付けが行なわれており、２と同様の資料である。８は、妊娠体を表わすもので、頭部と片足は欠損している。ヘソを中心に腹部全体が大きくふくらんでいる。また、ヘソの周辺には縄文が施文がされ、妊娠線を思わせる。ヘソから股にかけてＵ字状の溝がある。腰部には、パンツあるいは半ズボンなど、はき物と思われる表現が沈線によって行なわれている。足はややガニ股状で



第67図　浦谷B遺跡出土岩偶(1)、土偶(2～8)(1：2)



第68図　浦谷B遺跡出土土偶（1：2）



第69図　浦谷B遺跡出土土偶(1～4)、顔面装飾付土器(5)、土製耳飾(6～13)(1：2)

あるが、全体のバランスをこれによって保っている。現高で10.6cm、幅6.8cm、最大厚は腹部のところで4.2cmを測り、頭部が欠損しているとはいえかなり大形の土偶である。第68図1は、人体を抽象的表現をした土偶で完形品である。その他第69図4、5を除くものは、胴部、腕、足などの資料で、乳房やヘソ、性器などが表現されている。第69図4は動物的な表状をしており、やや異質の感を受ける。5は、土器の口縁部に表現された顔である。

時期は、縄文時代後期以降晩期初頭で、当時の生活を物語る重要資料である。

3)、土製耳飾（第69図6～第71図8、図版94・95）

耳飾は、完形、破片を含めて27点出土している。このうちできる限り図上復元を行なった。これらを分類すれば7種に区分できる。

A……環形にブリッジを装着したもので、製作方法は、円形の粘土板に環形部を巻き付けるものである（第69図6・7）。ブリッジには、中心部に円形刺突が行なわれ、それを中心に雲形文の抽象的表現とも思える文様が施文され、円周部及び環形部に刺突が行なわれている。6と7は、大きさが異なるが全く同じ手法の資料である。

B……Aと同様の製作方法であるが、ブリッジの直径が小さく、環形部の高さが大きいものである（第69図8）。ブリッジと環形の接合部を沈線で一周することにより、ブリッジの中央がやや盛り上がっている。環形部に刻み目と刺突により連続的な文様が施文されている。

C……無文で、A・Bと同様ブリッジに環形を巻き付ける手法をもっているものである（第69図13）。無文であるが表・裏面とも研磨され黒茶褐色をしている。環形部内側に一辺する段をもつ。

D……無孔で臼形のものである（第69図9～12、第70図1～3）。外周部が外反するものや傾斜はするが直線的なもの、内部が浅いもの、深いものさまざまである。

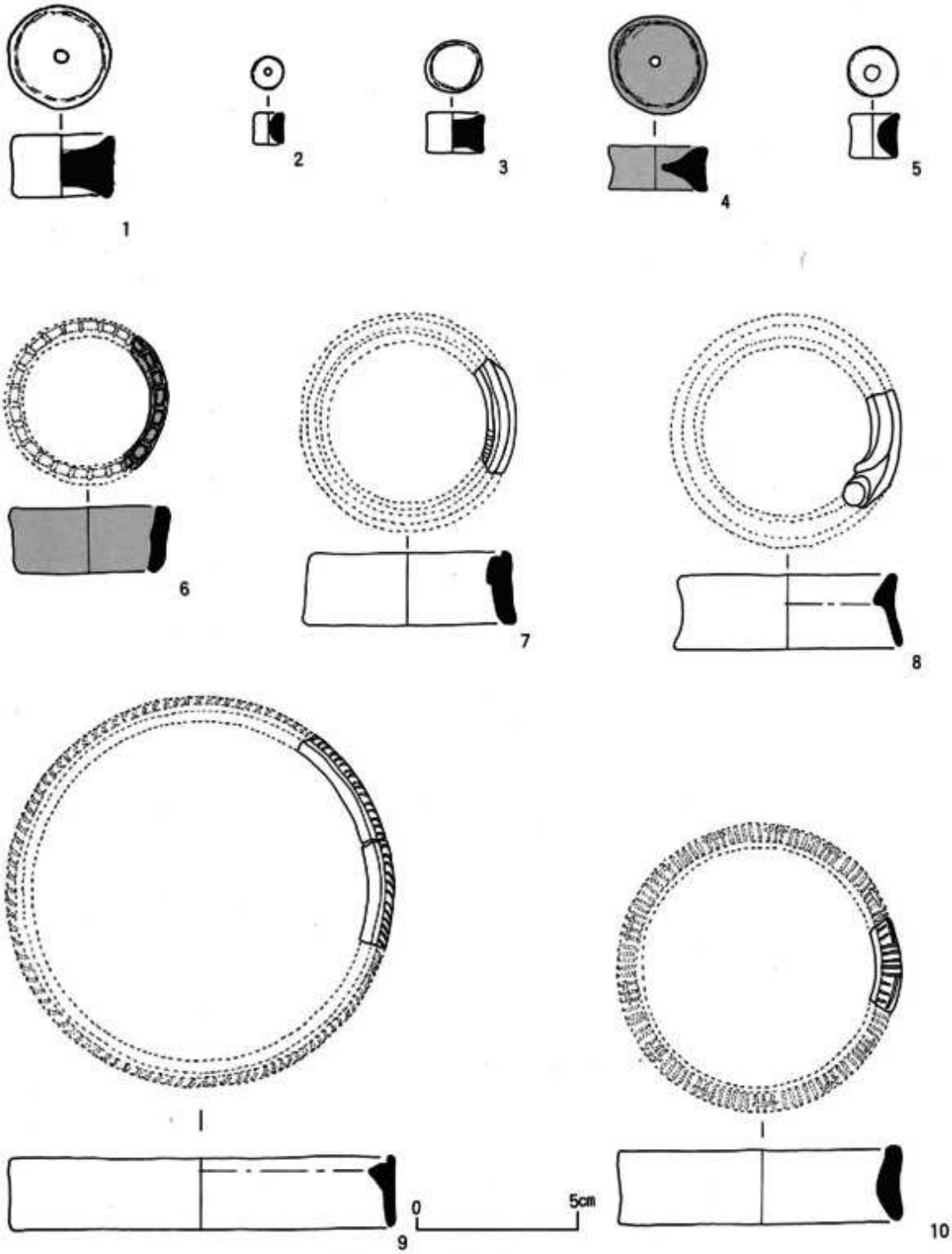
E……有孔で臼形のものである（第70図4、5）。2点だけ出土しており、直径に対して、高さの高いものと低いものの2種である。4は朱塗りである。

F……環形で、断面の一部が中央部に向って突出するものである（第70図7～9、第71図1～2、6～8）。第71図7・8は粗製品で、非常に厚手の資料である。他はかなり丁寧に作られたものが多く、沈線により施文されている。

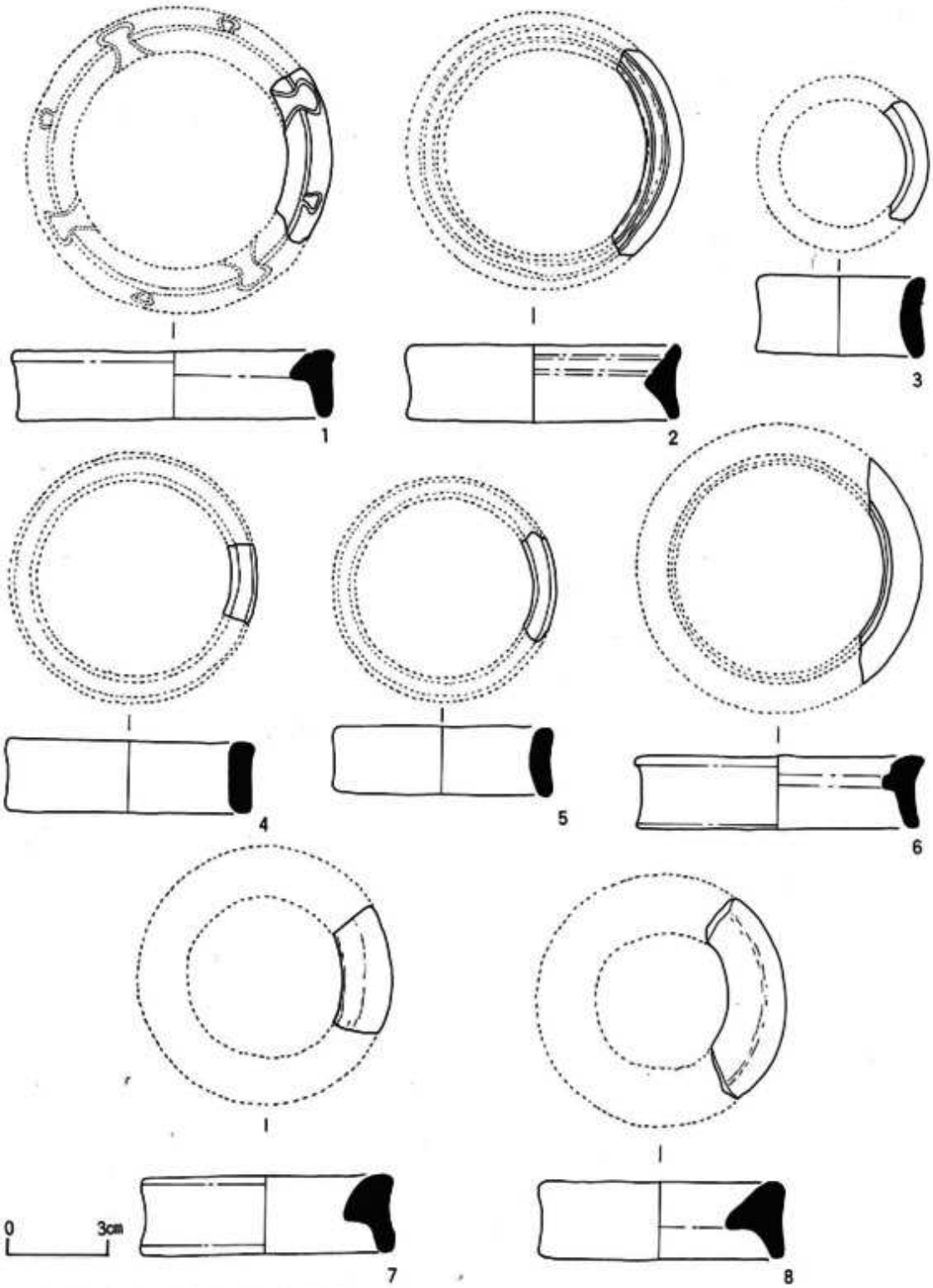
G……環形で突出部等がなく、平担なものである（第70図6・10、第71図4・5）。6、10は沈線により文様が施文され、6は朱塗りである。その他は、文様はないが段状の削りが一周している。

4)、環状土製品

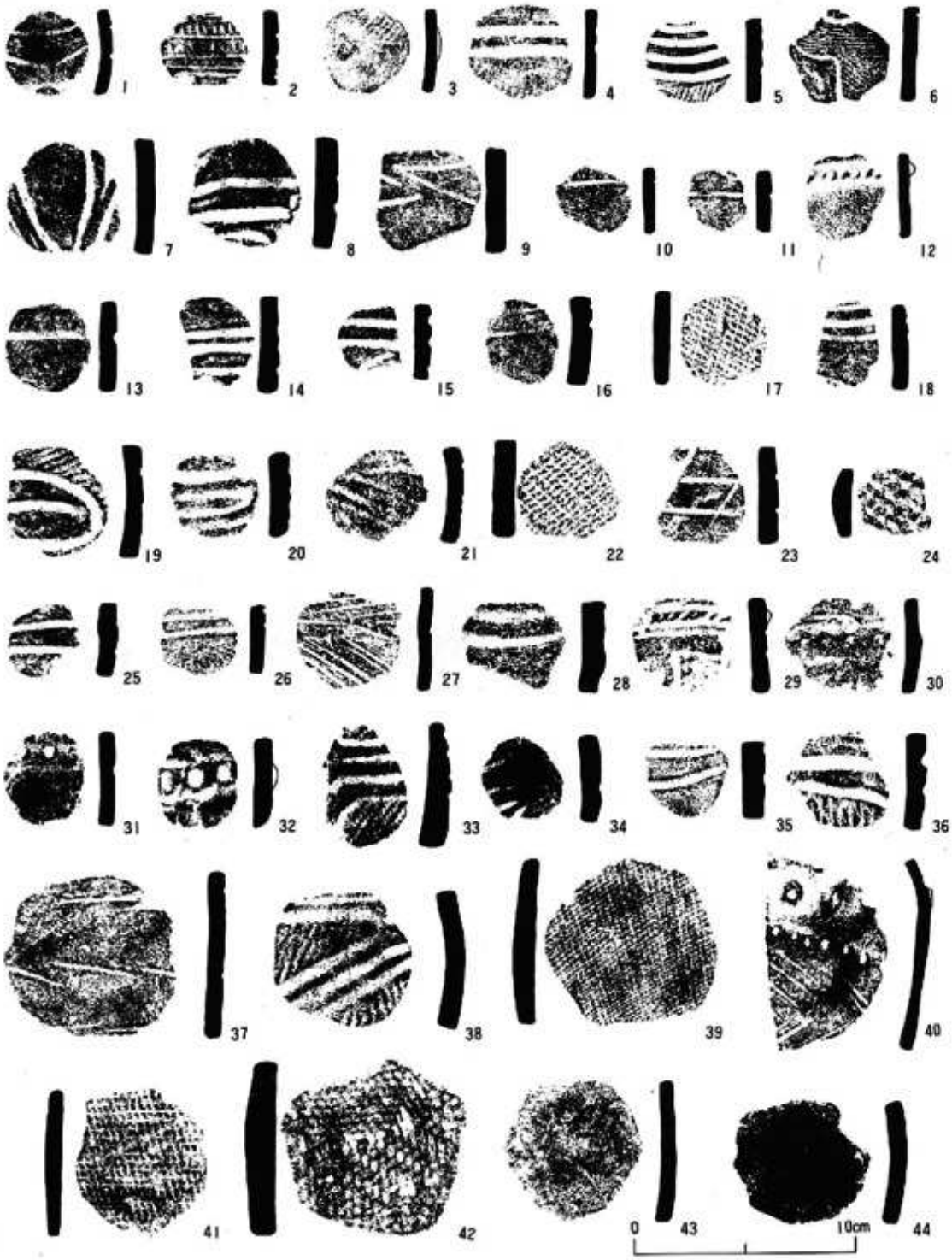
1点だけであるが、断面がほぼ円形を成し、表面は調整の削り痕が行なわれ、全体に丁寧な整形が行なわれている。耳飾りに近い性格のものであると思われる。



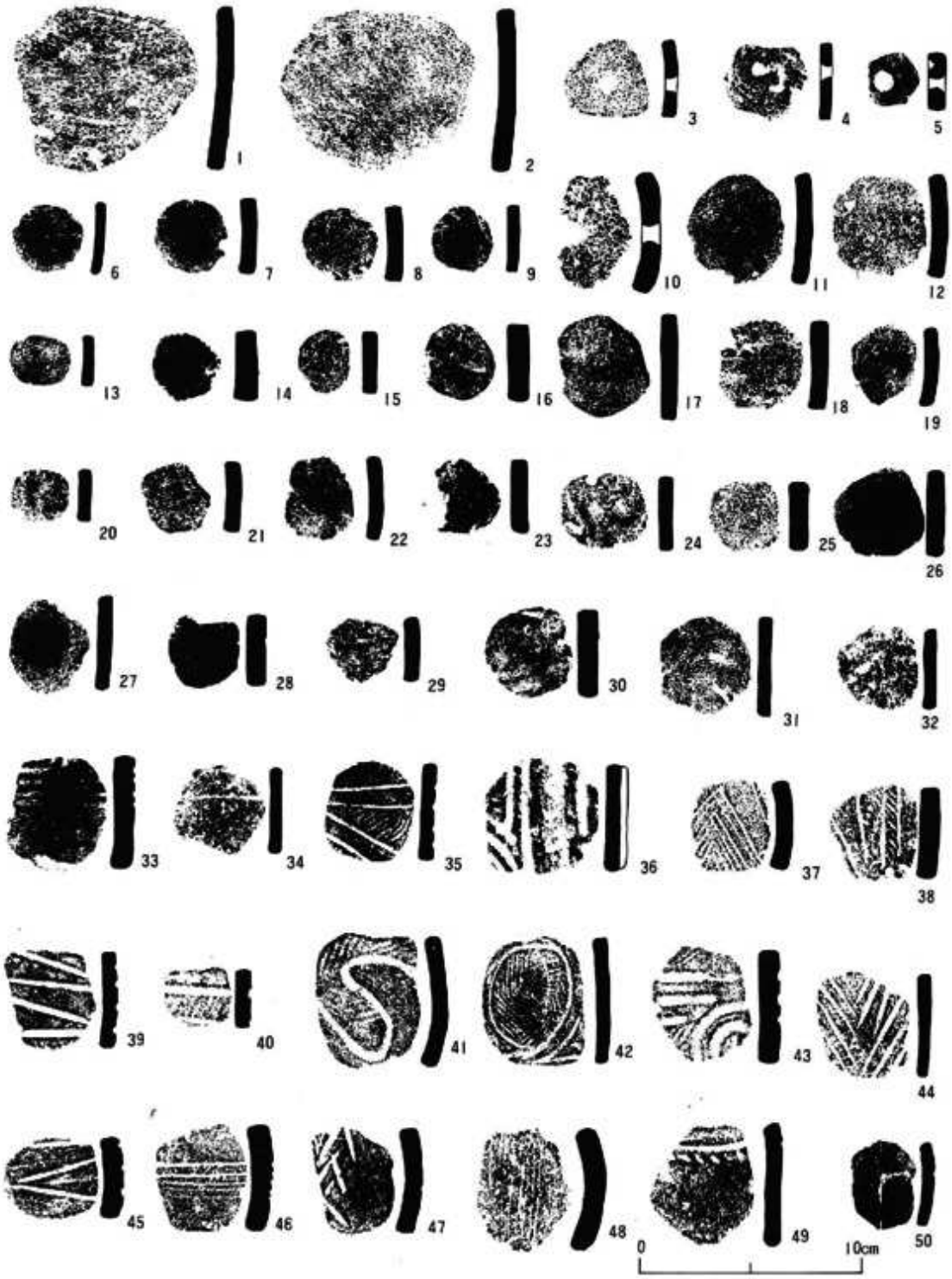
第70図　浦谷B遺跡出土土製耳飾（1：2）



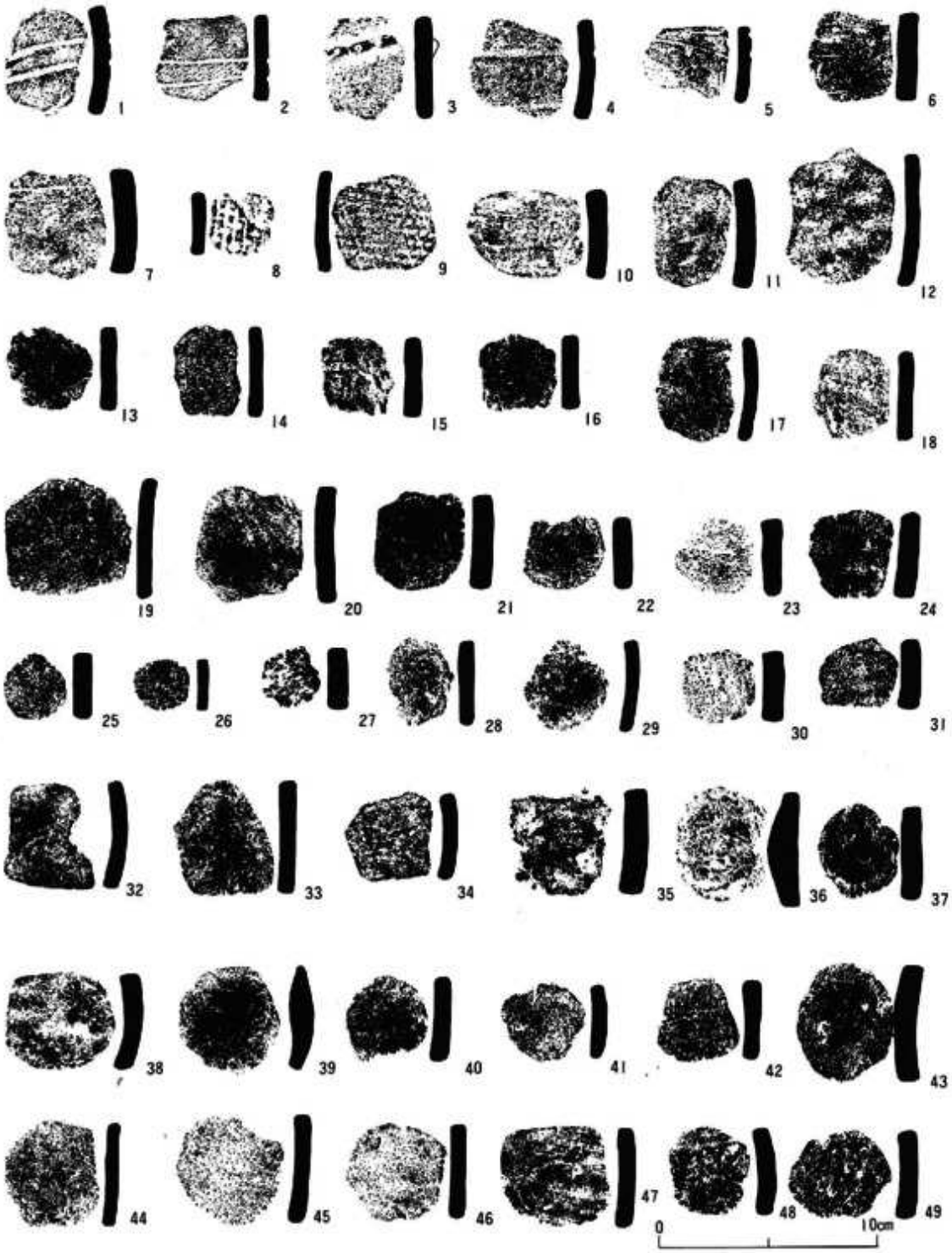
第71図　浦谷B遺跡出土土製耳飾（1：2）



第72図　浦谷B遺跡出土土製円板（1：3）



第73図　浦谷B遺跡出土土製円板（1：3）



第74図　浦谷B遺跡出土土製円板（1：3）

5)、土製円板（第72図1～第74図49、図版96～98）

分類上取り上げた土製円板は353点であるが、さらに厳密に整理を行なえば相当量の数に上ると思われる。特に打製のみによるものは、土器の破片であるか円板であるかの判断が難しいものがある。したがって、とりあえずは確実なもののみを数量とした。分類上次のように種別した。A：平面形・①円形、②楕円形、③隅丸方形（長方形）、④方形（長方形）　B：断面形・①直線、②湾曲　C：大きさ・①大、②中、③小　D：穿孔・①有、②無　E：文様・①有、②無　F：研磨・①有、②無　G：その他・①底部の利用（網代痕の再利用）

Aは①が半数を占め、④が最も少ない。Bは①が多いが器面利用であるので微妙には変化している。Cは直径7.5～8 cmを測る①から、2 cm程度の③までがあり、②が最も多い。Dは①が4点である。Eは②の方が多い。Fは②の方が多いが、①では縁辺部に研磨が行なわれ、平面部に行なっているものもまれにある。Gは少ないがある。

6)、球状土製品（図版103）

1点だけ出土している。直径が0.9cmで球形をしている。焼成は良好で黄褐色をしている。

第5節　縄文時代の石器

出土した石器は、石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、両極石器、打製石斧、磨製石斧、ノミ型石器、有溝砥石、砥石、石皿、凹石、多孔石、敲打器、磨石、その他使用痕のある石器、加工痕のある石器、剥片など多種にわたっている。

本遺跡には、石器製作址2基が検出されており、鋭利な石器の製作址という性格上、やはり石鏃やスクレイパーなどがきわだって多い。

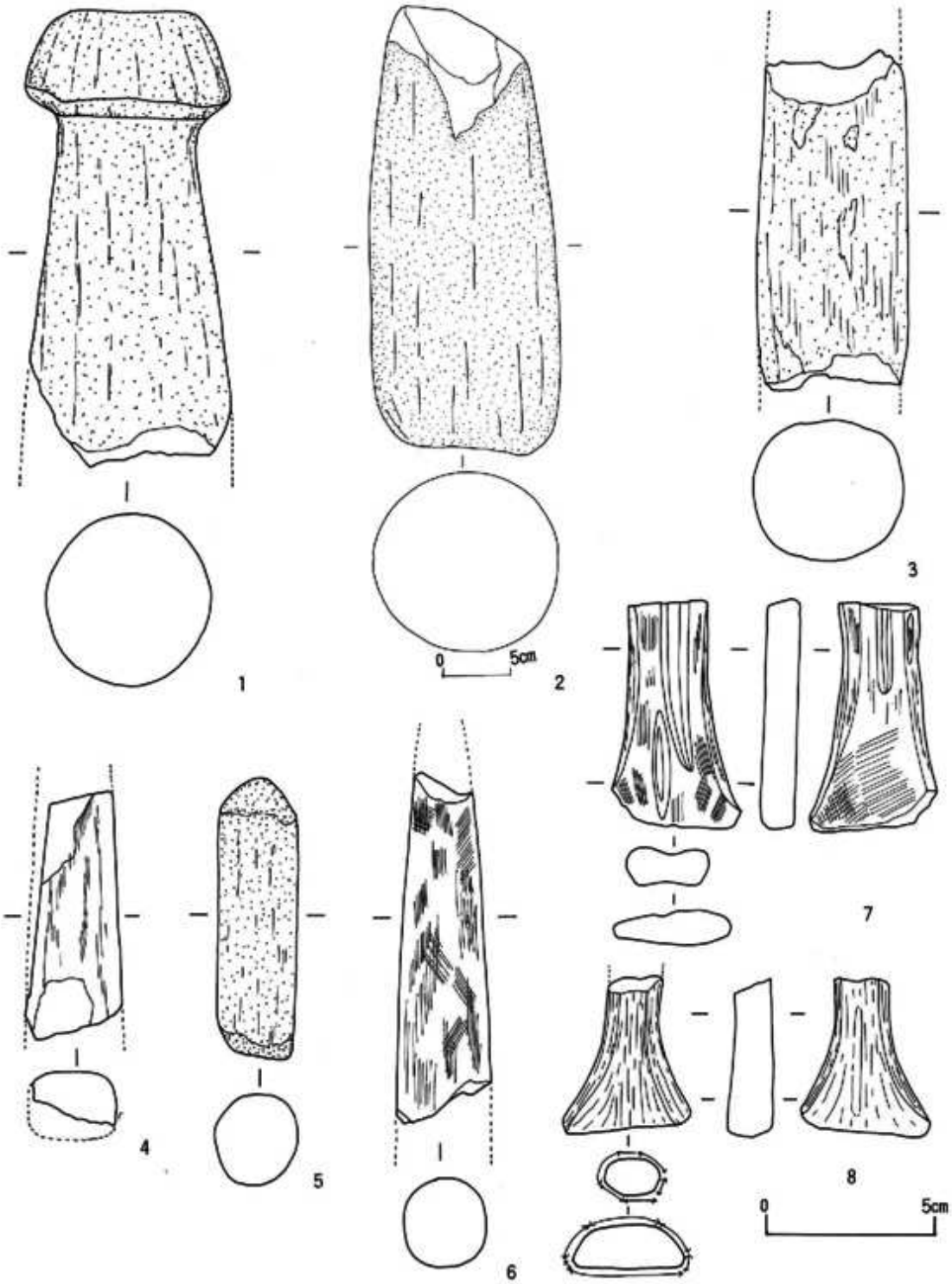
石器の数量にも増して、時間的な制約があり、詳細な分類・分析が行えなかったので、その概要のみ記述し本節とする。

1)、石鏃（図版104・105・107）

石鏃は、遺物集中地点及びグリッド等から274点出土している。また、第1号石器製作址から162点、第2号石器製作址から78点出土している。石器製作址の資料はやや性格が異なるので後述する。原質は、黒曜石とチャートの2種類であり、黒曜石製は158点、チャート製は16点で圧倒的に黒曜石製が多い。形態は無茎のものが⅔以上を占めている。詳細な分類は稿を別にして行ないたい。

2)、石錐（図版104・107）

17点で、黒曜石製9点、チャート製6点、玄武岩製2点で、棒状のものが1点で、他はつまみ



第76図　浦谷B遺跡出土石製品（2・1：5、他1：2）

のつくものである。欠損品が目立つが、刃部とつまみの接点が多い。

3)、石匙（図版107）

4点を出土しており、4点とも黒曜石製で1点は欠損品である。横型3点、縦型1点で、横型はいづれも全面に丁寧な加工がなされており、縦型は、つまみ部の作り出しと、両側辺の加工がされているだけである。いづれも極小の部類に入る。

4)、スクレイパー（図版104・105・107）

スクレイパーの数は極めて多く、石鏃を上回るものがある。サイドスクレイパーとエンドスクレイパーがあり、サイドスクレイパーの方がはるかに多い。石器は、黒曜石とチャート製で、縦長の剥片の両側辺部に加工されたものが多い。

5)、両極石器（図版107）

両極石器は、スクレイパー、石鏃に次いで数が多い。一方の打撃痕が直線的に反対側の打撃（ダメージ）と一致し、しかも剥離面の方向が相対しているものを全て含めた。石材は全て黒曜石製で、剥片を利用しているものはほとんどなく、大部分が礫核を利用している。詳細は形態分類をすべきところであるが概略とする。

6)、打製石斧（図版99）

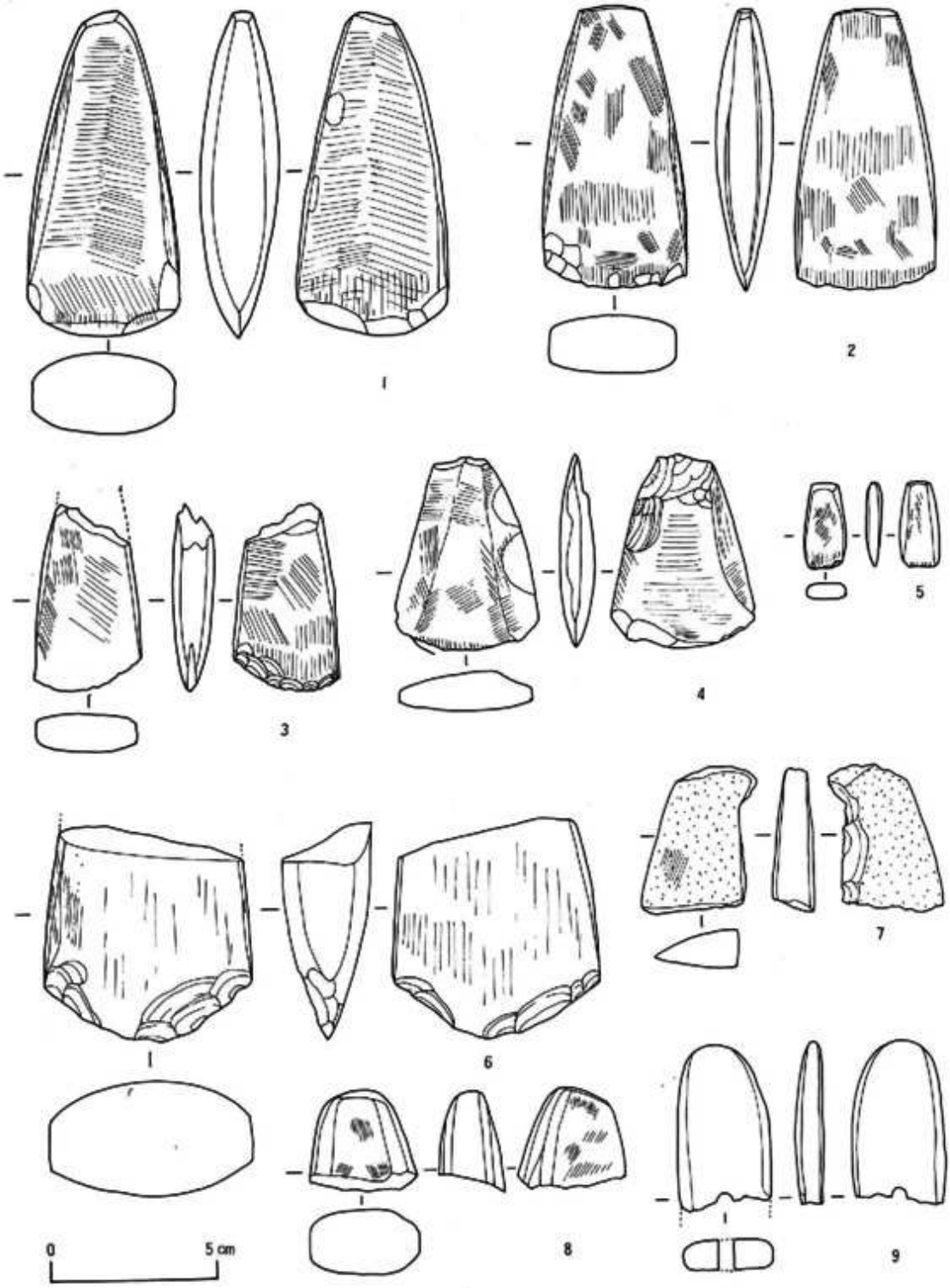
打製石斧は、15点前後と極めて少なく、一般に比較的組成率の高い石器であるのに対し、本遺跡では特に低い。平面形態は、短冊型が最も多く、次いで撥形、分銅型の順である。刃部は、円刃が多く、斜刃が3点である。使用痕が特に顕著なものがある。石質は、硬砂岩、安山岩が多い。自然面の残るものはほとんどない。

7)、磨製石斧（第75図1～4・6・8、図版99）

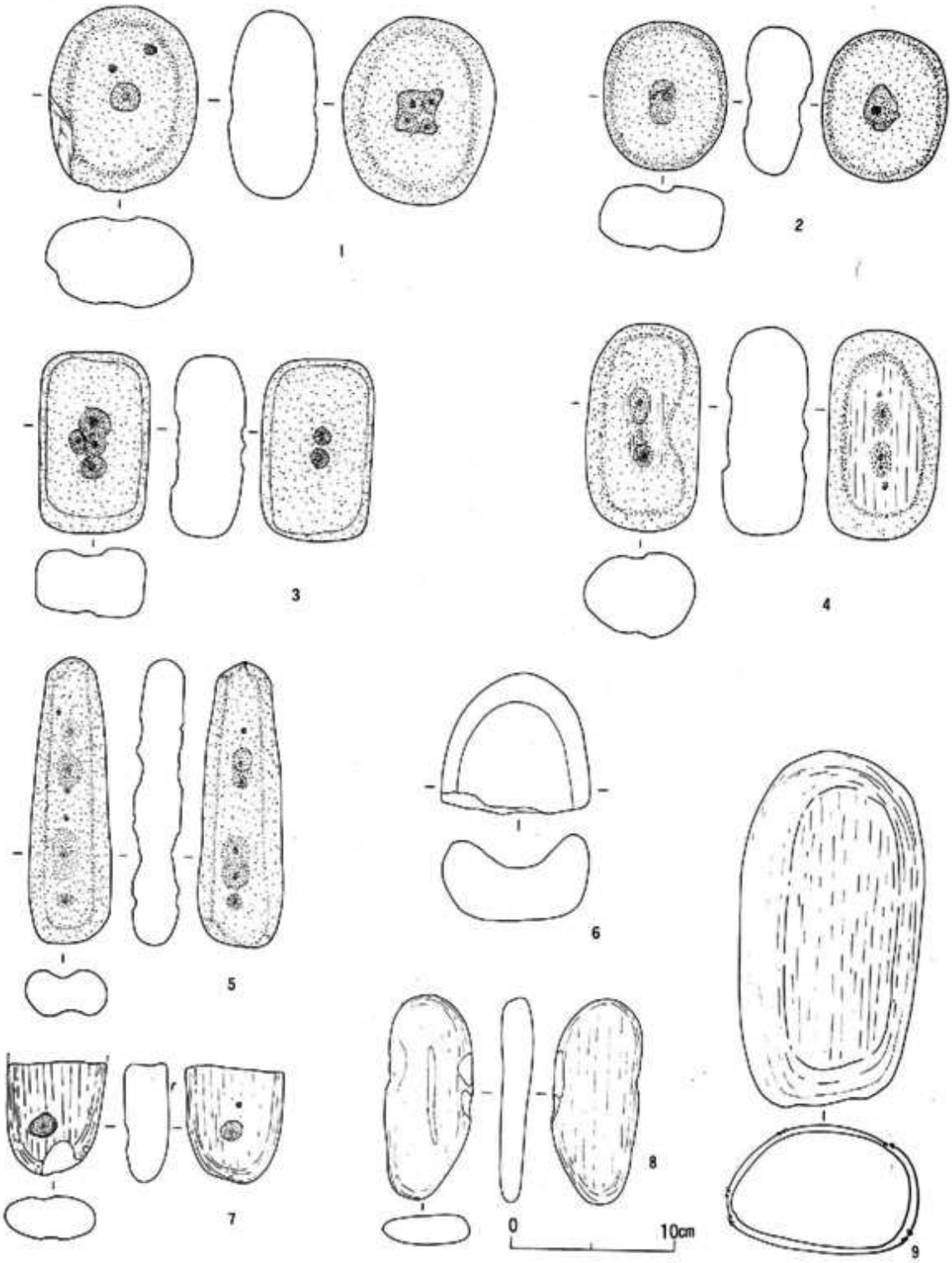
磨製石斧は、剥離された剥片も含めて8点を数える。8点とも定角式の石斧である。いづれも刃部に使用痕が残り、刃こぼれが激しい。平面形態は、刃部が最も広い撥型が多い。

8)、ノミ型石器（第75図5、図版99）

1点だけ出土した。長さ2.6cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmを測りチャート製である。本石器は、小型磨製石斧とか、磨製石斧のミニチュアなどと分類されているが、磨製石斧の小型板ではなく、ノミ的機能をもつノミ型石器である。製作工程や技術は、磨製石斧とほとんど変らない。本資料は、刃部に刃こぼれが残り、使用痕が顕著である。



第75図　浦谷B遺跡出土石器(1～8)、石製品(9)(1：2)



第77図　浦谷B遺跡出土石器(1：4)

9)、有溝砥石（第76図７・第77図８、図版100）

２点出土しており、いづれも比較的もろい砂岩である。７は欠損品であるが、現状の長さ6.8cm、幅は欠損部で2.5cm、最大幅3.5cm、厚さ１cmを測る。片面に２本、もう一方に１本の浅い溝があり、溝の方向に使用したことがわかる。８は完形品で７より大部大きく、長さ12.5cm、最大幅5.3cm、厚さ２cmを測る。本資料は片面にのみ痕跡と表現した方が良い程の溝があり、長さ６cmにわたって存在する。一方の面には、定形化された溝はないが、筋状の使用痕が多数認められる。また、これ自体も何かにこすったと思われる研磨痕が、周囲に残っている。

10)、砥石（第78図１・２、図版100）

溝が有るか無いかで分けたが、基本的に形態は全く有溝砥石と同種のものである。石質はもろい砂岩製でいづれも欠損している。使い減りが激しく、１は縁辺部がなくなり尖ってきている。筋状の使用痕が両面に顕著である。

11)、石皿（第78図３～５、図版102）

石皿は５点出土しており、いづれも欠損品である。使用面は両面にわたっているものが多く、かなり使い減りしている。石質は多孔質と普通の安山岩である。またこの他に極小のものも出土しているが、石皿ではなく、石臼とした方がよいかも知れない。

12)、凹石（第77図２～５、図版101）

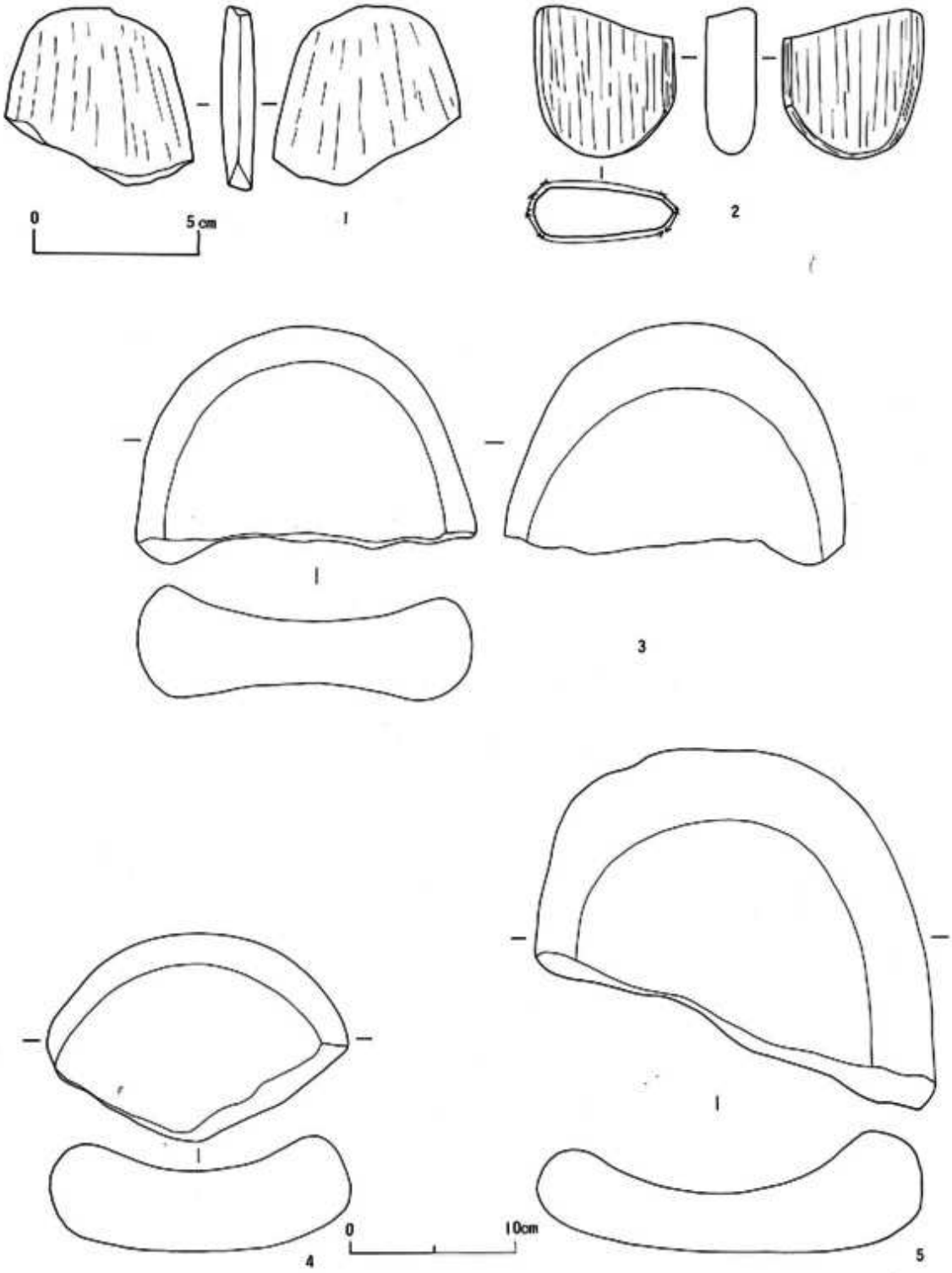
凹石は52個出土した。平面形態が、円形、楕円形、長方形、長楕円形のものが出土しており、中でも楕円形のものが多い。凹の数は表裏に２個ずつが多く、５のように片面に７個、もう一方に６個もあけられているものがある。凹部の面は、研磨されているものも多い。また、敲打器として使われ、使用痕を残すものもある。

13)、多孔石（図版102）

多孔石は大型のものが２点出土した。１点は、平面29.8cm×24cmの楕円形を成し、厚さ14.5cmを測る。石質は、多孔質の複輝石安山岩である。凹は約400～500あり、１つ１つがかなり大きなものである。両面が扁平で据わりがよい。もう１つのものは、これよりやや小さいが、同様に多くの凹がある。

14)、敲打器（図版101）

15点出土している。平面形は、長楕円形と円形で安山岩が多い。両端に使用痕が顕著に残るものが多く、また欠損して半欠品もある。磨石と区別がつかない程研磨されているものがある。



第78図　浦谷B遺跡出土石器(1、2・1：2、他1：4)

15)、磨石（図版101）

磨石は33点を取り上げたが、判断のつきにくいものを含めるとかなりの数に及ぶ。平面形態は、円形、楕円形、長楕円形などで、石質は、安山岩が最も多く、花崗岩などもある。使用痕的なものがないものをここに取り上げた。

第6節　縄文時代の石製品

石製品には、石剣、石棒、玉類(大珠など)、不定形石製品等が出土している。出土地点は、土器や石器と同様に遺物集中地点に集まっているが、絶対量はそれ程多くはない。その概略を示し本節とする。

1)、石剣（第76図4・6、図版100）

石剣は2点出土しており、いづれも第1遺物集中地点からである。4は粘板岩製で、尖端部、基部ともに欠損し、また縦に半分に欠損している。残存部は、よく研磨されている。断面は方形に近い形であり、石剣の分類で良いか疑問も残るが一応本類とした。6はやはり両端部が欠損し、出土した部分は僅かである。粘板岩製でよく研磨され、断面は円形である。

2)、石棒（第76図1～3、図版100・102）

石棒は合計3点出土し、有頭1点、無頭1点、両端欠損品は有頭石棒であると思われる。1は緑泥片岩製で、亀頭先端部はやや扁平、くびれ部からは基部に向って径を大きくしている。2は緑泥片岩製で、長さ33.3cm、直径13.7cmを測り、ほぼ完形である。先端の一部と基部の一部が剝落しているが、基部は立てるという性格からあまり整形しなかったようにも受け取れる。いづれも石剣程ではないが、よく研磨され丁寧な整形である。3は、蛇紋岩製の石棒で、両端が欠損している。断面はやや楕円形を示す。表面はよく研磨されている。

3)、玉類一括（第75図9、図版103）

出土した玉類は、大珠2点、溝のある黒曜石の玉、その他であり計12点である。

大珠は、9に示すように完形品が欠損したもので、中央部に穿孔していたものと思われる。現存部で4.7cm、幅で2.8cm、厚さ0.9cmを測る。したがって、長さは9 cmから9.5cm程のものであったと推定される。孔は片側から開けられており、直径7 mm、貫通部で5.5mmを測る。石質は、翡翠製で、それ程質はよくないが、緑色がよく目立ち、全体に丁寧な研磨が行なわれている。もう1点は未製品で、穿孔前の研磨段階の資料である。ほぼ形態は整っているが、厚みにむらがある。一部を欠損しているが、現存部で、長さ6.5cm、幅3 cm、厚さ1.2cmを測る。

黒曜石の玉は、長さ1.8cm、厚さ1.2cmを測り、断面が円形のもので、全体がよく研磨されて

いるが所々に凹凸がある。中央部に溝が一本めぐらされており、さしずめ紐をまく部分のようである。黒曜石の玉は大変珍しい。

その他は、瑪瑙、チャート、石英製の玉類で、球形のもの、扁平、円柱状のものなどさまざまであるが、穿孔もなく性格を知ることはできない。

第Ⅵ章　総　　括

（竹之城原・浄永坊・浦谷B）

本年における発掘調査の経過及び成果は，すでに各章で記載してきたところであるが，その要点をここでまとめ総括としたい。

竹之城原遺跡は，耕作による攪乱に悩まされた調査であったが次の成果があった。縄文時代においては，①前期初頭の花積下層式の住居址とそれに伴う遺物が出土した。②諸磯C式土器を主体とする前期末葉の土器群が出土した。③中期初頭の九兵衛尾根II式土器群が出土した。④中期末葉の両耳鍔付樽形土器が出土した。⑤平安時代の小鍛冶址を伴う住居址が検出されたことである。

蓼科山北麓地域の花積下層式の住居址は，栃久保A遺跡に次ぐ追加資料であるが，形態，規模等全く異なるので，今後に検討の予知を残すものである。諸磯系土器群のまとまった出土は初めてのことであり，関東及び蓼科山西南麓との関連において重要な意味を含んでいるものと思われる。九兵衛尾根II式土器群は，昭和58年度に発掘調査を実施した後沖遺跡で，住居址に伴い出土しており，これに追加する資料であり，当地方の編年作業の中で重要な位置を締めるものである。中期末葉の土器は，長野市安庭遺跡で出土したものに次ぐものであり，しかも調査で得られた最初の資料である。また，遺構に伴って出土したことも，性格を知る上で重要である。蓼科山北麓で，小鍛冶址を伴う住居址はむろん初めてであり，吹子や羽口を除けばセット関係をもって出土したとみてよい。総じて竹之城原遺跡は，各時代にまたがりさまざまな文化が存在していたことがわかった。本地域における総体的な編年作業に有力な資料を提示したものといえる。

浄永坊遺跡では，①縄文時代早期末葉の茅山式期の住居址と土器が出土した。②前期前葉の土器群が出土した。ことが大きな成果である。

早期の遺構は，新水B遺跡で住居址5棟，他に炉址や土壙，金塚遺跡では住居址3棟と土壙がすでに検出されており，これに続いて本年度検出されたものである。これにより，本地域の早期土器群は，中葉から末葉にかけて継続的把握がかなり可能になったといえる。前期土器群は，春日縄文時代遺跡群では普遍的に出土しており，遺跡群から離れる程希薄な状況になるという傾向が解って来た。金塚遺跡，栃久保A遺跡，南限である竹之城原遺跡とともに，蓼科山北麓地域土器群の重要な部分を締めるものであり，今後の資料の追加や検討の中でその実態はかなり明らかになるものと思われる。

浦谷B遺跡は，本文で記載したとおり礫に悩まされた調査であったといえ，遺跡そのものの性格付けをするのに捉えどころがなかったという状況である。その中で次のような成果が上げられる。縄文時代後期の，①石器製作址が2箇所で検出された。②集石及び石囲の遺構が検出された。③集石構造とともに，各期にわたる膨大な土器が出土した。ことである。

石器製作址は，浅い土拡状の遺構で，第2号は製作台を伴うという遺構そのものが検出された

ことは，非常に大きな成果であったといえる。丸子町の深町遺跡では，黒曜石が集中する範囲が検出され，「石器工房址」としての位置づけを行なっている例があるが，それに比較しても，規模や出土遺物量がはるかに多い。最近の縄文時代の石器分析は，そのほとんどが形態分類中心であり，なおいうならその域を突破する資料がないといっても過言ではないと思われるが，その中にあって，特に石鏃など鋭利な小型石器の成品や全ての部位を分析することによって，石器製作工程を直線的に把握できるものであり，標本的存在である。その分析の急務なることも感じている。集石遺構は，土器群と一帯を成しているが，その性格を捉えることができなかったというのが本音である。しかし，一部のものは祭祀的性格の強いものもあるということを記載しておきたい。本遺跡のメルクマールは，土器群の把握である。長野県における縄文時代後期・晩期の編年実態，継続的な文化段階の把握は，一部を除き成立し得る資料がほとんどないということはすでに記載したとおりである。出土した資料は，これらの空間部をほぼ埋めつくすことのできる内容をもっており，基本資料としてその重要性は大きい。本報告書では，出土土器を称名寺式からの対比型式に沿って,浦谷ＢＩ～浦谷XIまでを設定した。さらに各区分を類別に細分することによって，土器の系統的な連がりにまで発展させ，周辺地域との関係を表により明示した。これらの第１段階の編年作業により，長野県の後期から晩期初頭に至るもやもやした存在は，さらに追求する予知を残しているとはいえ解決される目どがついてきたものと思われる。

望月町は，他の周辺地域も含めて蓼科山北麓地域として範囲を区切り，ひとつのまとまりとし把握することのできる独特の文化的様相がある。現段階で，特に縄文時代は地域における編年組み立てを可能にできうる好資料が少なからず整って来たものと考えている。春日縄文時代遺跡群の調査はこれで終了であるが，これらの成果を総合的に分析し，詳細な内容をお手元にお届けする機会が近いことを念じ総括としたい。

おわりに

「南・蓼科，北には浅間，間(あい)の望月駒の里」と望月小唄に詩い込んでいることで知られているとおり，北に浅間山を臨みながら，蓼科山の麓では数千年もの永い間人々の生活が脈々と営なまれて来ており，私たちが今見ている自然の情景を，昔の人も同じような心もちで間のあたりに眺めていたはずである。その延長上に私たちの生活があり，また社会がある。こんな風情がピッタリの望月町である。

発掘調査は，このような風土の中で長期にわたって続いており，数々の成果を上げている。ひとえに調査を支えて下さった方々のお陰と感謝を申し上げるとともに，すばらしい仲間を得たことに感謝を覚えながらおわりの言葉としたい。

図　　版

浦谷B遺跡全景

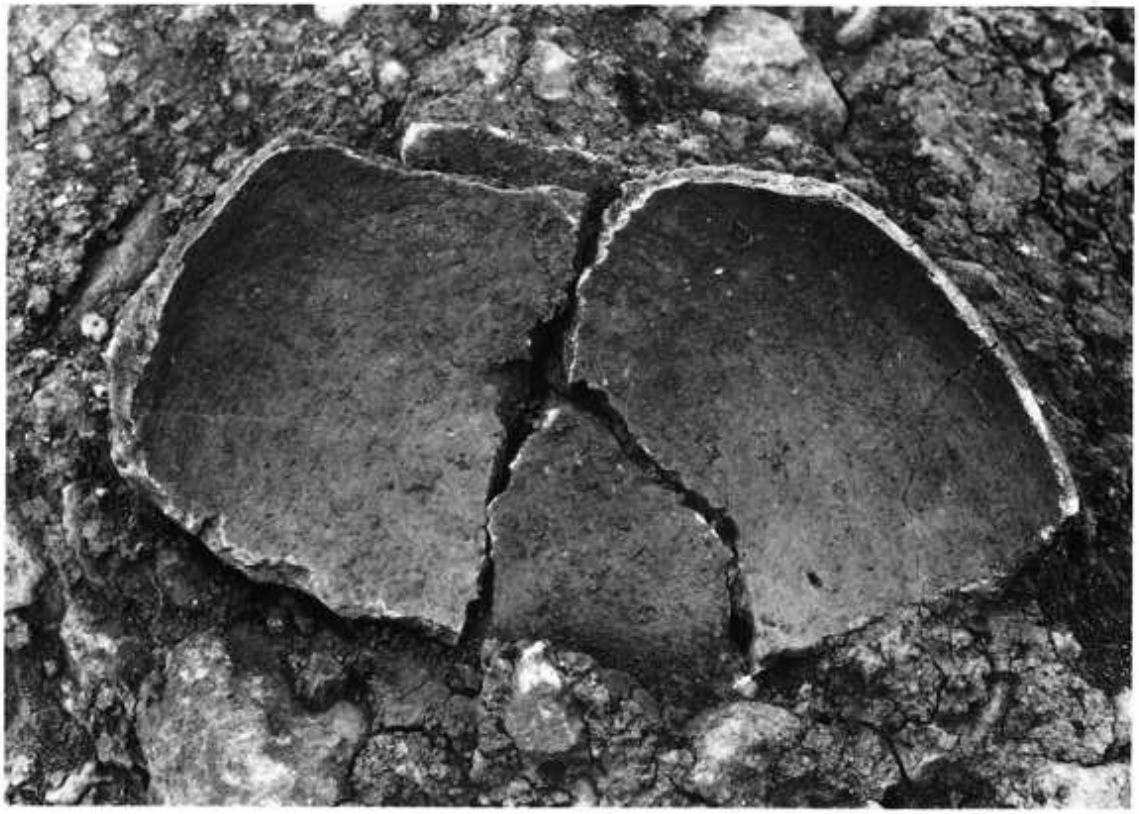
浦谷B遺跡東側

浦谷B遺跡西側

浦谷B遺跡北側

第1遺物集中地点

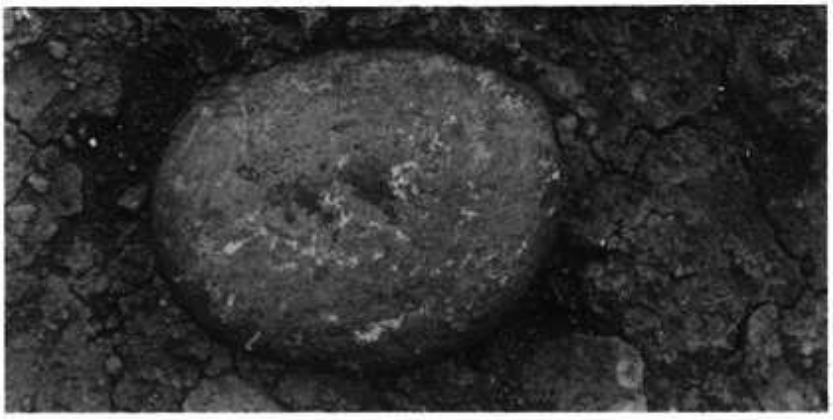
第1遺物集中地点遺物出土状態



第1遺物集中地点遺物出土状態

第1遺物集中地点遺物出土状態

第1遺物集中地点注口部出土状態



第1遺物集中地点石器、石製品出土状態

第2遺物集中地点

第2遺物集中地点土器出土状態

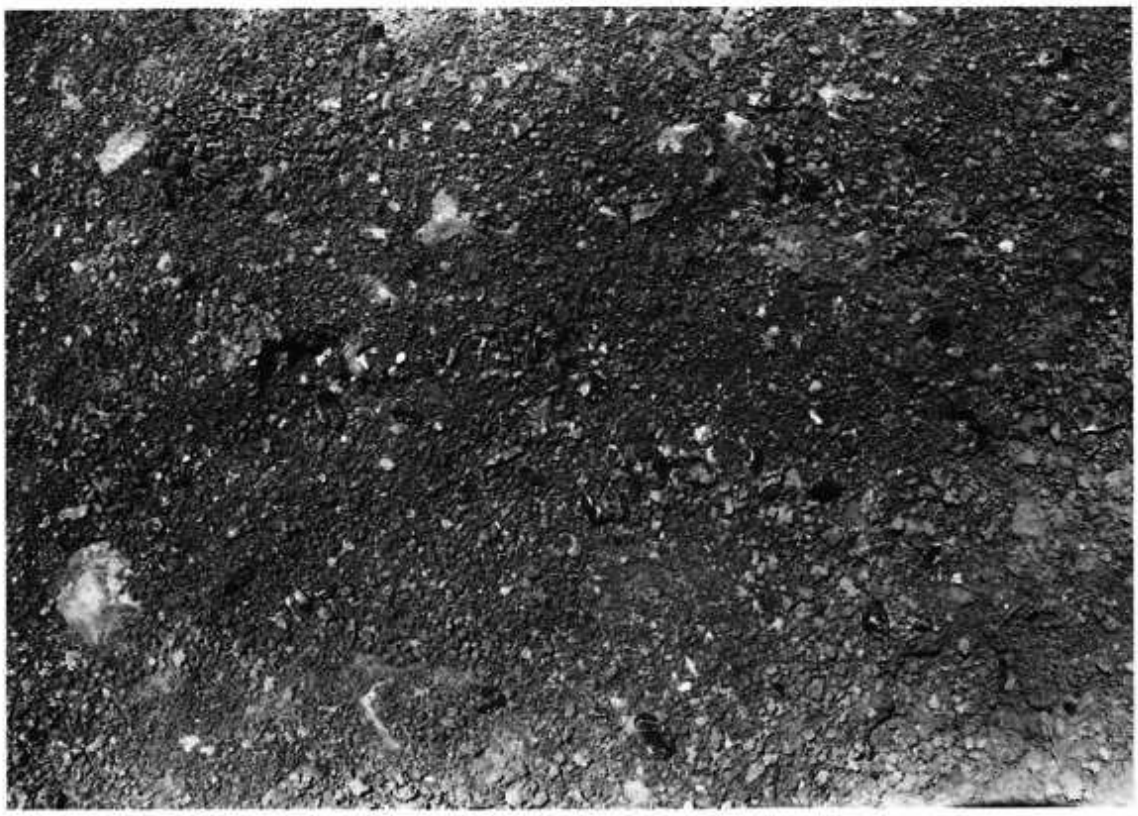
第2遺物集中地点土器出土状態

第2遺物集中地点埋甕

第2遺物集中地点土器、石器、土偶出土状態

第3遺物集中地点

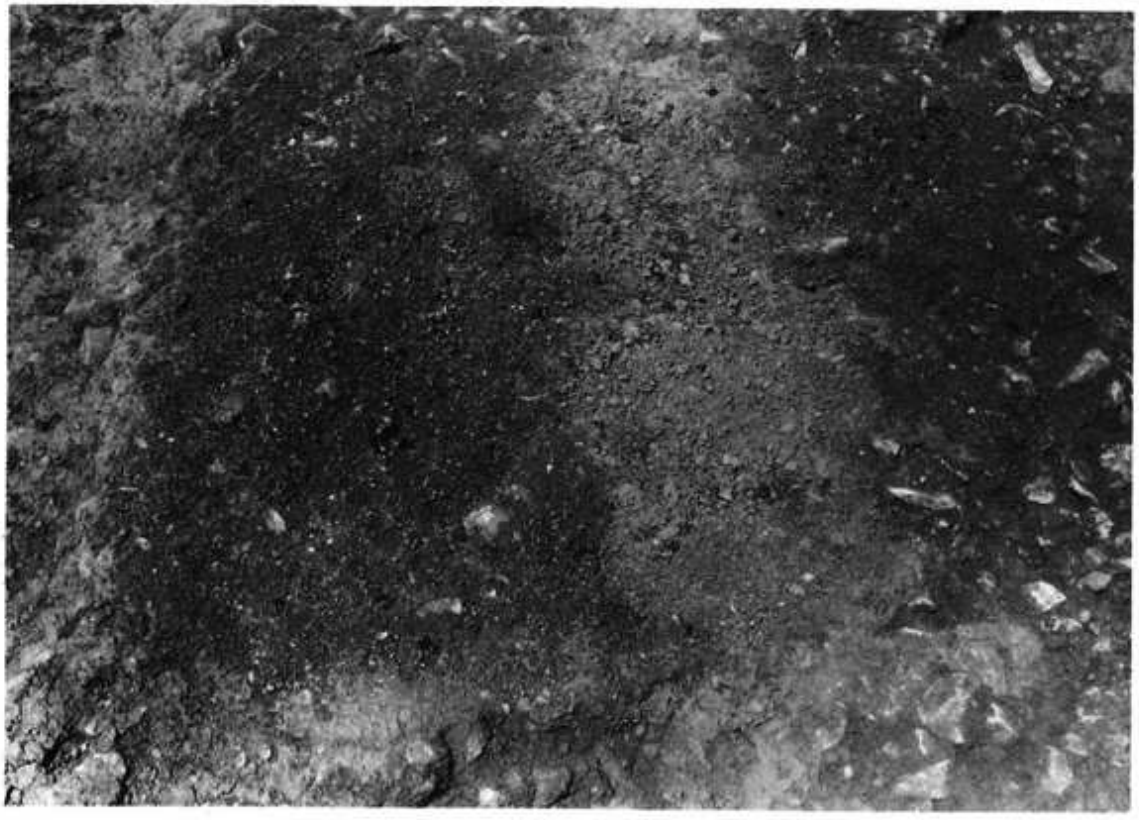
第1号石器製作址



第1号石器製作址黒曜石散乱状態

第1号石器製作址下部の様子

第2号石器製作址



第2号石器製作址黒曜石散乱状態

集　石

集　石

集　石

集　石

石組み状遺構

石組み状遺構

石　囲　址

石囲址土器出土状態

第1号土壙

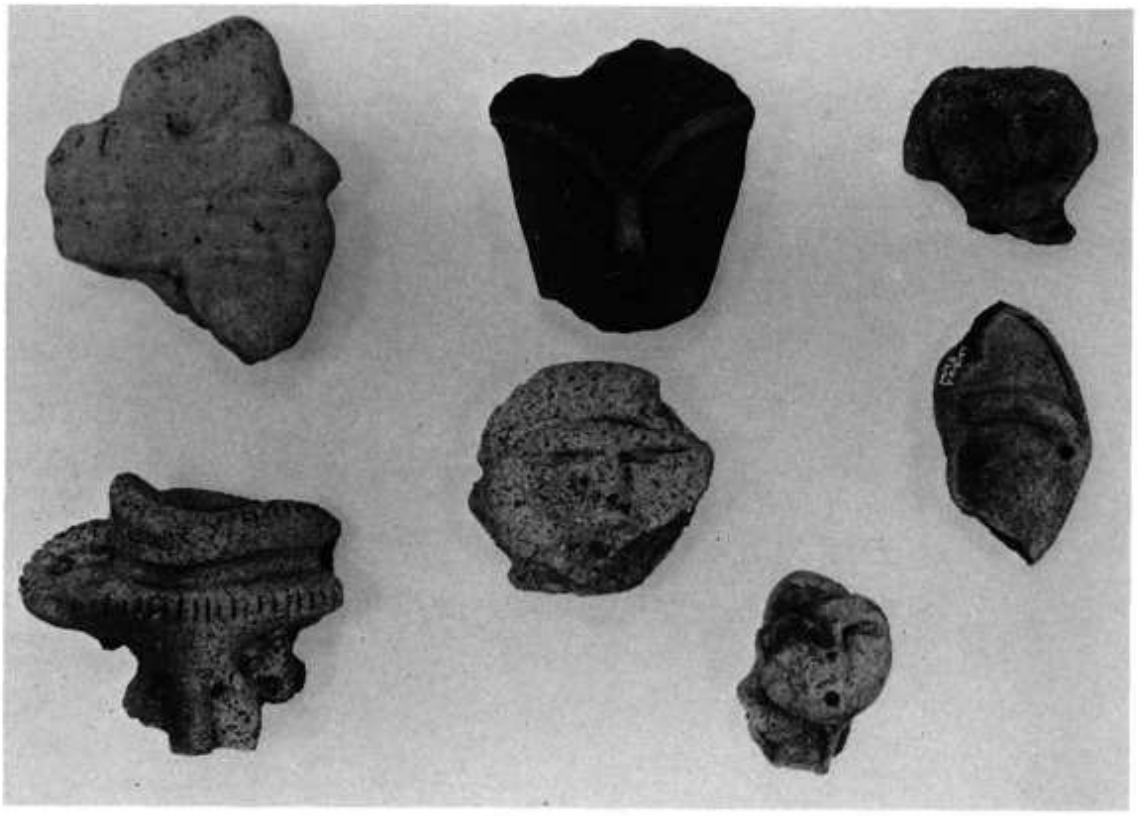
第2号土壙

図版90 浦谷B遺跡

埋甕、石棒、大珠出土状態

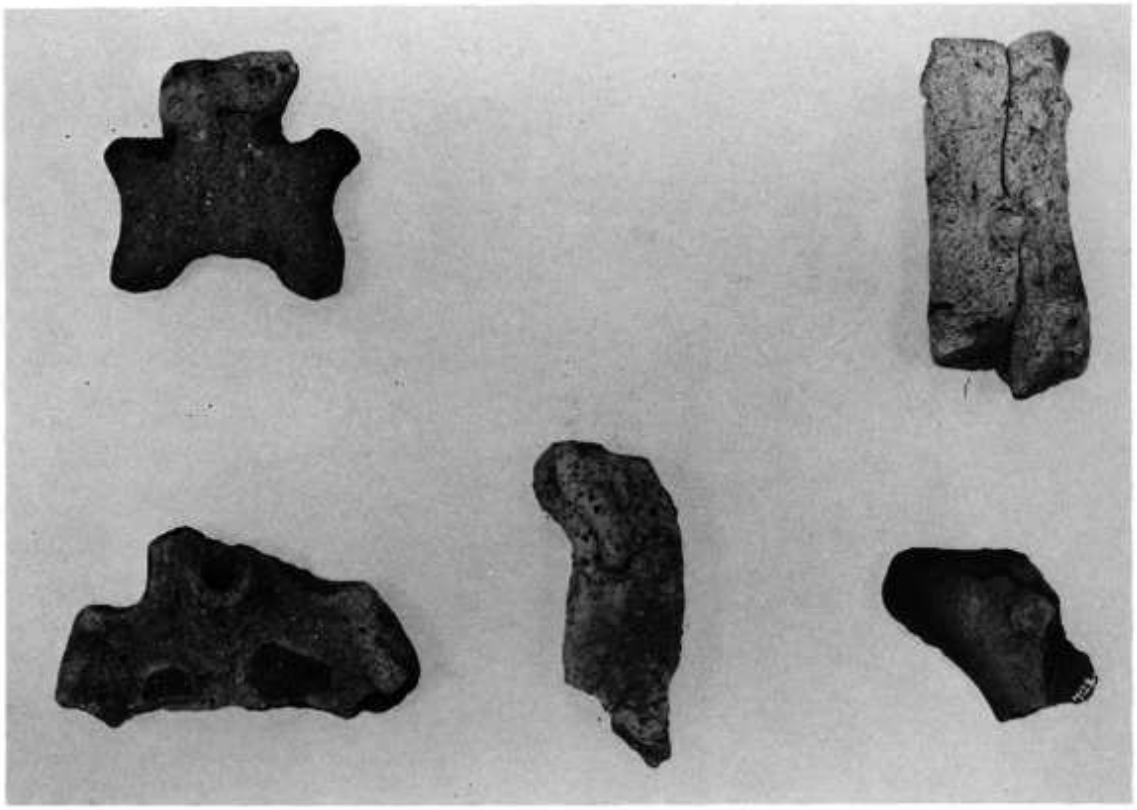
溝状列石遺構

溝状列石遺構

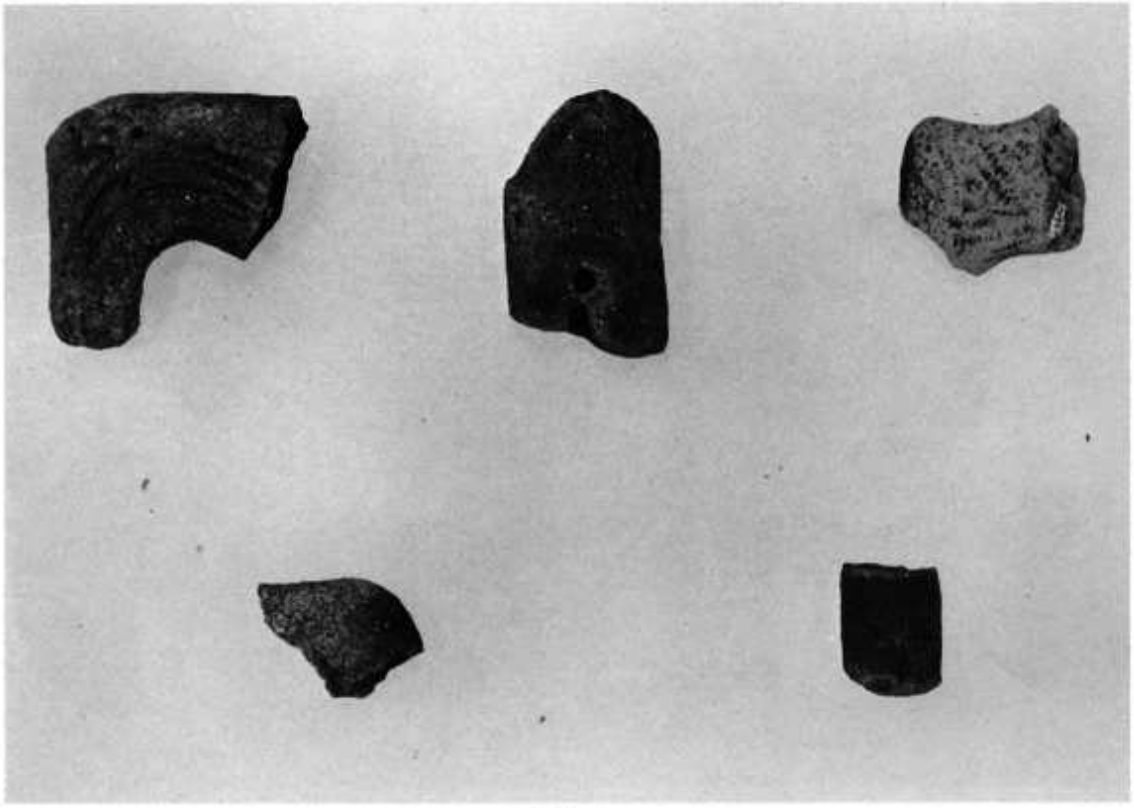


岩偶及び土偶

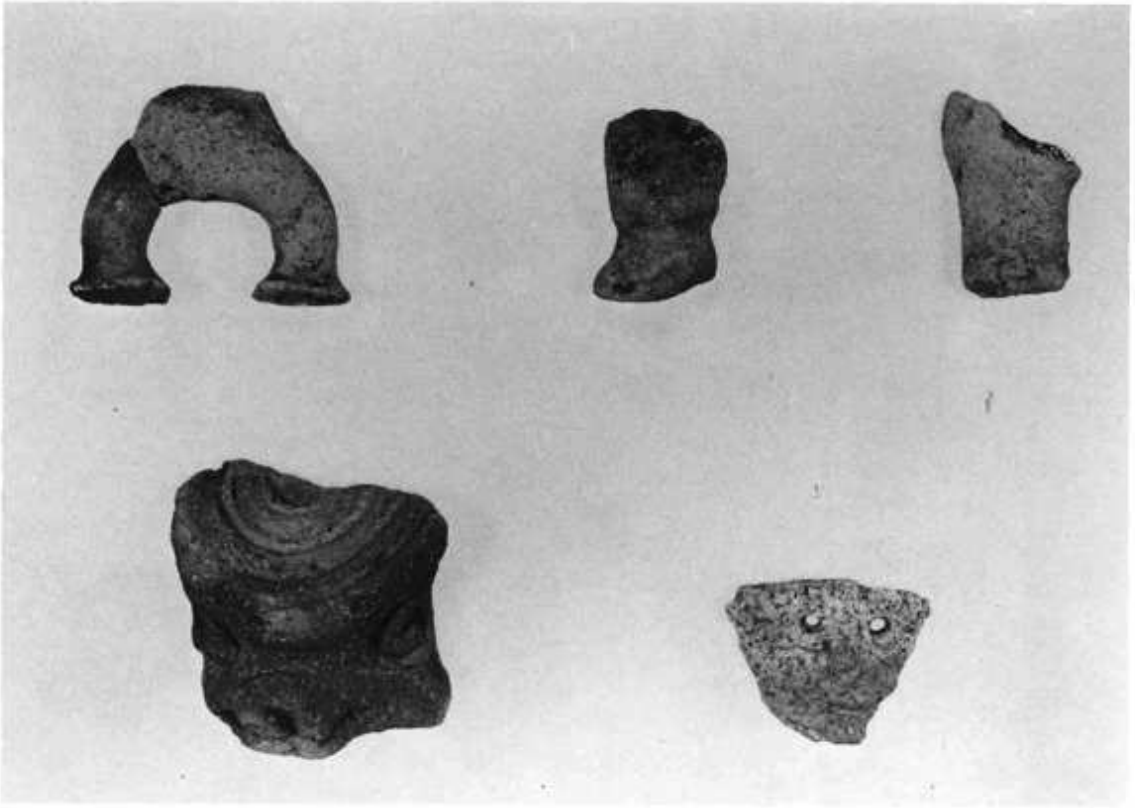
土偶　妊娠像



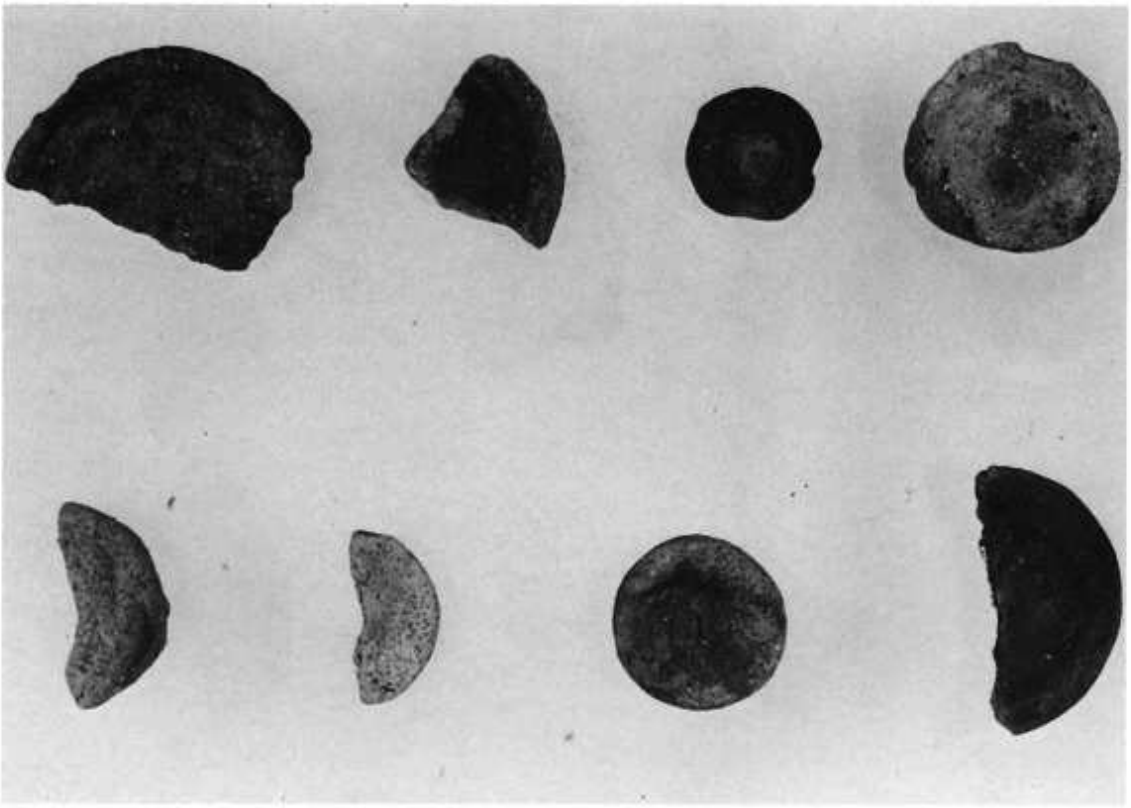
土偶



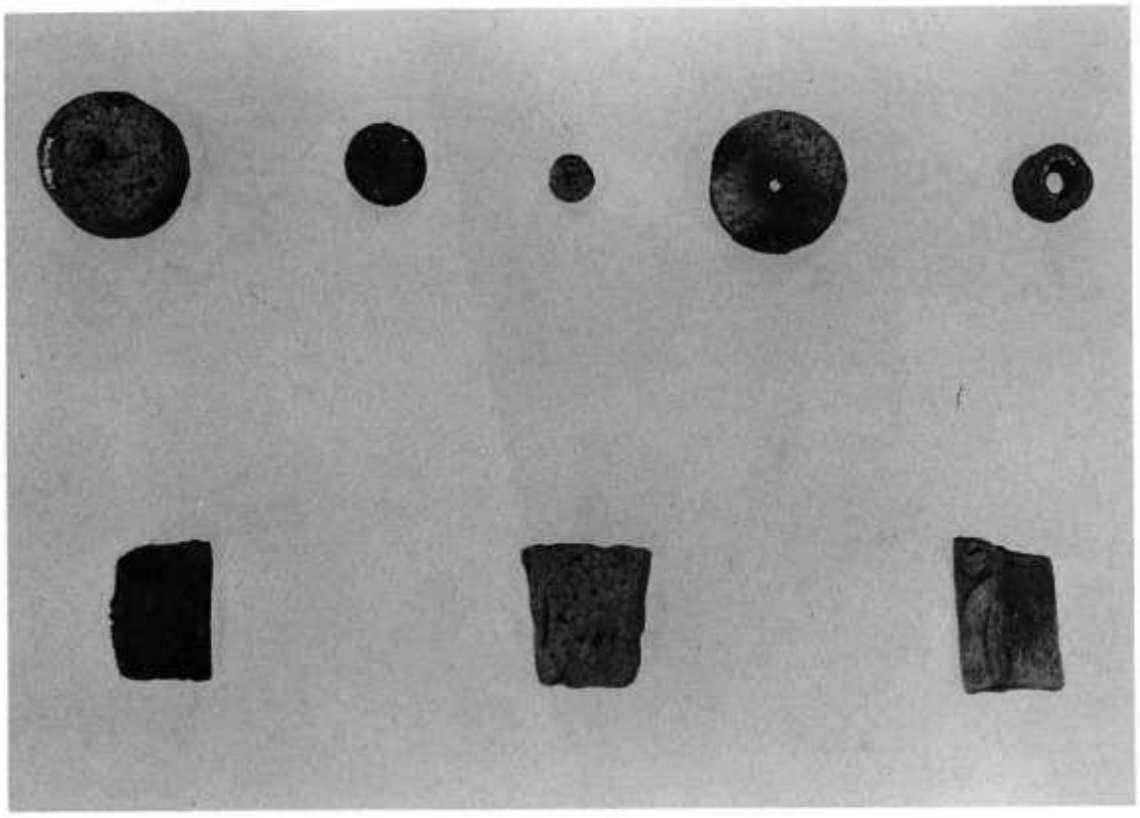
土偶



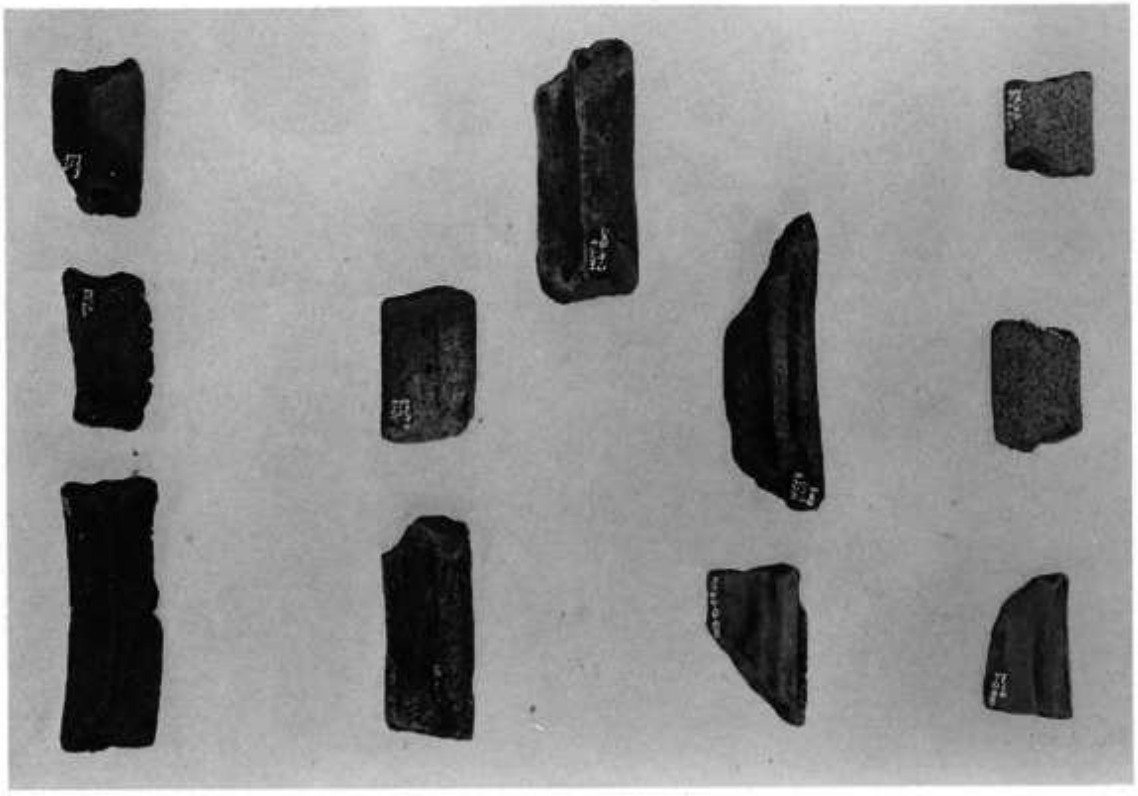
土偶(上段)、顔面付土器口縁部(下段)



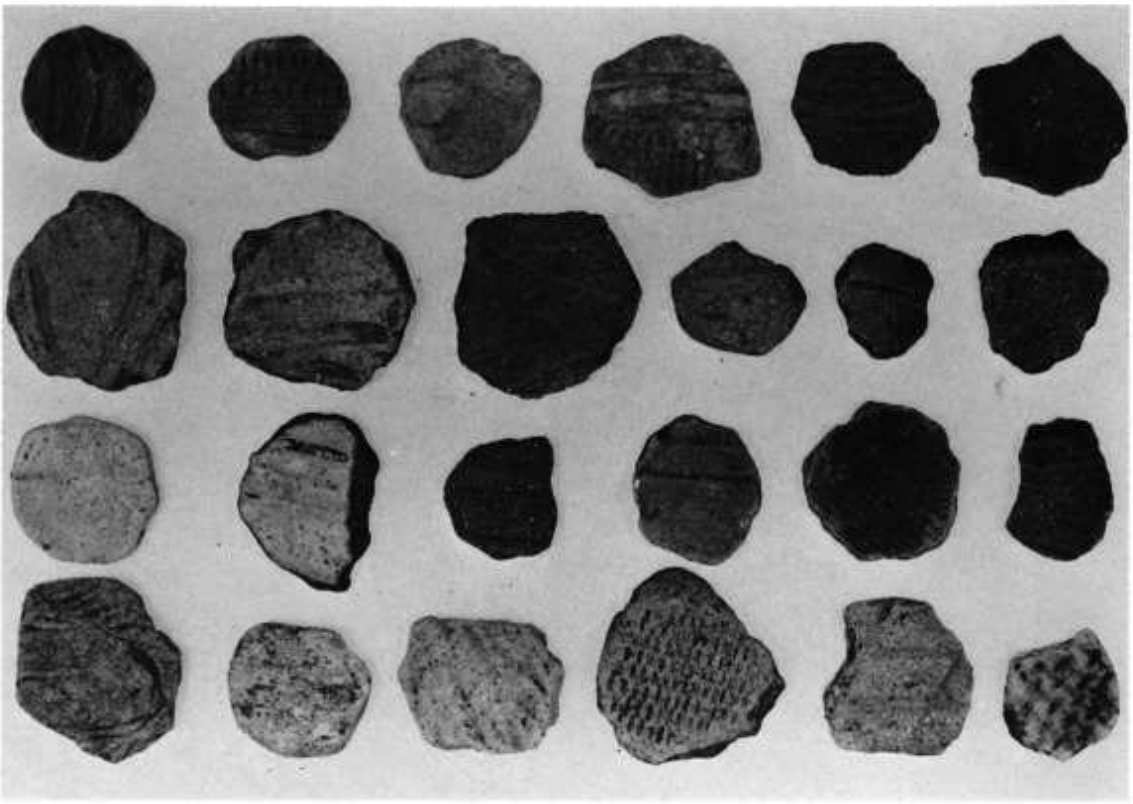
耳飾



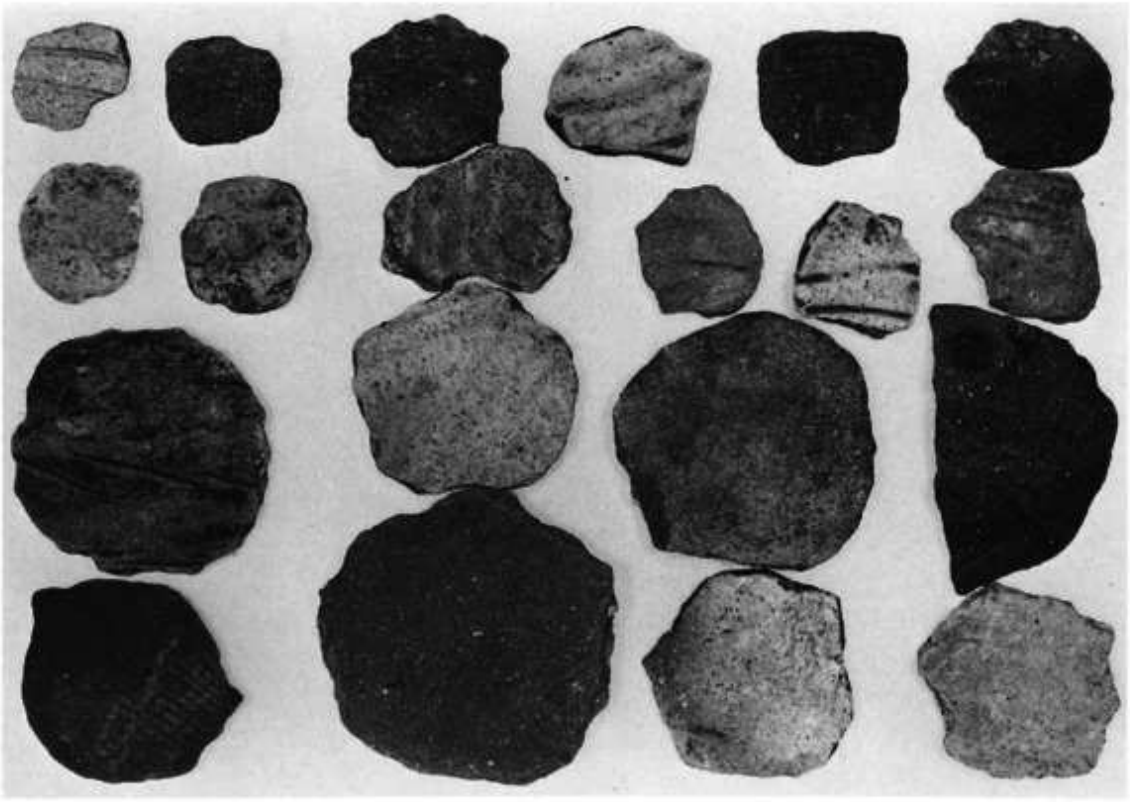
耳飾



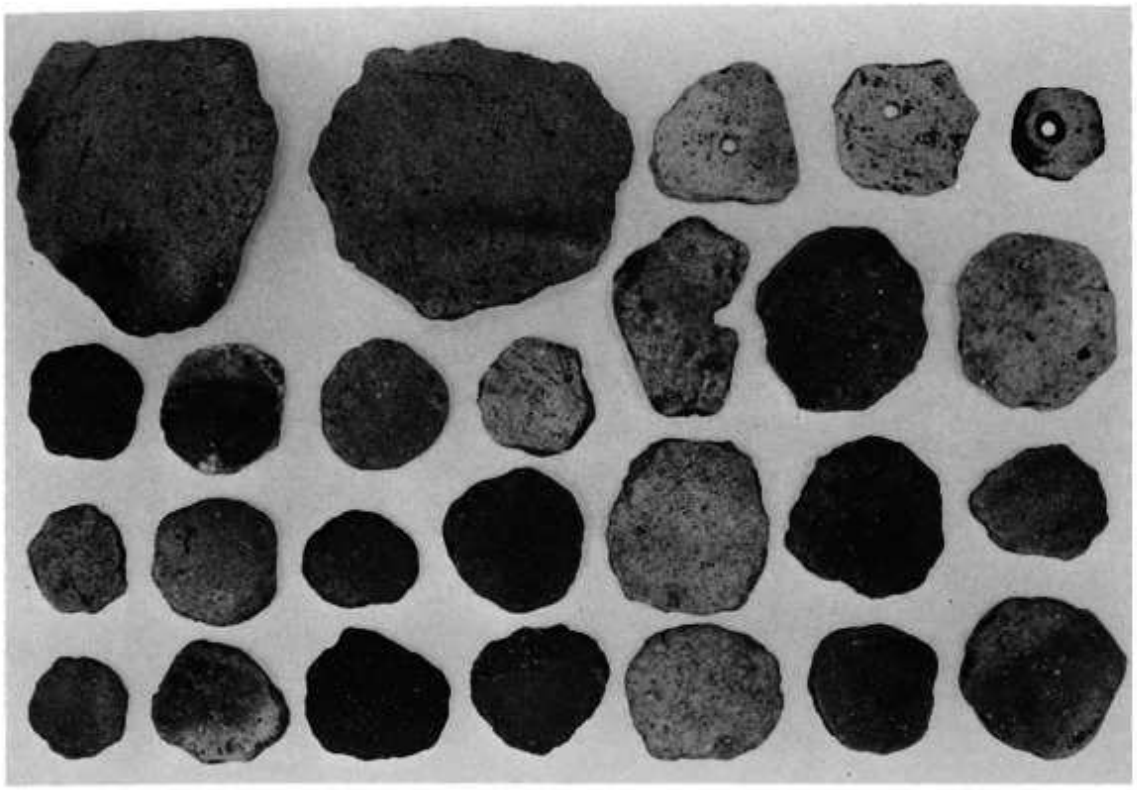
耳飾



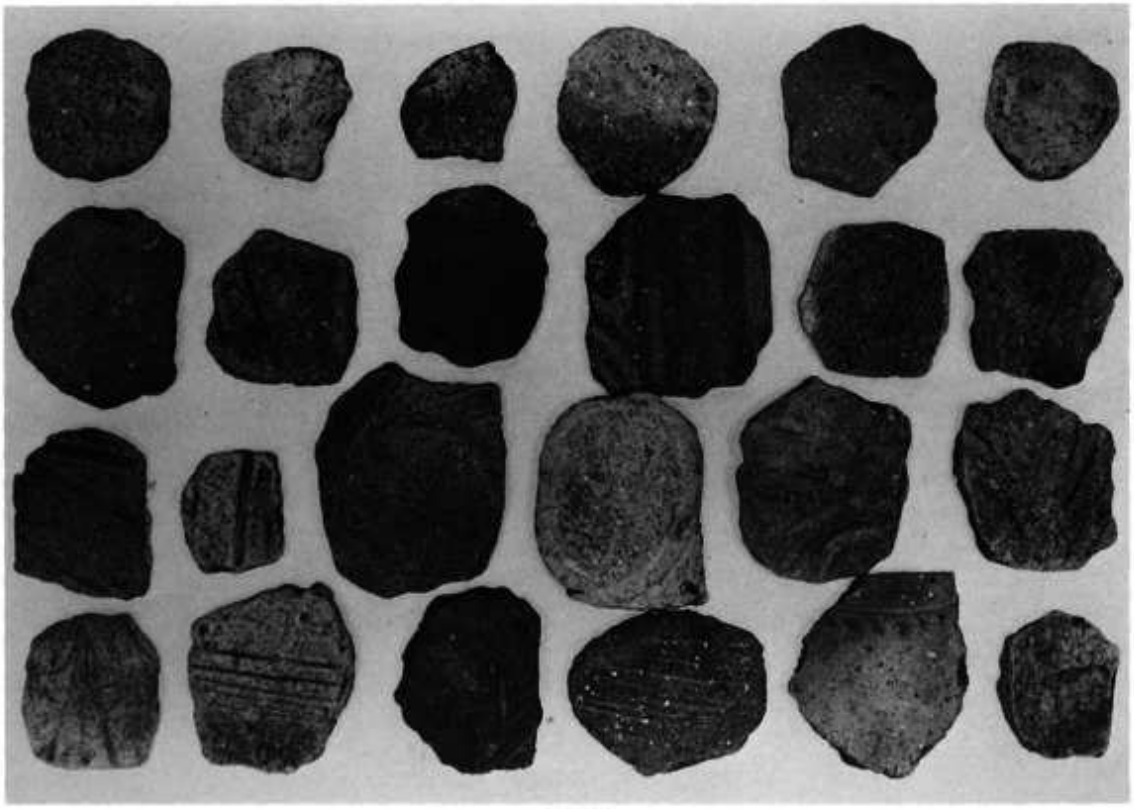
土製円板



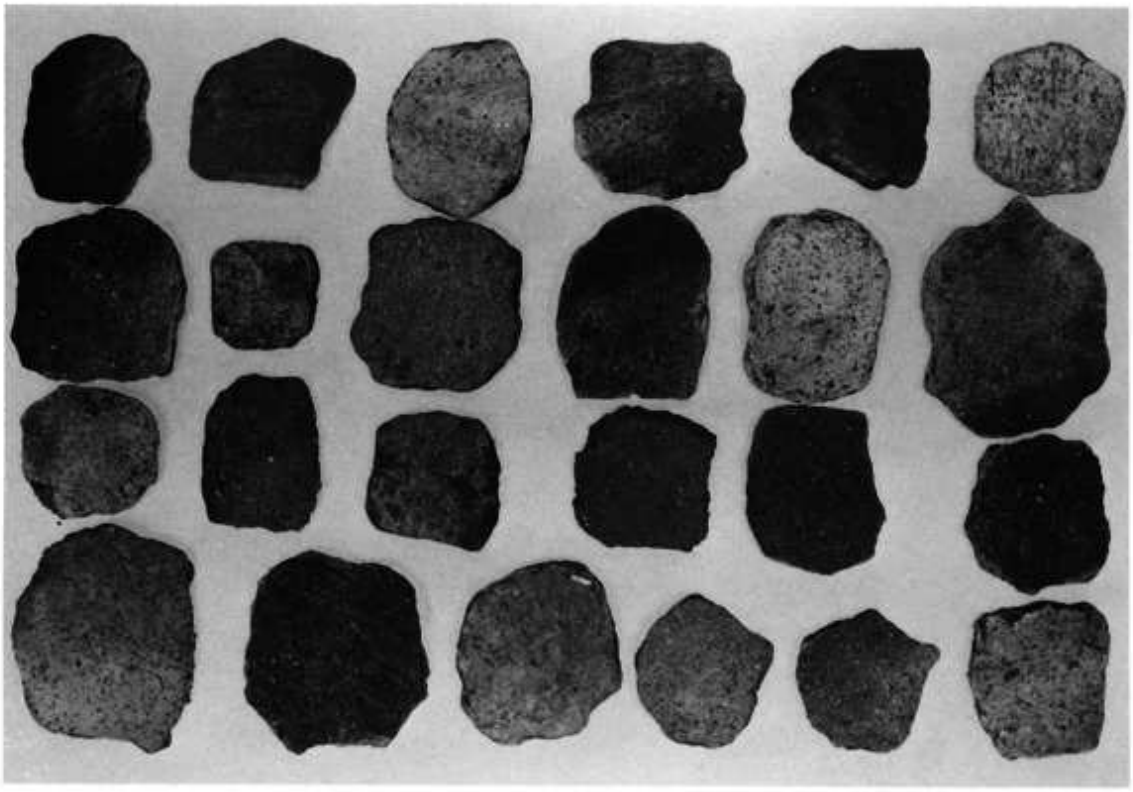
土製円板



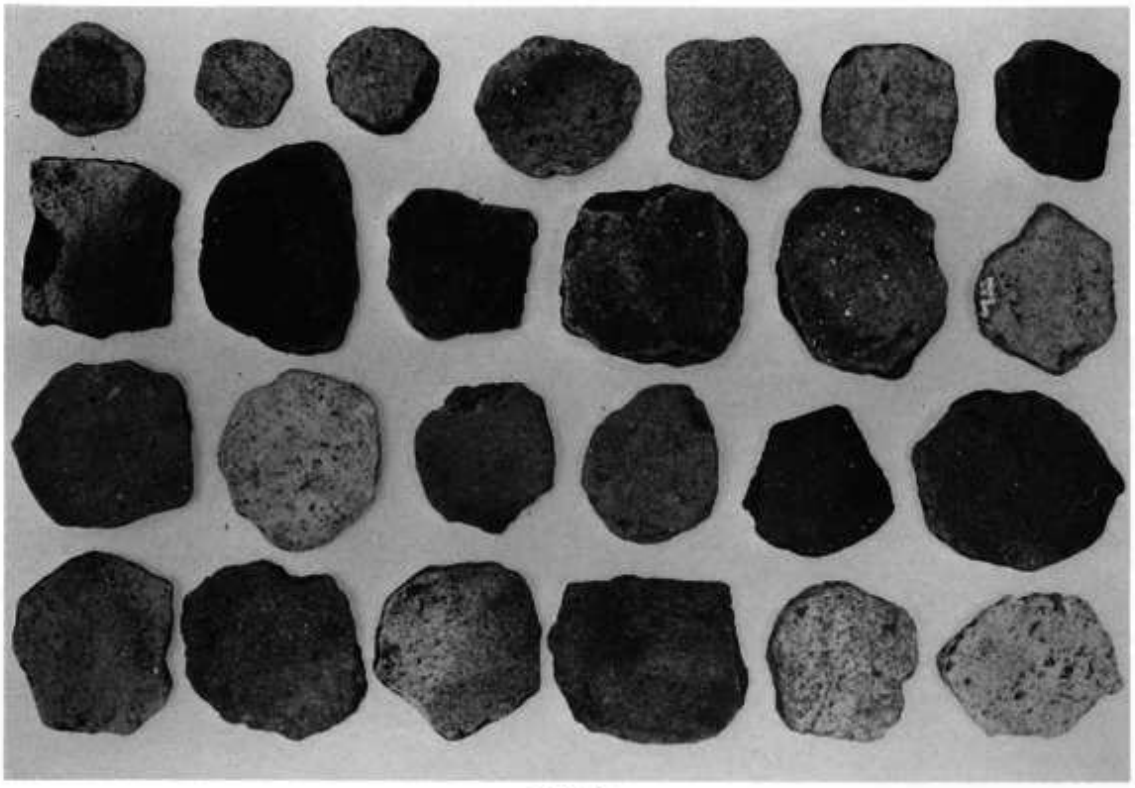
土製円板



土製円板

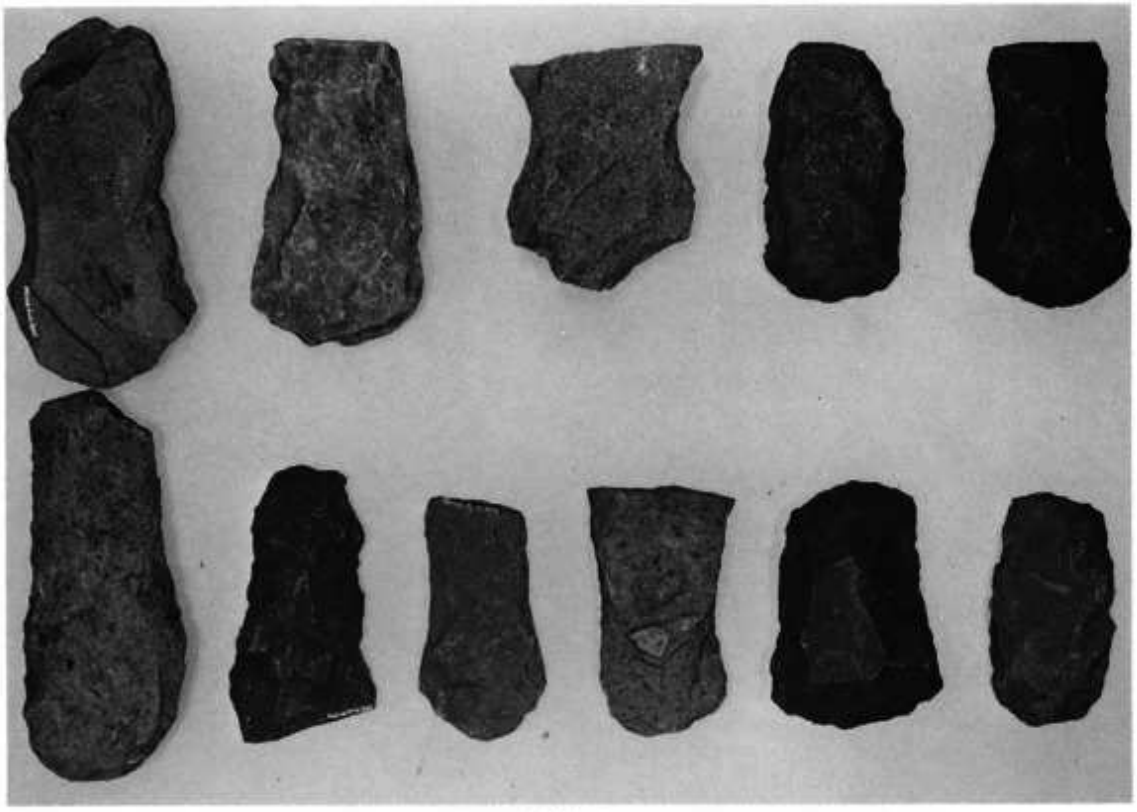


土製円板



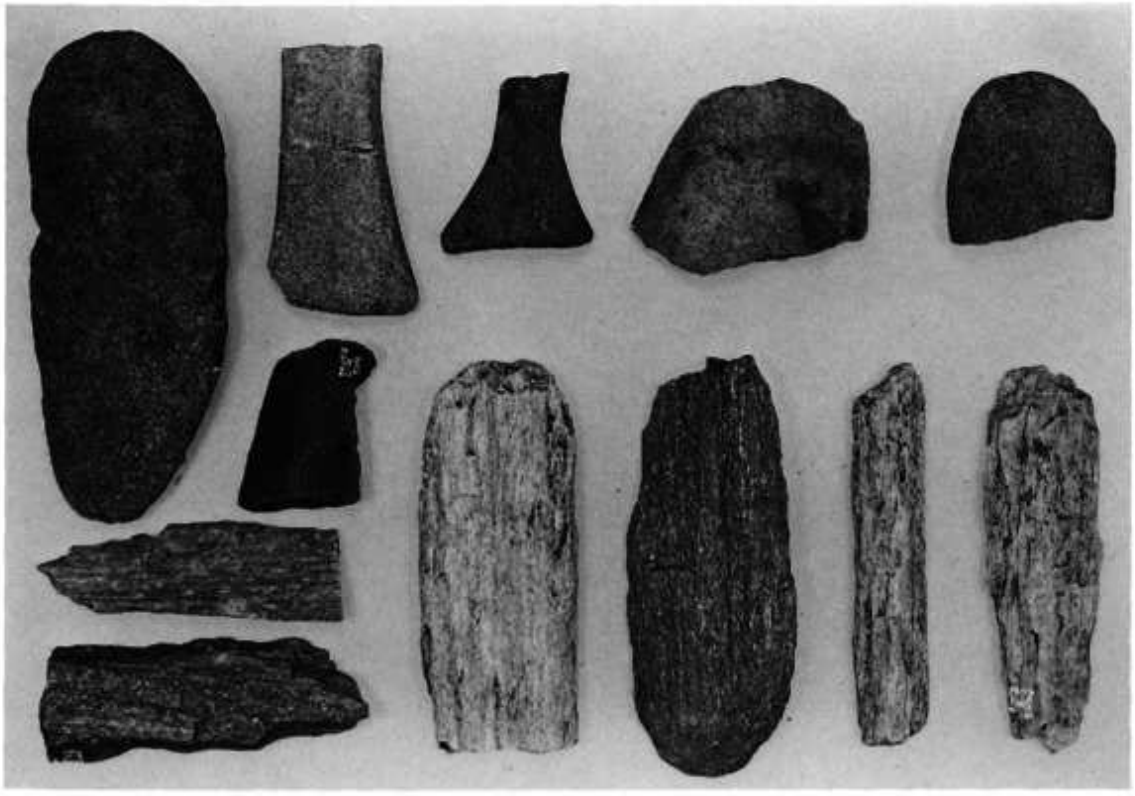
土製円板

磨製石斧

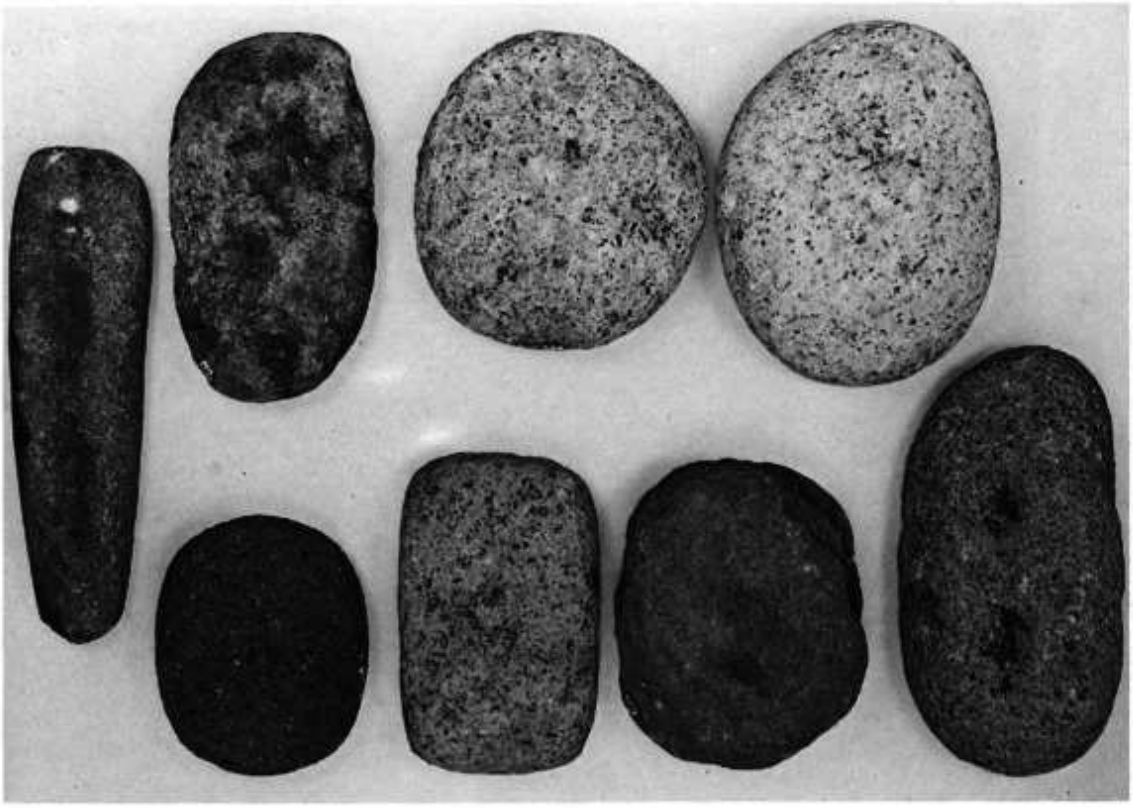


打製石斧

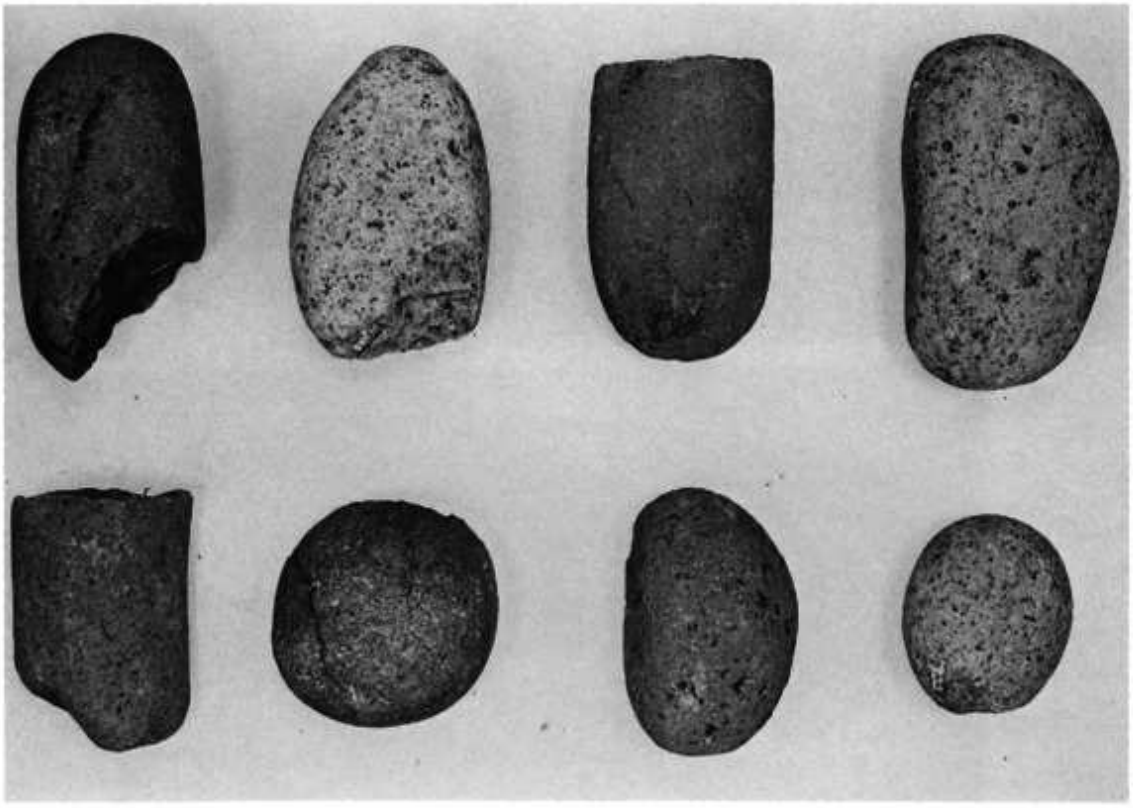
石剣・石棒・磨石



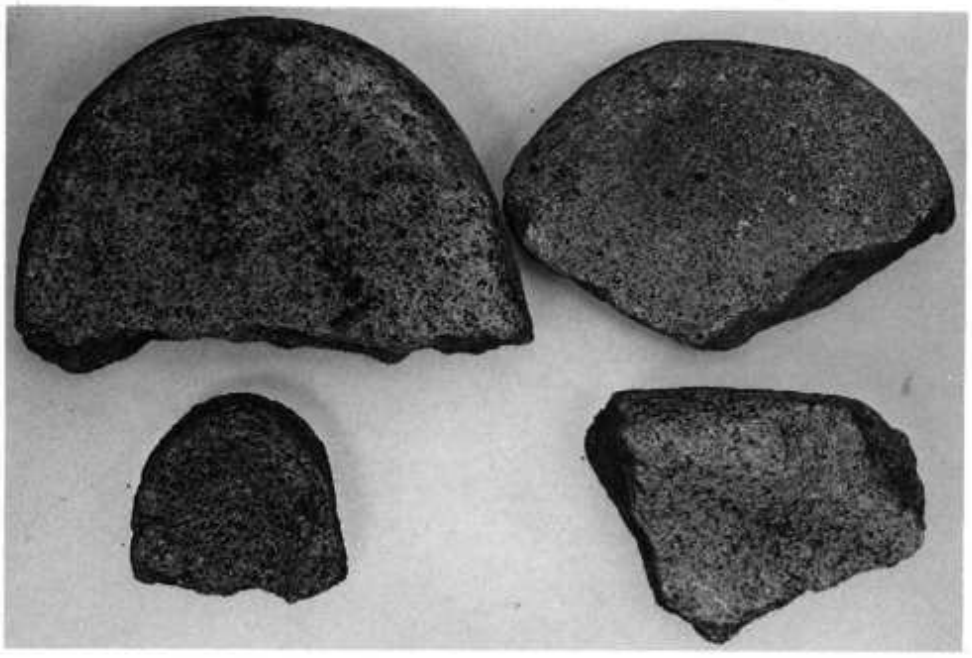
有溝砥石・砥石

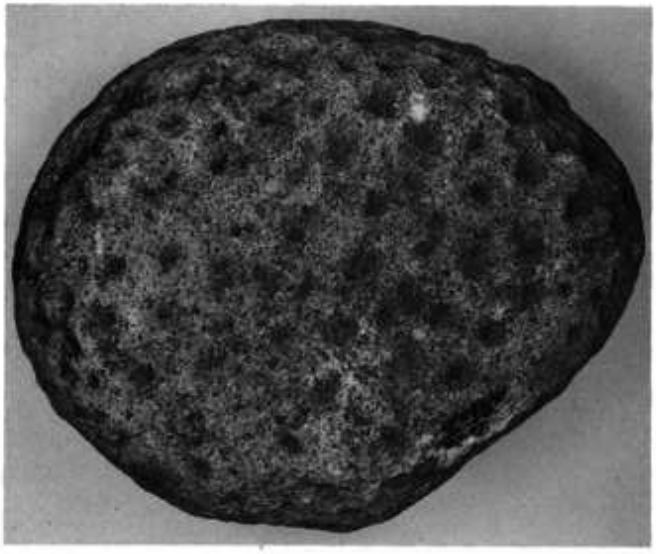


凹石

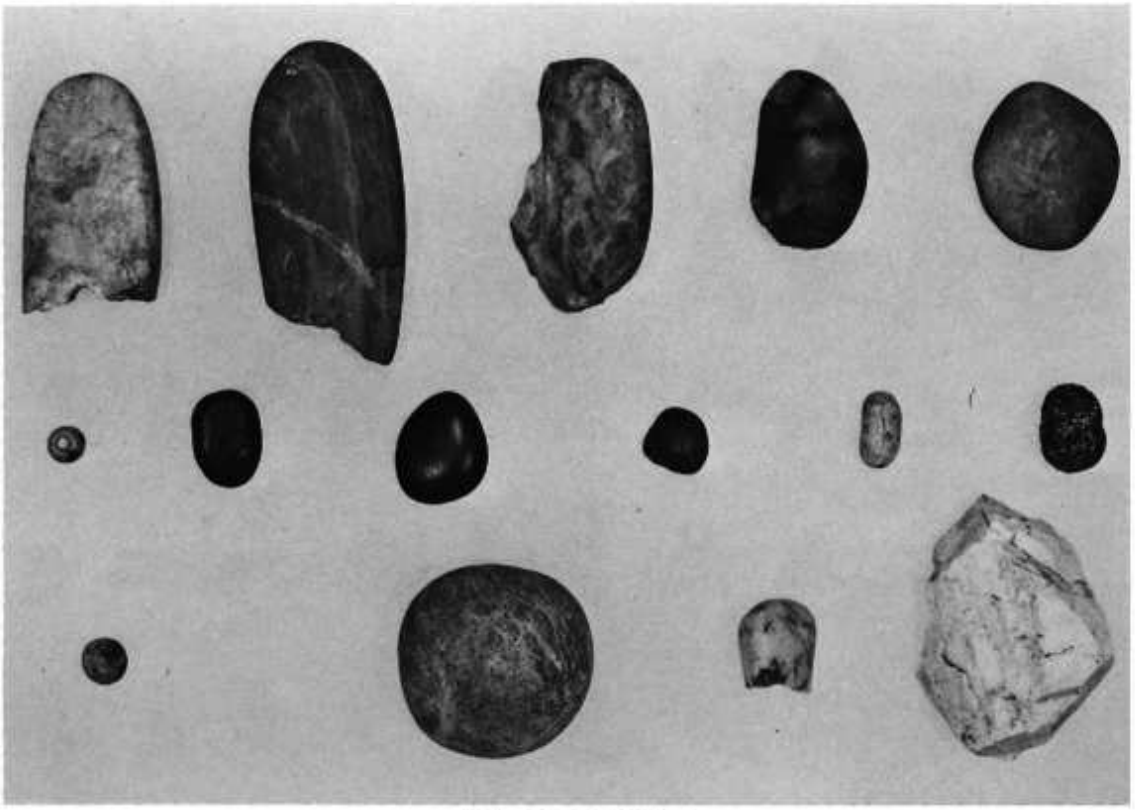


敲打器

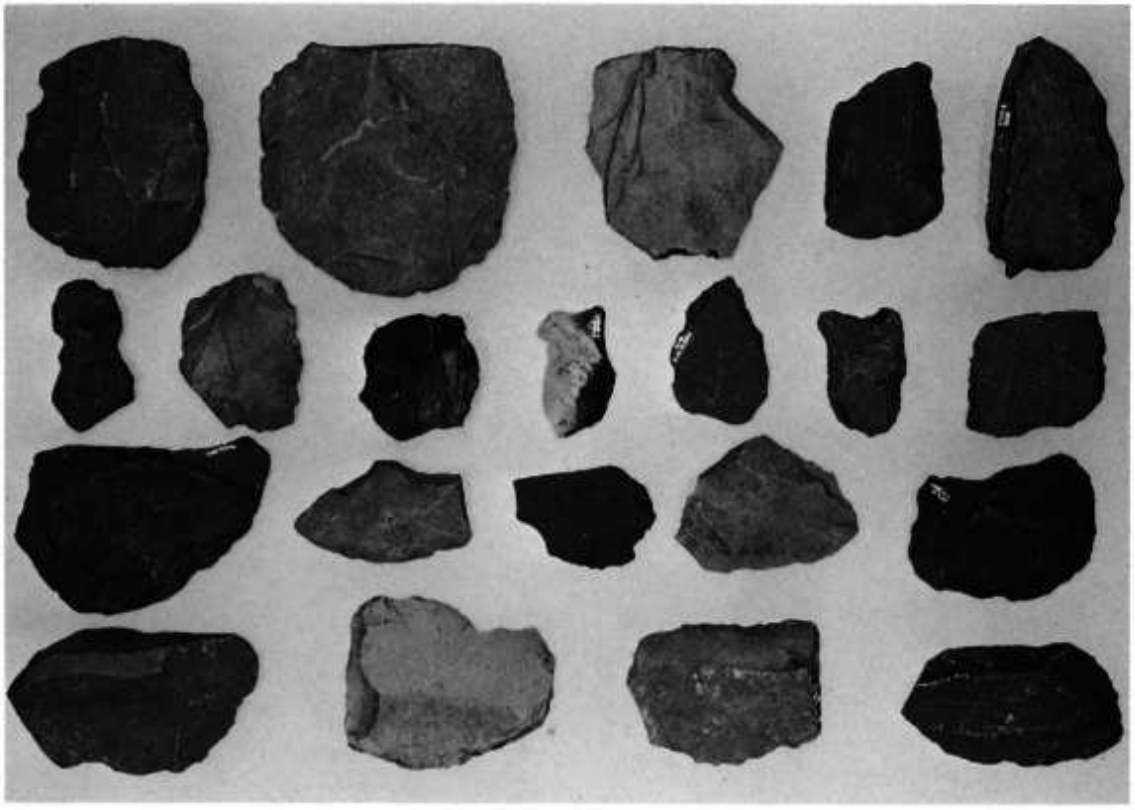




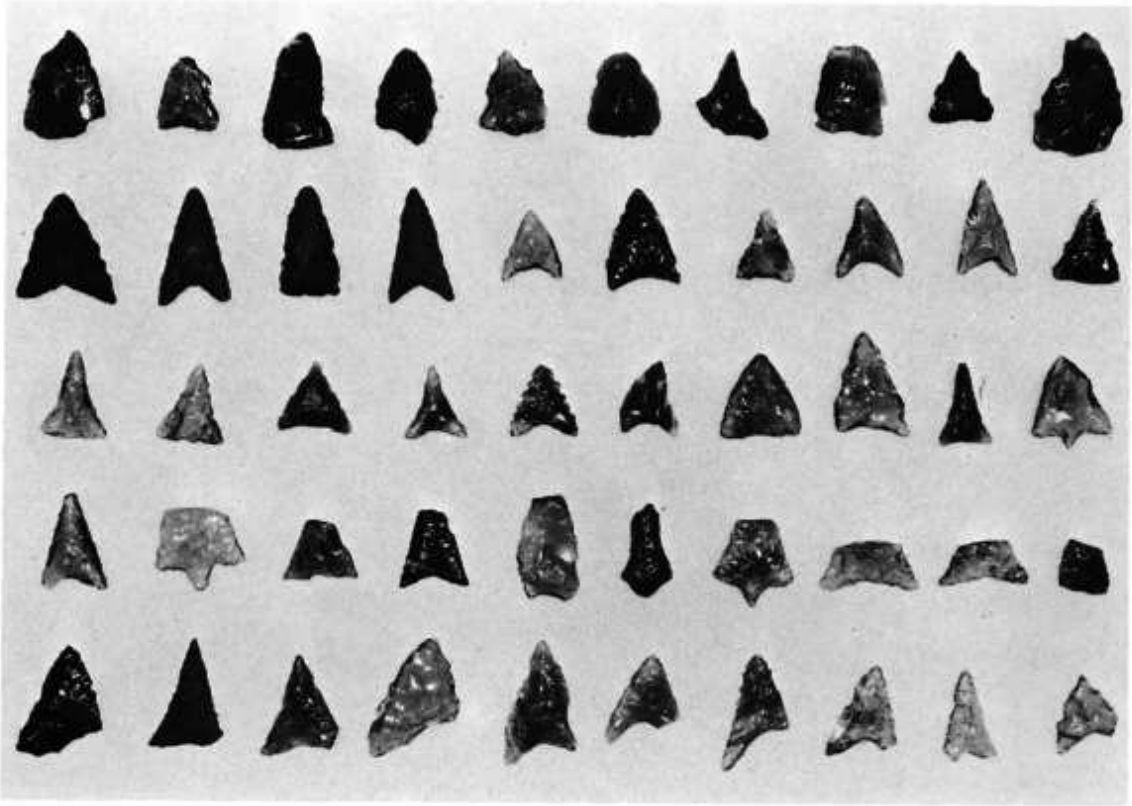
石皿、多孔石、石棒



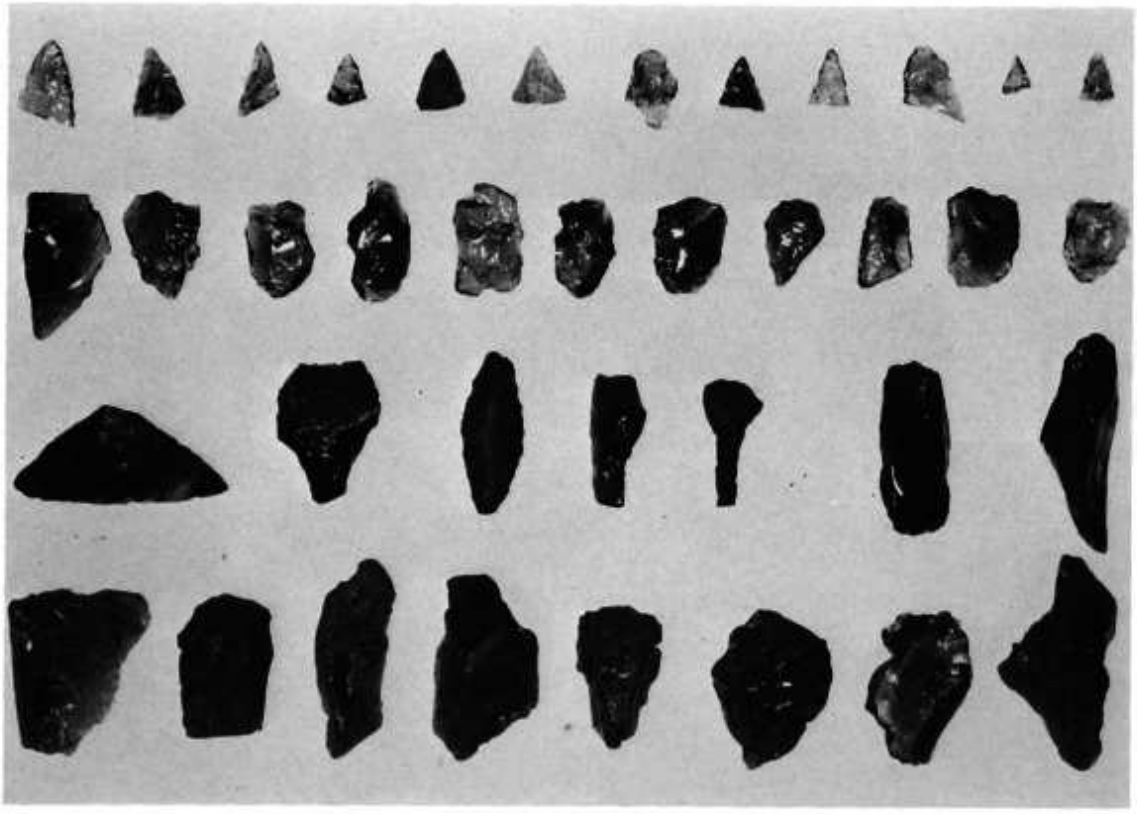
大珠、磨石、翡翠原石



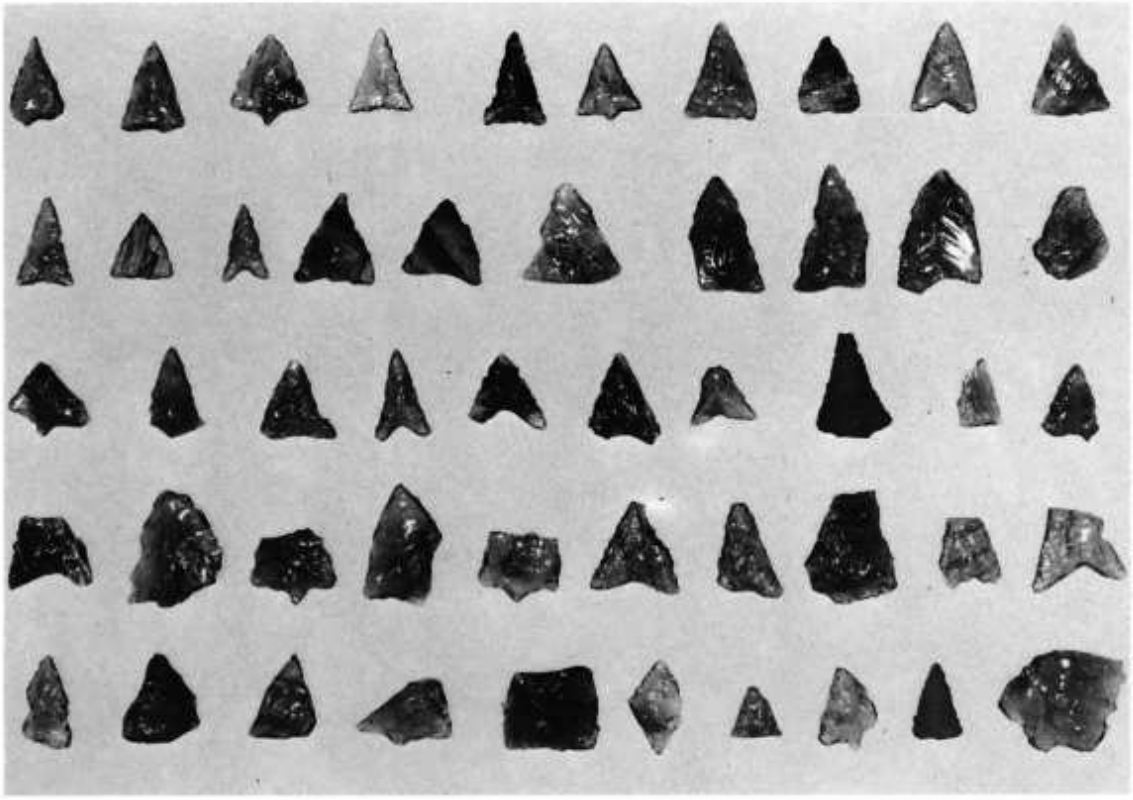
スクレイパー、不定形石器、横刃型石器



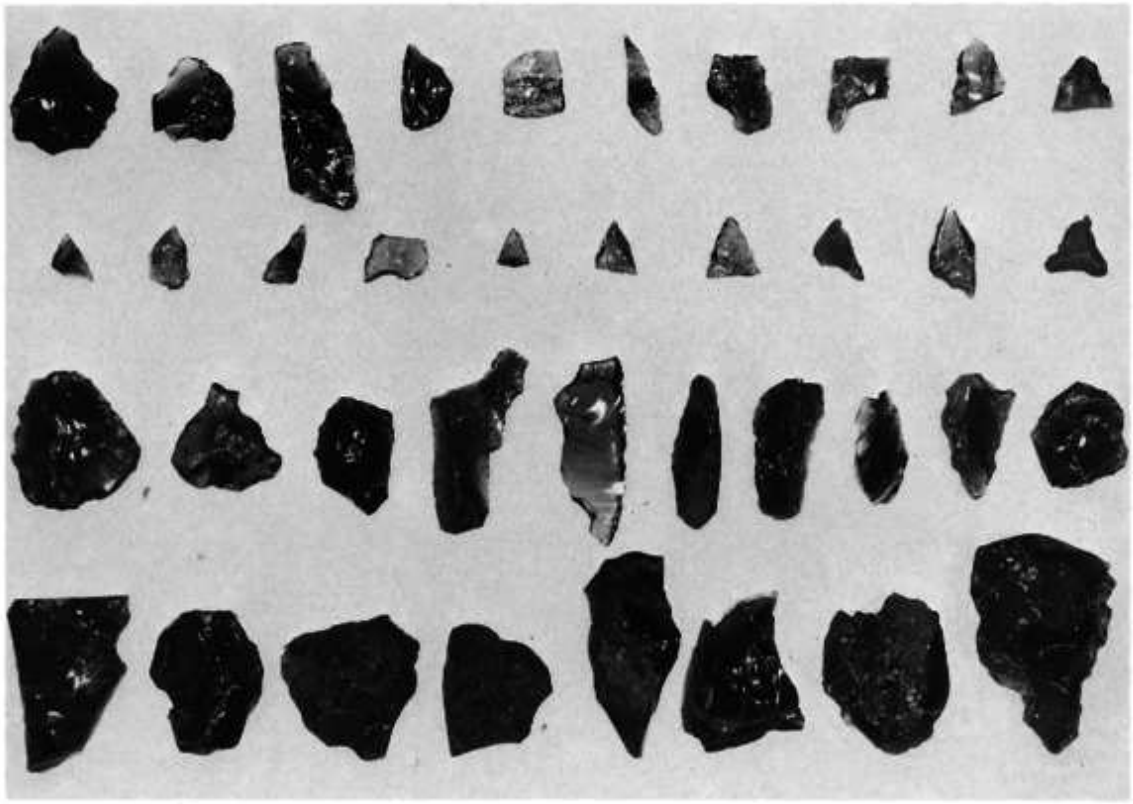
第1号石器製作址出土石鏃（未製品、完成品、欠損品）



第1号石器製作址出土石鏃、スクレイパー、石匙、石錐、両極石器、原石

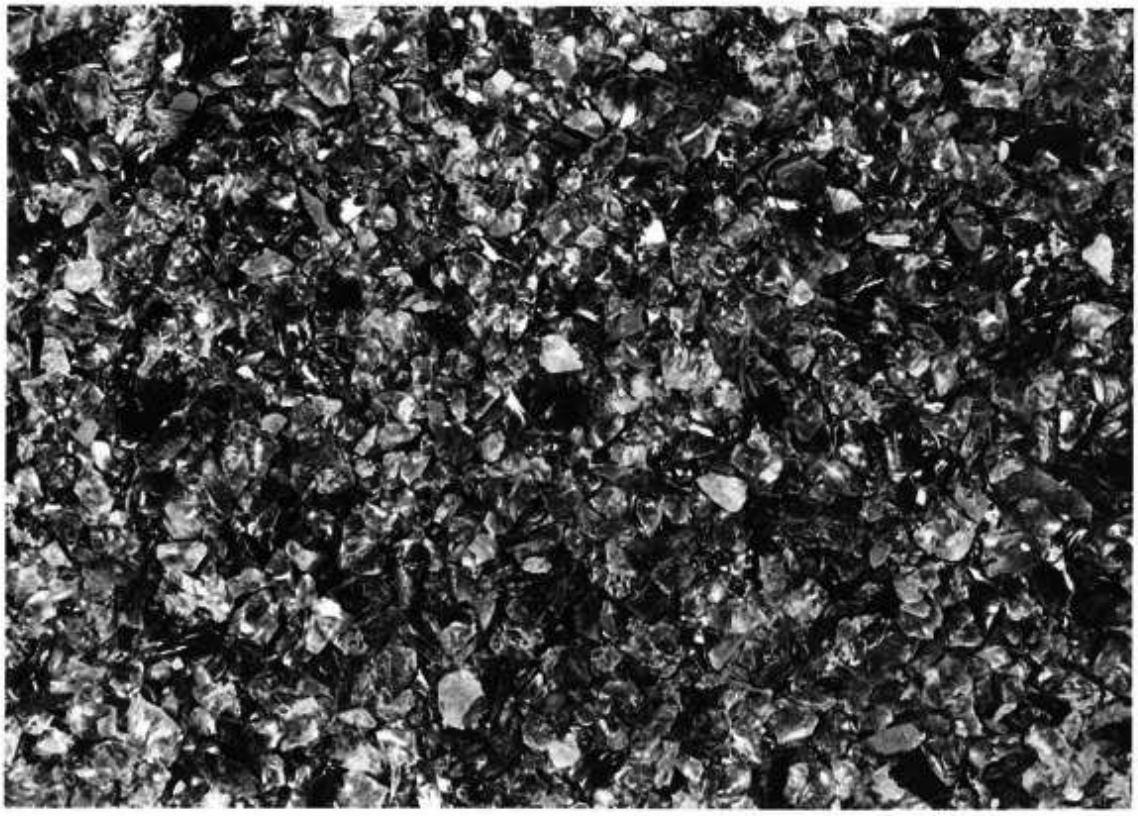


第2号石器製作址出土石鏃（完成品、欠損品）

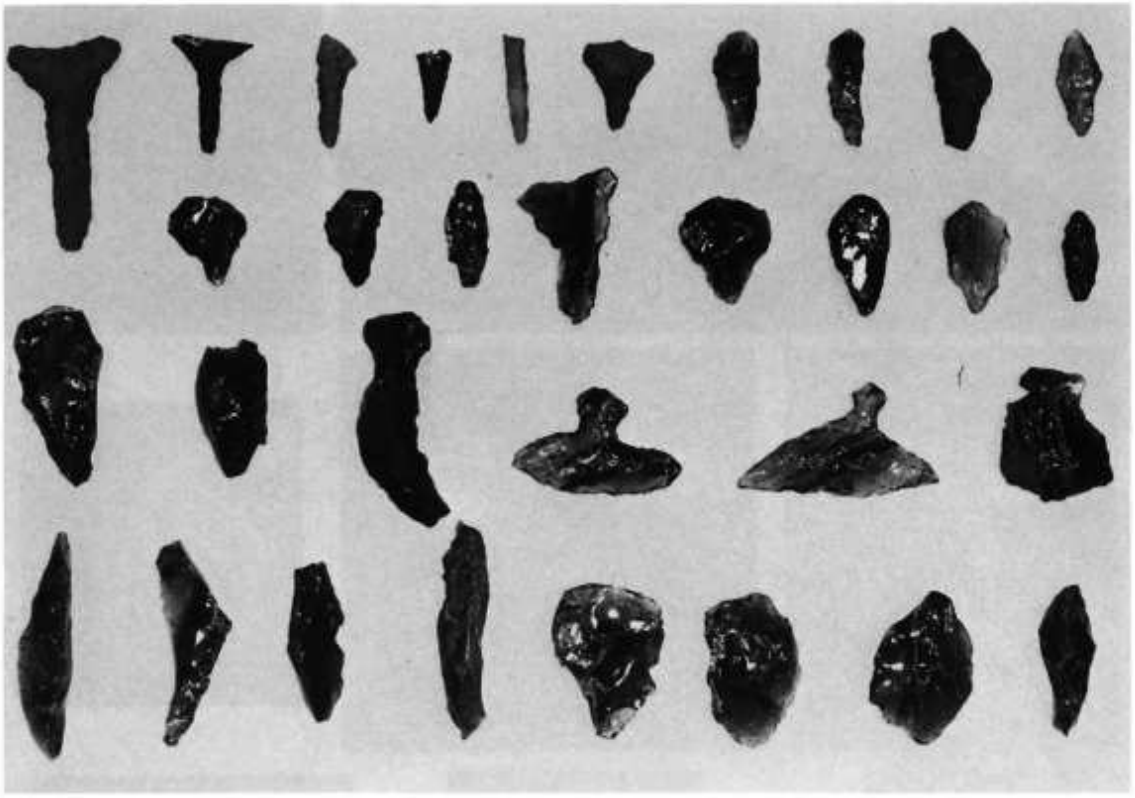


第2号石器製作址出土石鏃、スクレイパー、原石

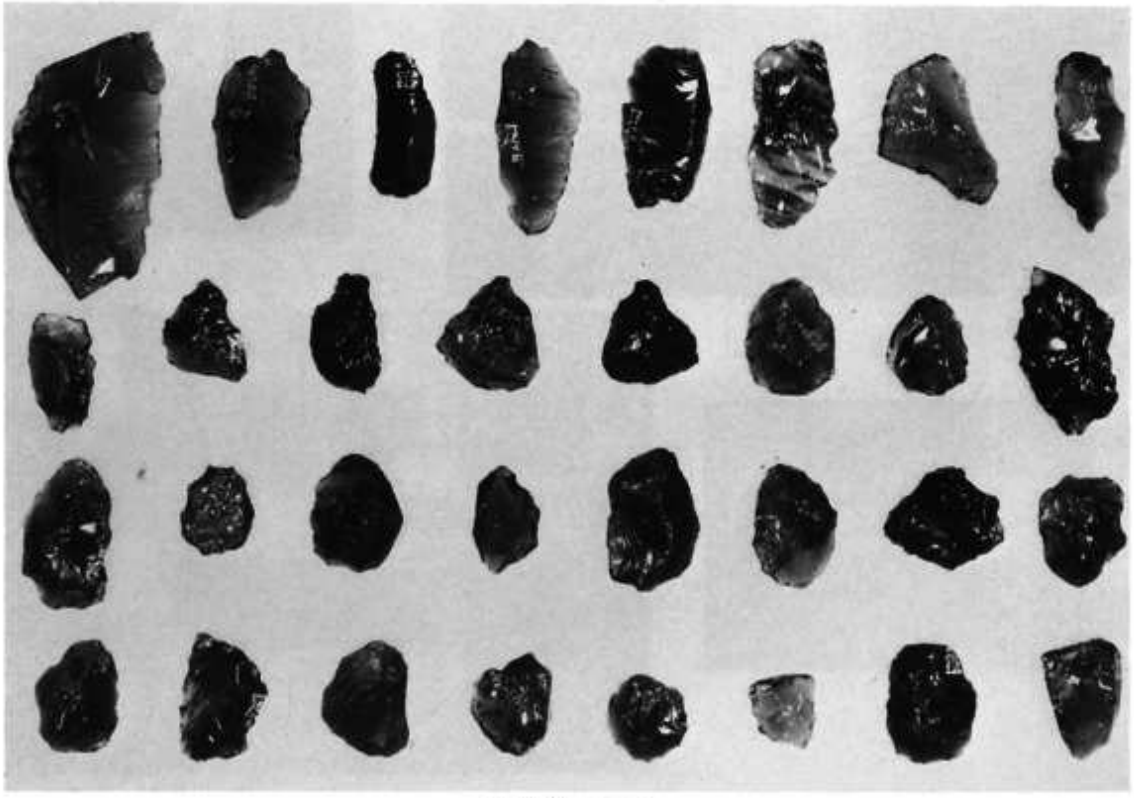
石器製作址出土フレイク



石器製作址出土チップ



遺構外出土石器



遺構外出土石器

調査及び整理の様子

望月町文化財調査報告書第13集

竹之城原遺跡
浄永坊遺跡
浦谷B遺跡

——緊急発掘調査報告書——

発行日　1984年3月20日
発行者　望月町教育委員会
　　東信土地改良事務所
印　刷　鬼灯書籍株式会社